



IOG

IOG Annual Report 2024

2024

東京大学 高齢社会総合研究機構
INSTITUTE OF GERONTOLOGY, The University of Tokyo

機構長ごあいさつ	1
IOG とは	2
IOG メンバー	8
リサーチビジョン	13
社会提言・その他	31
個別研究プロジェクト	37
個別研究プロジェクト【自治体等出向者のコメント】.....	63
産学連携プロジェクト	69
産学連携プロジェクト【個別共同研究】	77
IOG の業績	83
WINGS-GLAFS	103
イベント・インフォメーション	121

「幸福長寿と健康長寿」の両立を狙う ー産学官民協働で地域コミュニティのリデザインを

我々、東京大学高齢社会総合研究機構（Institute of Gerontology：IOG）は、「個（個人のエイジング：加齢）」と「地域社会」の両面から諸問題の解決に取り組むために、学際的・総合的・実践的な知の体系【総合知】を創成しております。また、分野横断型の課題解決型実証研究（アクションリサーチ）によって新たな知識と技術を地域社会に還元／実装する研究機構です。少子高齢化を基盤とする超高齢社会に対して、新たな地域社会の在り方をエビデンスベースの政策提言・社会提言も行うことを目指しております。さらに、地域連携・産官学民協働・国際連携にも重きを置き、その卓越性のある総合知から変革を駆動できるジェロントロジー研究拠点として、「地域活力のある、及び多様性のある超高齢社会の実現」に向けて国内外に発信することを目指しております。

人生 100 年時代と言われる中で、心身機能を維持しながら、住み慣れた地域や自分の住まいでいつまでも自立した日常生活を過ごしたい。これは全ての国民の願いです。しかし、そこには物理的な身体のみならず、生きがいも含めた Well-being（ウェルビーイング）も充実している必要があります。すなわち、日々の生活を通して、現役時代であっても、そしてリタイア後のセカンドライフ期においても、生きがいと幸せを感じることが出来るような人生を送りたい。これも、どの世代の方々にも言えることなのでしょう。言い換えれば、健康長寿を実現するだけでなく、そこには Well-being（ウェルビーイング）を軸とした「幸福長寿」も不可欠になってくるのであろう。そのために、これからの時代に合わせた「4つの助（自助・互助・共助・公助）」を前向きにアレンジし、なかでも新たな自助・互助のスタイルのモデル化・具現化し、新時代に向けた地域づくりとしての再構築（リデザイン）が求められ、まさに我々 IOG はそこにチャレンジしていきたい。それらを実現するためには、なぜこのような状況に陥っているのかという現状評価や課題認識、さらには既存の社会システムとの照らし合わせ、新たな仮説設定も持ちながら、先を見据えた将来の未来ビジョンをクリアに描き、全国への汎用性の高いモデル構築が強く求められます。そして何よりも、一歩前に踏み出していける勇気・パワー・情熱（パッション）も必要だと認識しております。

今回の「2024 年度活動」の報告書では、IOG がどのように多様な社会課題に向けた課題解決型実証研究（アクションリサーチ）を繰り広げ、さらにインパクトの高い様々な提言を世の中に発信できたのか等、機構長を中心に全構成員で前向きに振り返りながら、本報告書を作成しました。また、純粋な研究者の活動だけではなく、自治体出向者を軸とする地域連携やジェロントロジー産学連携活動における底上げもかなり強化してきております。まさにジェロントロジー総合研究開発を質と量ともに加速させることが出来ております。改めてそれを再認識できる報告書になっております。

最後に、今後さらに超高齢社会の課題解決を多角的かつ実践的に取り組んで参ります。また、我々の研究および教育の活動に対して、より多くの方々と一緒に協働でき、新しい日本そして世界に誇れる日本を創っていければ幸いです。

東京大学 高齢社会総合研究機構 機構長
東京大学 未来ビジョン研究センター 教授

飯島 勝矢



地域活力と多様性のある 高齢化社会の実現に向けて

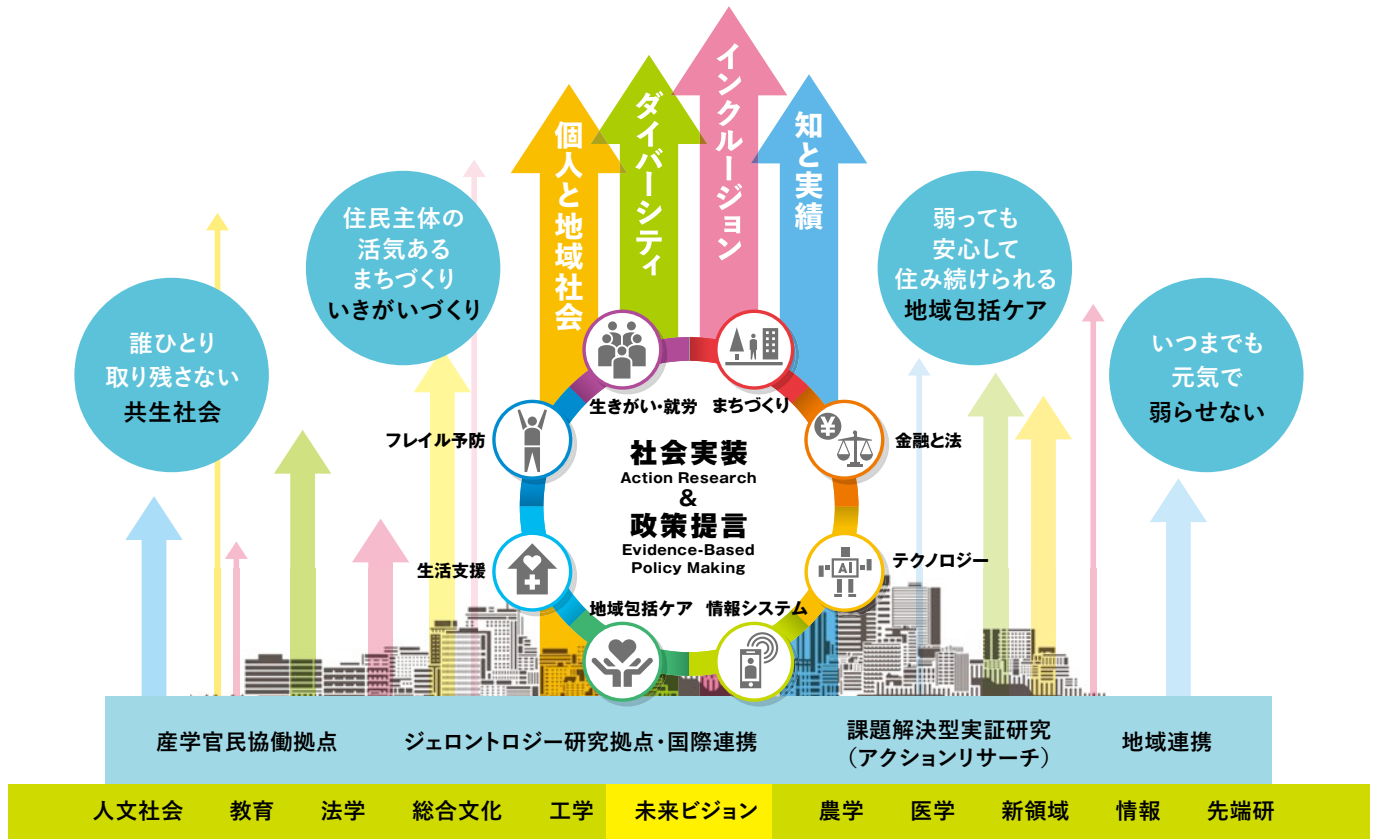
Gerontology (ジェロントロジー) すなわち「個(個人のエイジング: 加齢)」と「地域社会」の両面から諸問題の解決に取り組むために、学際的・総合的・実践的な知の体系【総合知】を創成し、分野横断型の課題解決型実証研究(アクションリサーチ)によって新たな知識と技術を地域社会に還元/実装する研究機構。

少子高齢化を基盤とする超高齢社会に対して、新たな地域社会の在り方をエビデンスベースの政策提言も行います。

また、地域連携・産官学民協働・国際連携にも重きを置き、その卓越性のある総合知から変革を駆動できるジェロントロジー研究拠点として、「地域活力のある、及び多様性のある超高齢社会の実現」に向けて国内外に発信することを目指します。



“Chōju” と “Ikigai” を自己実現できる 新たな価値を感じる地域コミュニティを



Gerontology(ジェロントロジー)すなわち「個(個人のエイジング: 加齢)」と「地域社会」の両面から諸問題の解決に取り組むために、学際的・総合的・実践的な知の体系【総合知】を創成し、分野横断型の課題解決型実証研究(アクションリサーチ)によって新たな知識と技術を地域社会に還元 / 実装する研究機構。少子高齢化を基盤とする超高齢社会に対して、新たな地域社

会の在り方をエビデンスベースの政策提言も行います。

また、地域連携・産官学民協働・国際連携にも重きを置き、その卓越性のある総合知から変革を駆動できるジェロントロジー研究拠点として、「地域活力のある、及び多様性のある超高齢社会の実現」に向けて国内外に発信することを目指します。

アクションリサーチ

IOG は全国各地の地域社会でアクションリサーチを行い、エビデンスに基づく知識と技術を還元・実装して高齢化社会全体の課題解決を目指しています。

IOG の研究領域

IOG では下記の 8 つのテーマを掲げています。各プロジェクトでは複数のテーマを横断しながら研究活動を行っています。

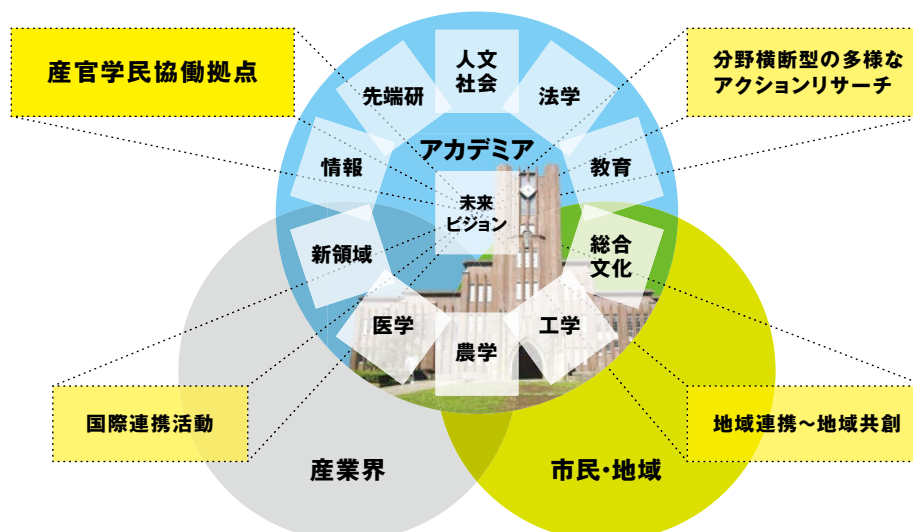


IOG の研究基盤

IOG は東大の9研究科・2センターの知を結集し、産学官民（産業界／地域・市民／行政）連携で超高齢社会の諸課題に分野横断で取り組んでいます。多様な学問領域を融合した研究基盤を生かして、全国のモデル自治体と協働して社会課題の解

決に向けた実証研究（アクションリサーチ）を行うなど、その活動は多くの成果を上げてきました。それらの研究成果を社会に還元することにより、SDGs の目標達成や Society5.0 の実現に貢献し、持続可能な社会の形成を目指しています。

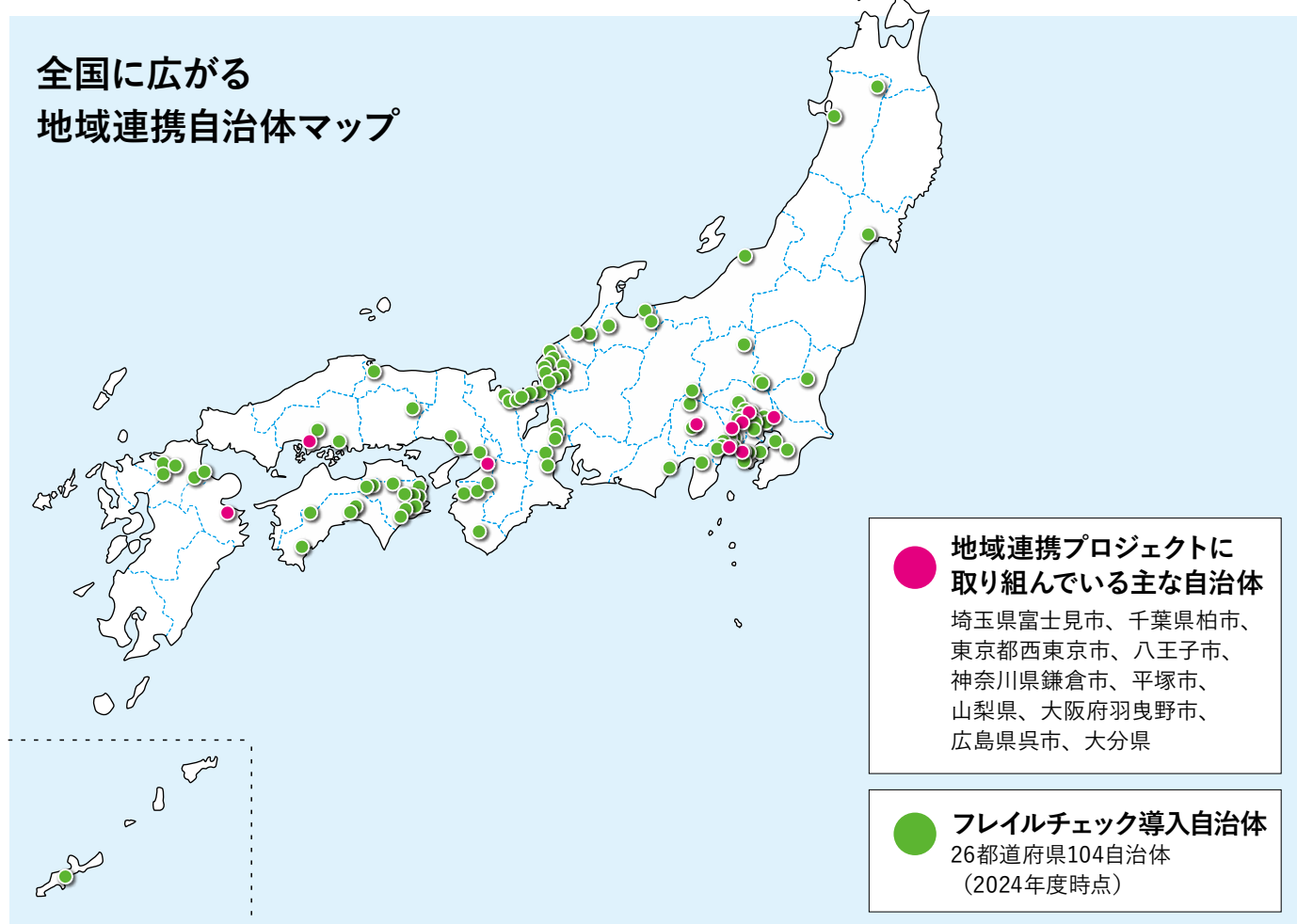
■IOGの研究・組織基盤



IOG の地域連携プロジェクト

IOG は全国各地の自治体と連携して、フレイル予防に関するアクションリサーチやフレイルチェックなどの啓発活動、高齢社会に対応したまちづくりなど、さまざまなプロジェクトを推進しています。

全国に広がる 地域連携自治体マップ



地域連携の一例 自治体からの出向

東京都西東京市



西東京市シニア e スポーツイベントの様子



本誌
P.64 を
参照

広島県呉市



全国フレイルトレーナーの集い @ 東京大学での活動の様子



本誌
P.65 を
参照

神奈川県平塚市



平塚市フレイルサポーター交流会の様子



本誌
P.67 を
参照

超高齢大国という未曾有の状況のなか フロントランナーとして社会を革新する

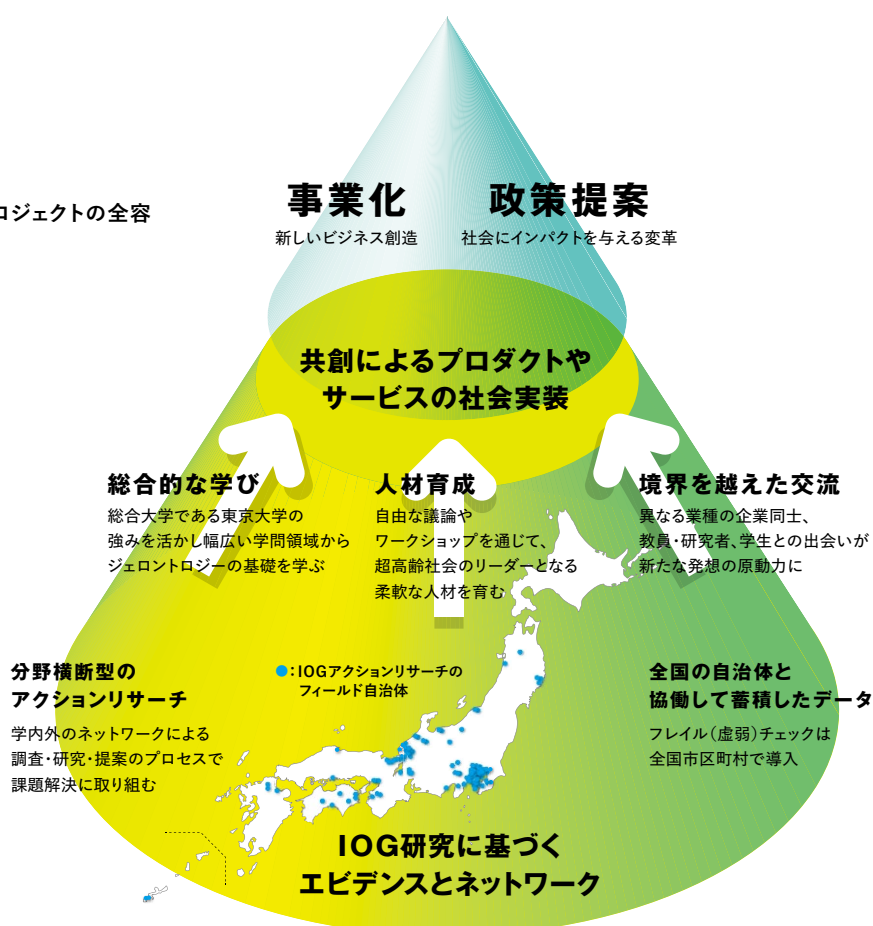
日本は有史以来、人類が経験したことのない超高齢大国というフェーズに突入しました。世界に先駆けて高齢化した私たちの社会には範とするべき前例がなく、新しい社会システムへの道を自ら切り拓く必要があります。

私たち IOG は、アクションリサーチによる研究成果に基づいて政策提言を行うとともに、共同研究のパートナーである企業がプロダクトやサービスを事業化して、より早く広く社会実装することを目指しています。全国各地の自治体や地域住民との連携と並んで、産学連携プロジェクトによるさまざまな個別テーマの研究は、IOG が注力している柱の一つです。今後、多くの国々が直面する超高齢化のフロントランナーとして社会を革新し、最適化するための知見を産官民学で共有することが、豊かな未来へと続く道にほかなりません。

IOG の産学連携プロジェクトが参加企業にもたらす価値

IOG は豊かな超高齢社会を目指して社会システムのイノベーションや新たなライフスタイルへのシフトを実現すべく学際的な調査・研究に取り組んでいます。「最先端の総合知」が境界を超えて結集し、全国各地の自治体と協働して行っている課題解決型実証研究（アクションリサーチ）の成果は、IOG の大きな資産です。IOG の産学連携プロジェクトに参加する企業は、ジェロントロジーという総合的な新しい学問を学び、まさに地域実装も含んだ アクションリサーチの現場を体験し、新規のビジネスモデル創生にチャレンジする機会を得ることができます。本プロジェクトでの協働そして挑戦は、超高齢社会において成長を持続し、事業を通じて社会に貢献しようとする企業に大きな価値をもたらします。

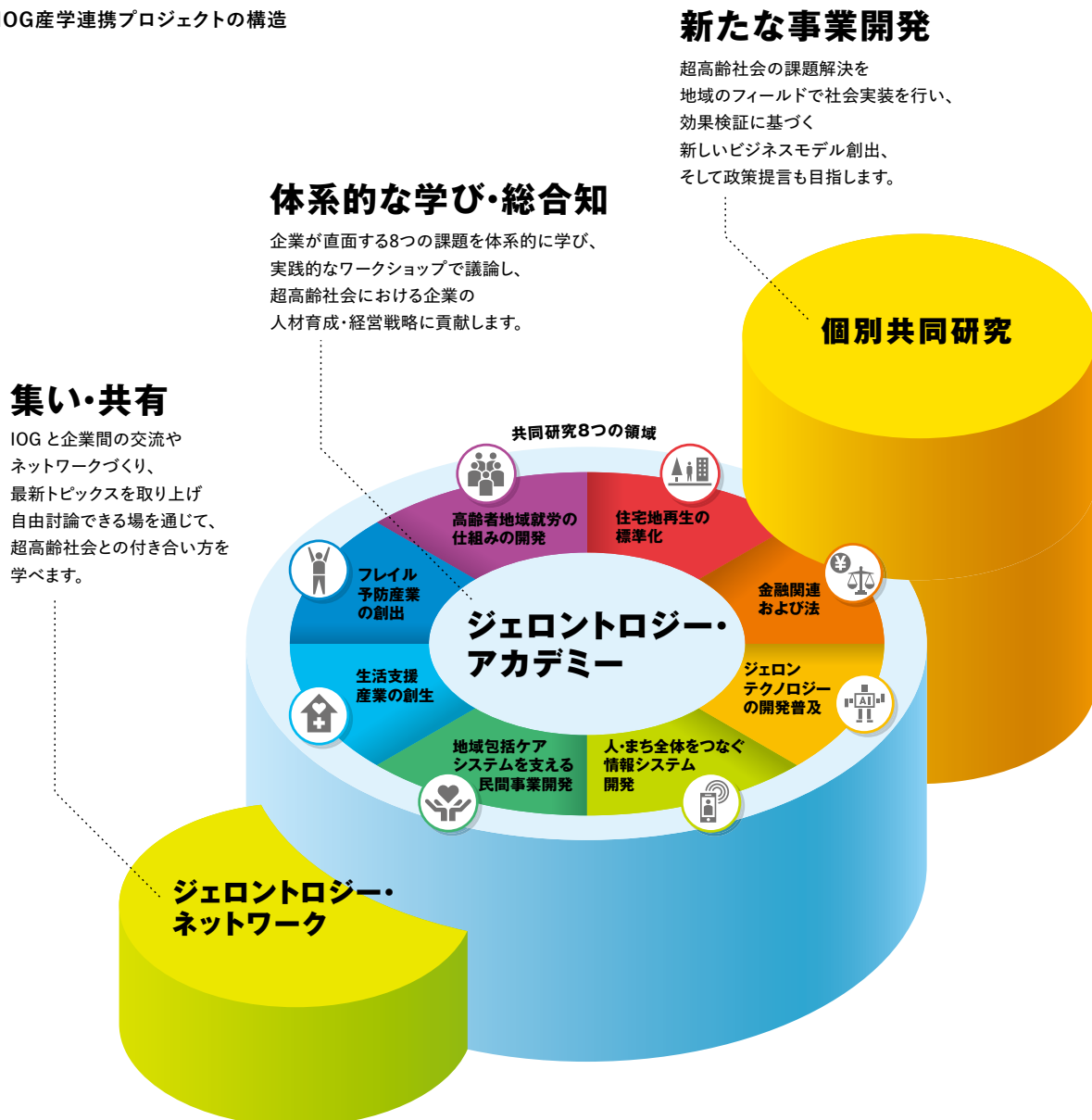
■東大IOG産学連携プロジェクトの全容



IOGの産学連携プロジェクトには3つのステージがあります

世界に先駆けて超高齢化する日本でトップランナーになるために東大教員と交流し、分野・業種の枠を超えた企業間のネットワークを生む「ジェロントロジー・ネットワーク」。学問分野を越境する8つのテーマから超高齢社会に取り組む「ジェロントロジー・アカデミー」。さらに、研究の社会実装・効果検証により政策提言までもを目指す「個別共同研究」では、個々の企業の課題に沿って研究テーマを設定し、より強固なパートナーシップで取り組みます。ネットワークから、アカデミー、そして個別共同研究へとステップアップして、よりインパクトの高い研究開発を行うことが目的です。

■東大IOG産学連携プロジェクトの構造



コアメンバー

2025年3月現在

**飯島 勝矢**

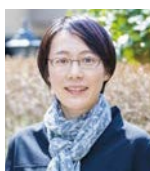
高齢社会総合研究機構 機構長
未来ビジョン研究センター 教授
専門:老年医学、在宅医療、虚弱予防、医学教育

**大月 敏雄**

高齢社会総合研究機構 副機構長
大学院工学系研究科 建築学専攻 教授
専門:建築計画、住宅計画

**祐成 保志**

高齢社会総合研究機構 副機構長
大学院人文社会系研究科 社会文化研究専攻 准教授
専門:社会学

**二瓶 美里**

大学院情報理工学系研究科 知能機械情報専攻 教授
専門:生活支援工学、リハビリテーション工学

**檜山 敦**

先端科学技術研究センター 身体情報学分野 特任教授
専門:統合現実感、ヒューマンインターフェース、
ジェロンテクノロジー

**井口 高志**

大学院人文社会系研究科 社会文化研究専攻 准教授
専門:社会学

**松田 雄二**

大学院工学系研究科 建築学専攻 准教授
専門:建築計画

**孫 輔卿**

未来ビジョン研究センター 特任准教授
専門:老年医学

**コスタンティニ ヒロコ (2025年1月まで)**

特任助教
専門:老年学、ウェルビーイング、ジェンダー、
ヘルス・コミュニケーション、家族学

**李 鎔根**

大学院工学系研究科 建築学専攻 助教
専門:建築計画、まちづくり

**税所 真也**

大学院人文社会系研究科 社会文化研究専攻 助教

**田中 友規**

特任助教
専門:老年医学、健康マネジメント学
テーマ: フレイル予防

**酒谷 薫**

特任研究員
専門:認知症、脳科学、AI、医療工学

**高瀬 麻以**

特任研究員
専門:老年学

**田中 敏明**

先端科学技術研究センター 特任研究員
(シニアアドバイザー)
専門:福祉工学、理学療法学、人間工学、病態運動学

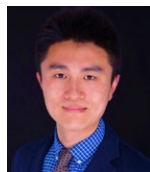
**藪 謙一郎**

先端科学技術研究センター 特任研究員
専門:福祉工学、音声信号処理、情報支援機器、
バリアフリー



コアメンバー

2025年3月現在

**呂偉達**

特任研究員

専門:老年医学、虚弱予防、スポーツ生理、生命科学

**秋山 弘子**

未来ビジョン研究センター 客員教授

東京大学名誉教授

専門:老年学

**伊福部 達**

先端科学技術研究センター 研究顧問

東京大学名誉教授

専門:福祉工学

**辻 哲夫**

未来ビジョン研究センター 客員研究員

専門:在宅医療、ケア政策、社会保障政策

**笹野 隆**

(西東京市より出向)

学術専門職員

専門:社会福祉政策

**神谷 哲朗**

学術専門職員

専門:ケア政策、在宅医療、虚弱予防

**葛谷 正明**

学術専門職員

専門:産学連携

**田中 康夫**

学術専門職員

専門:産学連携

**平岡 康隆**

(株式会社ロッテより出向)

学術専門職員

専門:食品科学

**堀江 直裕**

(イオン株式会社より出向)

学術専門職員

専門:産学連携、虚弱予防

**蒔野 充照**

(日本年金機構より出向)

学術専門職員

専門:社会保障政策

**吉田 涼子**

学術専門職員

専門:リビングラボ研究

**吉村 佑生**

(呉市より出向)

学術専門職員

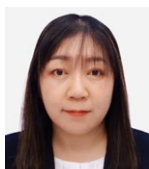
専門:社会保障政策

**倉田 幸治**

(キュービー株式会社より出向)

共同研究員

専門:食品科学、資源循環

**佐藤 麻美**

(平塚市職員と兼任)

客員研究員

専門:社会福祉政策

**田子森 順子**

(サンスター株式会社より出向)

共同研究員

専門:口腔保健学



事務局

2025年3月現在

参画教員

2025年3月現在

井口 智子 学術専門職員

名和 淳子 学術専門職員

福田 綾子 学術専門職員

宮原 章子 学術専門職員

林 奈美子 特任専門職員

飯島 勝矢

高齢社会総合研究機構 機構長
未来ビジョン研究センター 教授

大月 敏雄

高齢社会総合研究機構 副機構長
大学院工学系研究科 建築学専攻 教授

祐成 保志

高齢社会総合研究機構 副機構長
大学院人文社会系研究科 社会文化研究専攻 准教授

松田 雄二

大学院工学系研究科 建築学専攻 准教授

李 鎔根

大学院工学系研究科 建築学専攻 助教

小泉 秀樹

大学院工学系研究科 都市工学専攻 教授

伊藤 大知

大学院工学系研究科 化学システム工学専攻 教授

坂田 一郎

大学院工学系研究科 技術経営戦略学専攻 教授

太田 順

大学院工学系研究科 人工物工学研究センター 教授

加藤 淳子

大学院法学政治学研究科 総合法政専攻 教授

米村 滋人

大学院法学政治学研究科 法曹養成専攻 教授

橋本 英樹

大学院医学系研究科 公共健康医学専攻 教授

山本 則子

大学院医学系研究科 健康科学・看護学専攻 教授

井口 高志

大学院人文社会系研究科 社会文化研究専攻 准教授

税所 真也

大学院人文社会系研究科 社会文化研究専攻 助教

三坂 巧

大学院農学生命科学研究科 応用生命化学専攻 准教授

八木 洋憲

大学院農学生命科学研究科
農業・資源経済学専攻 准教授

横山 ゆりか

大学院総合文化研究科 広域科学専攻 教授

永田 淳嗣

大学院総合文化研究科 広域科学専攻 教授

牧野 篤

大学院教育学研究科 総合教育科学専攻 教授

高橋 美保

大学院教育学研究科 総合教育科学専攻 教授

割澤 伸一

大学院新領域創成科学研究科 人間環境学専攻 教授

葛岡 英明

大学院情報理工学系研究科 知能機械情報学専攻 教授

二瓶 美里

大学院情報理工学系研究科 知能機械情報学専攻 教授

池井 寧

大学院情報理工学系研究科 情報理工学教育研究センター 教授

鳴海 拓志

大学院情報理工学系研究科 知能機械情報学専攻 准教授

稲見 昌彦

先端科学技術研究センター 身体情報学分野 教授

檜山 敦

先端科学技術研究センター 身体情報学分野 特任教授

熊谷 晋一郎

先端科学技術研究センター 当事者研究分野 教授

孫 輔卿

未来ビジョン研究センター 特任准教授

統括運営委員 2025年3月現在	運営委員 2025年3月現在	IOGメンバー 研究戦略会議メンバー 2025年3月現在
加藤 泰浩 統括運営委員会 委員長 大学院工学系研究科 研究科長 山本 隆司 大学院法学政治学研究科 研究科長 南學 正臣 大学院医学系研究科 研究科長 納富 信留 大学院人文社会系研究科 研究科長 中嶋 康博 大学院農学生命科学研究科 研究科長 真船 文隆 大学院総合文化研究科 研究科長 勝野 正章 大学院教育学研究科 研究科長 徳永 朋祥 大学院新領域創成科学研究科 研究科長 中村 宏 大学院情報理工学系研究科 研究科長 杉山 正和 先端科学技術研究センター 所長 福士 謙介 未来ビジョン研究センター センター長	飯島 勝矢 大月 敏雄 祐成 保志 松田 雄二 浅間 一 米村 滋人 山本 則子 井口 高志 八木 洋憲 横山 ゆりか 高橋 美保 二瓶 美里 鳴海 拓志 檜山 敦	飯島 勝矢 大月 敏雄 祐成 保志 二瓶 美里 檜山 敦 松田 雄二 孫 輔卿 コスタンティーニ ヒロコ (2025年1月まで) 田中 友規
統括運営委員 (オブザーバー) 2025年3月現在 飯島 勝矢 大月 敏雄 祐成 保志		

客員教員 2025年3月現在	ジェロントロジー 産学連携プロジェクト担当教員 2025年3月現在	IOGメンバー
秋山 弘子 客員教授 伊福部 達 研究顧問 荻野 亮吾 客員研究員 Kang Sooin 客員研究員 金 起漢 客員研究員 後藤 純 客員研究員 佐藤 麻美 客員研究員 佐藤 雄太 客員研究員 菅原 育子 客員研究員 高橋 競 客員研究員 辻 哲夫 客員研究員 中村 美緒 客員研究員 畑中 綾子 客員研究員 馬場 絢子 客員研究員 福沢 愛 客員研究員 前田 展弘 客員研究員 松田 弥花 客員研究員 三浦 貴大 客員研究員 村山 洋史 客員研究員 吉江 悟 客員研究員 吉澤 裕世 客員研究員	飯島 勝矢 プロジェクト代表者 秋山 弘子 大月 敏雄 祐成 保志 伊福部 達 孫 輔卿 田中 友規 辻 哲夫 二瓶 美里 樋口 範雄 廣瀬 通孝 呂 偉達 井口 高志 李 鎔根 コスタンティーニ ヒロコ (2025年1月まで) 税所 真也 檜山 敦 松田 雄二	

リサーチビジョン

IOG は、分野横断型の課題解決型実証研究（アクションリサーチ）という手法を駆使して、多面的な研究開発を推進しています。IOG の目指すジェロンテクノロジー研究のリサーチビジョンについてご紹介します。

リサーチビジョン	14
フレイル予防研	16
オーラルフレイル研究	18
人生 100 年時代のフレイル予防産業創生に向けた取り組み	20
フレイル予防におけるテクノロジー研究	21
生活支援体制整備と 地域型 ICT ネットワークシステム構築研究	23
地域包括ケアシステム構築に関する研究	25
長寿時代の高齢者地域就労に関する研究	27
ジェロンテクノロジー研究	28
まちづくり総合研究	29

Research vision

リサーチビジョン

高齢社会総合研究機構は Gerontology (ジェロントロジー) という学問体系に則っており、多面的な研究開発を推し進めている。具体的には、「個（個人のエイジング：加齢）」と「地域社会」の両面から諸問題の解決に取り組むために、学際的・総合的・実践的な知の体系（総合知）を創成し、分野横断型の課題解決型実証研究（アクションリサーチ）を行っている。少子高齢化を基盤とする超高齢社会に対して、多様な問題が山積されており、それらに対して多角的視点から焦点を当て、新たな知識と技術を地域社会に還元し、さらに実装する研究を推し進めている。特に、地域連携・産官学民協働・国際連携にも重きを置きながら、新たな地域社会の在り方を新たな知見を生み出し、エビデンスベースの政策提言も行う。また、その卓越性のある総合知から変革を駆動できるジェロントロジー研究拠点として、地域活力のある、及び多様性のある次世代型の超高齢社会の実現に向けて、我々の新知見を国内外に発信することを目指している。

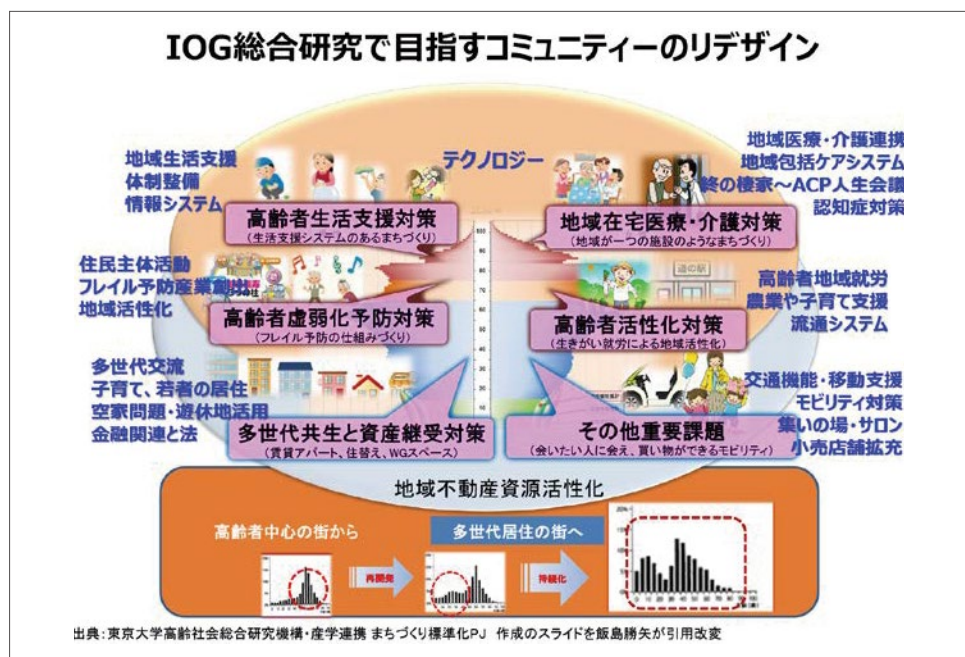
高齢者も「社会の支え手」となり、長生きを喜べる長寿社会へ

わが国は世界の他のどの国も経験したことのない超高齢社会に向かっており、しかも高齢者が増加するなかで、特に 75 歳以上の後期高齢者が急増していくことも予測されている。具体的に見てみると、2005 年から 2030 年までには後期高齢者人口が倍増し、同時に認知症や独居高齢者も激増していきながら多死時代にも突入する。その多死時代は 2039 ～ 2040 年頃がピークとも推計されている。この少子高齢化がわが国で進んでいる中で、急激な人口構成の変化に対応し、医療 / 介護を含む社会保障、居住環境、社会的インフラ、就業形態、そして住民同士のつながり（自助・

互助も含む）をはじめとした「地域コミュニティのあり方」を再考し、社会システム全体を組み替える必要性が目前に迫っている。健康長寿社会の実現に向けて、わが国は大きな分岐点に立っているのだらう。行政主導の公的財源によるヘルスケア施策にはある程度の限界も来ており、長生きを喜べる長寿社会を実現するために、住民活力を中心とした自助・互助の地域づくりを再度強化する必要がある。そのためには、住民自身への再認識を促し、モデル性の高い主体的な住民活動の風土づくりも必要であり、産官学民協働によるこだわったパラダイム転換も求められる。また、経済活動・地域活動への参加を促すことによって高齢者も「社会の支え手」とする新しい社会システムを追い求めたい。

5つの視点によるまちづくりが「Aging in Place」を実現

コミュニティをリデザインするために、図に示した対策が解決すべき課題は、個々の高齢者の課題でもあり、その手前の世代にも当てはまる話なのかもしれない。さらには、全ての住民を抱えたコミュニティそのものが抱えている大きな課題と言っても過言ではない。その意味では、わが国は大きな転換期を迎えている。一人ひとりの「個」に対して何を改めて伝え、意識変容や行動変容に移って頂くのか、そして同時に、住民が生活している各自治体およびその地域において、いわゆる「受け皿」として多様な選択肢が存在するまちづくりをどう具現化していくのか、そのまちづくりを産官学民協働によりリデザインしていくのか、まだまだ課題は山積している。これらを実現していくにあたり、特に高齢期における働きながら輝ける場、たとえ弱っても地域とつながり続けられる場、お互いに支え合える風土、自己実現にもつながる地域なども必要である。わが国が新たなス



ページに入るために、新旧のエビデンスを十分踏まえた上で、「まちぐるみでの包括的アプローチ」をいかに有効的に持続可能な形で達成するのが鍵になるのであろう。ジェロントロジー総合まちづくり研究として、特にこの5つの視点(分野横断、産学連携、地域連携、社会実装、政策提言)に重きを置き進めたい。それを実現し各地域に根付くことが出来れば、最終的には我々の追い求める「Aging in Place」につながると確信している。

【ジェロントロジー総合研究】 高齢社会対応のまちづくり

プロジェクトの連携から生まれる、次世代型の地域のあり方

当機構は全国の多くの自治体も出るフィールドを活用し、以下の多様な視点に立って産官学協働によるアクションリサーチを実践している。

- 1.【生涯現役】:セカンドライフ生きがい地域就労、GBER(ジョブマッチング・アプリ)
- 2.【フレイル予防(健康増進・介護予防)】:大規模高齢者コホート研究、住民主体フレイルチェック活動、フレイル予防検知テクノロジー開発
- 3.【生活支援】:住民主体の支え合い機能、移動支援含む
- 4.【地域包括ケアシステム～医療介護連携】:多職種協働(Inter-professional work: IPW)、かかりつけ医機能(医師会と行政の協働)、24時間の訪問看護機能、介護の科学化
- 5.【ジェロントテクノロジー】:介護支援ロボット、技術開発、移動支援・モビリティ開発
- 6.【情報システムネットワーク】:他の多くの分野におけるデジタルシステム、ICT化
- 7.【金融関連および法】:認知機能低下を有する高齢者における金融関連問題およびそれに纏わる高齢者法
- 8.【まちづくり】:住環境・住まい、住みこなし、次世代型の郊外住宅

忘れてならないのは、各研究プロジェクトがバラバラで独立せず、一つの地域に複数のプロジェクトが存在し、有機的に連携し合う(立体的に構築:総合知によるまちづくりのイメージ)ように戦略的に組むべきである。さらに、評価指標として、個々人の Quality of Life (QOL) だけに留まらず、次世代型の地域のあり方(すなわち Quality of Community(QOC))や経済的評価を示す方向性の指標も必要となる。このように包括的な戦略性および評価も行い、単なる研究だけではなく、その創出された知見を地域に還元した場合の全体評価を心掛けたい。

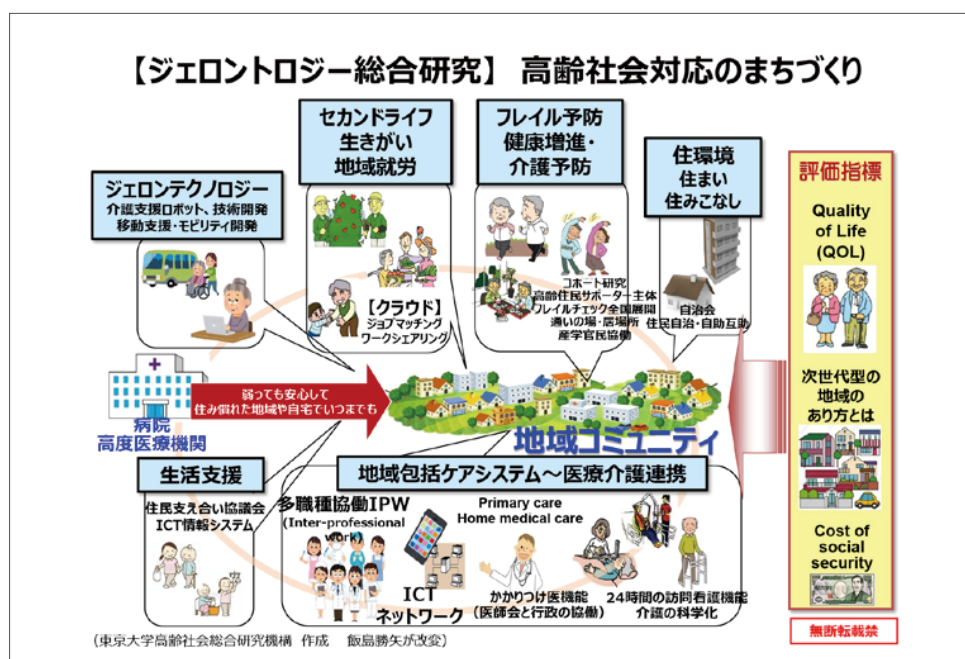
持続可能な包括的アプローチで

「総合知によるまちづくり」を目指す

最後に、地域連携・産官学協働を軸にしながらの分野横断型の課題解決型実証研究(アクションリサーチ)を推し進めるにあたり、以下の視点を目指して欲しい。

- 1 新規のモデル性と全国の自治体への広域展開を視野に入れた汎用性
- 2 多分野における既存制度もよく吟味した上での、具現化された産官学民協働によるチャレンジングな実行性(インパクト、メッセージ性、目新しさ)
- 3 研究のための研究に陥らず、全国の地域で活用されるエビデンス、国民の心に響くエビデンスをイメージし、切れ味のある研究デザインを構築した上での国内外への積極的な発信
- 4 産官学民協働の合同チーム(スクラム)だからこそなし得る業

以上を踏まえ、「総合知によるまちづくり」を目指しながら、新旧のエビデンスを十分踏まえた上での包括的アプローチをいかに有効的に持続可能な形で達成するのが重要な課題となる。また、それを達成することが最終的には我々の追い求める「Aging in Place」につながると確信している。



フレイル予防研究

健康長寿社会の実現に向けて、わが国は大きな分岐点に立っている。行政主導の公的財源によるヘルスケア施策（各自治体での介護予防事業など）だけではある程度の限界も来ており、住民活力を中心とした自助互助の地域づくりを再度強化する必要がある。生き生き快活な高齢期を送るには、身体が健康であるだけでは不十分であり、生きがい・社会参加・社会貢献などの活力を生む処方箋が地域の中で求められる。そのためには目前に迫った超高齢社会の問題を、医療面だけでなく精神心理面や社会・人間関係、就労や経済活動、ひいては地域活性化も含めたまちづくり等、多面的視点で捉える必要がある。

背景および狙い

わが国では 100 歳以上の高齢者が 9 万人を超え（2024 年 9 月 1 日時点、9 万 5119 人）、さらに 2025 年には高齢化率が 30% を超えていく。この社会的背景のなか、地域コミュニティにおける将来像として「住民自身が地域を創り、支え合って、守っていく」という原点の考えも包含し、持続可能な次世代型まちづくりを構築していかなければならない。しかし、平均寿命と健康寿命の差は約 10 年（男女平均）とされており、直近 15 年を見てもこの差が顕著に短縮できていない。経済財政運営と改革の基本方針（骨太の方針）として、2040 年までに健康寿命を男女とも 3 歳以上延ばすというビジョンが掲げられ、厚生労働省からも健康寿命延伸プランが 2019 年に出ている。生き生き快活な高齢期を送るには、身体が健康であるだけでは不十分であり、生きがい・社会参加・地域貢献・多世代交流などの活力を生む活動が地域の中で求められる。そのためには目前に迫った高齢化の問題を、医療面だけでなく、心理面や社会・人間関係、生きがいを持った就労や経済活動、ひいては地域活性化などの視点も重要になってくる。すなわち、多面的な視点での「総合知によるまちづくり」として捉える必要がある。そして今こそ日本のヘルスケアの底上げのために、エビデンス創出とそれに基づいた政策立案も求められ、まさに産官学民協働によるさらなる健康長寿社会への挑戦の一步を踏み出す時期である。

フレイルとは

ヒトは加齢が進むに従って徐々に心身の機能が低下し、日常生活活動や自立度の低下を経て、要介護に状態に陥っていく。この心身機能の（平均値を超えた）著明な低下を示す者を「虚弱」（frailty）と一般的に呼んでおり、要介護の原因として非常に重要であり、複数の要因によって要介護状態に至る病態と考えられて

いる。全国民への予防意識を高めるため、2014 年にわれわれ日本老年医学会から虚弱のことを『フレイル』と呼ぶことを提唱され、この新概念には次なる 3 つの視点が含まれている（図 1 参照）。

- 1.【中間の時期】：健康な状態と要介護状態の中間地点
- 2.【可逆性】：しかるべき適切な介入により機能（予備能力・残存機能）を戻すことができる時期
- 3.【多面的】：骨格筋を中心とした身体の虚弱（フィジカル・フレイル）だけではなく、こころ / 認知の虚弱（メンタル / コグニティブ・フレイル）、及び社会性の虚弱（ソーシャル・フレイル）が存在する

【住民主体のフレイル予防活動】

全国で同じ価値観で、同じ頂を目指そう！！

- ✓ 指導よりも「共感」
- ✓ 住民同士のパワーを信じよう！
- ✓ 新たな自助・互助のスタイルを！
- ✓ 自分たちのまちは、自分たちで創る！
- ✓ 地域貢献 と 生きがい



【住民主体フレイルサポーター活動】 全国展開システム



全国のフレイルサポーター、そしてトレーナー、行政 【全国で同じ気持ち 同じ方向を向く 地域を超えて仲間】



多様な研究アプローチ

フレイル予防研究におけるマルチアプローチを推進しており、エビデンスとともに地域を動かす（産官学民協働）ことを目指している。以下の多様な取り組みを進めている

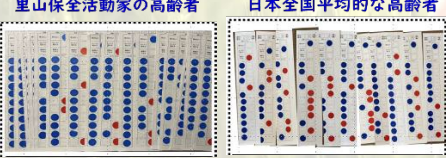
1. 柏スタディ：縦断追跡調査研究によるフレイル関連の最新エビデンス創出（2024年：第8次調査）
2. フレイル予防におけるポピュレーションアプローチ
 - ・全国に広がる「住民フレイルサポーター主体のフレイルチェック活動を軸とした健康長寿まちづくり」：2024年度末の時点で全国104自治体導入
 - ・フレイルサポーター熟練支援者における暗黙知やノウハウ収集：AIロボット搭載、アプリ化
 - ・オンライン版全国フレイルチェックの集い開催およびニュースレター
 - ・KONIC study (Kochi Niyodogawa Cohort Study)
3. フレイル予防産業界の活性化：多様な業態の横断的取り組み、および神奈川県をはじめとする複数の都道府県での実証
4. フレイル研究におけるテクノロジー技術開発：フレイル予兆検知およびマルチセンサーフュージョン、顔表情のアルツハイマー型認知症の予測能、靴インソール型歩容センサー
5. 新たな価値を含む生きがい研究：フレイルサポーターによる地域貢献活動、および生きがいのテクノロジー技術による可視化を活用した個人最適化
6. 新たな価値を含むウェルビーイング向上・生きがい向上研究：フレイルサポーターによる地域貢献活動、および生きがいのテクノロジー技術による可視化を活用した個人最適化、自然に触れ合う活動（里山自然保護活動や都市型農園など）
7. オーラルフレイル研究
 - ・オーラルフレイル概念構築および全国普及、さらには3学会合同ステートメント
 - ・オーラルフレイル予防推進を軸とする産官学民協働モデル：「平塚モデル」構築
8. 厚生労働省・新施策「高齢者の保健事業と介護予防の一体的実施」におけるフレイル対策のモデル化、効果検証
9. 食事性炎症指数も盛り込んだ食支援まちづくり
10. 1964年オリンピック選手と一般地域在住高齢者の比較研究
11. 孤食と社会性の研究

特に、千葉県柏市をフィールドとする「柏スタディ」（高齢者大規模フレイル予防研究：主に自立高齢者が対象とし、住民基本台帳から無作為抽出。開始時平均年齢73歳、男女比1:1）を2012年から展開し、縦断追跡を行っている。（2024年秋には第8次調査を実施）。これはサルコペニアの視点を軸に「、些細な老いの兆候」を多角的側面から評価する形で推し進め、より早期の気づきを与えることにより住民自身に自分事化させ、どのように意識変容～行動変容してもらうことを狙いとして出発した（一人の対象者に対して約260項目）。我々のエビデンスにより、健康長寿（フレイル予防）のための3つの柱として、「栄養（食・口腔機能）」「身体活動（運動など）」「社会参加（就労、余暇活動、ボランティアなど）」の3つに集約し、全国でフレイルサポーター養成研修を実践しながら、多くの自治体にフレイルチェックを実施している。このように、高齢住民フレイルサポーター達の新たな地域貢献を狙いながら、より早期からの包括的フレイル予防を実現している。個々の健康寿命を延伸し、快活なまちづくりを目指す中で、サルコペニア研究を基盤としながら、多面的な要素で進行するフレイルに対する早期予防や対策は非常に重要である。そのためには、基礎研究から臨床応用へ、そして患者様へのフィードバック、さらには地域コミュニティへのポピュレーションアプローチ（すなわち From Bench to Community）の一連の流れが必要となり、われわれ東京大学高齢社会総合研究機構の中のフレイル予防研究チームが一丸となって新エビデンスを創出している。

自然を育む活動（里山保全・都市型農園）とWell-being、そして健康



里山保全活動家の高齢者 日本全国平均的な高齢者



参考データ： 呂、田中、飯島（東京大学高齢社会総合研究機構）



世代を超えて 気づけば健康

ICT/IoTで簡単菜園、
オンラインコミュニケーション

育てた野菜を調理・共食

チーム・いきがいくくり

健康状態の可視化

Urban Community Farming

ジェロントロジー
産学連携の一例

オーラルフレイル研究

高齢期の『食力』とは

フレイル（虚弱）の最大なる要因として、栄養の偏りや低栄養を基盤として進行するサルコペニア（筋肉減弱）が大きな課題であり、そこには原点である「いつまでもしっかりと食べられる、すなわち口腔機能の重要性」を改めて国民に意識変容を促す必要がある。高齢者の食の安定性、すなわち「食力」がどのような要素によって下支えされているのかを再考してみると、歯科口腔機能（残存歯数や咀嚼力、嚥下機能、咬合支持など）が一番重要であると同時に、複数の基礎疾患（多病）やそれに付随する多剤併用（ポリファーマシー）、全身やお口のサルコペニア、さらには栄養問題（栄養摂取バランスの偏り等）に加え、食に対する誤認識もなどの要素も関与は大きい。さらに、社会性・心理面・認知・経済的問題等の要素も軽視できない。その中には孤食などの食環境の変化も含まれる。以上のように、高齢者の食を考え直してみると、高齢者が低栄養に傾いてしまう原因は多岐にわたる。そのなかで、どの高齢者に対して安定した食生活を、そして最期の時期まで自分の口で食べられるように、早い段階から国民に啓発したい。この食支援および口腔機能の視点は、今後フレイル予防を進める中で非常に重要な鍵になる。

オーラルフレイルの概念

オーラルフレイルは、日本で考案された概念である。従来、軽視しがちな口腔機能の虚弱化（オーラルフレイル）をより早い段階で評価し、早期に気づき・行動変容につなげ、さらに然るべき必要

な介入を施すことが健康長寿の達成に向けても寄与することが期待される。東京大学高齢社会総合研究機構が実施している高齢者コホート研究（柏スタディ）において、歯科口腔機能や口腔衛生状態の全 16 指標を評価し、そのなかで、客観的指標 4 項目（①残存歯数が 20 本未満、②ガムによる総合咀嚼力、③最大の舌圧、④滑舌）と主観的指標 2 項目（⑤半年前と比べて堅いものが食べにくい、⑥お茶や汁物でむせる）の 6 項目のうち 3 項目以上において軽微な衰えとして基準値を下回った方々をオーラルフレイル群と位置付けてみると、4 年間の追跡調査により、身体的フレイルやサルコペニアの新規発症がそれぞれ 2.41 倍と 2.13 倍、要介護の新規認定が 2.35 倍、総死亡が 2.09 倍になることが判明した。このようなエビデンスを踏まえ、新概念「オーラルフレイル」を世の中に出すことになった。

その後、研究のさらなる推進があり、新たなエビデンスをかなり蓄積されたことを受け、2024 年 4 月 1 日に『オーラルフレイル 3 学会合同ステートメント』を発出した。（代表責任者：飯島勝矢、3 学会：一般社団法人 日本老年医学会、一般社団法人 日本老年歯科医学会、一般社団法人 日本サルコペニア・フレイル学会）その中で、以下のように示している。

【概念】オーラルフレイルは、口の機能の健常な状態（いわゆる『健口』）と『口の機能低下』との間にある状態である。

【定義】オーラルフレイルは、歯の喪失や食べること、話すことに代表されるさまざまな機能の『軽微な衰え』が重複し、口の機能低下の危険性が増加しているが、改善も可能な状態である。



また、オーラルフレイルには社会的フレイルにも当てはまる高齢者が多いことも明らかとなってきた。オーラルフレイルは身体的な衰えのみならず、社会的フレイルをも呼び起こし高齢期の生きがいをも奪ってしまっている可能性もある。口に関するささいな衰えを放置したり、適切な対応を行わないままにしたりすることで、口の機能低下、食べる機能の障がい、さらには心身の機能低下まで繋がる負の連鎖が生じてしまうことに対して警鐘を鳴らした概念である。

オーラルフレイル研究の 今後とその期待

フレイル予防による健康長寿実現のためには、「栄養（食事・口腔機能）」「身体活動（生活活動・運動など）」「人とのつながりや社会参加」の3つの柱が重要である。そこには社会や人とのつながりが非常に重要であることも再認識すべきである。そして、

オーラルフレイル段階での早期発見・早期介入は重要な意味を持ち、フレイルの負の連鎖をより早期から断ち切る戦略として期待が高い。東京大学高齢社会総合研究機構の中のフレイル予防研究チームでは、歯科専門職が不在の状況（例：地域コミュニティの地域サロン・通いの場など）において、簡単にオーラルフレイルの危険度が判定できる簡易スクリーニング質問票（Oral Frailty Index-8: OFI-8）をすでに公表しているが、さらに今回のステートメント（前述）にて Oral Frailty 5-item Checklist (OF-5) を世の中にリリースした。いかに国民が取り組みやすく、自己評価ができるのか、いかに口腔機能に対して新たな意識を持ってもらうのか、さらには医科歯科連携も含めた多職種連携そして産官学民協働による地域ぐるみでのオーラルフレイル予防啓発（例：神奈川県平塚市の平塚モデル）をいかに加速できるのか、等の重要な方向性が重要となる。

オーラルフレイル 3学会合同ステートメント (2024年4月1日 発出)



一般社団法人 日本老年医学会
一般社団法人 日本老年歯科医学会
一般社団法人 日本サルコペニア・フレイル学会
オーラルフレイルに関する3学会合同ワーキンググループ



オーラルフレイルの概念図（一般市民向け）



オーラルフレイル3学会合同ステートメント（2024年4月リリース）から引用

オーラルフレイルを自分でチェックできる この5項目でやってみよう Oral Frailty 5-item Checklist (OF-5)

新5項目



歯科・口腔状態
残存歯数の低下



咀嚼困難感



嚥下困難感



口腔乾燥感



滑舌低下
(口腔巧緻性)

チェック項目

- 自身の歯は何本ありますか
☐ 0～19本 ☒ 20本以上
- 半年前と比べて固いものが食べにくくなりましたか
☒ はい ☐ いいえ
- お茶や汁物等でむせることがありますか
☐ はい ☒ いいえ
- 口の渇きが気になりますか ☐ はい ☒ いいえ
- 普段の会話で、言葉をはっきりと発音できないことがありますか
☒ はい ☐ いいえ

※評価が可能な場合により推奨
オーラルディアドコネシス (ta/音) ☐ 6.0 (回/秒) 未満 ☐ 6.0 (回/秒) 以上

2つ以上あてはまる場合に「オーラルフレイル」

オーラルフレイル3学会合同ステートメント（2024年4月リリース）

人生100年時代の フレイル予防産業創生に向けた取り組み

わが国は人類が直面したことのない超高齢社会に突入しており、特に高齢期の適正な食習慣の維持は健康な身体を構成する上で重要な課題である。高齢者の「食・食習慣」を守るための新しい食文化の形成、社会性と学びを伴う新たな食の場の構築においては、食品産業界には大きな役割があり、製造業による商品開発、小売店舗やコミュニティにおけるサービス提供などと併せて不断の努力が欠かせないものとなる。

東大ジェロントロジー産学連携コンソーシアムの中での最も大きな活動となっている「食の在り方研究会」においては、商品・サービスの開発および改良から、高齢期の食に関係するエビデンスの活用、同業種・異業種間との連携など、新しい視点からのビジネス創出も視野に入れて取り組み始めている。分野を越えた企業間での連携では、フレイル予防の3つの柱「栄養」「身体活動」「社会参加」の三位一体となった形で、「食」をフレイル予防産業の入口とし、ここに新たに運動や社会参加の要素が加わり、今後は旅行やフィットネスなど、フレイル予防に資する様々な産業の発掘と健全な育成に展開していくことが期待される。そのなかでも、高齢期は人とのつながりの中で一緒に食べる、いわゆる「共食」が重要な視点として位置付けている。それこそ共食サービス産業

の創生なども戦略的に検討されている。全国への汎用性を目的として、これらの取り組みを標準化し、従来の一次予防のアプローチ（啓発）だけではなく、「環境側を塗り替えていく、いわゆる『ゼロ次予防』」として、フレイル予防に資する新しい生活習慣やまちづくりとして根付かせ、地域の住民が日常の生活を永く続けられる仕組みを拡げていくことを目指していく。フレイル予防に資するポピュレーションアプローチにおいては、産学官民連携による総合知を包含した取り組みを行っていくことが重要になると考えるが、そのなかでも食品業界が牽引者となり、果たせる役割は多い。しかも、食は全ての人間にとって原点であり、無関心層等にも情報を届かせるためにも食品業界の担っている役割は大きいのであろう。これまでも、そしてこれからも、国民の暮らしの中で「食」は生きる上で欠かすことができないものである。だからこそ、単なる栄養摂取の情報提供にとどまらず、食そのものを楽しむことや食を通したコミュニティづくりとしても重要な役割がある。食品業界の多くの企業が、具体的な食提案と健康長寿の3つの柱「栄養」「身体活動」「社会参加」の三位一体の取り組みを軸に業種業態を超えて地域の一員として、地域に根差した食と健康の取り組みを推進していくことを展望する。

フレイル予防のためのエビデンス構築とフレイル予防産業の開発・活性化

【課題】生活習慣病対策は既に国の政策として推進中であるが、介護予防の政策体系は、まだ構築途上にある。日本老年医学会は、要介護になる手前の徐々に虚弱になる過程を「フレイル」と定義した。今後は早期の可逆性の高い段階でのフレイル予防政策を普及させることが国家的課題である。早期予防のためには、自助、互助を基本に置いた健康長寿のまちづくりが重要である。その一環として、フレイル予防に資する商品・サービスの役割は、重要であり、そのエビデンスの構築し、フレイル予防産業の振興を目指す。



フレイル予防におけるテクノロジー研究

人生 100 年時代に入り、高齢期であってもいかに生活の質を保ち、人生を生き切ることができるかという時代の要請に対して、ジェロントロジー総合研究として応えていく必要がある。ヒトは自然の老いのなかで「健康⇒フレイル⇒要介護⇒終末期⇒看取り」という一連の流れを辿っていくのだが、避けられない老いの過程の中で、2つの視点が重要となる。1つ目として、住民（特に高齢者）自身がどのように気づき、何に気を付けて行動変容していけるのか。そして2つ目として、住んでいる環境側をアレンジしていくことである。その中には、住んでいるだけで結果的に地域交流が進み、かつ身体を動かしているなどの環境整備も必要であろう。それと同時に、住環境の中で本人の老いのサインを見える化したり、オンライン技術で地域交流が推進されることも非常に重要である。

もう一回り詳細に述べれば、以下の研究デザインの方向性が必要であろう。健康長寿を実現するための具体的な方策を考えてみると、改めて国民の一人ひとりが気づきを得て、自分事化した後に、意識変容や行動変容に促すことも当然ながら重要である。それと同時に、国民が住んでいる地域コミュニティのあり方、および住環境の要素も非常に重要な視点である。健康のためにそれに資することを実践するだけではなく、多様なスタイルで日常生活を過ごし

ていると、結果的に健康に資することにつながるという環境側の整備や工夫も大きく影響するのであろう。その住環境要素の中でも、単に身体機能低下を持ち合わせると高齢の方がどのような住宅に住むのか、という単一の視点だけではなく、最新テクノロジー技術も兼ね備わった住まいで、どのように早期の段階でフレイル（＝多面的な老い）の兆候を見出し、本人や家族に早期の警鐘を鳴らせる機能も兼ね備えた住宅なのか、等の先進的な開発も大きく期待される。

そこで、我々の「フレイル予防におけるテクノロジー研究」として、以下の内容を走らせている。

- 【1】転倒骨折に関するモーションキャプチャー動作解析
 - ・模擬住居を活用したカメラ型モーションキャプチャー動作解析
 - ・着衣型モーションキャプチャー動作解析
- 【2】マルチセンサーフュージョンによるフレイル予兆検知
- 【3】電力スマートメーターからの AI 解析を活用したフレイル予兆検知
- 【4】フレイル早期予防のためのビッグデータ AI 解析
＜日立東大ラボ＞
- 【5】post コロナ社会を見据えた「次世代ハイブリッド型地域コミュニケーション」開発

フレイル予防におけるテクノロジー研究

Technology development in frailty prevention

最新テクノロジーを活用したフレイル予兆検知・早期予防（産学共同研究）

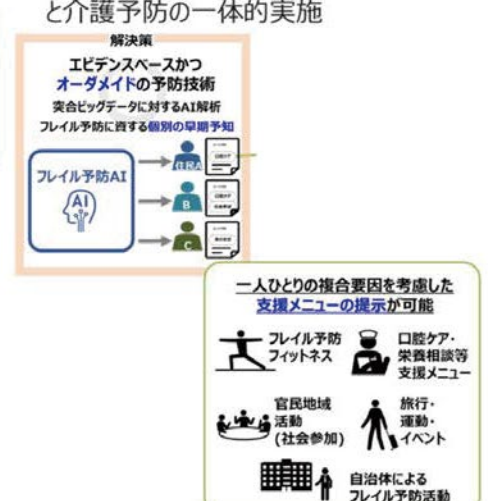
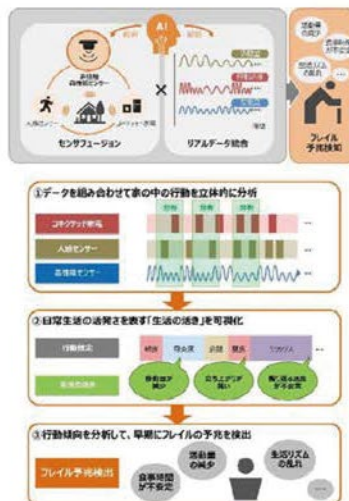
【フレイル予兆検知】

【フレイル早期予防のためのAI研究】

(1) モーションキャプチャー (2) マルチセンサーフュージョン (3) 電力スマートメーター (4) フレイル予防AIおよび高齢者の保健事業と介護予防の一体的実施



	(mm)	遊脚時足首高	歩幅	歩行速度
転倒リスク低	右	156	876	575
	左	156	823	
転倒リスク高	右	90	465	363
	左	133	423	



オンライン型フレイルチェック

特に、非接触型の安心見守り（監視）システムは重要であり、かつ一定以上のニーズが存在する。しかし、倒れて動かない状態なのか等、かなり重篤な状態やシビアな状況に陥ったケースが多い傾向にある。また、行政による介護予防事業等の公的な取り組みも進んでいるとはいえ、地域在住高齢者の参加者数もなかなか裾広がりになりにくい現状もあり、健康状態を維持するためには多角的な支援が求められる。そこで、我々の研究デザインとして、「もっと早期の段階で、そして日常生活の中でちょっとした老いのサインを『フレイル予兆』として検知すること」に狙いを定め、多様かつユニークな産学共同研究を推進している。

本研究で中心的に取り上げている「フレイル」は、身体的・精神的そして社会的な多面的な要素からなり、健常な状態よりは虚弱化が進行しているが、いわゆる身体機能障害（disability）とは異なり、適切な介入によって健常状態に回復することが可能な状態である。現在加速している高齢社会にあって、フレイルに対する早期からの適切な対策が必要不可欠であり、そのための科学的根拠の構築が必須である。我々のジェロントロジー総合研究の一環として、地域在住高齢者の日常生活における「普段からしている行動」をいかに科学的根拠として客観的データとして取得し、簡易なアセスメントが出来るのか、精力的に開発している。さらに、コロナ感染の問題が3年目に入り、post コロナ社会を見

据えた新たな地域像を考えなければならない。フレイル予防・対策のためには、新型コロナ問題の有無にかかわらず、「栄養（食と口腔機能）、身体活動（運動、非運動性活動も）、社会参加（人とのつながりが特に重要）」の3つの柱をいかに三位一体として底上げし、日常生活の中に継続的に盛り込めるかが鍵になる。そこには、①個人へどう情報を届け、意識変容・行動変容してもらうか、そして②住民活動休止状態の地域をどう前向きに再構築していくのか、この2つの視点が重要になる。高齢者にはこの感染症に対して「正しく恐れる、賢く恐れる」ことを促しながら、悪影響を早々に改善してもらいたい。すなわち、感染予防の対策だけを強調するのではなく、それ以上に、生活不活発及び人とのつながりも含めた社会性の低下に関する予防の重要性もしっかりと伝えるべきである。また、人とのつながり（社会交流）を維持するためには、次なる時代を見据えたオンライン技術へさらに一歩踏み出す必要もある。身体がたとえ離れていても、心は近づいており安心して交流が出来る地域社会を構築したい。そのような背景から、post コロナ社会を見据えた「次世代ハイブリッド型地域コミュニケーション」開発に着手し、まずはオンライン型フレイルチェック開発から行い、都内のモデル自治体2か所にて地域実装されている。以上により、「安心」ある地域および住まい、そして「絆」を構築できる地域コミュニティを目指し、フレイル予防におけるテクノロジー研究を推進している。

フレイル予防におけるテクノロジー研究 Technology development in frailty prevention

postコロナ社会を見据えた「次世代ハイブリッド型地域コミュニケーション」開発

対面（COVID-19流行前）



結果説明

指輪っかテスト

対面＋オンライン（コロナ禍）



握力

滑舌測定

イレブンチェック

学生との
交流
オンライン
全国集い

生活支援体制整備と 地域型ICTネットワークシステム構築研究

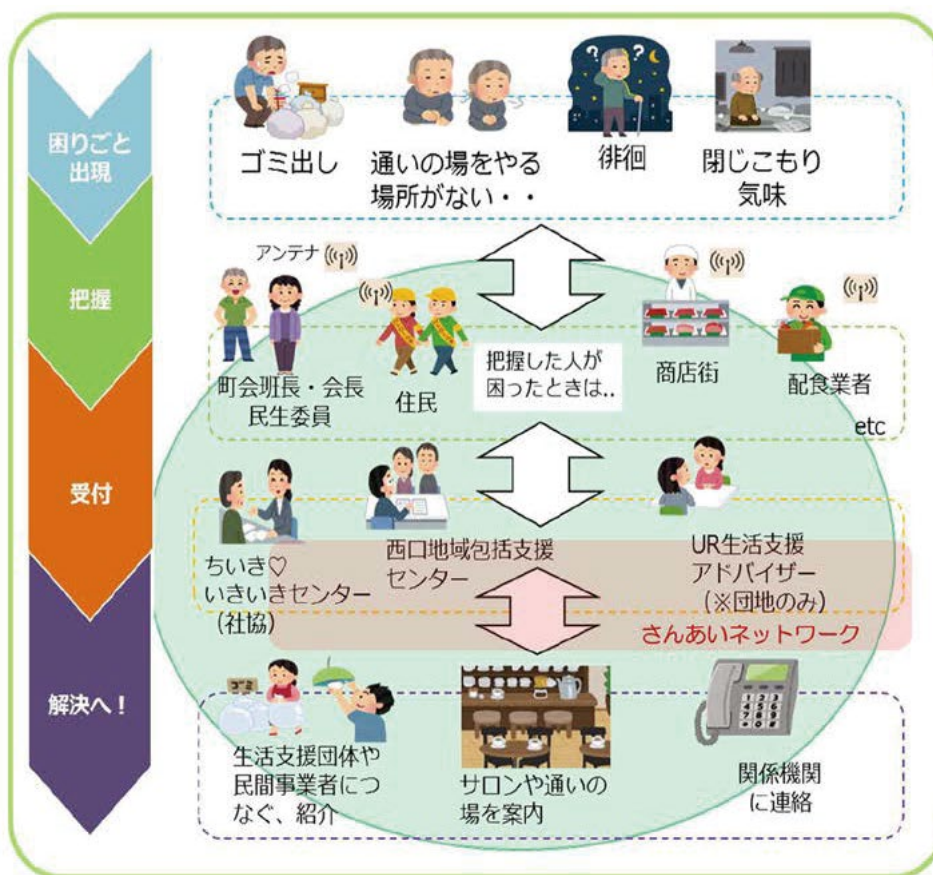
人は大半の方々が、健康な状態から老いの坂道を下り、要介護状態までの虚弱化プロセスを辿る。しかし、高齢になればなるほど個人差が大きいいため、地域在住の方々のなかには多様な状態の方々が混在して存続する。また、特に首都圏においては、2025 年以降、生活習慣病を含む様々な疾患を併せ持つだけでなく、身体機能低下、認知機能低下、うつ状態、独居や孤立などに諸課題を有する高齢者が激増することも明らかである。わが国は平成 27 年 4 月から地域支援事業において、要支援者および2次予防事業対象者向けの介護予防・日常生活支援に資する生活支援体制整備事業を施行し、全国の自治体でコーディネーターの配置、協議体の設置等が行われ実施されるに至って

いる。

日常のちょっとした困りごと（足腰が弱ってきて一人で買い物に行けない、通院困難、ゴミ出しできない、電球の交換ができない等）を手助けしてほしいというニーズへの対応として、強い「互助」のシステムを期待したい。そのために、現在、千葉県柏市のなかの豊四季台エリアをモデルフィールドとして「豊四季地域さんあいネットワーク」の仕組みを構築してきた。

住み慣れた地域で自分らしい暮らしを継続するための仕組みとしての地域包括ケアシステムは、在宅医療や介護サービスの専門職による多職種連携の強化と同時に、フレイル期における日常生活の維持をするための生活支援体制の確保が重要な役

豊四季地域さんあいネットワークの仕組み

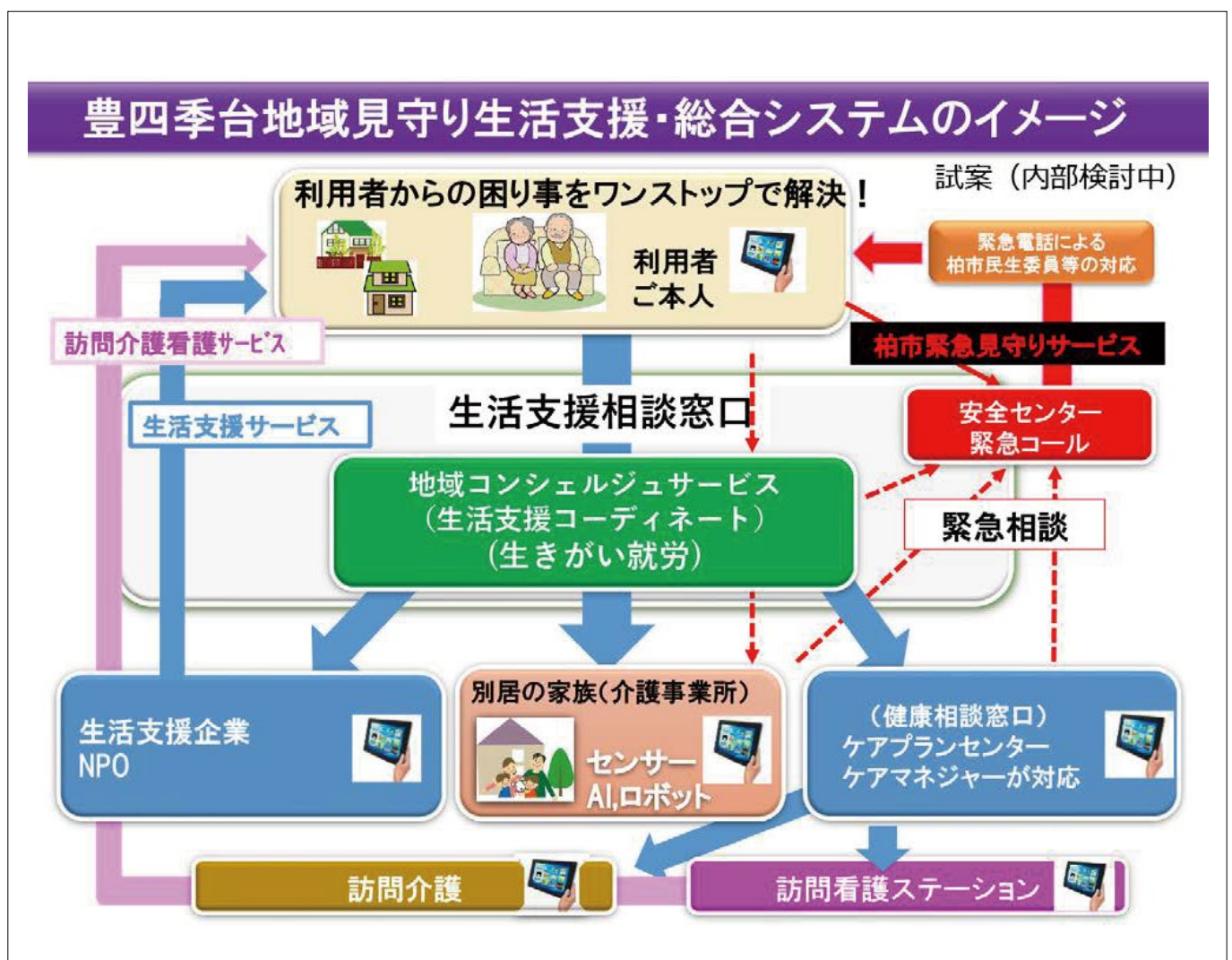


【日常生活圏域で解決できること】

1. 困った人がなんでも気軽に相談できる窓口（人）がある
2. 徘徊など、他の人の異変や困りごとを把握した人や相談できる窓口（人）がある
3. 相談されたことが解決につながる
4. 困りごとを解決できるサービスや資源が地域に豊富にある

割となる。フレイルの進行はその段階において適切な生活支援の投入がなされれば、その方の日常生活を普通に送り続けることが可能となる。生活支援の体制の強化はフレイル予防対策と表裏一体の体制整備構造といっても良い。

今後の介護予防、生活支援体制整備の拡充に向けては、それを推進するための人材や資金が不足してきており、ICT (Information Communication Technology) 情報システムを活用し、地域の高齢者への自立支援や介護サービス、在宅医療までのシームレスな連携を行える環境を構築することが重要な時代になってきている。各家庭に ICT 情報システムは日常生活圏を基礎単位とする「地域コンセルジュ」が介在する様な形で高齢者の困りごと等に対応する地域型ネットワークシステムの構築も一案である。更には介護予防・生活支援から在宅医療・介護連携までの一体的な運用により、社会を支える情報基盤システムの一つとして有用なツールになると考えている。



地域包括ケアシステム構築に関する研究

社会構造の変化

わが国の超高齢化が進むなかで、特に75歳以上の後期高齢者（なかでも85歳以上の超高齢者）が急増していくことも予測されている。具体的に見てみると、2005年から2030年までには後期高齢者人口が倍増し、同時に認知症や独居高齢者も激増していきながら多死時代にも突入する。その多死時代は2039～2040年頃がピークとも推計されている。その超高齢化の流れに加え、医療の高度化、そして疾病構造も大きく変化し、疾患や障害を持ち合わせながら長期に療養する患者が増える時代に突入している。個々の症例の抱える問題も多様化・重層化し、日々の臨床業務の中で頭を悩ます事例も少なくない。さらに、在院日数の短縮化と在宅医療の高度化に伴い、医療ニーズの高い患者が病院から早期に退院するようになってきている。その現状を踏まえ、円滑な療養場所の移行のための多職種・多機関の連携の底上げが各地域単位で改めて求められる。言い換えれば、我が国の医療政策が問い直されており、幅広い視点から医療・介護提供体制を大きく進化させていく時期に来ている。

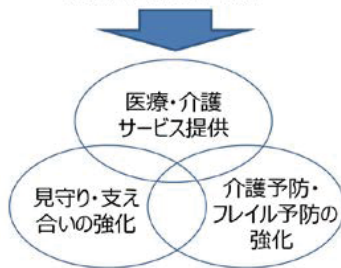
地域完結型医療のなかでの在宅医療新時代：連携から統合へ

国の方針としての「地域包括ケアシステム」が打ち立てられ、10年強の年数が経過した（図1）。要介護状態となっても、住み慣れた地域で自分らしい生活を最期まで続けることができるように地域内で助け合う体制のことを指す。特に、それぞれの地域の実情に合った医療・介護・予防・住まい・生活支援が一体的に提供される体制を目指している。

なかでも在宅医療を軸とした地域医療の底上げと介護連携に重きを置き、全国の各地域で進めてきた訳だが、地域ごとの進歩や気運の醸成の具合を聞いてみると、当然ながら幅がある。高齢期であってもいかに生活の質（Quality of Life：QOL）を保ち、よく生き切って人生を閉じることができるかという時代の要請に応える医療が今まさに求められている。そこには「病人である前に『生活者』である」という理念の下に、住み慣れた街全体で生から死までを地域全体で支え、みて（診て・看て）いくという地域完結型の医療への進化、そして機能分化型のシステム型医療へのパラダイム転換が求められる。すなわち従来の「治す医療」から『治し支える医療』という原点に立ち返る必要があり、その象徴的存在がまさに在宅医療である。さらに強調するならば、医師も中心人物の一人となって、全職種によるシームレス（切れ目のない）な現場を作り上げ、まさに今まで培ってきた「連携」から『統合』へギアを上げ、セカンドステージに入っていくことが望まれる。

『地域包括ケアシステム』の概念図

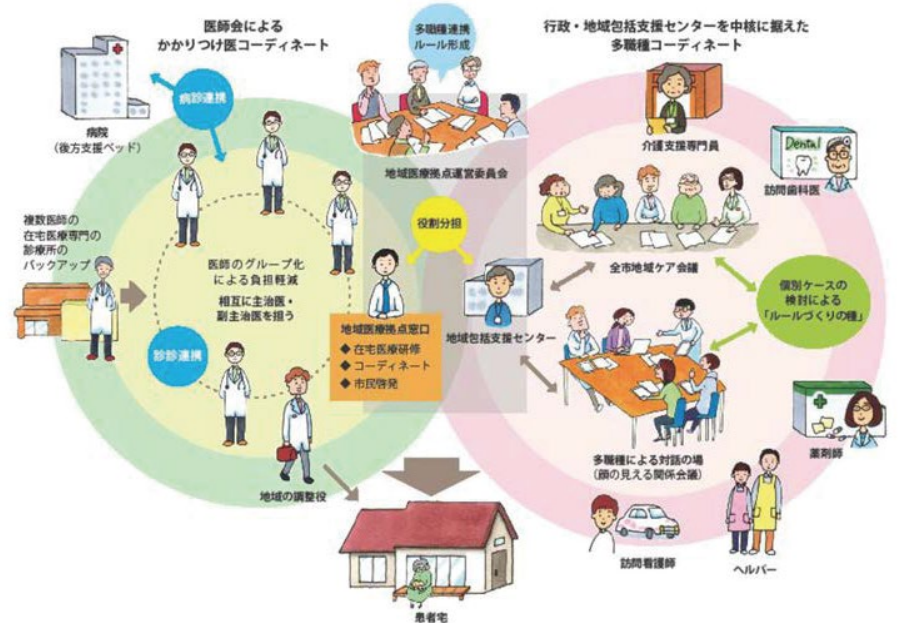
【地域の課題が顕著に】
超高齢化
独居や老夫婦世帯の増加
要介護認定者の増加
認知症高齢者の増加



『地域完結型の医療』への進化



まちづくりの中での多職種連携



多職種連携/協働の重要性および ケアチーム構築

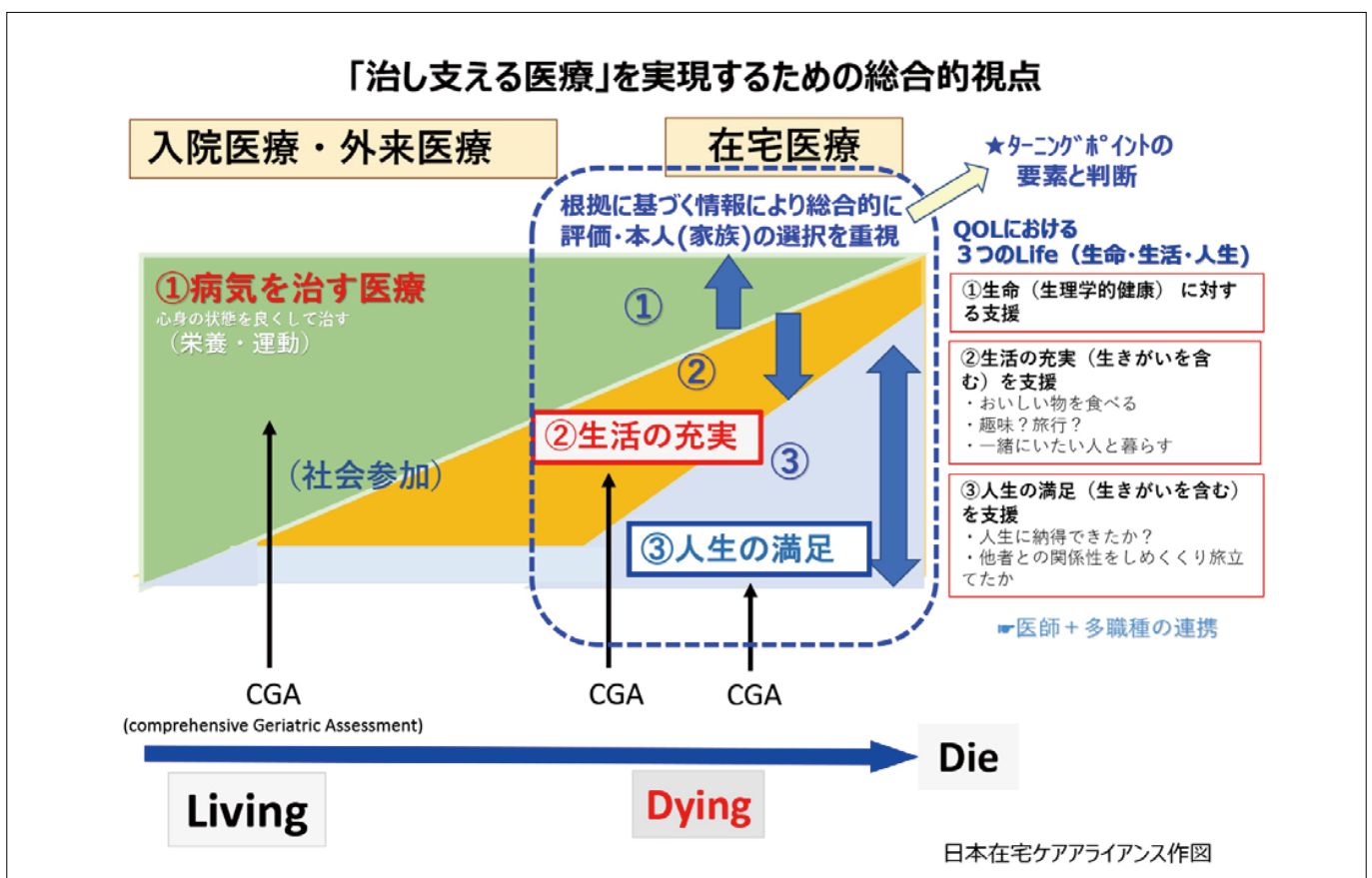
本研究で目指している「多職種協働 (inter-professional working: IPW)」を示す。症例ごとにさまざまな背景と異なる経過が予想され、多様な専門職を必要とするケースも少なくない。多職種・多機関での連携が円滑に行われ、必要な情報が迅速かつ適切に共有されることは、医療安全、ケアの効果的な提供、患者や家族の満足度向上等、さまざまな点で非常に効果的である。さらに、個々の従事者のモチベーションアップにもつながり、ケアの質向上にも連動していく好循環を生み出す。

地域包括ケアシステムの普及が時代の急務であるが、とりわけ今後は重度化した高齢者も生活の場で継続的にケアをすることを考慮すると在宅医療が不可欠である。地域包括ケアの願いである『Aging in Place』（弱っても安心して住み慣れたまちに住み続ける）をモットーとしながら、在宅医療推進のモデルづくりにはいくつもの視点に工夫が必要である。本研究では、特に千葉県柏市をフィールドとして、以下の視点にも焦点を当てながら進めている。

1. 24 時間を見守るシステム開発
2. 多職種協働 (inter-professional working: IPW)
3. 地区医師会と自治体行政の連携
4. 在宅医療・在宅ケアへの教育システム構築：on the job
トレーニング「在宅医療推進のための地域における多職種
連携研修会」を開発

5. 多職種協働や住民啓発における行政側の役割
6. 情報共有システム (information and communication
technology : ICT) を活用した多職種間の情報連携
7. 医療・介護レセプトデータからのエビデンス創出

真の地域包括ケアの鍵となる在宅医療の普及を通して医療改革が進み、生活者としての患者本位で、外来機能や入院機能をもつ病院医療と在宅医療の強い連携と調和が求められている。すなわち、どの医療従事者も『「治し支える医療」を実現するための総合的視点』を持つことが重要である (図3)。我々がよく使用する QOL という言葉における life には、「①生命、②生活、③人生」という3つの意味を含んでいる。①生命 (生理学的健康) に対する支援だけではなく、②生活の充実 (生きがいを含む) を支援すること、さらには③人生の満足 (生きがいを含む) を支援することも必要となる。どんな場面であれ、この3つの life の意味が実現されて欲しい。そして、多職種・多機関での連携が円滑に行われ、必要な情報が迅速かつ適切に共有されることは、医療安全、ケアの効果的な提供、そして最終的には患者や家族の満足度向上等、さまざまな点で非常に効果的である。さらに、個々の従事者のモチベーションアップにもつながり、ケアの質向上にも連動していく好循環を生み出す。患者・家族中心のケアを実現するには、地域医療を守る円滑な多職種連携、そしてこだわりを持った多職種連携チームの存在が必要であり、そのチーム力が問われている。まさにそのチーム力の結集はその地域ごとの「地域力」と言っても過言ではないであろう。



長寿時代の高齢者地域就労に関する研究 ～セカンドライフの生きがいがいづくりに向けて

東京大学 IOG（高齢者地域就労研究チーム）が取組む「高齢者就労」に関する研究は、定年を迎えたシニアが自宅のある“地域”の中で新たな活躍の場を見いだせるように、社会の制度・政策、地域社会システムのあり方について社会提言を行いながら、具体的な地域モデルを創造していくことを目的としている。社会的フレイルの予防や生きがい支援の観点からも重要な研究課題と認識している。

当研究における最大の課題は、私どもがⅡ層と称しているいわゆる「普通のシニア層（定年を迎えた会社員・公務員等や子育てを終えたシニア層）」の“マッチングが進まない（雇用が成立しない。新たなセカンドキャリアに移行できない）”ということである。経営者や自営業者あるいは明確な専門スキルを有している層は今も昔も比較的スムーズにセカンドキャリアへ移行しやすく特段の心配が不要な層であり、他方、生活困窮の状態にある層は生計を確保するために就労は必然となる。この間に位置するのがⅡ層であり、最もボリュームが大きい層であるが、その多くが活躍の場を見いだせずにいる。この要因としては、企業や団体等がシニアに求

めるニーズと当該シニア層が仕事（新たな就労）に求めるニーズが合わない“ミスマッチの状態”が解消されないことが大きい。こうした状態は今に始まったことではないもののこの問題を引続き放置してしまうと、生きがい等が満たされない不健康なシニアがますます増え、社会にとっても貴重な労働力を失い続ける結果を招いてしまう。

当研究チームでは、この問題の解決に向けて、次の3つの取り組みを進めている。一つは、「発想の転換（パラダイムシフト）」。個人、企業、社会全体に対して、生涯現役で活躍する意味や意義を改めて広く啓発すること（特に地域で活躍することについて）。二つは、「仕事（選択肢）の開拓・創造」。前述した普通のシニアの仕事（新たな就労）に対するニーズを踏まえた形で、仕事の選択肢を広げること。三つは、「マッチングシステム・イノベーション」。こうした高齢者の活躍を支援する持続的な社会システム（機能）を地域に実装していくことである。それぞれについてまだ取組むべき課題も多いが、高齢者が活き活きと活躍できる生涯現役社会の実現に向けて今後も精力的に取り組んでいく所存である。



ジェロテクノロジー研究

日本には高い心身機能と意欲を持ち様々な新しい活動に挑戦する高齢者もいれば、心身機能の減退や生きがいの喪失に直面し生活に様々な支援を必要とする人もおり、支援ニーズもさまざまである。また、その多様性を受けて高齢者の暮らしを支援する技術も、社会参加から介護現場の支援まで非常に多様なものが求められている。

高齢社会総合研究機構 (IOG) では、学際的な組織ならではの多様な専門性を活かし、AI や XR、ICT、ロボティクスなどの新技術を開発し、自治体や企業等での運用、社会参加を促進する分野横断研究を行っている。また、地域のキーパーソンとともに安全な生活をサポートする見守りシステムや自己管理支援システム、日常の移動を支援するパーソナルモビリティや MaaS、地域での自立した生活を維持するための福祉用具を含めた支援機器の活用促進に加え、疾患や個人特性に合わせた介護・リハビリ技術の研究開発も進めている。さらに、それらの機器やシステムを普及するための制度や政策についての産官学連携の議論も行ってい

Ⅱ. これからの健康長寿に向けた豊かな高齢社会づくりには、高齢当事者や家族に限らず、より多くの世代との接点を増やし、地域全体の課題として取り組む工夫が必要であり、テクノロジーの貢献が期待される。例えば、ライフログやトリップデータ等を用いた各世代の行動特性の分析は、地方地域交通におけるフレキシブルな時空間活用や世代分断の進む都市部における多世代で共有する場の設計への応用が期待できる。また、多世代が交流する中でそれぞれのニーズ、関わり方、テクノロジーの使い方などを日常生活の中で学ぶことができれば、高齢者を含むすべての人々に配慮したコミュニティや文化の育成につながると考えられる。

IOG では、今後私たちが直面する人口減少に備え、限られた社会資源の中でテクノロジーとともに生きる将来像について活発に議論し、地域住民と共に考えるインクルーシブな社会実現に向けたテクノロジーの活用やコミュニティづくりの促進を目指している。



まちづくり総合研究

日本が世界に先駆けて突入しつつある、誰しもが未だ見たことのない世界である超高齢社会における「住まいまちづくり」のビジョンを描き、地域の特性ごとに、そのビジョンを実現するための社会の仕組みを攻究し、多様なプレイヤーとともにアクションリサーチをベースに実現していくことが、IOGにおける「まちづくり総合研究」の目的である。

この研究フィールドの特徴は、研究におけるズーム機能、フィルター機能を重視していることである。

ズーム機能とは、対象とする現象をミクロレベルからマクロレベルまでシームレスに理解するための意志と知見を備えた研究組織としての能力のことである。人間の身体動作やそれと深く関連する空間の設えや住宅や施設の間取りに関わる、1:1の当寸大・原寸大レベルの現象理解とそこでの課題解決を目指すと同時に、1:10,000くらいで表現される地域社会における多様な人間と居

住空間・サービス提供拠点の分布、それらをつなぐ各種地域インフラの配置、それらの間を移動する人間やサービスのモビリティ確保、の課題解決が目指されなければならない。さらにその間に存在する、1:100レベルの住宅や施設の各種性能確保、1:200レベルの住宅間、住宅と公共空間の間のコミュニケーション空間のデザイン、1:500レベルの近隣コミュニティのマネジメントデザインといった領域も、独立現象としてではなく同時存在現象として観察するズーム機能を重視しながら研究を進めている。またフィルター機能とは、上述の空間縮尺レベルをソフトからハード、システムまで分野横断的に総合化・統合化して課題解決を図るという研究組織としての能力のことである。医学、保健学、社会学、経済学、法学、工学、デザイン学といった各種の専門家が同じフィールドに同じ気持ちで参加すること重要視しながら研究を進めている。



▲めじろ台テラス（空き店舗の地域の居場所活用）



▲めじろ台駅前ショッピングセンター 春祭り

社会提言・その他

IOG 教員が 2024 年度に行った高齢社会に対する社会提言をご紹介します。

高齢社会対策大綱 32

フレイル予防を軸とした健康長寿・
幸福長寿まちづくりの実現に向けた提言 34

Social Advice/Other

高齢社会対策大綱

飯島 勝矢（東京大学高齢社会総合研究機構 機構長・未来ビジョン研究センター教授）

令和6年9月13日に政府が推進すべき基本的かつ総合的な高齢社会対策の指針となる『高齢社会対策大綱』が閣議決定された（内閣府が所管）。本大綱に向けて設置された「高齢社会対策大綱の策定のための検討会」に、飯島勝矢機構長、大月敏雄副機構長、檜山敦特任教授が構成委員として参画した。検討会では、高齢者の活躍や健康・福祉、安全安心な生活環境の整備等の政策課題について、エビデンスをもとに審議を重ね、報告書として提言をまとめている。

今や高齢化は全世界的な傾向（特にアジア諸国を中心に）でもあり、わが国・日本の固有のものではない。すなわち、世界各国においても今後直面する大きな課題の一つであり、高齢社会のトップランナーである日本の対応に世界からの注目が集まっている。今までは2025年問題を取り上げてきた経緯があり、その2025年に到達した今、次なる「2040年問題」も叫ばれ始めている。

「高齢社会対策」とは、増加する高齢者を支えるための取組だけではない。今後、少子化および高齢者の割合がさらに大きくなっていく社会を前提として、全ての世代の人々にとって持続可能な社会および地域コミュニティを築いていくための取組である。人口構成や社会構造の変化に伴い、2040年問題という言葉に代表されるように、経済社会の担い手不足、経済規模の縮小等のほか、一人暮らし高齢者の増加等のライフスタイルの変化や認知機能が低下する人の増加等に伴う様々な影響や課題が懸念されている。具体的には、2040年代前半には、65歳以上人口がピークとなり、それまでに生産年齢人口は急減していく。このような変化を見据えつつ、社会の持続可能性（サステナブルな社会全般）を確保するためのあらゆる備えをしていくことが急務である。



内閣府

「高齢社会対策大綱の策定のための検討会 報告書」 2024.8.5

「高齢社会対策大綱」 閣議決定 2024.9.13

<https://www8.cao.go.jp/kourei/measure/taikou/r06/hon-index.html>



一方、超高齢社会が進んでいるとはいえ、高齢者の体力的な若返りも指摘されている。これらの状況を踏まえれば、65歳以上を一律に捉えることは現実的ではなく、新たな高齢期像を志向すべきである。よって、年齢に関わらず、個々の意欲や能力に応じて経済社会における様々な活動に参画する多様な機会を確保し、その能力を十分に発揮できる環境を創っていく必要がある。今回、2024年9月13日に閣議決定された内閣府『高齢社会対策大綱』では、以下の3つの軸が強調されている。

- ① 年齢に関わりなく希望に応じて活躍し続けられる経済社会の構築
- ② 一人暮らしの高齢者の増加等の環境変化に適切に対応し、多世代が共に安心して暮らせる社会の構築
- ③ 加齢に伴う身体機能・認知機能の変化に対応したきめ細かな施策展開・社会システムの構築

高齢社会対策大綱は、まさに東京大学 IOG が課題解決型実証研究を推進していくべき多様な課題、そして目指すべき方向性が盛り込まれている。年齢によって分け隔てられることなく、若年代から高齢世代までの全ての人が、それぞれの状況に応じて「支える側」にも「支えられる側」にもなれる社会を目指し、全世代の人々が「超高齢社会」を構成する一員として、希望が持てる未来を切り拓いていくことが重要である。これらを掲げた「高齢社会対策大綱」を是非ともご参照いただければ幸いである。

「分野別の基本的施策」で取り上げられている項目5つ

就業・所得／健康・福祉／学習・社会参加／生活環境／研究開発・国際展開等
のうちの4つの目次を掲載する。

【1. 就業・所得】

- (1) 年齢に関わりなく希望に応じて働くことができる環境の整備
 - ① 高齢期を見据えたスキルアップやリ・スキリングの推進
 - ② 企業等における高齢期の就業の促進
 - ③ 高齢期のニーズに応じた多様な就業等の機会の提供
- (2) 公的年金制度の安定的運営
- (3) 高齢期に向けた資産形成等の支援

【2. 健康・福祉】

- (1) 健康づくりの総合的推進
 - ① 生涯にわたる健康づくりの推進
 - ② 介護予防の推進
- (2) 持続可能な介護保険制度と介護サービスの充実
 - ① 地域包括ケアシステム構築の深化・推進
 - ② 必要な介護サービスの確保
 - ③ 介護サービスの質の向上
 - ④ 仕事と介護の両立支援
- (3) 持続可能な高齢者医療制度の運営
- (4) 認知症施策の総合的かつ計画的な推進
- (5) がん対策の推進
- (6) 人生の最終段階における医療・ケアの体制整備
- (7) 身寄りのない高齢者への支援
- (8) 支援を必要とする高齢者等を地域で支える仕組みづくりの促進
- (9) 加齢による難聴等への対応

例えば、
【2. 健康・福祉】
分野であっても、
他の分野と
強く関連している。

【3. 学習・社会参加】

- (1) 加齢に関する理解の促進
- (2) 高齢期の生活に資する学びの推進
 - ① デジタル等のテクノロジーに関する学びの推進
 - ② 社会保障教育及び金融経済教育の推進
 - ③ 消費者教育の推進
 - ④ 身近な場やオンラインでの学習機会の充実
- (3) 地域における社会参加活動の促進
 - ① 多世代による社会参加活動の促進
 - ② 地域住民を支援する専門人材・団体の活動基盤の整備

【4. 生活環境】

- (1) 豊かで安定した住生活の確保
 - ① 居住支援の充実
 - ② 空き家対策の推進
 - ③ 安全・安心で快適な住生活と循環型住宅市場の実現
- (2) 高齢社会に適したまちづくりの総合的推進
 - ① 地域における移動手段の確保
 - ② 多世代に配慮したまちづくりの総合的推進
 - ③ 農山漁村のコミュニティの維持
- (3) 金融経済活動における支援
- (4) 消費者被害の防止
- (5) 認知機能の変化に応じた交通安全対策
- (6) 情報アクセシビリティの確保
- (7) 公共交通機関や建築物等のバリアフリー化
- (8) 高齢期の特性に配慮した防災・防犯対策
 - ① 防災施策の推進
 - ② 犯罪、悪質商法、人権侵害等からの保護
- (9) 成年後見制度の利用促進

社会提言：個人の生きがいと地域社会の持続可能性の両立を目指した提言 ～ローカル・コモンズ概念の新たな側面の探究～

文責：飯島 勝矢（東京大学高齢社会総合研究機構 機構長・未来ビジョン研究センター教授）



【要約】

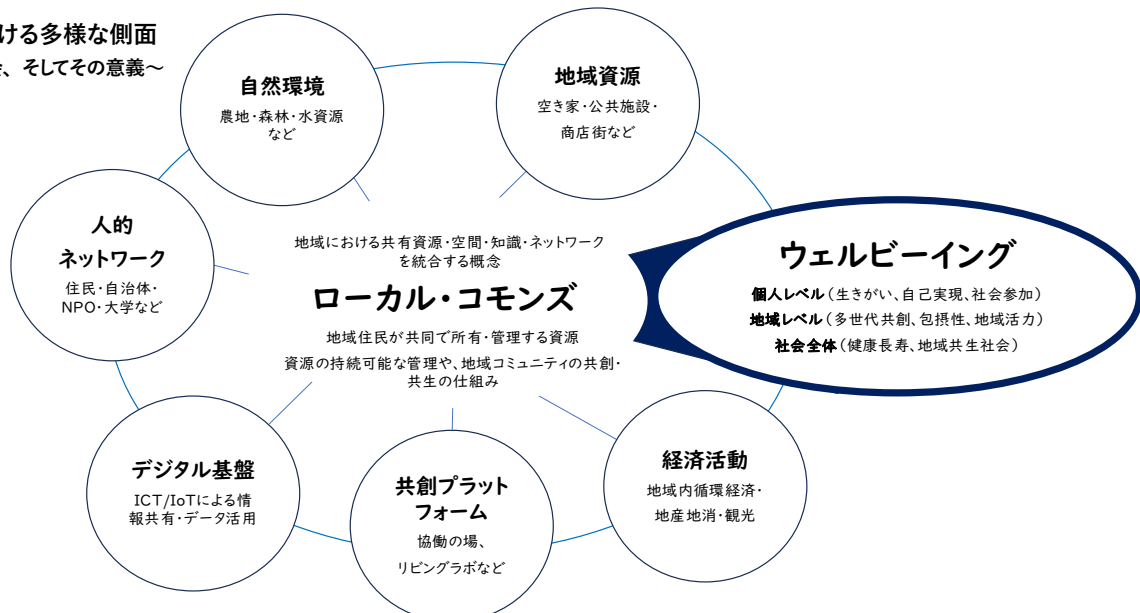
日本では、2020年に100歳以上の高齢者が8万人を超え、さらに2025年には高齢化率が30%を超えることが予想されている。さらに、2025年問題を取り上げてきた経緯を踏まえ、まさにその年であるタイミングを迎えた今、次には「2040年問題」とも言うべき、高齢社会の複雑な諸課題に向き合いながら持続性のある地域コミュニティ協創が求められている。

超高齢社会において、一人ひとりの高齢者が健康長寿（すなわち健康寿命の延伸）を実現できることを目指しているが、はたしてこの強く押し出されている健康長寿とは何なのか、原点に立ち返る必要がある。当然ながら、地域での介護予防事業の一環としての体操教室によって、身体を動かすことも重要だが、現在の地域コミュニティを見直してみると、「どのような気持ちでその活動に参加できているのか、自分の好みやニーズに合った取り組みに出会うことが出来ているのか、新たな出会いとつながり、そして楽しみと充実感・達成感などがしっかりと醸成され、最終的に継続したくなるというモードにつ

なげることが出来ているのか」等々の大きな課題を乗り越えることが出来ていない。言い換えれば、健康長寿と幸福長寿の両立が実現されていない地域コミュニティになってしまっている。

そのなかで、健康寿命の延伸は最大関心領域であり、その実現のためには、従来の各疾病別の管理・治療戦略ではなく、日常生活を包括的にとらえ、総合的なアプローチを必要とする「フレイル（虚弱）」の予防が重要なテーマとなる。したがって、そのフレイル予防を国家戦略として位置付けながら、地域社会でいかに実践していくか、地域コミュニティをいかにリデザインしていけるのかが鍵となる。さらに、フレイル予防を通じて「健康長寿とともに『幸福長寿』との両立を実現する」ことも重要であり、かつ必ず目指して行くべき方向性である。言い換えれば、心身ともに健康を維持することも大きな課題であるが、同時に、健康状態を実現できた際に、その上で、いかに自分が納得し達成感を感じることができるような日々の活動ができ、最終的に自己実現に向かうことが出来るような地域が目指す方向性である。この視点から再考すると、わが国においてもまだ大きな課題が残されている。そのために、フレイル概念の多面的側面（身体的、精神心理的、社会的）も十分考慮した上で、地域コミュニティのあり方および個々人の気持ちの醸成においても次なるステージに入ることが求められる。最近、日本人において「生きがい」を持っている人は健康であり、かつウェルビーイングを感じるということが研究結果として改めて示されている。つまり、生きる張り合いや生きる価値や意味・意義などの肯定的な感情を持っていることが、その人の身体的状態や行動に大きな好影響を与えることを意味している。しかし、生きがいのために好きなことや得意なことを追求することは、地域コミュニティの持続可能性の観点からは十分に議論されておらず、今後の課題を残している側面もある。その両立のために、社会貢献活動や就業を推奨すべく、環境づくりを工夫していくことの重要性和同時に、その価値を科学的に示す（見える化する）ことも必要である。

ローカル・コモンズ概念における多様な側面 ～地域高齢者が再び輝ける場と機会、そしてその意義～



全国の自治体における人口の推移などを見直してみると、時には消滅可能自治体などというフレーズも用いられて比較されている。多面的な視点における自治体間の差は存在することも事実であるが、都市部でも地方部でも、そこに住み続ける住民にとって必要なものや共通認識すべきものがある。それを熟考していくと、『ローカル・コモンズ』という言葉が浮かんでくる。従来から言われている内容としては、コモンズの一つであり、地域コミュニティが実質的に所有し、共同事業として現地住民が相互利益に配慮しながら管理しているため、無償利用は可能でも、アクセスが地域コミュニティのメンバーに限定されている、という解釈がされている。時代背景も進み、従来の考え方から「新しい要素や付加価値を含んだローカル・コモンズ」というものを模索すべき時に来ているのかもしれない。

以上より、持続可能な地域コミュニティ協創を考えるにあたり、従来のローカル・コモンズ概念を踏まえながら、個々人の生きがい感をどう醸成していけるのか、地域全体としての総和のボトムアップをどう実現していけるのか、さらには、そのためのどのような産学官民協働が求められているか、等々について、シンポジウムの議論の内容も盛り込みながら社会に向けて提案したい。ここで、ローカル・コモンズにおける地域住民の「主体性とそこに芽生える新価値」を述べる。

- 提言 1：個人の生きがいと地域コミュニティの持続可能性のそれぞれの考え方を踏まえ、その両立を目指し地域づくりに取り組む**
- 提言 2：個人の生きがいと地域社会の持続可能性の両立を目指すにあたり、充実感・満足感・新たな価値観を感じることもできる社会活動の場と機会を創造する**
- 提言 3：多様な社会活動の場と機会を創造するためには、産学官民協働における個々の役割を最大限活かした新たな連携が必要である**

今回、「生きがい・ウェルビーイングと地域社会の持続性がローカル・コモンズであり、その両立こそが重要かつ核心部分である」ことを提案した。しかし、ローカル・コモンズは非常に幅広い内容を含んでおり、それらが織りなす理想的な姿をもっと議論し、さらに具現化していく必要があるだろう。また、そこには産学官民協働によるさらなる幸福長寿社会への挑戦の一步を踏み出す時期であることは間違いない。生きがいを、個人のみならず、社会の視点でも考えて持続可能な地域社会の実現のためにどうつなぐかを考えたい。そのためには、高齢者の生涯教育も含めた能力開発できる教育・交流の機会を増やす必要がある。そして、地域コミュニティを考えるにあたり、物的資源と人的資源、その地に長年にわたり培われてきた文化と風土、受け継いでいく人々の気持ち、共に学び楽しみを分かち合える時間と空間への創造性、医療介護福祉分野を中心とする社会保障のセーフティーネット、楽しさと充実感のある地域活動や雇用、などの多岐にわたる要素の好循環を実現することこそが、ローカル・コモンズを踏まえた次世代型の地域コミュニティ協創になっていくだろう。また、そこには多様な地域活動を通じた主観的な生きがいを可視化し、その生きがい感を（ある意味では客観的に）実感できる日常生活を送れることも理想的なのかもしれない。いわゆる『個人の最適化』である。そこにも、産学官民全てのステークホルダーの協調と触媒的行動が必要であり、それぞれの役割を果たすことによって個人の生きがいと地域社会の持続可能性の両立の実現に一步近づくのだと確信している。

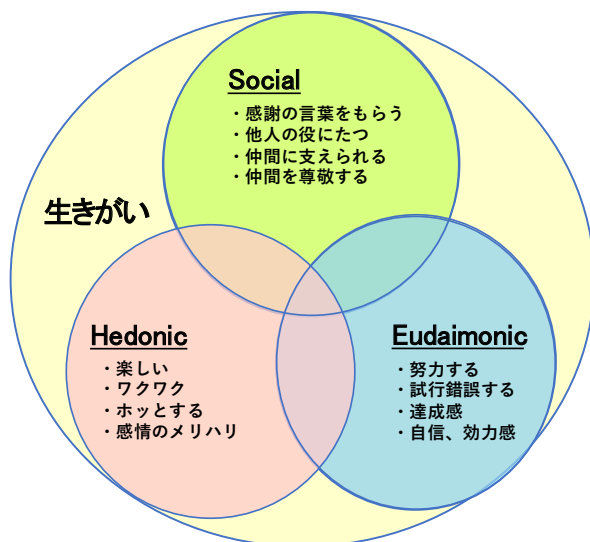
2025 年 3 月 18 日公開

<https://www.iog.u-tokyo.ac.jp/news/5080/>

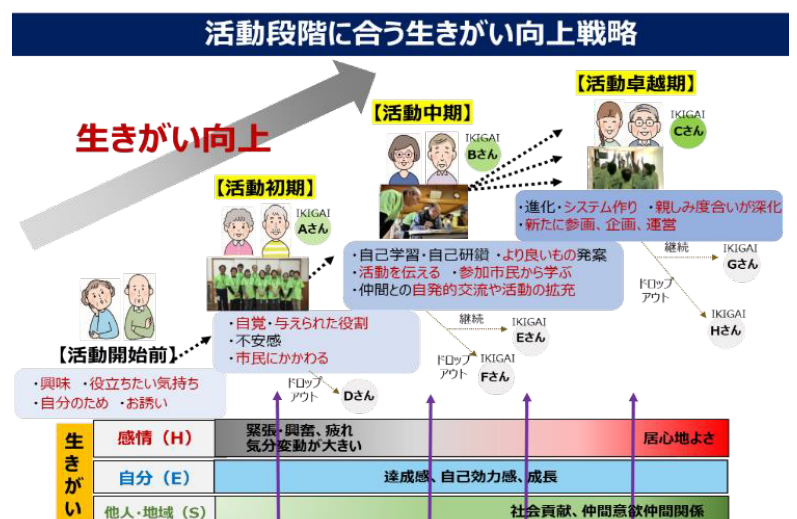
<https://ifi.u-tokyo.ac.jp/news/20232/>



社会活動がもたらす多様なウェルビーイング



持続的な地域活動を介した多面的な生きがい向上戦略



個別研究プロジェクト

IOG は企業や自治体とともに、さまざまなフィールドでアクションリサーチによる調査研究を行い、成果の社会実装を目的とした研究プロジェクトを進めています。その個別研究プロジェクトの内容や目的、参加メンバーについてご紹介します。

リビングラボ	38
大規模フレイル予防研究「栄養とからだの健康増進調査（柏スタディ）」	39
フレイル啓発に関わる地域特性の把握と フレイル予防活動につながる意識・行動変容のモデル化	40
フレイル予防を通じた健康長寿のまちづくり	41
フレイルチェックデータを活用した介護予測システムの構築	42
後期高齢者の保健事業と介護予防の一体的実施を見据えたフレイル対策	43
地域における食を通じたフレイル予防の実践と展開	44
食の在り方研究会 食を起点とするフレイル予防産業の創生	45
オーラルフレイル予防推進研究会 “食べられる口”を維持するためのオーラルフレイル予防産業の創生	46
カムカム戦略を軸とした全世代型食支援まちづくり	47
柏市・豊四季台地域における高齢社会対応のまちづくり	48
高齢者・障害者の生活支援のための健康・医療・福祉機器開発研究	49
100 年人生対応の包摂型地域創出のための 統合型地域診断に基づく地域再生手法の研究	50
まちづくり標準化研究会：既存住宅団地における少子高齢化対応手法の 実証研究およびまちづくり認証制度に向けたまちづくり評価手法研究	51
八王子市めじろ台におけるポスト超高齢社会まちづくりの実践	52
布施新町プロジェクト	53
AI を用いた健診データによるフレイル・認知症リスク評価と予防に関する研究	54
フレイル予防熟練支援者の知識構造化と介入 AI の開発	55
コミュニティの包摂性評価指標の開発	56
里山活動を通じたフレイル予防を軸とした健康長寿・幸福長寿まちづくり	57
都市型ふれあい農園の活用による社会的・身体的フレイル予防に関する研究	58
疲労感に着目した高齢女性のフレイル早期検知の指標と予防策の開発	59
生涯現役地域づくり環境整備事業（厚生労働省） 「シニア就労を通じた健康なまちづくり」	60
今後増加が見込まれる加齢により心身機能が低下した高齢者、身寄りのない 高齢者の資産・住まいの管理に関する社会的な介入の仕組みの研究、調査	61
その他の個別研究プロジェクト	62

Individual research project

リビングラボ

産学官民共創によるオープンイノベーションプラットフォーム

■ プロジェクト代表者

秋山弘子

■ 参画メンバー

菅原育子、吉田涼子、前田展弘、吉村佑生

■ 研究期間

2016 年～

■ パートナー企業・団体

鎌倉市、NPO 法人タウンサポート鎌倉今泉台、今泉台町内会、玉縄台自治会、一般社団法人未来社会共創センター、日本生命保険相互会社、大和ハウス工業株式会社、セコム株式会社、株式会社三井住友フィナンシャルグループ、三菱電機株式会社、株式会社博報堂、株式会社 Helte、他

■ 研究概要

リビングラボとは、開発プロセスの初期段階から生活者が主体として参加し、企業、大学、行政などの多様なステークホルダーが強みを持ち寄り、新しいものやサービスや社会のしくみを共に創っていく場や活動のこと。テストベッドと呼ばれる実際の生活の現場で生活者の困りごとや楽しみを起点とした開発を展開。もの・サービス創出のための PDCA の共創サイクルを循環させるプロセスを通して、オープンイノベーションのエコシステムを構築する。

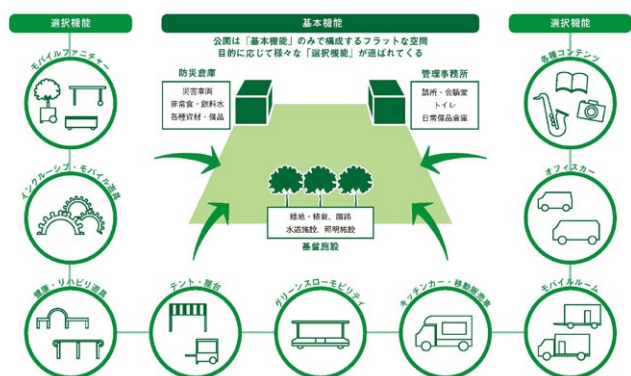
鎌倉リビングラボ HP www.kamakurall.cc-aa.or.jp

■ 研究目的

鎌倉リビングラボは高齢化著しい鎌倉市今泉台等の生活の場を実験室（ラボ）として、生活者のニーズに適う質の高い解決策（ものやサービス、仕組み）を創出するとともに、共創手法、マルチステークホルダー体制構築、住民参加のあり方やイノベーションのメカニズム等を体系化、理論化することで日本版リビングラボのモデル創出を目指す。

■ 進捗状況

- ・「若い世代にとっても住みやすいまち、テレワークに相応しいまちにしたい」という住民の思いを起点とし、産官学民四者の強みを生かしたテレワーク家具を開発（1st Phase）
- ・人生 100 年時代の新しいライフスタイルを体験できるイベント、鎌倉リビングラボ DAY「MOBILE LIFE 鎌倉」を開催
- ・鎌倉リビングラボ DAY から派生した「モバイルパーク」プロジェクトを複数企業・団体とともに進行中（2nd Phase）
- ・鎌倉市が推進するスマートシティ実現のための住民主体のデジタルデバッド対策
- ・「シニア活躍」「社会的孤立」「自立期間延伸」「働きがい」等多様なテーマの鎌倉リビングラボプロジェクトを通して共創手法、体制、プロセス等の洗練化
- ・ICT・IoT 活用による高齢者支援エコシステムモデル構築に向けた調査研究では、プロトタイプを改善、実生活での活用を視野にフィールド調査実施
- ・日本版リビングラボモデル構築、研究交流会等の開催、日本リビングラボネットワーク（JNoLL）活動に協力
- ・海外のリビングラボ事例調査、交流・リビングラボ普及に向けた広報活動、講演・ヒアリング調査対応



モバイルパーク概念図



モバイルパーク玩具



生活者と描いた画



モバイルパークワークショップ

フレイル予防に資する介入の探索

大規模フレイル予防研究「栄養とからだの健康増進調査（柏スタディ）」

■ プロジェクト代表者

飯島勝矢

■ 参画メンバー

孫輔卿、田中友規、吉澤裕世、神谷哲朗、呂偉達

■ 研究期間

2012 年～

■ 関連予算

厚生労働科学研究費補助金、
文部科学省科学研究費助成事業

■ 研究概要

地域在住高齢者のフレイル予防に資するエビデンス構築を目的に、千葉県柏市在住高齢者（自立／要支援 3,226 名を対象とした前向きコホート研究（柏スタディ））を経年的に実施している。柏スタディでは、高齢者の健康状態、身体構造と機能、活動、社会参加、心理及び認知機能等の精緻なデータ収集及び解析を行い、フレイルやフレイルの最大の原因であるサルコペニアの早期介入ポイントの探索および新たな簡易評価法についての研究成果を国内外に発信している。

■ 研究目的

地域在住高齢者のフレイル・サルコペニアに対する早期介入ポイントを多面的な側面から探索し、高齢者が容易に実施できる簡易評価法を開発すること

■ 進捗状況

柏スタディは 2012 年に初回調査が行われ、2024 年度までに第 8 次調査まで実施した。これまで、フレイルやサルコペニアの新たな簡易評価法、フレイルやサルコペニアの発症機序として口腔機能や社会性など、多面的要因の影響等についての研究結果をまとめている。2021 年度 9 月から 11 月にかけて、第 6 次調査を実施し、経年的に追跡してきた 2,044 名に加えて新たに 1,182 名の対象者を追加した。データセットも構築され、更なるエビデンス創出を目指し解析を進めている。また、2024 年度には、新しい試みとして 80 歳以上の高齢者のみを対象とした第 8 次調査（柏スタディ 80s）を実施し、344 名が参加した。柏スタディ 80s のデータやインタビューにより、80 歳以上元気高齢者に学ぶ「健康長寿の秘訣 BOOK」を作成した。



栄養とからだの健康増進調査（第 1 次調査～第 8 次調査まで）



フレイルの早期の兆候を見出す

栄養とからだの健康増進調査事業（柏スタディ）



柏スタディとは

デザイン: 地域在住高齢者のコホート研究（要介護認定者除く）

調査: 2012 年～2024 年まで 8 回の調査

対象者数: 総件数 10,221 (3,226 名)

第 1 コホート (2012 年～) 2,044 名

第 2 コホート (2021 年～) 1,182 名



200 項目を超える多種多様な測定項目



目的

- 多面的な測定項目から、フレイルの早期介入ポイントを探索
- 地域での実装可能な簡易スクリーニング・評価法の開発
- 地域での住民主体なフレイル予防活動の開発・展開

2024 年度・柏スタディ第 8 次調査

今のあなたの「くらし・からだ・お食事の「いきいき度」、測ってみませんか？ 貴様の健康診断にはない測定項目がたくさんあります！

ご自宅での食事の習慣と食卓での調査をあわせて総合的にあなたの「いきいき度」を測ります。調査の結果と返しましょう！



「栄養とからだの健康増進調査 2024」 参加のご案内



参加無料
柏市市民の皆さんは、毎年にわたる「栄養とからだの健康増進調査」にご参加いただき、健康を測ることができます。これまで参加にいらした皆さんは、多くの健康に関するデータを蓄積し、健康増進に貢献しています。今年度もぜひご参加ください。健康を測るだけでなく、健康増進のためのアドバイスも受けられます。

こんな研究成果がありました！



フレイル啓発に関わる地域特性の把握と フレイル予防活動につながる意識・行動変容のモデル化

■ プロジェクト代表者

飯島勝矢

■ 参画メンバー

孫輔卿、田中友規、吉澤裕世、呂偉達

■ 研究期間

2015 年～

■ パートナー企業・団体

千葉県柏市、東京都西東京市 健康福祉部 高齢者支援課

■ 研究概要

従来の観察研究の多くは健康意識の高い限られた高齢者のデータが多くを占めるなど、高齢者の代表性に課題が付きまとう。本研究では、協力関係にある自治体が実施した介護予防悉皆調査データを分析し、地域別の特徴（地域診断にも応用）やその地域特性に即した持続可能な健康増進活動への実現を目指す。具体的には、地域ごとのフレイルの実態と社会的・物理的環境要因との関連を明確にしたうえで、現在の地域資源を活かし、地域特性に即した持続可能な健康増進活動・介護予防事業のあり方について検討することを目的とする。

■ 研究目的

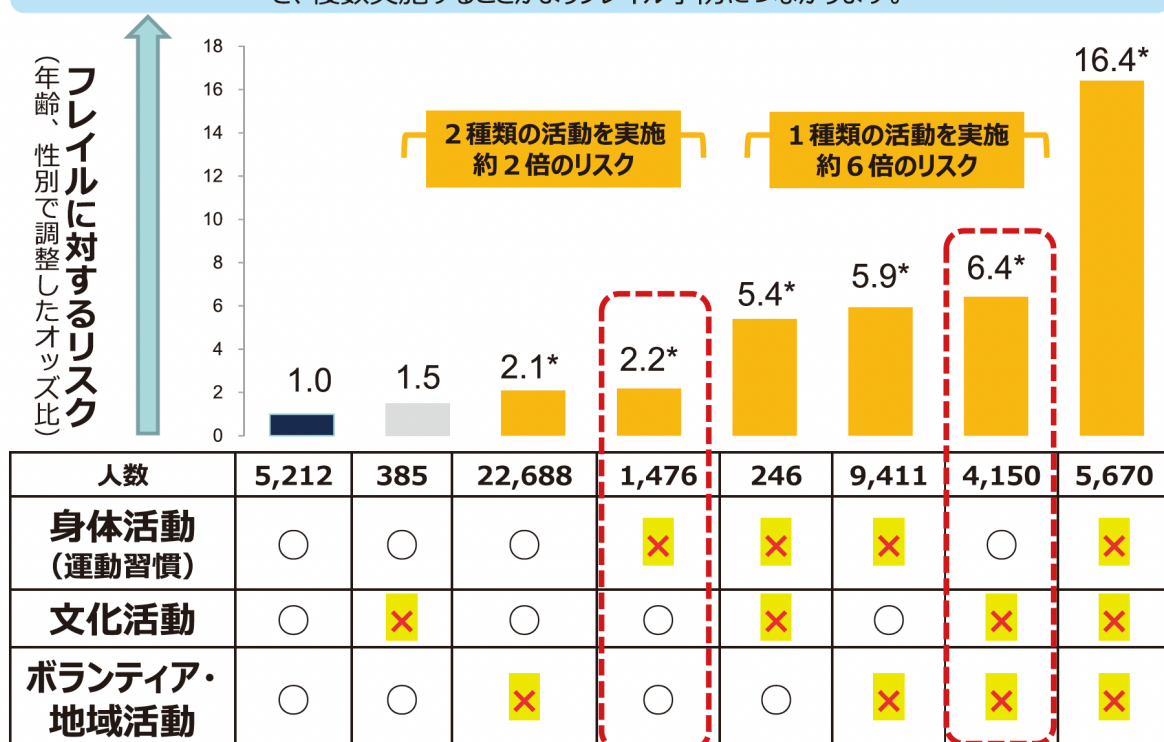
自治体が収集した悉皆パネルデータを二次分析することで、地域に潜むフレイルの実態を明らかにするとともに、フレイル予防に資する個人特性・地域特性を同定し、持続可能なフレイル予防施策につなげる。

■ 進捗状況

現状、2自治体の悉皆調査データを解析し、結果を報告している。（1）千葉県柏市において2015年に実施した介護予防悉皆調査約6万人分のデータを活用し、地域全体のフレイルの有症率と特に、高齢者の日常生活行動を運動関連、文化・趣味関連、ボランティア等の地域活動の3種類に分けた際のフレイルの有症率との関連を検討し、地域活動や文化活動の重要性を報告した。（2）東京都西東京市において2015年および2018年に実施した後期高齢者生活状況実態調査の悉皆パネルデータを用いて、3年間の後期高齢者におけるフレイルの有症率や新規発症・改善率、介護死亡等の発生率の代表値を明らかにした。同時にフレイルの認知度に地域格差が認められ、その地域差がフレイルの新規発症・介護等への重症化に関連する可能性を見出している。（2）に関しては、2021年度も同様のパネル調査を実施した。今後、より長期縦断追跡データを解析していく予定である。

様々な活動の複数実施とフレイルへのリスク ～自立高齢者に対する悉皆調査から（49,238人）～

身体活動はフレイル予防に重要ですが、身体活動だけよりも文化活動やボランティア・地域活動など、複数実施することがよりフレイル予防につながります。



* $p<0.001$

（吉澤裕世、田中友規、飯島勝矢ら、2019年 日本公衆衛生雑誌） vol.66 ,306-316

フレイル予防を通じた健康長寿のまちづくり

市民主導の新たな包括的フレイル予防プログラムを通じた快活な街づくりのモデル構築

■ プロジェクト代表者

飯島勝矢

■ 参画メンバー

辻哲夫、神谷哲朗、孫輔卿、田中友規、吉澤裕世、呂偉達、佐藤雄太、吉村佑生、笹野隆

■ 研究期間

2015 年～

■ パートナー企業・団体

フレイルチェック導入自治体、
NPO 法人全国フレイルサポーター連絡会連合会

■ 研究概要

フレイル予防を通じた健康寿命のまちづくりを達成すべく、本機構ではフレイル予防に資するエビデンスを構築し続け、住民主体（フレイルサポーター）による栄養・運動・社会参加を軸とした包括的フレイルチェックを開発した。フレイルチェックは全国 103 自治体が導入し、今や全国規模のフレイル予防プログラムとなっている。全国から集まったデータからビックデータを構築し、地域診断やフレイル予防施策、まちづくりに応用できるような地域還元も行っていく。本研究を通じて、フレイル予防の人的資源の拡充や、地域全土でのフレイル予防の機運醸成、受け皿体制の整備につながることで、住民主体の健康寿命のまちづくりを目指す。

■ 研究目的

地住民主導の包括的フレイル予防プログラム（フレイルチェック）を基軸とした、健康寿命の達成できる快活なまちづくりを目指し、本プロジェクトでは、次の 4 段階で研究を進めてきた。まず (1) フレイル予防に資するエビデンスを疫学調査等のデータを用いて創出する。具体的には、千葉県柏市在住の前向きコホート研究（柏スタディ）などのデータにより、フレイルの早期介入ポイント、簡易指標を検討する。次に、(2) エビデンスベースかつ有識者会議から、高齢住民フレイルサポーターによる栄養・運動・社会参加を軸とした包括的フレイルチェックの開発し、(3) フレイルトレーナー制度（医療専門職の指導者、調律者）による日本全国への面展開を行い、全国からのフレイルチェックデータの構築、そしてそこから得られたエビデンスを地域還元しながら、(4) フレイルチェックを基盤として、各自治体が多様かつ独自の予防施策につなげることで、フレイル予防を通じた健康寿命のまちづくりを達成する。

■ 進捗状況

フレイルチェック導入自治体は現在、104 自治体にも上り、全国規模でのフレイルチェックデータを突合しビックデータを構築してきた。今後、AI 技術などを応用した形で早期リスク予測や地域診断などに応用していく。さらに、新 NPO として全国フレイルサポーター連絡会連合会を発足させ、全国自治体のフレイルチェックの調整等を担っていく予定である。また、2024 年度には柏スタディ第 8 次調査も実施したことで、コホートデータから更なるエビデンス構築を進め、フレイル予防施策に反映できるよう地域還元していく。

フレイル予防を通じた高齢住民主体の健康長寿まちづくり



フレイルチェックデータを活用した介護予測システムの構築

複数自治体連携によるエビデンス構築から全国導入自治体へ

■ プロジェクト代表者

飯島勝矢

■ 参画メンバー

田中友規、孫輔卿、吉澤裕世、辻哲夫、神谷哲朗、呂偉達

■ 研究期間

2015 年～

■ パートナー企業・団体

フレイルチェック導入モデル自治体

■ 研究概要

フレイル予防を通じた健康寿命のまちづくりを達成すべく、本機構ではフレイル予防に資するエビデンスから住民主体（フレイルサポーター）による栄養・運動・社会参加を軸とした包括的フレイルチェックを開発した。フレイルチェックは全国 104 自治体が導入しているが、本プロジェクトでは、その中でも有数のフレイルチェック導入モデル自治体との産官民連携により、高齢住民が評価したフレイルチェックデータと、自治体の介護レセプトデータの連携データを構築する。その上で、フレイルチェックの結果が将来の介護予測に有用か否かを検討することで、フレイルチェックの結果と介護認定状況や将来の新規認定との関連、ハイリスク基準などを明らかにすることで、全国フレイルチェック導入自治体で活用できる介護予測システムを構築する。

■ 研究目的

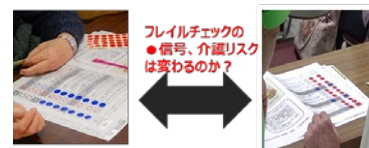
地域貢献活動を行っている【支え手側】の生きがいを最適化するフレイルチェック導入モデル自治体（具体的には、千葉県柏市、東京都西東京市、神奈川県平塚市、他）のマルチフィールドデータを活用して、フレイルチェックデータと介護レセプトデータの連結したデータセットを構築する。この構築データを二次利用することで（1）フレイルチェックの結果が将来の介護認定や死亡等のアウトカムを予測し得るのか、どの程度のインパクトがあるのか（2）フレイルチェックの全 22 項目でどの項目が介護認定等のアウトカムにより強く関連するのか、地域差はあるのか（3）介入対象者の基準（ハイリスク基準）の構築、そして（4）介護認定を受けにくい者の特徴などを明らかにする。

■ 進捗状況

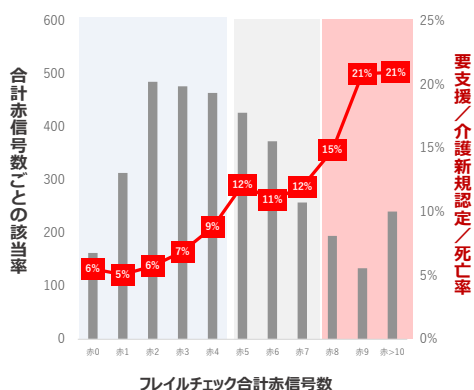
フレイルチェック導入モデル自治体の内、フレイルチェックと介護認定レセプトデータとの連結データセットを、千葉県柏市を中心に構築した。その結果として、フレイルチェック赤信号数は将来の要介護や死亡を予測し得ることがわかった。今後は、さらに複数自治体のデータも含めることで、全国フレイルチェック導入自治体に提案できるエビデンスを構築、地域へ還元していく。

フレイルチェックと自立喪失予測（柏・西東京・平塚 3 市）

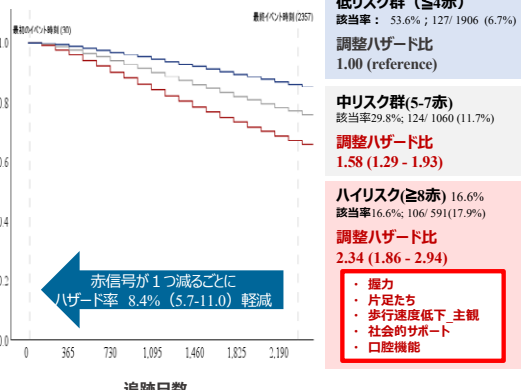
デザイン：前向きコホート研究（追跡日数中央値 [4分位範囲] = 1121 [400-1682] 日）最大2357日
対象：千葉県柏市・東京都西東京市・神奈川県平塚市在住65歳以上高齢者 3,548名（平均76.6±6.3歳、男女比=873/ 2684）
除外基準：初回FC参加時で介護認定者； FC参加後1か月以内に介護認定／資格喪失
アウトカム：追跡期間中の自立喪失（要介護新規認定、死亡） 357名（10.0%）※ 要支援新規認定は271名（7.6%）
調整変数：年齢、性別、フレイルチェック参加回数、居住地域
備考：Parametric Shared Frailty Models（Log-logistic Distribution）；欠損データは多重代入法にて補完



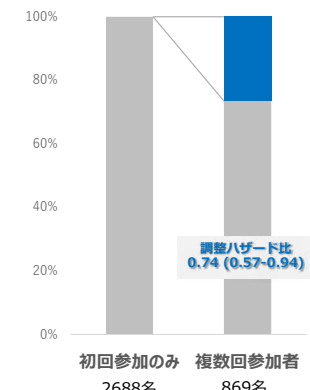
フレイルチェック合計赤信号数と
自立喪失（要介護／死亡）率との関連



フレイルチェック合計赤信号数の 3 群比較
ハイリスク群ではハザード比が約 2 倍



参加回数が多いほど
自立喪失リスクが軽減する



結果のまとめ

- フレイルチェックの結果は、自立喪失（要介護新規、死亡）のハザードリスクと関連する
- 高リスク群（赤8以上）では、ハザード比が約2.3倍、赤信号が1つ減るごとにハザード率が9.0%程度軽減される

田中友規、飯島勝矢、他

後期高齢者の保健事業と介護予防の一体的実施を見据えたフレイル対策 フレイルチェックとの融合・集いの場におけるアウトリーチ体制整備

■ プロジェクト代表者

飯島勝矢

■ 参画メンバー

田中友規、吉澤裕世

■ 研究期間

2019 年～ 2024 年

■ パートナー企業・団体

フレイルチェック導入モデル自治体

■ 研究概要

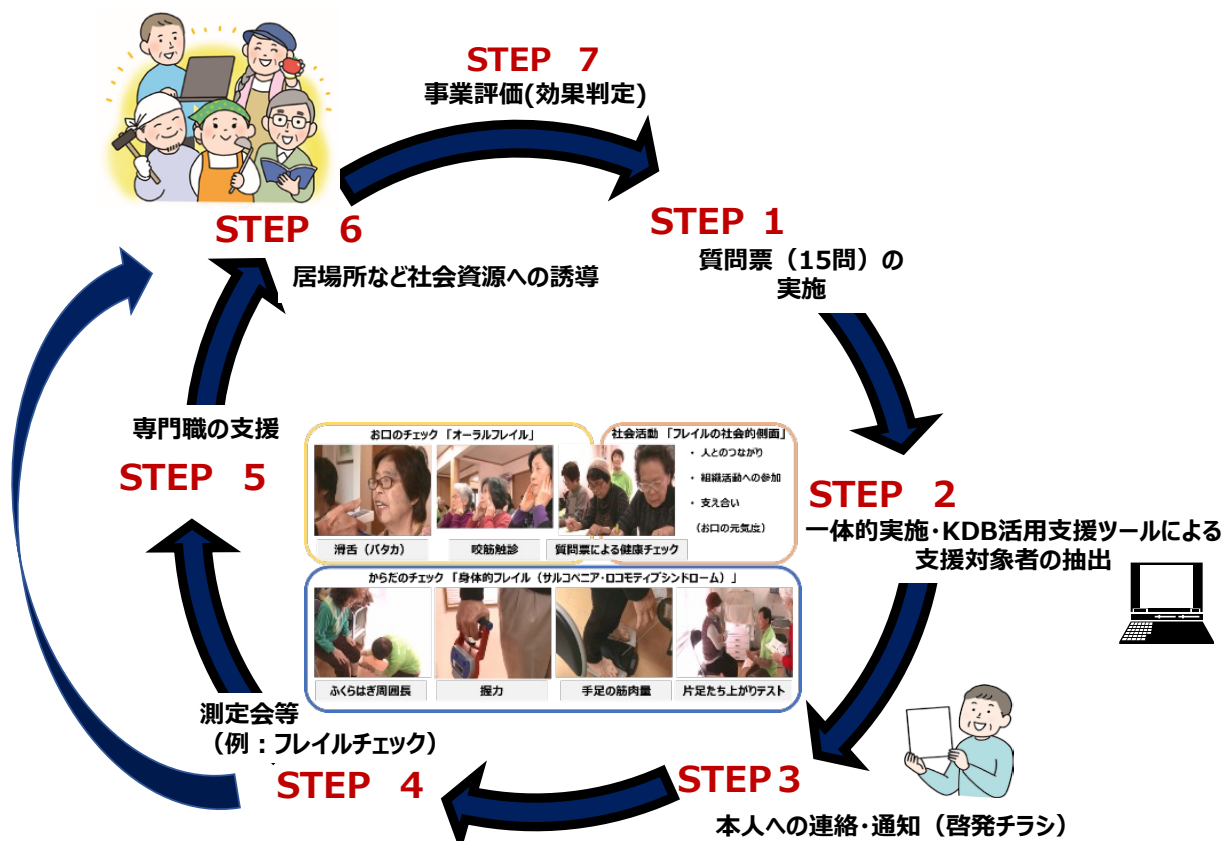
健康寿命の延伸にむけたフレイル対策、生活習慣病対策による高齢者の予防・健康づくりの推進は、中心的な国家戦略である。厚生労働省は従来、実施主体が異なっていた保健事業と介護予防事業に対して、疾病予防・重症化予防とフレイル対策の一体的実施という新たな枠組みを構築し、高齢者に対して包括的な予防・健康づくりの推進を提供すべく具体的な準備を進めている。その中心戦略として、保健・介護予防事業の双方のエッセンスを集約した「後期高齢者のための質問票（フレイル要素による）」を開発した。本プロジェクトでは、この保健事業と介護予防の一体的実施によるフレイル対策を見据え、国保データベース（KDB）から後期高齢者の質問票によるフレイル評価の妥当性を検証し、フレイルチェック導入自治体において、この KDB データの利活用法の構築からのハイリスクへのアウトリーチ体制の構築を目指す。

■ 研究目的

本プロジェクトでは、保健事業と介護予防の一体的実施を見据えたフレイル対策を構築すべく、フレイルチェック導入自治体をフィールドに（1）国保データベース（KDB）から後期高齢者の質問票によるフレイル評価の妥当性を要介護新規認定リスクとの関連性から明らかにした上で（2）KDB データを活用した地域診断、ハイリスク者の選定方法を自治体と協働で行い（3）フレイルチェックや集いの場への参加勧奨、専門職の直接介入などハイリスク者のアウトリーチ体制の構築を検討する。

■ 進捗状況

フレイルチェック導入自治体の国保データベース（KDB）を活用し、後期高齢者の質問票を活用したフレイル状態の把握と全身疾患状況が短期間の要介護新規認定リスクと関連することが分かった。また、モデル地域において質問票とフレイルチェックを連動させ、フレイル度の高い対象者を専門職支援につなげるという優先度を考慮した段階的な支援を実施した。その結果、前年度よりも専門職支援に繋がった割合が高いことが示された。今後は、全域に展開できるような体制についても検討し、実施する予定である。



地域における食を通じたフレイル予防の実践と展開

地域における食を通じたフレイル予防の実践と展開

■ プロジェクト代表者

孫輔卿

■ 参画メンバー

吉村佑生、笹野隆

■ 研究期間

2022 年～

■ 関連予算

2022- 文部科学省科学研究費補助金_基盤研究(C) 抗炎症に基づくフレイル予防の食教育・改善プログラムの開発と地域実装

■ パートナー企業・団体

東京都豊島区

■ 研究概要

フレイルは老化本態である慢性炎症(inflammaging=inflammation+aging)が引き起こす現象であり、食・栄養はこの慢性炎症を誘導する外因性因子である。最近、食事全体の炎症誘導能を評価する「食事性炎症指数」が開発され、高齢者において、炎症を誘導する食事とサルコペニアおよびフレイルとの有意な関連が柏スタディからあきらかになった(Son BK, et al., Arch Gerontol Geriatr 2021, Geriatr Gerontol Int 2024)。したがって、抗炎症(免疫力向上)の食行動がサルコペニア・フレイル予防につながる有効な方法であると考え、免疫力を高める食行動の実践プログラムの開発を目指す。

■ 研究目的

地域在住自立高齢者において、免疫力を意識した食生活からフレイルを予防することを目的とする。そのために、グループワークを通じた、主体的・持続的な食意識・行動の変容を促す手法を開発する。さらに、自分に合う実践方法の発見・継続だけではなく、他人に伝えて地域で波及する方法についても探索する。

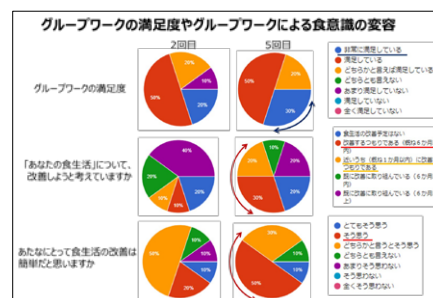
■ 進捗状況

2024 年度は東京都豊島区のフレイルサポーターで、「免疫力向上の食実践プログラム」に参加した方を対象として、1年後のフォローアップの食習慣アンケート調査を行った。

グループワークを通じて免疫力を意識した食生活の知識や実践のためのアイデア共有を行ったことで、食行動変容の持続性が期待できる。

また、免疫力を意識した食生活の基盤には、炎症老化があり、その理解のうえで食を通じた老化予防・フレイル予防の実践の重要性について、NHK の取材をうけて番組で放送された(2024 年 12 月 26 日)。

多くの高齢者から意識変容や行動変容の話があり、「免疫力向上の食実践プログラム」の実用性を確認した。

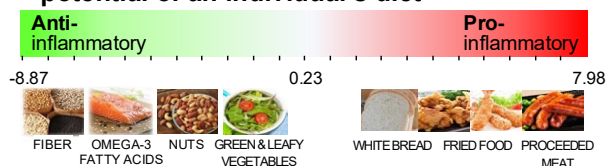


免疫力向上の食生活による地域のフレイル予防の食・栄養推進

【Assessment & Evidence】

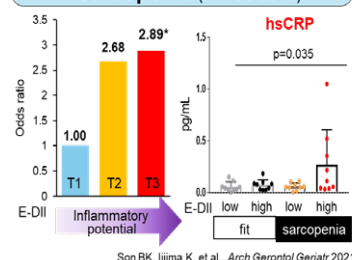
食事性炎症指数 (DII)

An effective assessment the inflammatory potential of an individual's diet

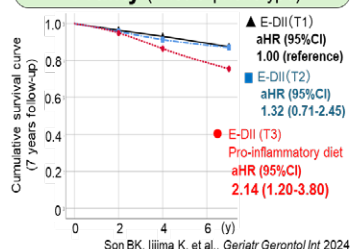


● Evidence

Sarcopenia (AWGS 2019)



Frailty (Fried's phenotype)



Lowering DII scores (e.g., dietary fiber intake) should be implemented

【Who】

Frailty supporter



地域在住高齢者

【Empowerment : Advice】



フレイルチェック (様子)

【GWプログラム】

(90分×6回)



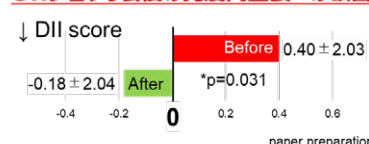
【成果物 : co-creation】

食物繊維の摂取を促すアイデア集 (海藻・キノコ類・豆類)



【食生活の改善】

GWプログラム後の免疫向上食への改善



食の在り方研究会 食を起点とする フレイル予防産業の創生

人生100年時代の「食の在り方」とフレイル予防産業創生

■ プロジェクト代表者

飯島勝矢

■ 実務担当責任者

倉田幸治、堀江直裕

■ 参画メンバー

辻哲夫、孫輔卿、田中友規、神谷哲朗、
田子森順子、平岡康隆、蒔野充照

■ 研究期間

2019 年～

■ パートナー企業・団体

イオン株式会社、伊藤ハム株式会社、キューピー株式会社、
サンスター株式会社、日清オイリオグループ株式会社、
株式会社ニチレイフーズ、株式会社ニッスイ、
ハウス食品グループ本社株式会社、はごろもフーズ株式会社、
フジッコ株式会社、株式会社マルタマフーズ、株式会社明治、
株式会社ロッテ（2025 年 3 月時点）

■ 研究概要

① 食関連フレイル予防産業ガイドラインの策定と 国の政策への提言を目指す

フレイルに関する知見を学び、食関連フレイル予防産業の振興策
を研究し、振興策のたたき台（食関連フレイル予防産業の育成の
ための自主ガイドラインと認証制度の構築についての草案）を取
りまとめ、国の政策（経済産業省「ヘルスケアサービスガイドラ
イン等のあり方」）の考え方に沿った政策推進の土台を構築する。

② フレイル予防商品・サービス等に向けたエビデンス構築 食を中心にアカデミア発のフレイル予防に繋がるエビデンスに基

づいたフレイル予防商品・サービスの概念の確立に向けた試行
事業を実施する。

③ 業界自主ガイドラインと認証制度の草案作成

参加企業の先行利益を尊重しつつ、業界自主ガイドラインの策
定と認証制度の確立を目指す。食関連をスタート台に据えてフレ
イル予防産業政策に展望を築く。

■ 研究目的

生活習慣病対策は既に国の政策として推進中であるが、介護
予防の政策体系は、まだ構築途上にある。日本老年医学会は、
要介護になる手前の徐々に虚弱になる過程を「フレイル」と定義
した。現在までの政策の主流であった要支援段階での介護予防
よりもより早期の可逆性の高い段階でのフレイル予防政策を普
及させることが国家的課題である。人生 100 年時代の「食の在
り方」対策は、より早期からの対応として、本人はもとより、地
域そのものを虚弱化させないためのまちづくりの一環として、先
駆けて取り組む必要がある。その中では民間事業者の役割が大
きく、産官学連携の取り組みでフレイル予防産業の創生をめざ
す。

■ 進捗状況

・研究会開催：

第 32 回研究会(2024 年 5 月)、第 33 回研究会(2024 年 8 月)、
第 34 回研究会(2024 年 10 月)、第 35 回研究会(2024 年 12 月)、
第 36 回研究会（2025 年 2 月）、
第 1 回新法人設立準備会（2025 年 1 月）、
第 2 回新法人設立準備会（2025 年 2 月）、
第 3 回新法人設立準備会（2025 年 3 月）・フレイル予防産業の創生に向けて、一般社団法人日本フレイル
予防サービス振興会を設立する準備を整えた（2025 年 5 月設
立予定）。

実際の店舗にて、フレイルの啓発・献立 / レシピ（関連商品）の展開・イベントの実施

※「東京大学高齢社会総合研究機構&神奈川県末病産業研究会 試行事業」の枠組みで実施

Web チラシ



売場展開 (POP 設置、関連販売)



行政と連動した啓発イベント



実験中

オーラルフレイル予防推進研究会 “食べられる口”を維持するためのオーラルフレイル予防産業の創生 早期のオーラルフレイル予防により「食べたいものをおいしく食べ続ける口を維持する」

■ プロジェクト代表者

飯島勝矢

■ 実務担当責任者

田子森順子、平岡康隆

■ 参画メンバー

辻哲夫、神谷哲郎、孫輔卿、田中友規、堀江直裕、倉田幸治

■ 研究期間

2020 年～

■ パートナー企業・団体

イオン株式会社、キューピー株式会社、サンスター株式会社、株式会社フードケア、株式会社ロッテ

■ 研究概要

オーラルフレイル予防の意義とその手段について、アカデミアと連動しエビデンス構築を行い、オーラルフレイル予防が健康寿命の延伸に重要であることを証明するとともに、その予防に資する商品・サービスを定義づけし、産学連携でオーラルフレイル予防の仕組みの社会実装、産業構築を目指す。

■ 研究目的

オーラルフレイルは、フレイルの中でも早期に顕在化し、それ単体で要介護認定や死亡のリスク因子となるため、より早期のオーラルフレイル予防を行い、食べたいものを美味しく食べられる口腔を維持することが重要である。

一方で、早期の気づきと予防行動のためにはポピュレーションアプローチのなかで、認知理解・行動変容を促す「自助」を想定したソリューション提供が重要であり、産業界の活用が必要となる。本研究会では、エビデンス構築をベースに、産学官民連携でオーラルフレイルの早期予防の仕組みづくりに取り組む。

■ 進捗状況

2024 年 4 月 1 日にオーラルフレイルの 3 学会合同ステートメントが発出され、早期の気づきと対策のために、国民啓発の推進および多職種協働が期待されている。地域と連携した啓発活動において、地域資源と企業のリソースを組み合わせることで、生活に密着した場にて、フレイル・オーラルフレイルへの認知と理解、自分事化の促進、よりよい生活習慣のためのソリューションにつなげる方法を試行してきた。また産官学民協働による地域ぐるみの啓発活動の結果、集中啓発地域では、他の地域よりも啓発期間後のオーラルフレイル新規発症率が低く、イベント参加者以外の住民にも、健康行動の良い変化が見られることが分かってきた。今後、このようなアプローチを広げていくためのモデルを構築し、横展開を目指す。

■ 本年度の活動

地域や食の在り方研究会と連動したフレイル予防のためのオーラルフレイル予防について、啓発活動を推進

・2024/4 ～ 2025/2

平塚市様とカムカム教室お口元気プラスの継続、市内全域への拡大

- ・2024/6 相模原市様とイオン相模原店にてイベント実施
- ・2024/6 秦野市様とイオン秦野店にてイベント実施
- ・2024/8 横須賀市様とイオン久里浜店にてイベント実施
- ・2024/9 横浜市中区様とイオン本牧店にてイベント実施
- ・2024/10 柏市様と地域医療連携センターにてイベント実施
- ・2024/10 秦野市様と保健福祉センターにてイベント実施
- ・2024/10 秦野市様とイオン秦野店にてイベント実施
- ・2024/12 西東京市様と J:COM コール田無にてイベント実施
- ・2025/1 鶴ヶ島市様と鶴ヶ島市役所にてイベント実施

**お口の元気は
からだの元気に
ご存知ですか？「オーラルフレイル」**

いつまでもイキイキ過ごすために

平塚市では産学官民で「オーラルフレイル」予防に取り組んでいます。

平塚市 × 東京大学 高齢社会総合研究機構 × オーラルフレイル 予防推進研究会

平塚市では、オーラルフレイルを楽しく学べる取り組みを行っています。

- ・カムカム教室お口元気プラス（オーラルフレイル予防のことが学べる教室）
- ・フレイルチェック（からだの元気度チェック） など！

参加費 無料
（開催費等の負担を
いただく必要は
ありません）

問合せ先：平塚市役所保健年金課 電話：0463-72-7266

オーラルフレイル啓発ポスター



お口の健康の秘訣

お口の健康で重要なのは…

お口には、食べる、しゃべるなど様々な機能があります。弱てくると、フレイルや要介護になりやすくなるため、フレイル予防には、オーラルフレイル（お口の機能の衰え）予防も重要です。

そのためにはまず、①元気を歯を保つことが大切です！

バランスのよい食事に加えて、②噛む力を維持するためにも、噛み応えのある食品を選んで、③口を動かす練習をしていきましょう！

さらに、③口を動かす練習などでお口を鍛えていきましょう！

ケア

- ハミガキ
- 歯間ブラシ
- うがいなど
- 歯科医院での定期検診

歯のお手入れも忘れず！

体操

- 口腔体操
- 音楽・カラオケ
- シュガーレスガム など

【食材の工夫】

- 玄米・たくあん・ナッツ類など、固いもの
- 生野菜・根菜・きのこ類など、繊維質なもの

【調理の工夫】

- 食材を大きめに切る
- 加熱しすぎない
- 水分を少なくする

同じ食材でも、歯ごたえが違います！

カムカム戦略を軸とした全世代型食支援まちづくり 高齢者フィールドでインパクトのあるエビデンスづくりから全世代へ

■ プロジェクト代表者

飯島勝矢

■ 参画メンバー

田中友規、田子森順子、佐藤麻美

■ 研究期間

2021 年～

■ 関連予算

科研費若手研究（田中友規）、サンスター株式会社

■ パートナー企業・団体

神奈川県平塚市、株式会社フードケア、
サンスター株式会社

■ 研究概要

オーラルフレイルを軸としたフレイル予防の推進に向けては、地域全土へのポピュレーション・アプローチが重要である。本プロジェクトでは、ライフコース・アプローチの視点をさらに加えることで、高齢者フィールドを中心としつつも、全世代型の食支援まちづくりを目指す。具体的には、フレイルチェック導入モデル自治体において、カムカム概念（しっかりと噛み応えのある食材・調理方法で工夫して、栄養バランスの取れた食生活を）を基盤としたフレイル予防の推進（フレイルチェックとカムカム概念の融合：カムカム教室の実践）、地域全土の意識変容に向けたオーラルフ

レイル啓発の推進、さらにはカムカム概念に振れやすい生活環境整備（買い物の場面や学校給食、歯科健診など）を実現させる。

■ 研究目的

本研究では、フレイルチェック導入モデル自治体である神奈川県平塚市をフィールドとして、① フレイル予防活動「フレイルチェック」を融合させた「住民主体のフレイル・オーラルフレイル予防プログラム：カムカム教室」の、地域在住高齢者に対する介入効果を検証する。さらに、② モデル自治体の特定地域に対して、集中的に「口腔機能訓練や口腔ケア、フレイル・オーラルフレイル予防」の啓発を行うことで、口腔保健行動に対する意識・行動変容や、フレイル・オーラルフレイルの認知度向上を検討する。

■ 進捗状況

モデル自治体に対して、関係性作りを進めながらも、産学官民連携により「カムカム教室」の自治体独自の地域資源を加味して内容や資材を構築した。実際のフレイルチェック参加者に対する介入研究（非無作為化比較試験）を継続実施している。さらに、2022 年度から 2023 年度にかけてカムカム教室の介入効果の検証と、特定地域に対する集中的な啓発活動を展開した。2024 年度はカムカム教室お口元気プラスの市内全域への拡大、さらなる生活環境の構築に取り組んでいる。カムカム教室への参加により、フレイル要素や口腔機能の改善、人とのつながりの向上がみられること、集中的な地域啓発活動が教室参加者だけでなく住民の意識行動により影響を及ぼし、地域のフレイル・オーラルフレイル予防に貢献できる可能性がみえてきた。今後、このようなアプローチを広げていくためのモデルを構築し、横展開を目指す。



柏市・豊四季台地域における高齢社会対応のまちづくり 住み慣れたまちで自分らしく老いることのできるまちづくり

■ プロジェクト代表者

飯島勝矢

■ 研究期間

2009 年～

■ パートナー企業・団体

柏市、柏市社会福祉協議会、UR都市機構

■ 研究概要

東京大学高齢社会総合研究機構と独立行政法人都市再生機構、柏市は、2010 年に協定を結び、柏市社会福祉協議会とも連携しながら千葉県柏市豊四季台地域において下記の項目について取り組みを実施してきた。

〈いつまでも在宅で安心した生活が送れるまち〉

- (1) 在宅医療の推進 在宅医療・介護を推進する多職種連携協議会
- (2) 地域包括ケアシステムのモデル拠点の整備
- (3) 生活支援サービス

〈いつまでも元気に活躍できるまち〉

- (1) 生きがい就労・生きがい支援
- (2) 外出・移動・交流・地域活動をうながす環境づくり
- (3) 健康づくり・介護予防・フレイル予防
- (4) コミュニティ食堂

「在宅医療の推進」及び「地域包括ケアシステムのモデル拠点の整備」については、P25「地域包括ケアシステム構築に関する研究」も併せてご参照ください。

「生活支援サービス」については、P23「生活支援体制整備と地域型 ICT ネットワークシステム構築研究」も併せてご参照ください。

「生きがい就労・生きがい支援」については、P27「長寿時代の高齢者地域就労に関する研究～セカンドライフの生きがいづくりに向けて」も併せてご参照ください。

「健康づくり・介護予防」については、P39「栄養とからだの健康増進調査（柏スタディ）」も併せてご参照ください。

■ 研究目的

柏市豊四季台地域、特に地域内にある団地を中心に、下記の3つの個別テーマに分かれて研究を実践し、Aging in Place のまちづくり完成モデルの構築を目指してきた。

「在宅で安心して生活できる医療・看護・介護システムの開発と普及」

「いつまでも地域で活躍できる生きがい就労の創成」

「長寿社会に対応したまちの設計、移動システム」

その後、「生活支援サービス」と「健康づくり・介護予防」の2つのテーマが加わり、超高齢人口減少社会の新たな地域政策の確立を目指すという方向に向かっている。

■ 進捗状況

2010 年 5 月から 2015 年 5 月までの第1フェーズの間、基礎固めとして「在宅医療の推進」や「地域包括ケアシステムのモデル拠点の整備」、「生きがい就労・生きがい支援」、「外出・移動・交流・地域活動をうながす環境づくり」を掲げて研究を実施してきた。第1フェーズ中後期までの取り組み状況については、「地域包括ケアのすすめ - 在宅医療推進のための多職種連携の試み」（東京大学高齢社会総合研究機構編、2014、東京大学出版会）に取りまとめている。

2015 年 5 月から 3 年間の第2フェーズにおいては、試行と実践、定着を図り、これらの取り組みの拡充と定着を目指して今日まで研究を継続している。また、第2フェーズから「生活支援サービス」と「健康づくり・介護予防」（2012 年度より実施）の項目を協定内で強化し、10 年を超えた昨今において、「住み慣れた場所で自分らしく老いることのできるまちづくり：Aging in Place」のアウトカムのフェーズに移行している。2020 年 10 月には、これらの取り組みを「地域包括ケアのまちづくり - 老いても安心して住み続けられる地域を目指す総合的な試み」（東京大学高齢社会総合研究機構編、2020、東京大学出版会）に取りまとめている。

2020 年度以降においては、各項目に対して横断的で総合的なアウトカムや実装の段階にきており、より一層のブラッシュアップした次のフェーズに向かうべく研究活動を実施している。

2023 年 3 月 1 日には、柏市豊四季台団地の敷地を活用し、〈いつまでも元気で活躍できるまち〉の実現につながる、「生きがい就労・生きがい支援」「外出・移動・交流・地域活動をうながす環境づくり」「健康づくり・介護予防」の場となる、スポーツクラブ・コミュニティ食堂がオープンした。地域住民の交流の拠点として、豊四季台地域におけるコミュニティ形成に資する取り組みや事業等を推進することを目指している。そして、これまでの成果を三者協定項目ごとに「目的・目指す姿」、「取組事項」、「実績」、「今後の方向性」、「推進の根拠」でまとめ終えたこともあり、2024 年度にこの三者研（東京大学高齢社会総合研究機構と独立行政法人都市再生機構、柏市）の取り組みは終了となった。



高齢者・障害者の生活支援のための健康・医療・福祉機器開発研究

■ プロジェクト代表者

田中敏明

■ 参画メンバー

飯島勝矢（東京大学）、大月敏雄（東京大学）、
藪 謙一郎（東京大学）、渡邊高志（東北大）、
三浦 貴大（産業 技術総合研究所）、
中島康博（道総研工業試験場）、
白銀暁（国立障害者リハビリテーションセンター）

■ 研究期間

2020 年～ 2025 年

■ パートナー企業・団体

（株）共和電業
（株）元由アテンダントサービス

■ 研究概要

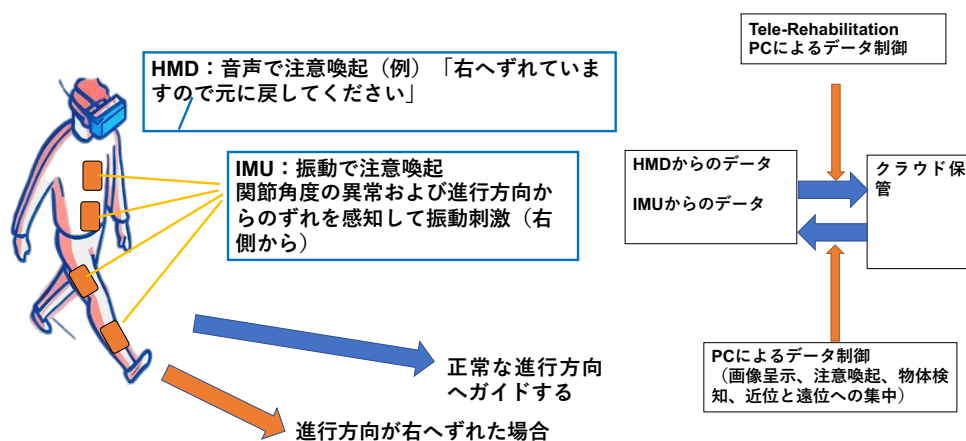
超高齢社会において、高齢者が地域社会で出来るだけ自立し、充実した人生を過ごすための研究が必要である。本研究では高齢者・障害者の日常生活を支援する リハビリテーションとして、健康医療福祉機器の開発を実施する。

■ 研究目的

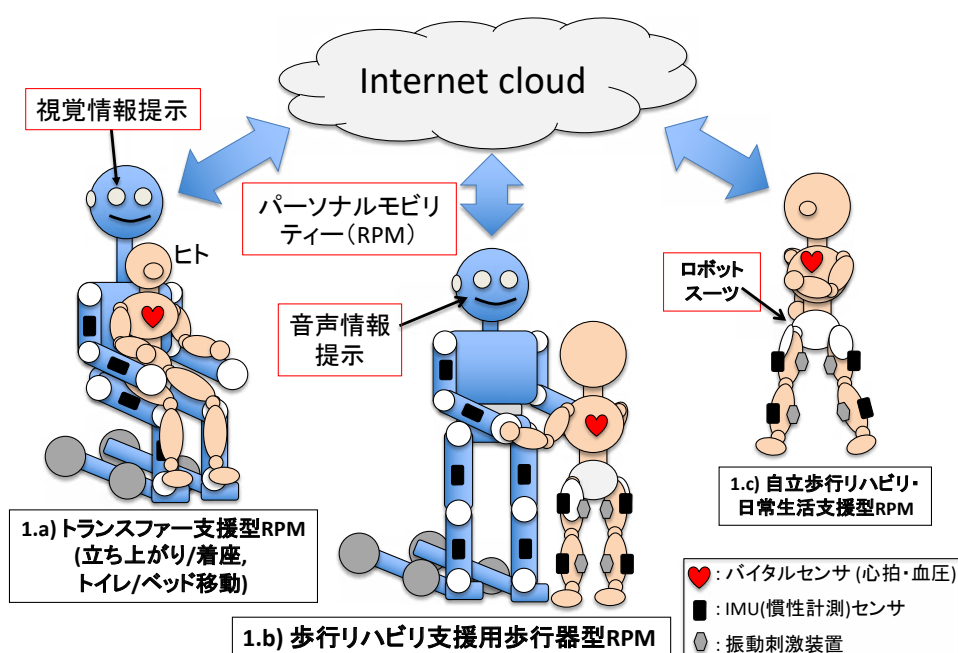
高齢者の健康を予防維持改善予防するため遠隔ヘルスリハビリテーションシステムを構築する。具体的には、ICT およびバーチャルリアリティ（VR）技術を用いた視覚情報提示装置の開発および注意喚起システム付き移動支援機器の開発を行い、高齢者障害者の屋内外における生活支援およびリハビリテーションを支援する。

■ 進捗状況

2023 年度に試作開発した高齢者・障害者のためのバーチャルリアリティ技術を用いた視覚情報提示装置の開発を継続中である（特許出願中）。また、移動支援のためのパーソナルモビリティおよびロボットスーツのための移動支援用注意喚起システムを試作開発し、現在、その効果を検証中である。遠隔リハビリテーションへの応用への展開も検討中である。



視覚情報提示装置（HMD）と歩行アプリの同期システムによる視覚障害解消のための生活支援リハビリ機器



移動支援のためのロボットスーツ・パーソナルモビリティ用注意喚起システム開発研究

100 年人生対応の包摂型地域創出のための 統合型地域診断に基づく地域再生手法の研究

■ プロジェクト代表者

大月敏雄

■ 研究期間

2021 年～

■ 関連予算

文部科学省科学研究費基盤 (A)「100 年人生対応の包摂型地域創出のための統合型地域診断に基づく地域再生手法の研究」(主査:大月敏雄)

■ 研究概要

① 90 歳以上、100 歳以上の超高齢社会の地域生活上の個人特性を評価する② あわせて、子ども、障害者、疾病保有、ひとり親世帯等の多様な地域居住者の個人特性を等価に評価する。③ 建築学、医学、社会学、福祉工学・情報学といった既存の 4 専門領域の融合的取り組みとして、上記評価、診断、再生手法を提案する。④ 上記をふまえ、「都市・地方」「既成市街地、戸建住宅地、集合住宅団地」の属性をもつ 6 類型の地域包括ケア単位の地域を対象として、統合型地域診断法とそれぞれの地域再生手法を提案する。

■ 研究目的

超齢高齢者の地域生活上の個人特性の評価にあわせ、従来福祉対象となる属性を持つ地域居住者の個人特性をも等価に評価する指標の創設を通して、建築学、医学、社会学、福祉工学・情報学といった既存の 4 専門領域の合的取り組みとして、「市・地方」「既成市街地、戸建住宅地、合住宅団地」の属性をもつ類型の地域包括ケア単位の地域を対象として、統合型地域診断法とそれぞれの地域再生手法を提案する。

■ 進捗状況

100 年人生対応型の町に生まれ変わらなければならない住宅地が全国に大量に、しかも多様に存在している。そこで、どんな属性をもった生活者が、地域居住生活においてどのような地域的関心を抱いているのかについての、全国大規模アンケートを実施した。その結果、対象となる地域の郵便番号コードと地域指標を示すオープンデータを紐づけることによって、地域類型化を迅速にできる可能性を検討しつつある。また、生活者についても老若男女のような基礎的属性はもちろん、障害や子育てといった、支援が必要な度合いによる地域認識の違い、加えて、配慮の必要な人と同居する家族の認識の仕方も把握できており、「当事者とその他」といった二元論的地域把握の限界を確認しつつある。2025 年度は、この全国的指標をベースに具体のエリアでの居住環境評価と再生手法提案プロトコルを構築したい。

100 年人生対応の包摂型地域創出のための 統合型地域診断に基づく 地域再生手法の研究



診断軸1: <個人の評価> 100 年人生を見据えた多様な個人特性の適正評価

<総合化すべき旧指標・新指標>

年齢: 乳幼児、超高齢者 (90 歳、100 歳) ...
病状: 認知症、フレイル ...
障害者: 身体、精神、知的 ...
世帯属性: 片親 ...

<診断の方向性>

適切かつ小規模の支援さえあれば地域社会の中で自律的に生きていける個人として個人を捉え直し、個人特性の地位部として評価

<処方の方向性>

ライフスタイル: コミュニティ親和性 ...
居住地属性: 入院、入所、施設居住、住宅種別、地理的属性 (GIS)、密度 (立地適正化計画) ...

診断軸2: <居場所の評価> 個人特性に適した次元空間を超えた居場所の評価

<総合化すべき旧指標・新指標>

地域の居場所 (ザ・サードプレイス) ...
地域の空間機能配置 ...
記憶の中の場所 ...
地域情報のリアルタイム共有 ...
思わぬ居場所 (3 次元空間、バーチャル空間とともにある生きがい) ...

<診断の方向性>

人数規模による多様な居場所、実空間に限らないリアルな居場所から記憶の中の居場所・バーチャルな居場所まで、個人特性に応じた居場所獲得状況の評価

<処方の方向性>

個人特性に応じた多様な居場所を、地域の中で提供していくための地域機能・地域空間再編のための方策

診断軸3: <移動可能性の座標> 地域資源へのアクセシビリティの評価

<総合化すべき旧指標・新指標>

・アクセシビリティ評価
建築内・敷地・地域と言った空間移動のための転倒防止、ユニバーサルデザイン
・空間移動支援状況評価
超スローモビリティ、バーチャルな移動、アクセシビリティの獲得状況
・生活拠点移動 (引越) 評価
地域での住み替え・近居ニーズ評価、劇的環境移行を伴わない引越評価
・緊急時の安全確保状況評価
災害時の緊急避難の移動、堅牢建物、避難所、仮設居住環境の確保

<診断の方向性>

空間移動のためのアクセシビリティの確保状況評価、空間移動のための支援状況の評価、生活拠点移動 (引越) 評価、緊急時の安全確保状況評価といった側面から、地域における移動可能性を総合評価

<処方の方向性>

地域の中で、個人特性に応じたニーズとしての移動要求をスムーズに満たすための地域資源の再構築を通して、情報環境、配達環境、フレイル予防的解決といった諸側面から QOC (Quality of Community) を高める方策

まちづくり標準化研究会:既存住宅団地における少子高齢化対応手法の実証研究およびまちづくり認証制度に向けたまちづくり評価手法研究

既存団地の持続可能なまちづくりの計画策定と実現方策を実践・実証し、マネジメントシステムの認証制度提案を目指す

■ プロジェクト代表者

辻 哲夫

■ 参画メンバー

辻 哲夫、飯島勝矢、神谷哲朗、田中康夫、田中紀之

■ 研究期間

2020 年～

■ 関連予算

ジェロントロジー産学連携共同研究

■ パートナー企業・団体

UR都市機構、大和ハウス工業株式会社、
株式会社東急不動産 R&D センター、
ミサワホーム株式会社（株式会社マザアス）、
イオン株式会社 他

■ 研究概要

1950 年代より団塊の世代等をターゲットにして開発が進んだニュータウンは、現在のような少子高齢化を想定せずに計画されているケースが多いほか、今後さらなる少子高齢化が進んだ場合には、次世代の入居が進まないことによる空き家の増加や人口の減少、医療・介護生活支援体制の不足、コミュニティマネジメント体制の崩壊など様々な課題が想定される。そのようなニュータウンは全国に 3000 か所も存在するといわれており、そこでの課題解決は社会的にも急務である。ニュータウンにおいて今後さらに加速すると想定される少子高齢化や空き家問題等を含めた地域課題の解決に向け、これまでの柏PJなどをはじめとする IOG の知見や各社のノウハウ等を実際のフィールドで実践・実証し、さらにはそのノウハウを標準化し社会に広げていくことを狙っている。

主な取り組み内容は以下の通り

・既存団地をモデルとした持続可能なまちづくりの計画策定とその実

現方策の検討

- ・当該計画と実現方策の標準化を行い、それを全国の住宅地（団地）に適用可能とするマネジメントシステムの認証制度（必要な制度改革を含む）の提案を目指す
- ・当該認証制度の普及のための幅広い関係者の連携体制の構築を目指す

■ 研究目的

今後首都圏等で想定される郊外等の住宅地域（団地）の急速な高齢化による地域の衰退を防止し、持続可能な地域（団地）として再生するまちづくりの方策を策定する。

■ 進捗状況

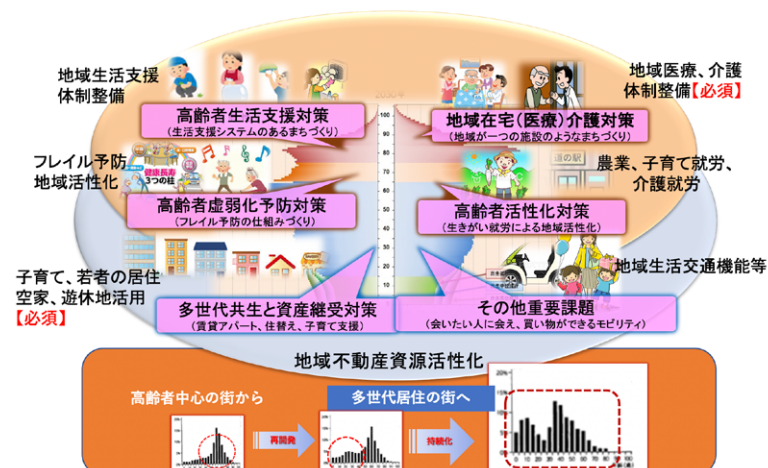
- 2020 年～ 東京大学高齢社会総合研究機構において「まちづくり標準化研究会」を発足
首都圏郊外に広く分布する郊外一戸建住宅団地の活性化活動の普及を目的に事業の標準化と認証制度の構築を検討開始
- 2022 年 12 月～ 「郊外住宅団地再生検討委員会」において「まちづくり標準化検討委員会」の活動を取り上げて審議する。
- 2023 年 10 月までに計 5 回の委員会を開催し、検討内容を「報告書」として公表
- 2023 年 11 月～ 「郊外住宅団地再生手法検討委員会」として認証事業について具体的な検討を開始
- 2024 年 10 月までに計 5 回の委員会を開催し、「住宅団地認証制度検討報告書」として公表

備考：2024 年 2 月地域再生法の一部改正を閣議決定、同 11 月施行
自治体が作成する団地再生計画に当該「報告書」に基づく住民の意見を反映できる仕組み（地域再生推進法人（民間組織）の指定と意見答申という形で実現）に改正された。

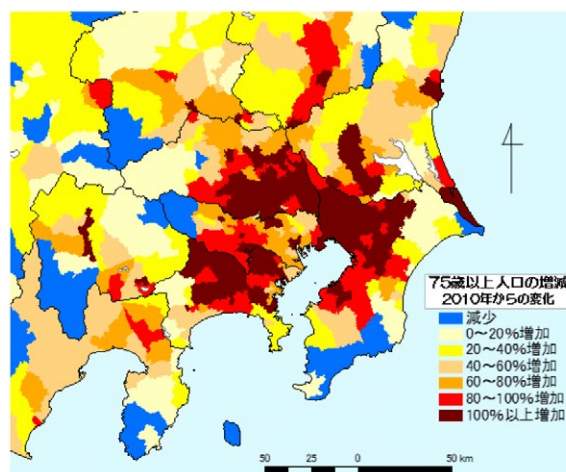
■ 今後の展開

郊外住宅団地の再生事業において、今回の法改正がどの程度機能し、住民の意見を反映する地域再生推進法人の指定などにおいて委員会が出した「報告書」がどの程度活用できるのかについて注視する。その上で必要に応じて事業の標準化、認証制度について再検討を行う。

持続可能な住宅地の再生を目指して 超高齢社会の定常化への対応



首都圏の高齢化：2010→2040年 75歳以上 人口増減率



八王子市めじろ台におけるポスト超高齢社会まちづくりの実践 めじろ台まちづくりプロジェクト

■ プロジェクト代表者
大月敏雄

■ 参画メンバー
李ヨンゲン

■ 研究期間
2018 年～

■ 関連予算
文部科学省科学研究費基盤 (A)「100 年人生対応の包摂型地域創出のための統合型地域診断に基づく地域再生手法の研究」(主査:大月敏雄)

■ パートナー企業・団体
日本都市計画家協会、八王子市

■ 研究概要
今後急速な超高齢化によって町の持続性が損なわれる可能性のある郊外戸建住宅団地を対象に、町の持続性を担保するための

住民主体のまちづくり活動が、どのような契機によって促進、実現されていくかを明らかにするとともに、アクションリサーチとして住民とともにまちづくり活動を実施する。めじろ台地区まちづくり協議会 HP のリンクはこちら→ <https://mejirodai.tokyo/>

■ 研究目的
郊外戸建住宅団地の持続性獲得のための要件の解明。

■ 進捗状況
2019 年度からまちづくり協議会(準備会)というかたちで 2020 年度まで活動し、住民をはじめとする関係者の意見収集を通して、まちづくり憲章を作成した。さらに、2021 年度からは八王子市地区まちづくり条例に基づく「まちづくり協議会」の位置づけとなり、複数の分科会を立ち上げ、駅前広場活性化、商業機能活性化、多世代交流、住宅・住宅地のバージョンアップという課題を中心に、具体的プロジェクトを推進するための議論を進行中。

地域資源図のイメージ



めじろ台地区まちづくり基本方針2021



布施新町プロジェクト

多世代交流を目指した地域活動の促進

■ プロジェクト代表者

菅原育子、吉田涼子、福沢愛

■ 研究期間

2020 年～ 2024 年

■ パートナー企業・団体

布施新町みらいプロジェクト、布施新町町会

■ 研究概要

千葉県柏市布施新町は、高齢化率が 5 割を超え、近いうちに日本が直面する問題の縮図ともいえる地域です。一方で、近年は新たに参入してくる若い住人も増えてきました。住人たちが主体となったスマホ教室など、ICT を利用した街づくりに対するサポートも厚い地域です。

現在積極的に地域活動に参加している高齢の住人たちは一様に高い生きがい意識を持っていますが、彼らが喫緊の課題として挙げているのが、若い住人たちの地域活動への参入です。本プロジェクトは、地域住人へのインタビュー調査や量的調査で住人の地域活動の現状やニーズを知り、それらを基にした、住民の主体的なまちづくり活動の支援、住民組織および地域のエンパワメント支援とその評価方法の開発を目的としています。

■ 研究目的

地域活動への積極的な参加（社会参加）は生きがい意識を高め結果的に健康寿命を高めることが期待されますが、積極的に参加しない人が多いのも現状です。本プロジェクトでは、地域活動への参加を促進／阻害する要因について詳細に検討するため、地域活動に積極的に参加している住人（高齢住人／子ども会役員）へのインタビューや、布施新町の全域を対象とした質問紙調査を行っています。

■ 進捗状況

1. インタビュー調査（2020 年度～ 2022 年度）

積極的に地域活動に参加している高齢住人や若い住人へのインタビュー調査の結果、地域活動への積極的な参加は、パーソナリティや身体的健康にかかわらず住人の生きがい意識を高めることが分かりました。継続した地域活動には男性・女性住人できっかけが異なることや、円滑な地域活動には住人のパーソナリティ傾向や、住人同士のバランスにも注目することが重要であることも示されました。

2. ワークショップ（2022 年度・2023 年度・2024 年度）

2022 年度には地域活動のコアメンバーである高齢住人を対象にワークショップを開き、地域活動の現状や今後の課題について意見の洗い出しとフィードバックを行いました。2023 年には夏祭り兼ワークショップを行いました。子ども対象には夏祭りを、大人には防災ゲームなどを行い、地域での多世代でのつながりのきっかけ作りを行いました。2024 年度には、IOG も協力し、大学の研究者と司法書士による「終活の始め方セミナー」を行いました。当日は多くの住人が集まり、こうしたテーマへの関心の深さが示されました。

3. 質問紙調査（2022 年度）

全戸調査を行った結果、若い住人たちの地域活動への参加率や参加意欲は低いものの、「地域で親しい人を作りたい」と希望しながらもそういった相手を作れていないと感じる人の率は若者でも高く、また孤独を感じている若い住人が多いことから、地域活動の潜在的なニーズは高いことが分かりました。更に、特に子育て世代は防災対策に不安を感じており、不安に思う人ほど地域活動に積極的である傾向が見られました。こうした調査結果や上記のワークショップの結果をふまえ、今後は「防災」などを一つのキーワードとし、引き続き「こどもから 100 歳を超える高齢者まで誰一人取り残されることなく、月に 1 回程度は対面または ICT を通じて地域とつながるまち」の実現を目指していく予定です。



2024 年度終活の始め方セミナー



多世代での防災ゲーム（2023 年度夏祭り兼ワークショップ）



子どもたち向け工作教室（2023 年度夏祭り兼ワークショップ）

AI を用いた健診データによるフレイル・認知症リスク評価と予防に関する研究

■ プロジェクト代表者

酒谷 薫

■ 参画メンバー

飯島勝矢、唐子顕児*、
陳昱*（*大学院新領域創成科学研究科人間環境学専攻）、
喜納直人（羽曳野市きのうクリニック院長）

■ 研究期間

2023 年 9 月～2026 年 3 月

■ パートナー企業・団体

大阪府羽曳野市

■ 研究概要

超高齢社会において健康寿命の延伸は、医療費の抑制、社会・地域の活性化につながる取り組むべき重要な課題である。特にフレイルや認知症の早期発見・予防法は、高齢者の ADL・QOL 向上と共に医療費削減につながる重要な研究テーマであり、東京大学高齢社会総合研究機構では、AI を用いて一般の健診データよりフレイル・認知症の早期発見と予防法の研究開発を行ってきた。

そこで東京大学と大阪府羽曳野市の2者により、羽曳野市の健診データ等を解析し、生活習慣病、フレイルと認知症の関係について AI を用いて検討し、一般血液検査データなど健診データより、フレイル・認知症を早期に発見し、予防する方法を研究する。

■ 研究目的

羽曳野市が保有する特定健康診査等のデータを用いて以下の解析を行う。

- ①中年層（40 歳以上、65 歳未満）と高齢層（65 歳以上）における生活習慣病などの全身性代謝障害の発生頻度の差を分析する。
- ②加齢に伴う全身性代謝状態の変化について検討する。
- ③ディープラーニングを用いて健診データから認知障害発症リスクを推定する。
- ④中年層と高齢層における認知障害発症リスク因子の差異について検討する。
- ⑤高齢者の認知症スクリーニング検査における適切な検査項目について検討する。
- ⑥以上の結果に基づいて、健診データの AI による認知症発症リスク判定と食事療法を組み合わせた認知症予防プログラムを開発する。

■ 進捗状況

羽曳野市のデータ解析を行っている。（スライドデータ参照）

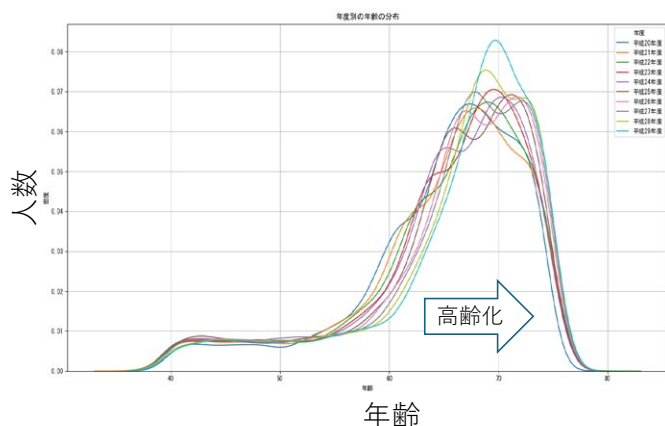
月 1 回羽曳野市担当者と定期会合を行い、進捗状況の報告と今後の研究の進め方について協議を行っている。



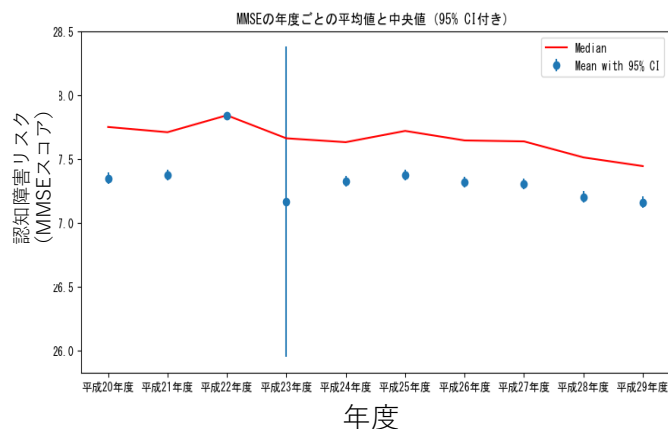
羽曳野市との研究事業協定締結式

大阪羽曳野市の人口分布と認知症発症リスクの変化

年齢分布の変化



認知障害リスク（MMSEスコア）の経時的変化



フレイル予防熟練支援者の知識構造化と介入 AI の開発

■ プロジェクト代表者

飯島勝矢

■ 参画メンバー

田中友規、呂偉達

■ 研究期間

2023 年 1 月～

■ 関連予算

戦略的な研究開発の推進 JST ムーンショット型研究開発事業
(あいたい未来を共に考え行動を促す AI ロボット)

研究代表者：大武美保子

(理化学研究所、革新知能統合研究センター、チームリーダー)

■ 研究概要

研究開発プロジェクト「あいたい未来を共に考え行動を促す AI ロボット」では、今後装着型のセンサ、家庭や職場など活動空間全体での一生にわたる見守りが普及し、様々なタイプの AI ロボットが、実世界とメタバース連携で支援する社会が実装されていることを想定し、その中で利用者を誰よりも理解し、夢へ向かう意欲を促し、成長を支援する AI ロボットの技術開発を目指している。本研究開発課題の背景として、超高齢社会が進むなかで、人生 100 年時代といわれる世の中になり、いつまでも元気で心身機能を維持しながら、自立した日常生活を過ごしたい。そのために自分自身がどのような意識を持ち、どう日常生活をアレンジできるのか。そこに新概念「フレイル(虚弱)」を盛り込み、医療関係者が主導する従来の介護予防事業の弱点(例：悪気はないにしても、結果的に上から目線の指導になってしまい、受講者である市民自身の自発的な気づきを促しにくく、自分事化にもならず、意識変容や行動変容に繋がりにくく、継続性も低い傾向が少なくない)も克服すべく、自助／互助の考えの下、住民主体活動の効果的な支援技術を集約し、どんな地域においても、そして、どんな人でも効果的・効率的に意識変容・行動変容を促すことが出来るシステムが大きな課題となる。

本研究では介入 AI の開発のため、「フレイル予防熟練支援者の知識構造化と介入 AI の開発」を進める。本プロジェクトにおいて開発する AI ロボットと、研究開発課題の位置づけを図に示す。本研究課題では、住民主体活動を推進するフレイル予防熟練支援者が実践するフレイル予防の効果的支援の知識(科学的根拠に裏付けられたもの)や暗黙知を収集・構造化する。最終的には、どんな人でも、どこでもいつでも、一歩踏み出して健康長寿と幸福長寿を目指すことができる熟練支援 AI ロボット(伴走者、上手いお節介役)を開発する。

■ 研究目的

本研究においては、次の3つの開発課題の完遂を目指している。開発課題①オンライン行動支援プログラムの構築と有効性の検証、開発課題②フレイル予防熟練支援者・利用者の暗黙知の収集・構造化と利用者の意識／行動変容データの事例データベース構築、開発課題③フレイル予防熟練支援者介入 AI の有効性の検証である。

■ 進捗状況

開発課題①オンライン行動支援プログラムの構築と有効性の検証においては、モデル地域(東京都西東京市)に登録されているフレイルサポーター(熟練支援者)全体との本研究協力に対する合意形成、5名以上の熟練支援者と調査体制を整備し「モデル地域にてオンライン行動支援プログラムのプロトタイプ試行テスト」として、東京都西東京市をモデル地域に選定し、熟練支援者(フレイルサポーター)10名と協働で、計20回の「フレイル予防のオンライン行動変容プログラム」を作成した。具体的には、フレイル予防に重要な栄養(食・口腔)、運動・身体活動、社会参加の各要素において、熟練支援者による講話を中心とした回と、参加者も交えた共想法に基づく参加型の講話回を行う内容である。2023年末時点で、熟練支援者10名(フレイルサポーター)、高齢参加者7名を対象に第10回まで試行した。熟練支援者と高齢参加者17名の内、16名がオンライン行動支援プログラム全体に対して高い満足度を報告しており、自身のフレイル予防活動に対して参考になったと回答していた。

開発課題②フレイル予防熟練支援者・利用者の暗黙知の収集・構造化と利用者の意識／行動変容データの事例データベース構築；開発課題③フレイル予防熟練支援者介入 AI の有効性の検証に関しては、オンライン行動支援プログラムにて、熟練支援者10名(フレイルサポーター)、高齢参加者7名の音声・映像等のデータを収集している。また、熟練支援者20名の暗黙知データ収集として、インタビュー調査を実施した。11月末時点で、高齢者市民6名(フレイルサポーター)、医療専門職10名(フレイルトレーナー)、自治体行政3名(フレイル予防事業担当)、1名キャンセルの計19名のインタビューを完了し、暗黙知の収集・構造化を進めている。特に、AI 深層学習を進めるにあたっては、暗黙知のマッピングを進め、計262要素、8階層のマッピングを作成した。

フレイル予防熟練支援者を超えるAIロボットシステムの開発



コミュニティの包摂性評価指標の開発

■ プロジェクト代表者

二瓶美里

■ 参画メンバー

コスタンティーニ・ヒロコ、小野敬済、熊谷晋一郎、
菅原育子、飯島勝矢、大月敏雄、亀山祐美、
松田雄二、藪謙一郎

■ 研究期間

2023 年 6 月 30 日～2028 年 3 月 31 日

■ 関連予算

内閣府戦略的イノベーション創造プログラム (SIP)

■ 研究概要

SIP「包摂的コミュニティプラットフォームの構築」では、一人ひとりの多様な幸せ(well-being)の最大化に向けて、包摂的コミュニティを実現する科学技術・社会技術が展開されるプラットフォームを構築することをミッションとする¹⁾。本研究チームは、課題 A: 社会の寛容性向上策「コミュニティと共進化するデジタルツインによる次世代型包摂的まちづくり手法と包摂性評価指標の開発」に取り組んでいる。課題 A では、多様な個人を受容する「寛容性」と一人ひとりの「自律性」を備えた社会を実現することを目指し、多様な人々が集うコミュニティにおいて生きづらさを抱えた人やその家族を含めた住民の寛容性を向上させ、一人ひとりの多様な幸せを実現する技術を開発・実装する。その中でも、我々は、コミュニティの包摂性を評価するための評価指標の開発を行う。

1) 「包摂的コミュニティプラットフォームの構築」戦略及び計画

https://www8.cao.go.jp/cstp/gaiyo/sip/sip_3/keikaku/03_community.pdf

2) SIP 包摂的コミュニティプラットフォーム構築ホームページ

<https://www.nibiohn.go.jp/sip3-housetsu/about/outline/>

■ 研究目的

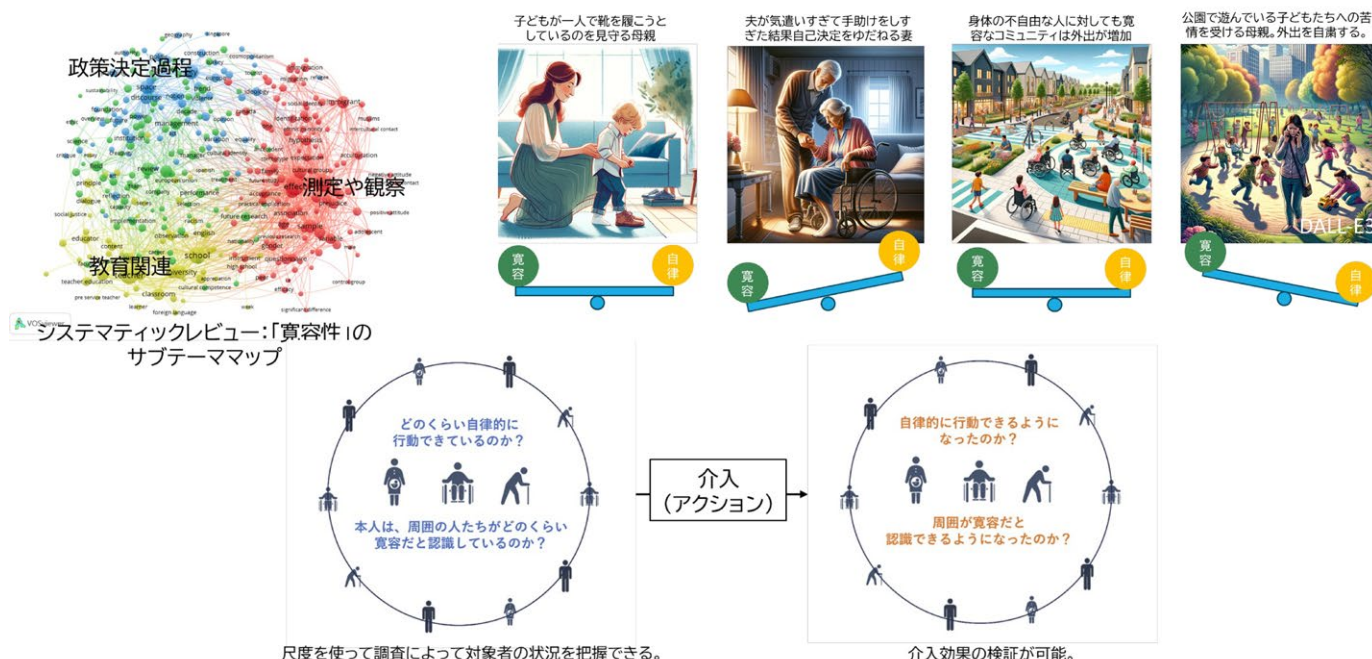
本研究では、多様な個人を受容する「寛容性」と一人ひとりの「自律性」を評価するための包摂性評価指標(寛容性と自律性)の開発を目的とする。

■ 進捗状況

本年度は、昨年度に実施した調査結果および COSMIN 基準に基づき、周囲の寛容性および個人の自律性に関する尺度の開発を行った。まず、開発した尺度を用いて、国内外において計 7 件の調査を実施し、妥当性および信頼性の検証を行った。

次に、寛容性および自律性に関連する要因について、地域幸福度指標との附帯調査データの解析等を通じて明らかにし、尺度内容の拡充を図った。さらに、有識者等へのインタビュー調査および階層意思決定法(AHP)を用いて、指標の総合得点に関する重み付けを行った。

これらの成果をもとに、包摂性指標(β版)を開発し、大規模なオンライン再調査を実施することで、改めてその妥当性および信頼性を検証した。加えて、国際比較調査を通じて日本における包摂性の特徴を明確化するとともに、開発した包摂性指標(β版)とウェルビーイングとの関連性に関する示唆を得ることができた。



里山活動を通じたフレイル予防を軸とした健康長寿・幸福長寿まちづくり

「イオン東大里山ラボ」における産官学民連携

■ プロジェクト代表者

飯島勝矢

■ 参画メンバー

呂偉達、田中友規、孫輔卿

■ 研究期間

2023 年～

■ 研究概要

日本には、里山に代表される景観と、多様な農水産物を得ることが出来る地理的特徴があり、そのポテンシャルを十分に利用するため、再生可能エネルギーの整備や、資源の戦略的活用等、新しい取り組みが各地で進んでいる。日本全体の持続可能性を高めることを目指し、公益財団法人イオン環境財団と東京大学未来ビジョン研究センターで設立した「イオン東大里山ラボ」において、里山活動と結果としてのフレイル予防（ゼロ次予防）の有効性であるかと明らかにする。

■ 研究目的

里山活動が高齢者のフレイル予防およびウェルビーイングの向上に与える影響を科学的に検証することである。特に「生きがい・健康」と「人材・新産業」という観点に着目し、調査と社会実践

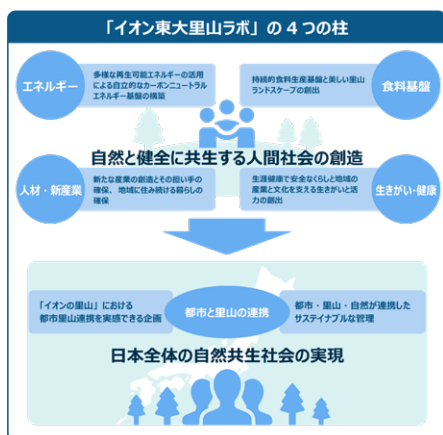
を組み合わせることで、里山活動が高齢者個人、地域社会、自然環境にもたらす健康的・社会的効果を明らかにすることを目指す。また、本研究を通じて、①自然と共生する持続可能な社会の構築、②高齢者が生きがいをもち健康に暮らせる地域づくり、③大学・企業・行政・地域が連携する革新的な地域プラットフォームの形成を促進し、研究成果の社会実装と参加促進を図ることで、持続可能な活動の好循環を生み出すことを目指す。

■ 進捗状況

今年度では、神奈川県秦野市の行政および NPO 法人・自然塾丹沢ドン会と連携し、フレイル予防と里山活動を組み合わせた実践的な取り組みを推進している。研究調査として、同 NPO の参加者を対象に、生活状況・身体機能・心理状態等の調査を実施し、里山活動が高齢者のフレイル予防およびウェルビーイング向上に与える影響を検証した。さらに、2024 年度には「そばの種まきイベント」や「秦野市里山まつり」に参加し、一般市民に対して「自然×研究」の連携によるフレイル啓発活動を積極的に展開した。また、2025 年 2 月には、イオン環境財団主催の「イオン SATOYAMA フォーラム 2025」にて、東京大学として本年度の取り組みについて報告を行った。

フレイル予防を軸とした研究長寿・幸福寿命まちづくり

～自然と健康（ゼロ次予防）：イオン東大里山ラボ～



秦野市の里山保全団体のメンバーで簡易フレイルチェック活動を実施



秦野市の里山保全団体のメンバーでの健康調査



イオン秦野店におけるフレイルの紹介とフレイルチェックの実施



都市型ふれあい農園の活用による 社会的・身体的フレイル予防に関する研究

■ プロジェクト代表者

飯島勝矢

■ 参画メンバー

田中友規、呂偉達、吉村佑生、笹野隆

■ 研究期間

2023 年～

■ パートナー企業・団体

株式会社タニタ

■ 研究概要

健康寿命の延伸に向けて、健康と疾患・障害の間の虚弱状態（フレイル）予防およびフレイルの社会的側面（社会的フレイル）への関心が高まっている。従来の健康づくりを目的とした介入では継続性の低さや社会的フレイル対策の困難さ等の課題があるが、高齢期の農業・園芸活動とピア効果を応用した「仲間と集い、ともに育てる都市型農園活動」に課題解決の可能性を見出した。本研究では、高齢者のフレイル兆候への気付きと自分事化を促すため、高齢住民ボランティア（フレイルサポーター）が主体となった地域活動「フレイルチェック」に参加した地域在住の一般高齢者を対象に、

株式会社タニタ本社の敷地内にある「タニタふれあい農園」をフィールドに、非侵襲的な介入試験を行っている。タニタふれあい農園は、ICT および AI による支援技術を活用し、農業の経験や知識がなくても手軽に参加できる都市型農園である。

■ 研究目的

本研究の目的は、株式会社タニタ本社の敷地内にある「タニタふれあい農園」（敷地面積約 170 平方メートルの農園）で行う都市型農園活動が地域の社会的・身体的フレイルの予防・改善に有効かを明らかにすることである。

■ 進捗状況

2024 年度では、一般の地域在住高齢者 40 名程度を対象にタニタふれあい農園で実際の都市型農園活動を年間通して実施した。具体的には野菜選びから種まき、収穫祭、試食会までを通して行った。また、効果検証として心身機能や質問票を用いた調査を実施し、試験の有効性の検証してきた。



農園活動の様子（農園中央のカフェゾーンでの交流）



農園活動の様子（初めてでも経験者と一緒に菜園）



仲間と収穫した新鮮野菜（一例）



育てた野菜を皆で調理・共食の機会に



農園活動中に、健康状態（筋力・筋肉量）の見える化・専門的なアドバイスも



疲労感に着目した高齢女性の フレイル早期検知の指標と予防策の開発

■ プロジェクト代表者

孫輔卿

■ 参画メンバー

飯島勝矢、菅原育子、松田弥花、蜂須賀知里、Vincent Hernandez、七尾道子、三浦貴大、馬場絢子、藪謙一郎、内山瑛美子、呂偉達、小関祐介

■ 研究期間

2024 年1月～2026 年12 月31 日（3年間）

■ パートナー企業・団体

セコム財団

■ 研究概要

日本は平均寿命も健康寿命も世界トップクラスだが、その差である要介護期間も男性9年、女性12年と長い。特に、女性では要介護期間が長いことが社会的に大きな問題であり、諸外国も同様の課題を抱えている。要介護の前段階であるフレイルは、男女関係なく生じるが、女性になりやすく、要介護に陥りやすい。実際、フレイルの主な原因であるサルコペニア、骨粗鬆症、認知症はいずれも女性に多いが、性差が生じる要因については未解明である。したがって、フレイルにおいて、性差に基づく「ジェンダー・ヘルスサイエンス」の検討が求められている。

最近の申請者らの検討（832名の地域在住高齢者対象：平均年齢75.8歳、女性48.0%）では、生きがい（喜びや楽しみ）がある高齢女性に比べて、生きがいが無い（生きがい喪失）高齢女性が5年間でフレイルになるリスクが約4倍高いことが示され

た。一方で、興味深いことに高齢男性においては、生きがいとフレイル新規発症と有意な関連は認めず、性差がある。特に女性の生きがい喪失はフレイルの評価項目の一つである疲労感と強い相関を認めた。しかし、健診の質問項目や後期高齢者の質問票において、疲労感に関連する項目はなく、フレイル評価や早期検知に繋がってない現状があり、女性特有の生きがい喪失による疲労感を検知できる質問項目や客観指標の開発が求められている。

■ 研究目的

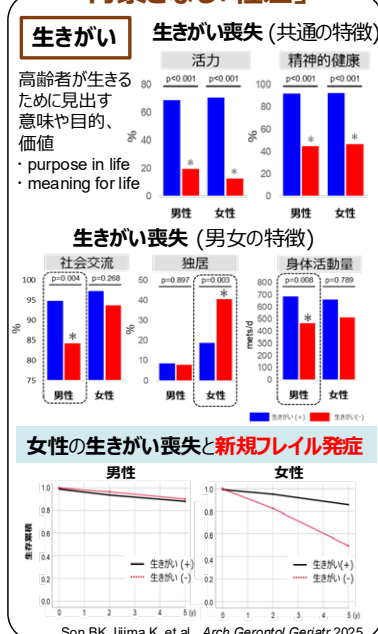
本研究は、高齢女性特有の疲労感に着目して、疲労感の中核要因や関連因子を明らかにしたうえで、定量評価指標および生体情報から検出する技術開発を行い、フレイルを早期検知することを第一目的とする。また、生きがい向上による疲労感の解消や軽減をフレイル進行の対策案として打ち出し、特に社会活動など社会とのつながりから生まれる生きがいを提案（フィードバック）し、汎用性ある活動の実践・持続につながる仕組みを確立することを最大の目的とする。

■ 進捗状況

2024年度は、柏コホート研究の第8次調査のなか、高齢者一人の主観評価、バイオマーカー、生体情報（顔表情、音声、姿勢）が連結できるようにデータを取得した。今後、高齢女性特有の疲労の特徴や要因を明らかにしたうえで、主観評価に基づく慢性的な疲労を説明できる客観指標の開発を行う。具体的には、疲労感の早期検知の血液バイオマーカーの探索および生体情報の各モダリティからの特徴量、マルチモダリティモデルの確立を行う予定である。

セコムPJ：ジェンダーダイノバージョン 女性のフレイル早期検知の指標と予防策の開発

背景となる「性差」



生きがい喪失は**疲労感**として表れる

フレイル 評価項目	フレイル（-）		フレイル（+）		P
	生きがい+	生きがい-	生きがい+	生きがい-	
体重減少	5.2%	8.3%	4.3%	0.0%	0.816
疲労感	21.8%	58.3%	47.8%	62.5%	< 0.001
活動量低下	14.0%	8.3%	26.1%	12.5%	0.339
歩行速度低下	14.5%	20.8%	21.7%	12.5%	0.681
筋力低下	15.7%	12.5%	30.4%	12.5%	0.284

Kruskal-Wallis test, Bonferroni (Post-hoc test)

R6年：高齢者大規模調査でのデータ収集と実測

主観・客観	測定項目	予備検討の内容や結果	
		主観	客観
① 質問項目 (主観指標)	生きがい・wellbeing	生きがい・wellbeing	
	疲労感	疲労感	
② 血液 バイオマーカー	性ホルモン		
	炎症因子		
	ビタミンD		
③ 生体情報	顔表情		
	音声		
	姿勢		



高齢者大規模調査（柏コホート研究）

R7年：主観推定モデル開発

R8年：疲労感の指標開発

【地域実装・生きがい向上】



生涯現役地域づくり環境整備事業（厚生労働省） 「シニア就労を通じた健康なまちづくり」

■ プロジェクト代表者

コスタンティーニヒロコ（～2025/1）、
飯島勝矢（2025/2～）

■ 参画メンバー

蒔野充照、前田展弘、
コスタンティーニヒロコ（～2025/1）、飯島勝矢

■ 研究期間

2023 年～

■ パートナー企業・団体

柏市生涯現役促進協議会

■ 研究概要

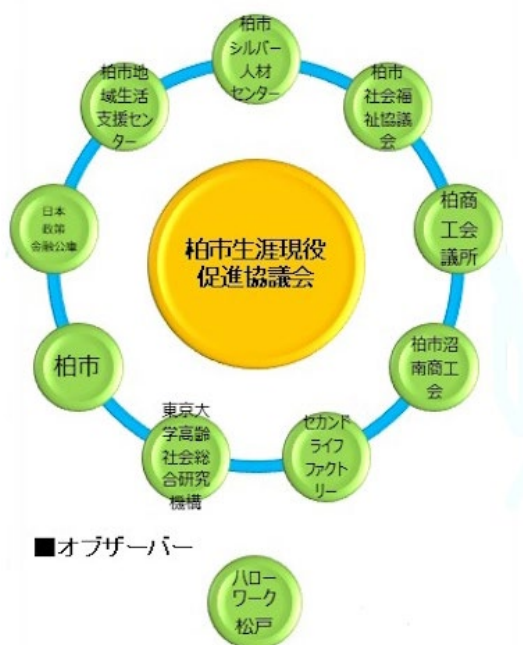
本研究では、高齢社会に対応できる柏市のまちづくりに向けてシニアの就労マッチング問題の解消を中心課題に据えながら、次の3つのことに焦点をあてて研究を進めていく。それは、①「企業人材」から「地域人材」へ導く切れ目のないキャリアパス移行支援（地域人材養成研修・セミナー事業、仕事（タスク）開拓事業を含む）、②生活支援を中心に日常生活圏域単位でのマッチング拡充支援（生活支援強化事業）、③フレイル予防を含め市民（高齢者等）の生きがいと Well-being に貢献する支援（フレイル予防等推進事業）の3つである。以上を通じて、「地域で活躍する」ことに価値を見出す地域文化を根付かせ、リタイアした後はもちろん、現役時代からも地域の中で活躍する（関わる）市民「地域人材」を増やしていく。そのことで多くの市民の健康づくりにも寄与するとともに、新たな生きがいを感じ、Well-being を高めていくこと、また地域力が強化されることを課題解決型アクションリサーチ方法論に基づき実施する。

■ 研究目的

今後の人口構造変化に対応できる「サステナブルな柏のまちづくり」の実現

■ 進捗状況

2024年度は、柏市生涯現役促進協議会とともに4回のセミナーを実施した。そのうち7月に実施したセミナーについては、「55歳からのセカンドキャリア応援セミナー」と題して、定年前の世代に対して訴求するセミナーを東京大学柏キャンパスにおいて実施した。各セミナーにおいては就労および地域活動に係る情報提供のほか、フレイル予防に関する情報発信、講師を招いてのセカンドキャリアの考え方等の発信を行った。そのほか各セミナーにおいてアンケート調査を実施し、その結果については柏市生涯現役促進協議会にフィードバックを行った。



■ オブザーバー

ハローワーク
松戸

柏市生涯現役促進協議会のネットワーク図



セミナーの様子

今後増加が見込まれる加齢により心身機能が低下した高齢者、身寄りのない高齢者の資産・住まいの管理に関する社会的な介入の仕組みの研究、調査

■ プロジェクト代表者

辻哲夫

■ 参画メンバー

辻哲夫、樋口範雄（東大名誉教授）、
飯島勝矢、大月敏雄、菅原育子

■ 研究期間

2024 年度～

■ パートナー企業・団体

三井住友信託銀行、SOMPO インスティテュート・プラス、
トラスト未来フォーラム、医療経済研究・社会保険福祉協会

■ 研究背景

1) 高齢化・単身世帯の増加、認知症患者の増加

・75歳以上の人口割合は 14.7% から、2065 年には 25.5 %に増加する見込み

・65歳以上の単身世帯は、男性：15.0 %から 2040 年に 20.8 %、女性 22.1 %から 24.5 %に増加見込み

・加齢に伴う心身機能の低下の代表的状態として、認知症がある。認知症患者数は 2040 年にかけてほぼ同程度（約 470 万人）から2倍（約 800 ～ 1000 万人）と推計されている。

2) 共生社会創出の気風

2024 年 1 月に「共生社会の実現を推進するための認知症基本法」が施行された。認知症の方が尊厳を保持しつつ希望を持って暮らすことができるよう、認知症の方を含めた国民一人一人が相互に人格と個性を尊重しつつ支え合いながら共生する活力ある社会（＝共生社会）の実現を推進することとされている。

ここでは、日常生活の動線の中では常に、

①当事者本人の尊厳が守られること

②本人の意思決定ができる限り尊重されること

の 2 点が要点 となる。

3) 財産管理にまつわる課題への着目の必要性

長寿化に伴う支援を必要とする期間の延伸、親族等による支援を期待できない単身世帯等の増加、子ども世代の高齢化などから、高齢者の生活支援資源の減少が課題として着目され、政策課題として解消に向けた動きが加速している。その一方で、高齢者の財産管理にまつわる高齢者の潜在的ニーズ、望ましい意思決定支援のあり方、それを実現するアドバイザーやサービスの在り方（ALP）に関する先行研究は数少ない。そのため、東大 IOG「金融と法」共同研究会では、金融機関を中心とした民間企業と老年医学・高齢者法等を中心としたアカデミアの連携により、ALP の普及に向けた具体的な対策を目指すこととする。

■ 研究目的

アドバンス・ライフ・プランニング（ALP）を浸透させることにより、高齢者の健康、主観的幸福感を向上させ、健康人生の延伸、自立 / 自律期間の延伸と、人生楽しみ（娯楽消費活動等）の充実

を目指す。アドバンス・ライフ・プランニング（ALP）は、将来の人生を、本人が能動的に設計していくことを目指し、本人と関係者が事前に / 継続的に、繰り返し行っていく、資産・住まい管理および介護に向けた備えと対応にかかる意思決定プロセスである。この目指す社会を実現するため、ALPアドバイザー資格制度と、資格認定 / 資格者育成団体を創成し、

①人生 100 年時代のジャーニーマップと、事前の備えが有効であることの周知

②有効な事前の備えのためのツール、選択肢の提供

③本人意思の尊重、家族コミュニケーション機会の増進

④アドバイスの結果連携することとなるALP関連のサービス事業（介護保険外産業）の拡充、育成を推進する。

■ 2024 年度の事業

高齢者の資産・住まいの管理に関する実態と困りごとを調査し、ALP の概念とその必要性の調査を行う。

具体的な活動

2024 年 4 月 研究会準備会・調査委員会立上げ

2024 年 5 月～ 2025 年 3 月

全 11 回共同研究準備会 開催

2024 年 7 月～ 2025 年 3 月

全 9 回 ALP 調査研究委員会

2025 年 3 月 2024 年度 研究報告書

Advance Life Planning 調査研究委員会

※本調査研究事業は（公財）トラスト未来フォーラムの委託研究として（一財）医療経済研究・社会保険福祉協会が実施
〈2024 年度研究報告書〉

<https://www.iog.u-tokyo.ac.jp/news/5979/>

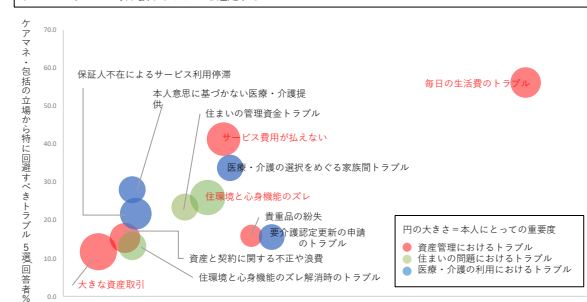
ALP アドバイザー事業の取り組みにより期待される効果

- ◆民間企業がALPアドバイザー事業に取り組むことで、業種共通の効果とともに業種固有の効果も期待できる。
- ◆複数の業種にまたがる事業者が連携してALPアドバイザー事業に取り組むことで、業種ごとの強みを発揮しつつ課題を克服できる可能性がある。

ALPアドバイザー事業の形態	業種共通の効果	業種固有の効果	課題
専業	・地域包括ケア、認知症バリアフリー社会への貢献	なし	集客、収益化、質確保
兼業 銀行		中年層の資産形成の促進、高齢層との取引継続	地域包括ケア、適切なALP関連サービスとの連携
信託銀行	・高齢顧客への対応品質の向上、契約手続きの適正化	信託商品の販促	
保険		死亡保障、介護補償の販促 ALPアドバイザー・事業者向け補償 保険金請求漏れの防止	
証券	・自社従業員を介した親世代のALP促進による自社従業員の介護離職防止、人的資本経営の促進	資産形成の促進、取引継続	
介護事業		利用者金銭管理等の業務外対応の抑制 利用者の不動産・金融資産の凍結防止 施設、サ高住等への誘客	健常時の顧客との接点
不動産		シニア住宅・サ高住、リフォーム事業への誘客 賃貸入居者への居住支援サービスの提供	地域包括ケア、適切なALP関連サービスとの連携
通信		高齢顧客へのサービスラインナップ強化 金融事業への誘客	
物流（宅配）		高齢層との取引継続、地方創生	

今年度の成果物：KJM：生前12トラブルの総合評価

- ◆ 生前トラブルを3つの軸で総合評価し下記図に示した
- ◆ ここからKJMで取り扱うトラブルを選定する



その他の個別研究プロジェクト

プロジェクト名	代表者	研究概要
IARU- 国際研究型大学連合： 「Aging, Longevity and Health」分野における 研究教育交流	飯島 勝矢	人口高齢化や長寿化に伴う世界的な課題に関する国際共同研究の推進、将来活躍が見込まれる若手研究者の育成及びネットワークの構築。(毎年秋に IARU-ALH annual conference 開催)
地域包括ケア： 安心ある在宅療養（エビデンスとモデル構築）	飯島 勝矢	IOG 発足以来、千葉県柏市をメインフィールドとして在宅医療介護連携の取り組みを推進してきた。特に医師会と行政の二人三脚、かかりつけ医機能、訪問看護機能、多職種連携、病診連携、市民啓発、アドバンス・ケア・プランニングなどを中心に、地域包括ケアシステムのモデル構築を行なっている。さらに、学外研究者とともに、日本人に合った在宅医療ケア分野における新たな QOL 簡易指標も進んでいる。
豊四季台団地における地域活動館の取り組み	大月 敏雄	高齢者の健康を保つ重要な要素といわれる社会参加について、地域の集いの場である地域活動館を介した効果的な社会参加の方法を模索する。
「食」を作る・整える行動と フレイルセグメント別の効果的なアプローチ	飯島 勝矢	地域在住高齢者を対象とした質的・量的調査の混合研究を行い、エビデンスに基づく「フレイル予防のための食を楽しむ方」を明らかにし、市民啓発向けの標語や紙芝居の試作を作成した。
中高年者の健康増進をサポートするアプリ開発	飯島 勝矢	中高年者のフレイル予防のためパーソナルな食・運動・社会参加を促進して健康を管理する AI 搭載型アプリケーションを開発し、効果を検証する。
アクアリウムの設置や観賞魚の飼育が 人の心理的なストレスに与える影響の検討	高瀬 麻以	犬や猫など運動機能の維持に好影響を及ぼす哺乳類系ペットの飼育が難しい高齢者に、観賞魚の飼育が生活に与える影響を検証する。
貢献寿命延伸への挑戦！ ～高齢者が活躍するスマートコミュニティの社会実装～	檜山 敦	元気シニアの地域参加を促進するウェブプラットフォーム GBER を活用し、収入を伴う仕事に限らず役割を持って、何歳になっても社会とつながれる地域コミュニティの構築を目指す。
発話障害支援デバイスの開発による 自己表現機能向上のための音声要素に関する研究	藪 謙一郎	脳疾患、喉頭がん、筋・神経系疾患等から起こる多様な発話障害について、種別ごとの支援デバイス開発を通じ QOL 向上をさせる音声機能支援手法を探索する。開発中の音声訓練アプリの検証を進めている。
高齢者の身体機能に対応する持続支援可能な ロボット型パーソナルモビリティの研究開発	田中 敏明	本研究は、個々の高齢者の日常生活状況に合わせた持続的・段階的リハビリテーションを安全に行うため、ヒトとロボットの同期的感覚フィードバックを導入の上でパーソナルモビリティとロボットスーツを融合した外骨格ロボット型パーソナルモビリティの開発研究。
視覚認知障害者の空間動作支援のための 注意喚起機能付き視覚バリアフリー機器開発研究	田中 敏明	3 次元視覚情報呈示装置として HMD（ヘッドマウントディスプレイ）を用い、これに動的な歩行・ADL 動作時支援のための動作のセンシングし、かつ、経時的に無視領域へ注意喚起を促すため感覚フィードバックを利用した注意喚起機能付き視覚バリアフリー機器開発研究。
住宅内移動時転倒のヒトと空間双方からの リスク評価標準化と予防サポートアプリ開発	大月 敏雄	高齢者の身体機能データと住居の物理的な環境データを取得し、それらを踏まえた住宅内移動時の転倒防止策の提示を行うアプリの開発を行う。
FMコウモリ型超音波センサを用いた 浴室内事故防止システムの開発と評価	伊福部 達	開発したコウモリ型センサを用いて、浴室内における溺死・溺水に至る動作パターンを予知し、事故をどこまで未然に防ぐことができるかを評価する。
フレイルおよび化粧指導が身体・脳機能に 及ぼす影響	飯島 勝矢	地域在住高齢者および施設の高齢者を対象として、化粧指導を行い不安軽減や生きがい向上、フレイルの予防、また脳機能の活性における効果を検証する
高知県仁淀川町コホート研究 ：KONIC study (Kochi Niyodogawa Cohort)	飯島 勝矢	人口 5000 人台という、人口減少も顕著である地方自治体をフィールドに、80 ～ 90 歳代も含む高齢住民が主体的に気づき合い、測定し合い、励まし高め合って、健康長寿と幸福長寿の両立を目指す。その地域自治体ならではの住民主体システム構築とデータ検証。

個別研究プロジェクト

自治体等出向者のコメント

自治体はどうあるべきか (東京都西東京市)	64
感謝 ～関わらせていただいたすべての皆様へ～ (広島県呉市)	65
社会変化に対応する知識・経験の蓄積を (日本年金機構)	66
みんなのチカラを総結集! ～フレイル予防で広がる Wellbeing の輪～ (神奈川県平塚市)	67

Individual research project
Comments from employees seconded to local governments

自治体はどうあるべきか

学術専門職員 笹野 隆（東京都西東京市）

2024年4月に東京都西東京市よりIOGに出向し、この一年間で様々な研究活動や産官学民連携に携わる中で、基礎自治体である市区町村は今後どうあるべきなのかということを日々考えさせられました。

IOGで学んだこと

大規模調査の柏スタディをはじめ、eスポーツのフレイル予防に寄与する効果検証等といった研究活動に携わることができ、WINGS-GLAFSの講義を受講する機会を得ることもできました。その中で、エビデンスを積み上げていくことや絶えずイノベーションを追求することの重要性、学との連携の大切さを学びました。社会や人が大きく変わる時、その背景にはエビデンスとイノベーションがあるのではないのでしょうか。自治体が何かをなすためにも、最新の技術・知識・エビデンスが必要不可欠であり、自治体で研究調査を行うのは困難なので学との連携が必要不可欠であると実感しました。

産官学民連携では、多くの産や民の方と交流することができました。何か物事を継続・拡大させていくには、自治体だけの力では限界があり、産業界の力も使って利益を生みだしながら「犠牲なき献身こそ真の奉仕」を体現していく必要があると感じました。また、全国のフレイルチェック活動を通じて、フレイルサポーターを中心とした地域の底力を体感することができましたし、一生懸命頑張る他の自治体職員やフレイルトレーナーと知己になることができ、これらは大きな刺激になりました。地域との関係性や自治体間の競争といったことで、時に地域の内外で困難に見舞われることもあります。仲間もいるということはこれからの大きな励みになります。

学んだ先へ

ただ学ぶだけではなく、出向から戻った際には、学んだことを持ち帰り、実践していかなければなりません。高齢社会に限らず社会課題を解決していくには、イノベーションと産官学民連携を駆使していくしかないのではないかと感じています。住民に最も近い存在である基礎自治体は、これからも多くの社会課題に向き合っていかなければなりません。そうした時に、今からイノベーションと産官学民連携に取り組んでいるかどうかが大きく問われるような気がしています。来年度は、そうした土壌ができるよう地道に耕し種を蒔きながら今後の実践に繋がるそんな一年にしていきたいと強く思っています。



国立市フレイルチェック会



西東京市 e スポーツのフレイル予防に寄与する効果検証



西東京市フレイル予防料理教室



ロッテさんとの西東京市フレイル予防イベント

感謝 ～関わらせていただいたすべての皆様へ～

学術専門職員 吉村 佑生（広島県呉市）

私は 2023 年 4 月に広島県呉市より IOG に出向し、2024 年度は IOG での活動 2 年目の年となりました。昨年度同様、1 年間を通じて様々なプロジェクトに関わらせていただきました。

中でもフレイル予防プロジェクトについては、定例ミーティングの司会を務めさせていただくなど、昨年度以上に多くの方々と御縁をいただく 1 年間でした。各地のイベント等のお邪魔した際には「いつもミーティング参加してます!」といったお声をいただきとても嬉しく感じていました。

また、IOG での活動 2 年目ということもあり関わらせていただく皆様の変化も多く感じさせていただきました。日々の活動が壁にぶつかり、それを打開しようと住民・行政が一体となって手探りで始めた動きが軌道に乗る様、さらには好循環を生みながら自走していく様を間近で見させていただいたことは自治体職員として大変貴重な経験となっています。

私の出向元である呉市は高齢化率 36.6%となっており、日本全体の 29.3%に対して大きく上回っています。市域には都市部だけでなく山間部、島しょ部を有しており、少子高齢化・人口減少が進んでいる日本の縮図として全国の中でも最先端を走っていると言っても過言ではありません。そのような状況の中で住民の皆さんが「生きがい」を持って楽しく暮らせるようにするためには IOG で行われている様々なプロジェクトが重要なヒントになるものと確信しています。

私の出向期間は 2024 年度で終了となりますが、引き続き IOG の取り組む多くのプロジェクトを参考にさせていただくとともに 2 年間で経験したことを糧にして、業務に取り組んで参りたいと思います。

貴重な機会をいただき、本当にありがとうございました。



全国フレイルトレーナーの集い



柏スタディ振り返り会



豊島区フレイルサポーターの皆様と



千葉県フレイルサポーターの集い

社会変化に対応する知識・経験の蓄積を

学術専門職員 蒔野 充照（日本年金機構）

私は、公的年金の一連の運營業務を担っている日本年金機構より、2023年10月よりIOGに出向しております。日本年金機構からの出向は、2016年に始まり私で4代目となりました。着任して1年半、「フレイル予防」「生きがい・就労」のプロジェクトに携わらせています。特に、厚生労働省の高齢者の雇用機会確保の施策のひとつである「生涯現役地域づくり環境整備事業」を受託して行われている柏市生涯現役促進協議会の活動に携わらせていただいています。

IOGでの活動を通して、日本社会が突入している超高齢社会への課題意識を知ることができました。また、その社会変化に対応するための高齢者地域就労への取り組みや、フレイル予防事業等に関わらせていただきました。日本年金機構のミッションは、確実な適用・徴収、正確な給付等の基幹業務に安定的かつ着実に取り組み、国民生活の安心を支え続けることです。そのために社会の変化に着実に対応することは必須であることを、IOGでの活動を通して強く再認識しました。

またIOGへの出向にあたり、最も感じることは、視野を広げる機会となっていることです。日本年金機構では、厚生年金保険徴収業務や調達業務に従事しておりましたが、これまでとは違うフィールドに身を置き、研究者の先生、自治体職員、民間企業職員、地域住民の方など、様々な方と関わることで、新たな学びを得る機会となっていると実感しております。

引き続きIOGスタッフとして活動を通して、より多くの知識や経験を蓄積していきたいと考えております。



柏市生涯現役促進協議会主催「セカンドライフセミナー」の様子

みんなのチカラを総結集！ ～フレイル予防で広がる Wellbeing の輪～

客員研究員 佐藤 麻美（神奈川県平塚市）

平塚市は 2022 年に東京大学高齢社会総合研究機構と「フレイル対策の活性化に関する連携協力協定」を神奈川県内の自治体として初めて締結し、フレイル予防、中でも「オーラルフレイル予防を軸とした産官学民協働のフレイル予防」に力を入れて推進しています。

私は客員研究員として 2024 年 4 月から出向し、以下のテーマを中心に活動しています。

IOG での主な活動や研究内容

- ① オーラルフレイル予防を軸としたフレイル予防のまちづくりの効果検証
- ② 保健事業と介護予防の一体的実施の視点から住民主体のフレイル予防活動効果の研究
- ③ フレイル予防の取組について全国への紹介
- ④ フレイル予防の意識・行動変容に与える要因の考察（産業界、自治体の可能性等の考察）

1 年目を終えて

①では、本市で実施した「オーラルフレイル（以下 "OF"）地域丸ごと集中啓発」の効果として OF の認知度が非介入地域も含め市内全域で上昇し、介入地域では OF 発症者の有意な減少が確認できました（第 66 回日本老年医学会学術集会で発表）。

この成果をフレイルサポーターや産業界、市担当者等と共有することで、フレイル予防の効果を実感し、やりがいや更なるフレイル予防活動への原動力になっていると感じます。

②では、国保データベースシステムを活用して短期的な将来の年間介護給付費をフレイルチェック参加者と非参加者で比較したところ（75 歳以上の後期高齢者が対象）、フレイルチェックに参加した経験がある者の平均年間介護給付費が有意に低いことを確認することができました（2025 年第 67 回日本老年医学会学術集会で発表予定）。この成果は行政の介護保険制度運営にとっても大きなエビデンスであり、今後は多くの自治体でも同じように効果検証をできるような方法を検討していきたいと思います。

③については、この一年間で多くの自治体と出会い、人口減少が進むまちでは高齢者の一人一人が主役になって前向きにフレイル予防の取り組む姿を、都市部においてはフレイルサポーターの得意な分野や、まちの特徴を活かした多彩なフレイル予防活動に触れることができました。これらのフレイル予防を軸とした人の繋がりは、実践する本人だけでなくその周囲やまち全体の Wellbeing に大きな影響を与え健康長寿の実現につながると感じました。2 年目はこれらの取組を全国で共有できるよう、また自治体職員同士の情報共有についても力を尽くしたいと思います。

④については、産業界によるフレイル予防の社会実装の様々な取組に触れ、無関心層を含め広くフレイル予防意識・行動変容を促すためには行政と産業界と住民と学術機関が力を合わせて、各々の得意分野を引き出し実践していく重要性を学びました。今後も実際の取組を中心に引き続き深めてまいりたいと思います。



フレイルサポーター・サンスター(株)・東大 IOG 合同で学会発表

産学連携プロジェクト

IOG の産学連携プロジェクトは、企業とともに研究成果の社会実装を目指す「個別共同研究」、ジェロントロジーの8つの分野を学ぶ「アカデミー」参加企業と IOG との交流を目的とした「ネットワーク」の3層構造になっています。企業から出向している方々のコメントを通して、プロジェクトがもたらす価値や今後の取り組みについてお伝えします。

ジェロントロジー産学連携プロジェクトの活動内容	70
ジェロントロジー産学連携プロジェクト 参加企業	72
産学連携プロジェクトの活動実績	73

Individual research project

ジェロントロジー産学連携プロジェクトの活動内容

ジェロントロジー産学連携プロジェクトは、集い・共有する「ジェロントロジー・ネットワーク」、体系的な学び・総合知で深掘りする「ジェロントロジー・アカデミー」、新たな事業開発につなげる「個別共同研究」の3層構造で成り立っています。

メンバーが集い・共有するジェロントロジー・ネットワーク

ジェロントロジー・ネットワークは、参加企業とIOGの交流やメンバー同士の討論を通じて、超高齢社会と向き合っていくかを学ぶ場です。最新のトピックスやアカデミーの研究など、さまざまな情報をキャッチアップしながら自由な討論や意見交換を行い、共有することにより、各企業がどのように自社の強みを生かすべきかを考えます。

2024 年度に行った産学交流機会：サロンのディスカッションテーマ

*ハイブリッド開催を含む

1) 豊かな健康を個と地域のウェルビーイングから考える

IOG 機構長の掲げた次の4つのビジョンを元に議論する

- ・住民主体の活力のあるまちづくり（生きがいづくり、ウェルビーイング）
- ・誰ひとり取り残さない（地域共生社会、誰でも仲間〔障害者、社会的弱者含む〕）
- ・いつまでも元気で（弱らせない、健康長寿、地域貢献）
- ・弱っても安心して住み続けられる（地域包括ケア、在宅医療介護連携、介護 DX）

2) ライフデザイン

主な討論テーマ

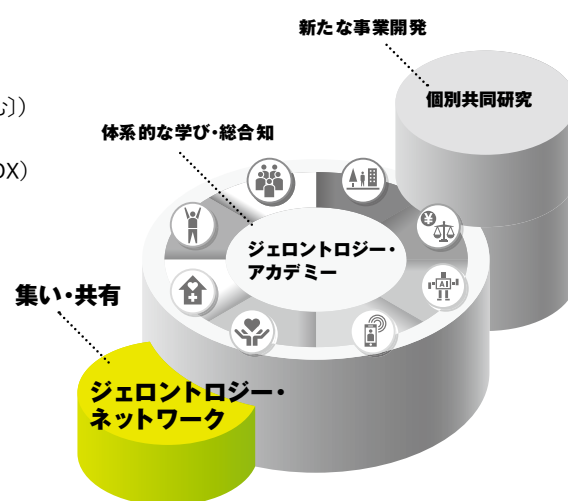
- ・若い世代の人生 100 年ライフデザインとは
- ・わくわく、楽しく豊かな人生、のための「もの・こと」、人脈づくり
- ・長寿社会を豊かにする AI 活用
- ・社会貢献とは

3) 移動分科会サロン

- ・温故知新で移動社会をデザイン
- ・宇都宮 LRT 試乗と地域交通・結接点の重要性とまちづくり
- ・ユーザーオリエンティッドな未来の地域交通とまちづくり

4) 企業と教員紹介&雑談交流サロン

- ・企業活動紹介 12 社
- ・雑談会 「しあわせと心のフレイル予防について」
「混合介護保険外サービス懇話会」



レクチャーとグループワークを共同研究に繋げるジェロントロジー・アカデミー

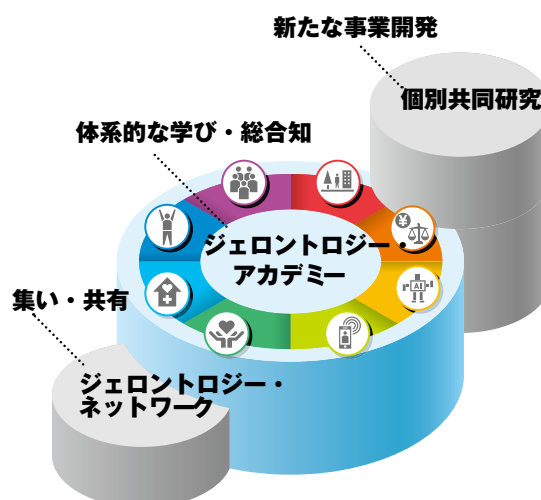
ジェロントロジー・アカデミーは、2020 年度からスタートしたジェロントロジー産学連携プロジェクトの中心として位置付けられている活動です。ジェロントロジー・アカデミーでは、8つの領域からテーマを設定し、関連する講演や話題提供を行うレクチャーと、自分事とするためのグループワークの二つの構成で進めています。

アカデミー参加企業は、アカデミーのカリキュラム（前期・後期）、各種研究会、ジェロネットの活動に参加できます。

さらに、アカデミーで学ぶ中で社会実装に向けてテーマを絞り込み、各研究会の立ち上げ、活動をスタートしています。

■ 2024 年度の研究会

- ・高齢者就労研究準備会
- ・食の在り方研究会
- ・オーラルフレイル予防研究会
- ・金融関連および法研究会 勉強会
- ・まちづくり標準化研究会



高齢者地域就労の仕組みの開発



高齢者就労と生涯現役社会の実現への社会的課題解決に向けたロードマップ作成を目指します。生涯現役社会の新しい働き方を開拓するための具体策について議論します。

フレイル予防産業の創出



東大IOGのエビデンスの蓄積と産学連携の先進事例を学び、各社の強みを生かして国民に向けた啓発を強化し、幅広いフレイル予防産業を展開するための方策を探りながら、健康長寿社会の実現を目指します。

生活支援産業の創生



社会的な需要が高まる高齢者の生活支援サービスのビジネスモデル創出における課題を明らかにし、解決のためのアイデアを具体化します。

地域包括ケアシステムを支える民間事業開発



高齢者が最後まで自分らしい人生を送るために、フレイルの段階に合わせたサービスを地域のインフラとして提供できる地域包括ケアシステムを展望します。



高齢者地域就労の仕組みの開発



住宅地再生の標準化



金融関連および法



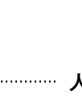
生活支援産業の創生



地域包括ケアシステムを支える民間事業開発



人・まち全体をつなぐ情報システム開発



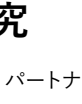
人・まち全体をつなぐ情報システム開発



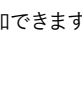
人・まち全体をつなぐ情報システム開発



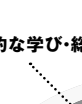
人・まち全体をつなぐ情報システム開発



人・まち全体をつなぐ情報システム開発



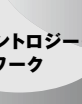
人・まち全体をつなぐ情報システム開発



人・まち全体をつなぐ情報システム開発



人・まち全体をつなぐ情報システム開発



人・まち全体をつなぐ情報システム開発



人・まち全体をつなぐ情報システム開発

住宅地再生の標準化



老朽化、空き家が問題となっている住宅地を「持続性をもつ住宅、住宅地」に変えるため、フィールド研究や地域課題共有から産官学民で解決の道を探り出します。

金融関連および法



人生100年時代の高齢期には、金融と法に関する継続的かつ包括的な支援体制が不可欠です。成年後見、信託、リバースモーゲージ等を用いた、見守りと生活支援の新しいあり方を構想します。

ジェロントロジーの開発普及



生きがいある自立・自律生活を支え、高齢期のマイナスをプラスに転換する技術やシステムを探求し、経済と生きがいを両立するICTやロボット活用を学びます。



高齢者の「暮らす・繋がる・働く」などの行動を支えるために、ICTを用いた情報システムが果たすべき産官学民の役割について議論します。

社会実装と新たな事業開発につながる個別共同研究

共同研究として、個別の研究課題に取り組み、社会実装を目指します。東京大学への派遣・出向も行い、パートナーシップで課題解決、新たなビジネスモデル創出、そして政策提言も行います（派遣・出向を行う個別共同研究プロジェクト紹介：→P77～82）

個別共同研究参加企業は、アカデミー・ネットワークを含む産学連携プロジェクトのすべての活動に参加できます。

産学連携プロジェクトの詳細はホームページでも紹介しています。

▶ <https://www.iog.u-tokyo.ac.jp/collaboration/>



▲パンフレット

新たな事業開発

個別共同研究

体系的な学び・総合知

集い・共有

ジェロントロジー・アカデミー

ジェロントロジー・ネットワーク

参加企業

2024 年度

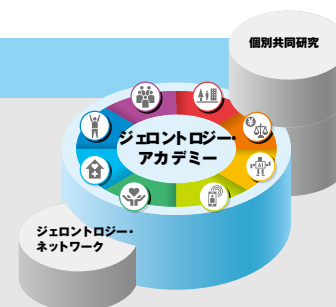
個別共同研究・寄付プロジェクト

イオン株式会社	株式会社ニッスイ
伊藤ハム株式会社	株式会社ニッセイ基礎研究所
株式会社ウェルモ	日本コカ・コーラ株式会社
キューピー株式会社	日本生命保険相互会社
一般財団法人高齢者住宅財団	株式会社ノバケア
サンスター株式会社	ハウス食品グループ本社株式会社
株式会社住協	はごろもフーズ株式会社
相鉄不動産株式会社	株式会社長谷工コーポレーション
大和ハウス工業株式会社	株式会社フードケア
株式会社タニタ	フジッコ株式会社
東急株式会社	株式会社ヘルシーパス
株式会社東急不動産 R&D センター	株式会社マルタマフーズ
常盤薬品工業株式会社	ミサワホーム株式会社
株式会社ニチレイフーズ	株式会社明治
日清オイリオグループ株式会社	株式会社ロッテ



ジェロントロジー・アカデミー

株式会社うえるねす	社会福祉法人 浪速松楓会
株式会社オートテックジャパン	一般社団法人日本セルフケア研究会
株式会社かんぽ生命保険	三井住友信託銀行株式会社
株式会社 JTB	株式会社りらいぶ
SOMPO インスティテュート・プラス株式会社	
独立行政法人都市再生機構 (UR 都市機構)	



ジェロントロジー・ネットワーク

旭化成ホームズ株式会社	株式会社小学館
アフラック生命保険株式会社	スズキ株式会社
株式会社アンカー	住友生命保険相互会社
ICONA DESIGN GROUP JAPAN 株式会社	TOPPAN 株式会社
株式会社 Enri	株式会社長谷工総合研究所
キッコーマン株式会社	パナソニックホールディングス株式会社
株式会社クリニコ	パラマウントベッド株式会社
有限会社げんごろう (言語朗)	有限会社ホリホック
社会福祉法人ことぶき会	ヤマハ発動機株式会社
株式会社坂井電機	株式会社 Rehab for JAPAN
株式会社 JVC ケンウッド・デザイン	株式会社ルネサンス
株式会社ジェイテクト	



2024 年度ジェロントロジー産学連携プロジェクトの活動方針

- ・2020 年度のスタートから3年間フェイズ1 が終了し、次のフェイズ2 の3 年間の中間の年度の位置づけとなり、最終年度の2025 年度に何かしらの成果を残すことを意識した活動を行う。
 - ・まずは参加企業内での「フレイル・フレイル予防」の認知度 UP (内部固め)
 - ・参加企業を中心に賛同する企業を増やす(拡大戦略)
 - ・8 つのテーマを総合的に組み立てて、目指すべき社会を創造する
- <共同研究>・8 つのテーマのうち、具体的な方向性が見えてきたテーマ
(フレイル予防、高齢者地域就労、まちづくり、金融関連及び法)を更に進化させる。
- ・各研究会の活動(社会実装等)の方向性が見えてきた段階で、それを推進する企業集団を組織化する。
- <アカデミー>・8 つのテーマをそれぞれ単独ではなく、関連するテーマを組み合わせた立体的なアカデミーを実施する。
- <サロン>・従来の定例的なサロンに加えて、交流を意図した随時開催のサロンを増やす。
- <その他>・事業地視察会、ワークショップ、全体ミーティングなどをリアルで開催し、学びと交流を図る。
- ・基礎的な学びの場として GLAFS の講義への積極的な参加を促す。

活動実績

2024年度	全体ミーティング	アカデミー	サロン
4 月	ジェロントロジー産学連携プロジェクト2024 開講式 ◇基調講演:「美味しい、楽しい、ワクワク」を担う産業の重要性 江崎 禎英(社会政策課題研究所) ◇講演:「東京大学 IOG 産学連携の目指すところ」～最新のフレイル予防の動向を踏まえて～ 飯島 勝矢(東京大学) ◇IOG教員(3名)の各研究テーマの紹介「新たな産学連携共同研究を目指して」 ◇IOG 産学連携プロジェクト2024の活動 ◇総合討論		豊かな健康を個と地域のウェルビーイングから考えるサロン ◇対話テーマ:「自立支援に幅広く貢献できるかわり(製品・サービス)の実現に向けて!」 ライフデザインサロン ◇対話テーマ:「若い世代が描く人生100年のライフデザインイメージ」について 企業雑談交流活動 ◇しあわせと心のフレイル予防について
5 月		アカデミー 第1回「8つのテーマの課題解決で実現する社会」 ◇報告:8つのテーマで学んだこと 事務局 ◇総合討論:テーマ「8つのテーマの課題解決で実現できる社会とは」 第1部 あるべき社会、あって欲しい社会とは 第2部 そのためになすべきことは何か ◇総評「目指すべき方向と産業界への期待」 辻 哲夫(東京大学)	ライフデザインサロン ◇対話テーマ:「高齢になってもわくわくする「モノ・コト」は何だろう?」について
6 月		アカデミー 第2回「フレイル予防」と「高齢者地域就労」 ◇問題提起 ・企業と高齢者就労に関する論点整理 前田 展弘(東京大学 IOG) ・高齢者就労とフレイル予防の新たな知見 飯島 勝矢(東京大学) ◇各社紹介 ・東急バスの取組 古川 卓(東急バス) ・東急リゾート&ステイの取組 平尾 祥二郎(東急リゾート&ステイ) ◇パネルディスカッション テーマ「フレイル予防」と「高齢者地域就労」を企業の中で実現するには アカデミー 第3回「フレイル予防」と「まちづくり」 ◇問題提起 ・郊外住宅団地の課題とフレイル予防 田中 康夫(東京大学) ・フレイル予防とまちづくりの活動(神奈川県三浦半島における拠点づくり構想について) 成田 慎一(かながわ福祉サービス振興会) ・企業目線でのまちづくりと住民パワーの結集 石塚 禎幸(ミサワホーム) ◇取組の事例紹介 ・平塚市のフレイル予防啓発活動 佐藤 麻美(東京大学 IOG/平塚市からの出向) ・池子住民協議会の取組(逗子市) 中川 隆(池子住民協議会) ◇総合討論 テーマ 元気なまちづくりは住民のフレイル予防活動から～そして産業界の役割は～	豊かな健康を個と地域のウェルビーイングから考えるサロン ◇対話テーマ:介護エコシステムの構築に向けて「産学官連携による高齢者とそのご家族への支援のあり方について考える!」 ライフデザインサロン ◇対話テーマ:「これがあるので人生が楽しく豊かになると思っているもの」について 企業雑談交流活動 ◇しあわせと心のフレイル予防について

※個別研究会は各々開催



ライフデザインサロン 4 月 学生との対話風



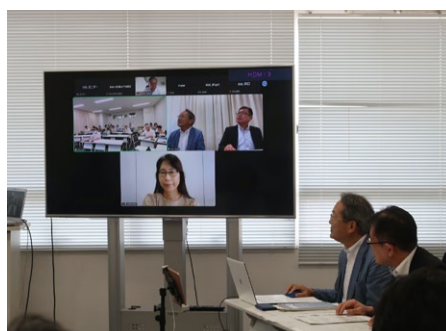
開講式 4 月 会場風景



企業雑談交流活動 6 月 心のフレイル予防

2024年度	全体ミーティング	アカデミー	サロン
7月	事業地視察会 関西事業視察会 ◇目的：ジェロントロジー産学連携プロジェクトでの座学とともに実際の現場での最新事例などを視察することで、高齢社会の課題についてより理解を深め、課題解決を図ることを目的とする。 ◇視察先 ・奈良県生駒市の取組 フレイル予防活動、まちのえき、いこま市民パワー㈱ ・浪速松楓会(大阪市)の取組 ライフェル駒川(サ付き)、駒川でっとう(地域貢献事業) ・枚方信用金庫の取組 巡リズムの取組、ひらしん健康ステーション	アカデミー 第4回「まちづくり」と「高齢者地域就労」 ◇問題提起 ・持続可能な郊外住宅地のまちづくり～その主役は住民に移行された地域再生法の改正の意味について～ 田中 康夫(東京大学) ・高齢者の社会参加と地域人材に関する論点整理 前田 展弘(東京大学 IOG) ◇活動事例報告 ・生駒市の取組紹介 田中 明美(生駒市) ・住民参加のまちづくり取組の事例紹介 こま武蔵台での活動 柳沢 弘二(げんきネット武蔵台) 八王子めじろ台での活動 中村 修(めじろ台地区まちづくり協議会) ◇総合討論 テーマ「次世代への橋渡し」～シニアパワーをどうまちづくりに活かすか～ 人材発掘、意識改革、生きがい創造、等の取組 アカデミー 第5回「生活支援」と「フレイル予防」を「情報システム」で解決 ◇＜問題提起・話題提供＞ ・フレイル予防推進会議に向けてのねらい ～産官学民の連携の重要性～ 辻 哲夫(東京大学) ・日常生活圏におけるソーシャルキャピタルの重要性 ～地域包括ケア(まちづくり)基本概念を主眼において～ 神谷 哲朗(東京大学) 蒔野 充昭(東京大学 IOG/ 日本年金機構からの出向) ・これからのまちづくりに期待される情報システムとは ～AI の活用等地域ソーシャルキャピタルづくりに期待されること～ 広瀬 通孝(東京大学) ◇テーマ：『生活圏域ソーシャルキャピタル充足に向けて、あなたの会社として何ができるか』 視点1 官民連携に向けて、民間側からの新たな提案は？ 視点2 地域に貢献できる商品やサービスは？ 視点3 リビングラボは必要か？	ライフデザインサロン ◇対話テーマ：「あなたが豊かになれると思っているコトやモノは、何ですか？それは、いつからはじめますか？」 移動分科会 ◇対話テーマ：温故知新で移動社会をデザイン 企業雑談交流活動 ◇しあわせと心のフレイル予防について
8月		アカデミー 第6回「フレイル予防」と「金融関連及び法」 ◇問題提起 ・「Advance Life Planning 調査」で見えてきた高齢者の財産管理の困りごと SOMPO インスティテュート・プラス ◇話題提供 ・高齢社会対策大綱(最新版) ～ウェルビーイング向上を目指して～ 飯島 勝矢(東京大学) ・「老い支度」の事例 高齢者の住宅資産循環を考える委員会の活動について 吉田 肇(ミサワホーム) ・東大が考える認知症対応 いままで自分らしく活動できる社会を目指して ALP の活用で社会を変える 三井住友信託銀行 ◇総合討論 テーマ『シニアのウェルビーイングが実現できる社会とは？』	豊かな健康を個と地域のウェルビーイングから考えるサロン ◇対話テーマ：話すことが人と繋がる第一歩。社会に参加・貢献してみるのはどうですか？<やる気&やりたい気持ち>を集め、種々さまざまなコミュニティの創生によるフレイル予防活動について考えてみる！> 企業紹介交流サロン セッション1 6社<第二の人生を豊かにするための積極性を促すコミュニティづくりに向けて・混合介護など保険外などの豊かなサービス選択の普及に向けて・住まいあり方やくらしを支えるサービスによるシニアの健康寿命延伸に向けて・高齢者とそのご家族への支援視点による介護エコシステムの構築に向けて・>フレイル予防や介護予防による充実したシニアライフデザインに向けて・リライブウェアで高齢者の健康寿命延伸の実現に向けて> 企業紹介交流サロン セッション2 6社：<高齢社会における最適化デザインの実現に向けて・未来社会を豊かにする新たな価値創造とサービス提供支援に向けて・心身の健康づくりのトータルサポートによる人生100年代のいきいきに向けて・モビリティと人のパートナーシップにより取り残されそうな社会課題の解決に向けて・認知症治療、予防の自由診療によるフレイル予防のアプローチに向けて・文化芸術・クリエイティブ X 多世代による「彩りある人生&多様性を認め合う社会」の実現に向けて> 企業雑談交流活動 ◇しあわせと心のフレイル予防について ◇混合介護 保険外サービス懇話会

※個別研究会は各々開催

アカデミー 6月
「フレイル予防とまちづくり」事例紹介風景アカデミー 7月
「まちづくりと高齢者地域就労」オンライン参加風景企業雑談交流活動 8月
心のフレイル予防 武蔵野大訪問

2024年度	全体ミーティング	アカデミー	サロン
9月	2 DAY Workshop 「テーマ：産官学で考えるウェルビーイングを実現する社会」 【Day 1】 ■開催にあたり 飯島 勝矢（東京大学） ■セッション1 あなたにとってウェルビーイングとは（自分事） ウェルビーイングの概念を学ぶ（※ウェルビーイングカードを活用） 1-1：ウェルビーイングカードの紹介 自身や周囲の人々のウェルビーイングに意識を向け、対話をうながすツールとして開発 https://socialwellbeing.ilab.ntt.co.jp/tool_measure_wellbeingcard.html 1-2：ワークショップ 自分のウェルビーイングカードをもとに交流（意見交換）をしてみよう（Well-being 研究プロジェクト）：深山 篤、橋本 遼（NTT 社会情報研究所） 1-3：講演：わたしたちのウェルビーイングに関する実践と探求 ウェルビーイング・コンピテンシーについて 渡邊 淳司（NTT コミュニケーション科学基礎研究所） ■セッション2 あなたの企業活動をウェルビーイングの視点で考える（企業目線） 2-1：企業発表 自社でのウェルビーイングの取り組み 対従業員、対ユーザー（顧客、会員、取引企業など） 2-2：意見交換 【Day 2】 ■セッション3 有識者からウェルビーイングを学ぶ 3-1：IOG が目指すウェルビーイングの取組 田中 友規（東京大学） 3-2：いま何故ウェルビーイングなのか 菅原 育子（武蔵野大学） ■セッション4 総合討論（その1） 国民すべてがウェルビーイングを感じることが出来る社会とはどんな社会なのか ■セッション5 総合討論（その2） それの社会を実現するために産業界、学術界（東大）の役割とは	上期総括会 ◇サロン・アカデミー等の活動報告 ◇各共同研究からの報告 その1 ・フレイル予防のポピュレーションアプローチの普及に向けて フレイル予防推進会議の活動 食の在り方研究会の活動 参加企業を中心とした産業界の動き（現在、今後） オーラルフレイルの新たな定義の普及に向けて ・高齢者地域就労生涯現役研究会勉強会 ・金融関連及び法研究準備会 2024年度調査事業並びに2025年度に向けての活動について ・まちづくり標準化研究会 「郊外住宅団地再生検討委員会」の活動の紹介と今後の活動について ◇その他の研究会等の活動について その2 ・地域包括ケアシステムの構築 辻哲夫（東京大学） 「在宅医療」（中央法規出版）の発行に向けて ・東大 IOG ウェルビーイングの研究について 田中 友規（東京大学） ◇総合討論	ライフデザインサロン ◇対話テーマ：「気になる世の中の出来事・変化から未来を考えてみる」 企業雑談交流活動 ◇しあわせと心のフレイル予防について
10月	栄養とからだの健康増進調査柏スタディ 2024		ライフデザインサロン ◇対話テーマ：「長寿社会の人生を豊かにする AI 活用」について 豊かな健康を個と地域のウェルビーイングから考えるサロン ◇対話テーマ：地域性を生かして自由な時間と空間を大切にげんきに生きる力を育む大切さとは「自立支援と幅広いサポートから多様なコミュニティと豊かな予防を考えてみる！」
11月			移動分科会サロン ◇活動テーマ：宇都宮 LRT 試乗と地域交通・結接点の重要性とまちづくり
12月		アカデミー 第7回「まちづくり」と「金融関連及び法」 ◇問題提起 ・持続可能な住宅団地のために 住民主体のまちづくり、シニアの住宅資産循環対策 ・シニア層の Well-Being 実現のために 本人、家族によるALPの作成と活用 ◇パネルディスカッション テーマ『多世代循環：果たして理想の多世代循環とは何か』 ファシリテーター 田中 康夫（東京大学） パネラー ＊次世代メンバー2名 神保 哲太（こま武蔵台住民） 加藤 達也（オースタシニア DX） ＊シニア世代2名 藤村 孝一（ディレクトフォース） 東海林 節男（うえるねす） ＊地域活性化活動 松尾 まよか（日高市元市議会） ＊地方自治体 吉村 佑生（東京大学 IOG/ 呉市からの出向） ◇総合討論 テーマ『わかつちやいれど、進まない、「高齢社会対策」どうする?』 アカデミー 第8回「高齢者地域就労」と「金融関連及び法」 ◇レクチャー・話題提供 ・「臨床心理学の観点から見た「高齢者のウェルビーイング」について」 樋山 雅美（京都府立医科大学） ・「歳を重ねて、楽しみがある人生に。」 加藤 達也（オースタンス） ・「シニアの経済環境の実態把握」 前田 展弘（東京大学 IOG） ◇ 総合討論 テーマ『シニア世代に楽しくお金を使ってもらいましょう』～ 自分のウェルビーイング向上のため、いかに楽しく、気持ちよくお金を使っていたら皆さんと一緒に考えていきたいと思います。	豊かな健康を個と地域のウェルビーイングから考えるサロン ◇対話テーマ：健康長寿を、よりよく生きるしあわせについて考えてみませんか？～ Well-being の視点から健康な活動や社会での活躍。そして、豊かさでフレイル予防について考え語りあいましょう～ ライフデザインサロン ◇対話テーマ：「人生の谷にわたったとき、どのように復活しているのか」について 企業雑談交流活動 ◇しあわせと心のフレイル予防について

※個別研究会は各々開催

豊かな健康を個と地域のウェルビーイングから考える
サロン 8月 オンライン参加者との対話風景移動分科会 11月
宇都宮 LRT 現地視察調査風景ライフデザインサロン 12月
グループワーク風景

2024年度	全体ミーティング	アカデミー	サロン
1月		アカデミー 第9回「金融関連及び法」と「生活支援」 ◇レクチャー、話題提供 ・問題提起 田中康夫（東京大学） ・「ALP 構想に寄せる想い」～相談援助の現場から～山崎 宏（想い人） https://www.omohibito.com/team ・「郵便局の終活日和（終活紹介サービス）の取り組み」 https://www.post.japanpost.jp/life/inheriting/pdf/pamphlet.pdf ・「仁淀川町の取組紹介」～ ころづもりノートの活用でシニアの Well-Being を実現する ～ 小松 仁視（フレイルサポート仁淀川） ◇パネルディスカッション、総合討論 テーマ『実効性の高い ALP の組立』～シニアのための ALP の仕組みとそれを如何に実践していただくには～ アカデミー 第10回「まちづくり」と「在宅医療・介護」 ◇レクチャー・話題提供 ・「在宅医療サービスの現状と課題」森川 悦明（folkモア） ・「在宅介護サービスと施設介護サービス」吉田 肇（高齢者住宅協会） ・「利用者視点からの地域包括ケアシステムの課題と備えの仕掛け」金子 萌（想い人） ・「制度と個人をつなぐ 地域福祉コーディネーターの役割」浦田 愛（文京区） ◇パネルディスカッション テーマ『それぞれの関係者から見る地域包括ケアシステムのありべき姿について』	企業雑談交流活動 ◇混合介護 保険外サービス懇話会
2月	全体ミーティング ◇目的：大きな二つの政策に関して学び、自らが自事（自仕事）として具体的にどう行動すれば良いのかについて考える ◇第1部 それぞれの政策を知る 高齢社会対策大綱の意図 飯島 勝矢（東京大学） 住生活基本計画見直しの論点（動画）大月 敏雄（東京大学） ◇総合討論その1 それぞれの政策から見た高齢社会の重要な課題～私はこう読み解く、ここが重点だと思う～ ◇総合討論その2 実際に政策を具体的に実現するのは、自治体であり企業である ～ 私だったらこの課題にこう取組む～	アカデミー 第11回「ジェロントテクノロジー」 ◇問題提起 事務局 事前課題（アンケート）結果のご紹介を含めて ◇話題提供と課題解決の視点 技術分野からの視点 内藤 昌宏（京セラ） 介護事業者からの視点 福元 均（ALP ジャパン） 森川 悦明（元高齢者住宅経営者連絡協議会） ◇総合討論 テーマ『なぜ進まぬ DX 化』～ DX 化によって見える社会は～	豊かな健康を個と地域のウェルビーイングから考えるサロン ◇対話テーマ：「子供からシニアまで誰もが心地よく過ごせる”居場所”について」～ Well-being の視点から”まち”と”ひと”のつながりを軸に考えてみる!～ ライフデザインサロン ◇対話テーマ：「人生が豊かになる個人的人脈の創り方、つきあい方」について 移動分科会サロン ◇対話テーマ：ユーザーオリエンティドな未来の地域交通とまちづくり
3月		2024 年度総括会 ◇サロン、アカデミー等開催状況報告 事務局 ・サロンの活動報告 ・アカデミーの活動報告 ※それぞれ活動実績については資料を作成し事前配布 ・2025 年度サロン、アカデミーの活動方針（案） ◇共同研究会活動の進展 辻哲夫（東京大学） 神谷 哲朗（東京大学） ・食の在り方研究会（オーラルフレイル予防研究会含む）⇒フレイル予防推進会議と新たな企業との連携の動きについて ・その他の研究会の活動報告（2024年度の活動と次年度に向けて） ・高齢者地域就労研究準備会 ・金融関連及び法勉強会 ・その他の研究会等の活動 ◇質疑・総合討論 テーマ 東大 IOG 産学連携プロジェクトの在り方について 主な論点・2025年に何をを目指すか。 ・フェイズ2を終えるにあたり我々は何を社会に残すのか？ 東大 IOG 発…（学び、社会実装、ニュービジネス、政策提言、社会貢献、等）	ライフデザインサロン ◇対話テーマ：「＜貢献＞のイメージは？」について 企業雑談交流活動 ◇しあわせと心のフレイル予防について ◇混合介護 保険外サービス懇話会

※個別研究会は各々開催

企業雑談交流活動 1 月
混合介護 保険外サービス懇話会移動分科会 2 月
議論風景全体会 2 月
ディスカッション風

産学連携プロジェクト

個別共同研究

フレイル予防を基軸に、 地域のお客さまのヘルス&ウェルネスに貢献 イオン株式会社 …………… 78
「サラダとタマゴ」による食と健康への貢献と、 産学官民総合知でのフレイル予防産業創生に向けた取り組み キューピー株式会社 …………… 79
オーラルフレイル予防により、 食やコミュニケーションを支え、生きる力を守りたい サンスター株式会社 …………… 80
「噛むこと」研究やお菓子を通じた高齢者の オーラルフレイル予防・フレイル予防の仕組みづくり 株式会社ロッテ …………… 81
“履くフレイル予防”の社会実装に向けた取り組み ～無意識で健康でいられる世界を目指して～ 日本電気株式会社…………… 82

Individual research project
Comments from employees seconded to local governments

フレイル予防を基軸に、 地域のお客さまのヘルス&ウェルネスに貢献

イオン株式会社 共同研究

担当：堀江 直裕

心身ともに健康的なライフスタイルを創造し続ける

イオンは創業以来、「お客さま第一」を実践し、お客さまや地域社会への限りない貢献こそが小売業の使命であるとの信念を貫いてきました。このような価値観のもと、地域になくてはならない存在であり続けるために、必要なサービスや社会資本を充実させて、あらゆる生活シーンで便利さや豊かさを提供していきます。超高齢化の進展やコロナによる健康意識の高まりなど、従来の治療ニーズだけでなく心身ともに健康で自立した生活（ヘルス & ウェルネス）が、豊かなライフスタイルを送るために欠かせない要素となっています。この課題の解決に向け、中期経営計画の柱の一つである「ヘルス & ウェルネスの進化」を掲げ、大学や行政等の地域のパートナーと連携して、これらの早期実現を目指しています。

イオンが有する2万拠点をタッチポイントとして活用

イオンは、フレイル予防の3つの柱（栄養（食・口腔）、身体活動、社会参加）の考え方をヘルス & ウェルネスの活動方針に取り入れるため、2018年度から東大 IOG と共同研究を行っています。

フレイル予防への行動変容を引き起こすための重要なポイントは、対策を行えば健康な状態に戻る可能性がある早期の段階の人に、日常生活の動線上で気づきの機会を提供することです。

地域で催される介護予防の教室や運動教室は、そもそも健康志向の高い住民が集まる傾向がありますが、イオンが有する店舗内のイベントスペースや売場などの生活者との多くのタッチポイントを活用すれば、無関心層も含めたより広い層へのアプローチが可能となります。2020年、東大 IOG の開発したフレイルチェックについて官民協働実施のガイドラインを整備し、イオンの店舗においても行政と同等の品質を担保してフレイルチェックを実施できるようにしました。

2021年には神奈川県内のイオンの店舗従業員へ教育を行い、フレイル予防普及啓発活動と商品・サービス提供を継続展開できる体制を構築し、同年10月、イオン秦野店、秦野市、フレイルサポーターによる簡易フレイルチェック体験会やオーラルフレイルの啓発、食の在り方研究会参画企業によるフレイル予防に資する食生活提案を開始しました。この従業員教育と食生活提案は、2022年度に神奈川県内のイオン、イオンスタイル全店へ拡大しました。

2023年度のイオン秦野店でのフレイル予防普及啓発イベントでは、東京大学未来ビジョン研究センターと公益財団法人イオン環境財団による「イオン東大里山ラボ」の取組みに協力している NPO 法人にも協力をいただき、「結果としてフレイル予防になる活動」の重要性を一緒に発信しました。今後もこのような地域の団体との関係強化をすすめてまいります。

2024年度は、これらの取組みを神奈川県から千葉県、東京都、神奈川県、山梨県のイオン、イオンスタイルへ拡大しました。その一環として、自治体や地域の団体、東大 IOG とともに5店舗でイベントを開催し、来店されたお客さまに気づきの機会を提供しました。

今後も店舗でのフレイル予防を通じて、お客さまのヘルス & ウェルネスに貢献してまいります。



イオン秦野店フレイル予防普及啓発イベント会場の様子

「サラダとタマゴ」による食と健康への貢献と、 産学官民総合知でのフレイル予防産業創生に向けた取り組み

キューピー株式会社 共同研究

担当：倉田 幸治

キューピーの食と健康への貢献と3つの柱「栄養・運動・社会参加」

キューピーは、2019年に創業100年を迎えた食品メーカーです。創業当時の日本人は、現在と比べると栄養状態も悪く、体も小さかったため「おいしく、栄養のあるマヨネーズを、生活必需品となるまで広く普及させて、日本人の体格と健康の向上に貢献したい」という想いで、1925年「キューピー マヨネーズ」を発売するに至りました。

そして、ライフスタイルや食に対する課題が多様化するこれからの時代、国民一人ひとりのくらしに寄り添い、新しい食習慣の形成をめざすには、高い視座が必要になると考えました。そこで、できるだけ早期にフレイル予防の3つの柱「栄養・運動・社会参加」に取り組むことが重要である、という考え方に共感し、サステナビリティ目標の「食と健康への貢献」で健康寿命延伸への取り組みとして掲げています。キューピーは食品メーカーであるため、特に「栄養」での貢献が軸になりますが、生涯健康であるためには栄養だけでなく、口腔機能、運動、社会参加も重要となるメッセージも発信しております。3つの柱の考え方は、企業の枠を超えて様々な地域資源をつなぐ、大きな志と成り得ると考えております。

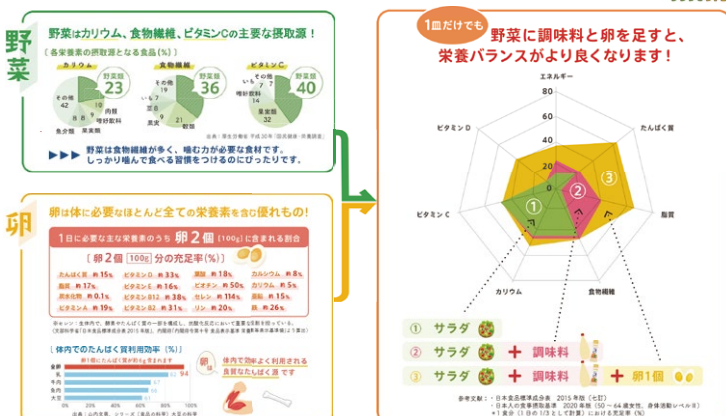
キューピーの強み「サラダとタマゴ」と食産業界コンソーシアム「食の在り方研究会」

具体的には、キューピーが得意とするサラダとタマゴの提案は、日常の食生活の中で自然と摂りやすく、継続しやすい食材・メニューであると考えています。キューピーは長年、野菜を美味しく摂れるサラダメニューを提案してきました。そして卵は、コレステロールの先入観により一時は敬遠されておりましたが、健康な人にとっては、手軽で美味しく、高齢期に特に必要となるたんぱく質を摂取できる優れた食材です。

さらに卵はビタミンCと食物繊維以外の体に必要な栄養素がほとんど含まれており、野菜と一緒に摂取することで、より栄養バランスが良くなるという、この栄養価値の啓発を進めております。

以上はキューピーの発信する内容の一例ですが、フレイル予防においては、民間企業のくらしに溶け込む商品やサービスが果たす役割は大きく、参画している産学連携研究「食の在り方研究会」では、フレイル予防に資する複数の食習慣の提案が、正しい形でフレイル予防の啓発とセットで提供され、日々の暮らしの中で繰り返される産業創生をめざしております。産学官民一体となった総合力・総合知をもって取り組んでまいります。

野菜に卵を加えると栄養バランスがより良くなります！



キューピーグループは サラダとタマゴで 一人ひとりの健康を応援します



小売店舗におけるフレイル予防啓発イベントの様子

オーラルフレイル予防により、 食やコミュニケーションを支え、生きる力を守りたい

サンスター株式会社 共同研究

担当：田子森 順子

高齢社会の課題解決に企業ならではの役割を果たしたい

当社はオーラルケアを核に事業を展開しており、お口の健康が全身の健康につながっている、という考え方のもと、お口から全身、そして生活空間までといった健康的な生活習慣作りに貢献したいと考えて事業に取り組んでいます。東大 IOG と取り組んでいる、オーラルフレイルの予防は、まさに健康寿命を延ばすことを目的としています。2010 年に東京大学が高齢社会の課題解決のための産学連携の取り組みを行っているとお伺いし、年齢を重ねても自分らしく、高齢者も若い世代も生き生きと暮らせる社会の実現のために、学の力、自治体や地域住民の皆さまの力、そして企業だからこそ果たせる役割があるとの思いで参画しています。さらに 2017 年からは、地域住民の皆さまや歯科界への普及啓発に有効なエビデンスを取得し、高齢者のニーズに即したオーラルフレイル予防の提案をめざして、東京大学との共同研究を行っています。

研究成果を社会に還元し、オーラルフレイル予防産業の土台を作る

2020 年には、産官学民の連携を強化する事で、オーラルフレイル予防を社会実装するため、「オーラルフレイル予防推進研究会」を設立し、オーラルフレイルの定義や予防の重要性に関するエビデンス整理を実施し、オーラルフレイル予防産業の土台作りに取り組みました。また、2021 年の柏スタディでは、オーラルフレイルの研究に参画するとともに、サンスターとしても独自のデータ取得を実施し、解析を進めています。オーラルフレイル予防には、重度歯周炎を予防する従来のオーラルケアも重要であることが分かったので、従来のアプローチを重視しつつも、口腔機能を維持するための様々なアプローチを検討していきます。

さらに 2023 年からは、オーラルフレイル予防推進研究会の活動の一環として、地域住民の活力を生かし、産学官民協働でオーラルフレイル予防活動に取り組んでいます。地域ぐるみの多面的なアプローチで取り組むことが、教室参加者だけでなく地域全体のフレイル・オーラルフレイル予防に貢献し、教室に参加していない住民の意識行動にも良い変化が見られることが分かってきました。2024 年にはこのようなアプローチの地域拡大、効果的で持続性のある介入手段の確立を目指し、本取り組みに関する学会報告を7演題、会社からのリリースなど情報発信にも努めました。引き続き、柏スタディ 2023、2024 での取り組み含め、さらなるエビデンスの創出とそれをもとにした健康づくり、地域づくりに取り組んでいきます。

※サンスターサステナビリティクリップ（知ってほしいオーラルフレイル。啓発活動と研究の両面で貢献。）

https://jp.sunstar.com/s-clip/article/2024/08/article_04.html

【これまでの投稿論文】

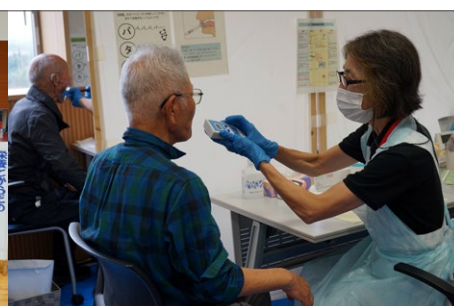
- ・オーラルフレイルは残存歯数減少よりも口腔関連 QOL 低下と強く関連する：地域在住高齢者による横断検討
西本美紗ら．日本未病学会雑誌 2019；25（3）:48-52.
- ・オーラルフレイルと食事の満足感の関連：地域在住高齢者による横断検討（柏スタディ）
西本美紗ら．日老医誌 2020；57：273-281.
- ・地域在住高齢者の重度歯周炎とオーラルフレイル新規発症との関連
Nishimoto M et al. Severe Periodontitis Increases the Risk of Oral Frailty: A Six-Year Follow-Up Study from Kashiwa Cohort Study. Geriatrics (Basel). 2023 Feb 13; 8(1): 25.
- ・地域在住高齢者のオーラルフレイルと軽度認知障害の新規発症との関連
Nagatani M et al. Oral frailty as a risk factor for mild cognitive impairment in community-dwelling older adults: Kashiwa study. Exp Gerontol. 2023 Feb;172:112075.



日本老年歯科医学会



柏スタディ 2024



柏スタディ 2024 口腔ブース

「噛むこと」研究やお菓子を通じた高齢者の オーラルフレイル予防・フレイル予防の仕組みづくり

株式会社ロッテ 共同研究

担当：平岡 康隆

「噛むこと」と高齢者の健康のエビデンス構築を目指して

現在、口腔機能の低下は深刻な問題となっています。特に高齢者においては、加齢に伴う口腔の微細な衰え（オーラルフレイル）が、身体的なフレイル、サルコペニア、要介護状態、さらには死亡リスクの因子であることが明らかになっています。

2024年4月、日本老年医学会、日本老年歯科医学会、日本サルコペニア・フレイル学会の3学会合同で、オーラルフレイルに関するステートメントが発表されました。その中に、歯科医療専門職が不在の場でもオーラルフレイルを評価できる、「Oral Frailty 5-item Checklist (OF-5)」が記載されています。このチェックリストは、「残存歯数の減少」「咀嚼困難感」「嚥下困難感」「口腔乾燥感」「滑舌低下(舌口唇運動機能の低下)」の5項目から成り、2つ以上該当する場合にオーラルフレイルと定義されます。このうちの3つの項目、「咀嚼困難感」「嚥下困難感」「滑舌低下」に関連する、咀嚼力や嚥下力、滑舌などは口腔周囲の筋肉に大きく依存しています。

ガムは、硬さが変わらず、常に咀嚼運動を行うことができる食品です。先行研究では、成人や高齢者がガム咀嚼トレーニングを行うことで、咀嚼力や滑舌の改善が見られた事例が報告されています。

IOGが実施した「栄養とからだの健康増進調査」では、高齢者のガム咀嚼習慣についてヒアリングを行い、口腔機能、身体機能、認知機能との関連性を調査しました。その結果、週に30分以上ガムを咀嚼する習慣のある高齢者は、ガム咀嚼習慣のない高齢者に比べて口腔機能が高く、オーラルフレイルの有症率が低いことが明らかになりました。また、身体機能や認知機能も高いことが示されました。これらの結果は論文としてまとめられ、2024年1月に『Geriatrics & Gerontology International』に掲載されました。さらに、弊社はこの研究成果をPRとして活用し、50社以上の媒体に転載されるなど広く普及しています。特に、自治体と連携して行っている介護予防教室などを通じて、市民への啓発活動を展開しています。

今後も、IOGは産学官連携を通じて、「学」がもたらすエビデンスの創出、「官」が提供する啓発の場、そして「産」が持つ発信力を組み合わせ、お口の健康の重要性を広めていく所存です。これにより、健康寿命の延伸やQOLの向上に貢献できることを目指しています。



栄養とからだの健康増進調査の測定の様子



フレイル予防イベントの様子

“ 履くフレイル予防 ” の社会実装に向けた取り組み ～無意識で健康でいられる世界を目指して～

日本電気株式会社 (NEC) 共同研究

担当：小林 優太

歩くだけで始める健康管理

当社では、「無意識で健康でいられる世界を目指して」というビジョンを掲げ、「NEC 歩行センシングインソール A-RROWG (アローグ)」の開発・事業化に取り組んでいます。A-RROWG は、歩行分析センサを搭載した専用インソールとスマートフォンアプリから構成され、普段履いている靴に専用インソールを装着しスマートフォンアプリと接続して歩くだけで、日常の歩容 (≒歩行の質) データを収集することができます。さらに、より良い歩き方に向けたアドバイスを提供するソリューションです。

東大 IOG と連携した A-RROWG のフレイル予防への活用可能性の探求

A-RROWG では、歩行速度や歩幅や立脚 / 遊脚時間など歩行の質に関する 24 項目を計測することができます (2025 年 3 月時点)。将来的には、A-RROWG を高齢者の方に日常的に利用いただくことで、例えば、日常生活の中でフレイルの度合いを計測して本人でも気付かない運動能力や筋力の衰えの兆しを見つけ、フレイル予防につながる行動を促すといった活用が可能になると考えます。

上記のようなテクノロジーを活用したフレイル予防を社会実装していくためには、科学的エビデンスが欠かせないものと考えます。そこで、2024 年度から東大 IOG と共同研究を開始し、千葉県柏市をフィールドとして、A-RROWG で収集した歩容データと東大 IOG の保有するデータから、フレイルとの関連性についての調査に取り組んでいます。

具体的には、2024 年度は柏市在住の高齢者約 150 名を対象に 1 か月間 A-RROWG を貸与し、日常の歩容データを収集しました。データ収集の過程では、研究参加者の方から「履いて出かけるだけでデータを収集できるのは簡単でいいね。」という声をいただく一方で、「スマートフォンアプリを使うことに抵抗を感じる。」といった声もいただき、A-RROWG のフレイル予防への活用可能性と課題が見えてきました。2025 年度以降は収集したデータの分析によりエビデンスを構築し、高齢社会の課題にテクノロジーで貢献できるよう、社会実装に向けて取り組んでいきます。

NEC 歩行センシングウェルネスソリューション

A-RROWG

歩くだけで始める健康管理



App 良質な歩行を、毎日の習慣に

あなたのスマートフォンに A-RROWG アプリをインストール。あとはセンサ入りインソールを装着した靴で歩くだけで、歩行データの計測が可能です。歩き方の特徴を分析することで、より良い歩行を目指すことができます。

Sensor パワーセーブの省電設計

センサが足の動きを検知すると、歩行とそれ以外の動き (ランニング、着席時の揺れなど) を判別して、歩行時のみデータ計測機能を ON。効率的なデータ収集により、約 1 年間の継続利用が可能です。

IOGの業績

教員・研究員の業績 84

IOG's Results

教員・研究員の業績

2024 年度における IOG メンバーの研究論文や学会発表など、研究活動の業績を紹介します。

飯島 勝矢

● 論文等

【学術雑誌等（紀要・論文集等も含む）に発表した論文】

1. Hamada S, Sasaki Y, Son BK, Tanaka T, Lyu W, Tsuchiya-Ito R, Kitamura S, Dregan A, Hotopf M, Iwagami M, Iijima K. Association of coexistence of frailty and depressive symptoms with mortality in community-dwelling older adults: Kashiwa Cohort Study. Arch Gerontol Geriatr, 2024 Apr;119:105322. DOI: 10.1016/j.archger.2023.105322. 査読有
2. Costantini H, Ono T, Shogaki N, Tanaka T, Lyu W, Son BK, Yoshizawa Y, Iijima K. The Impact of Financial Pressure on the Association between Employment and Depressive Symptoms for Community-Dwelling Older Adults. Journal of Ageing and Longevity, 2024 Apr;4(2):41-50, DOI: 10.3390/jal4020004. 査読有
3. Abe T, Fujiwara Y, Kitamura A, Nofuji Y, Nishita Y, Makizako H, Jeong S, Iwasaki M, Yamada M, Kojima N, Iijima K, Obuchi S, Shinmura K, Otsuka R, Suzuki T. Higher-level competence: results from the ILSA-J on the shape of associations with impaired physical and cognitive functions. Geriatr Gerontol Int, 2024 Apr;24(4):352-358. DOI: 10.1111/ggi.14839. 査読有
4. Iwasaki M, Shirobe M, Motokawa K, Tanaka T, Ikebe K, Ueda T, Minakuchi S, Akishita M, Arai H, Iijima K, Sasai H, Obuchi S, Hirano H. Prevalence of oral frailty and its association with dietary variety, social engagement, and physical frailty: Results from the Oral Frailty 5-item Checklist. Geriatr Gerontol Int, 2024 Apr;24(4):371-377. DOI: 10.1111/ggi.14846. Epub 2024 Feb 23. 査読有
5. Shimizu T, Kodama A, Kume Y, Iwakura M, Iijima K, Ota H. Comparative Analysis of Frailty Risk and Associated Factors: Community-Based vs. Open Recruitment Groups. Int J Environ Res Public Health, 2024 May 10;21(5):611. DOI: 10.3390/ijerph21050611. 査読有
6. Tanaka T, Akishita M, Kojima T, Son BK, Iijima K. Medical care priorities of community-dwelling older adults according to three dimensions of quality of life: quality of daily living, satisfaction and happiness from birth to death, and human vitality. Geriatr Gerontol Int, 2024;24(5):493-498. DOI: 10.1111/ggi.14870. 査読有
7. Tanaka T, Lyu W, Son BK, Yoshizawa Y, Iijima K. Kami-Chigiri” (newspaper tear-off) test: Simple screening method for assessing muscle weakness among community-dwelling older adults. Journal of Frailty Aging, 2024;13(4):586-587. DOI: 10.14283/jfa.2024.62. 査読有
8. Shiratsuchi D, Makizako H, Akaida S, Tateishi M, Hirano H, Iijima K, Yamada M, Kojima N, Obuchi S, Fujiwara Y, Murayama H, Nishita Y, Jeong S, Otsuka R, Abe T, Suzuki T. Associations between information and communication technology use and frailty in community-dwelling old-old adults: Results from the ILSA-J. Eur Geriatr Med, 2024 Jun;15(3):621-627. DOI: 10.1007/s41999-024-00979-y. 査読有
9. Kamei T, Kawada A, Minami K, Takahashi Z, Ishigaki Y, Yamanaka T, Yamamoto N, Yamamoto Y, Suzuki Y, Watanabe T, Iijima K. Academic Group in Japan Home Health Care Alliance. Effectiveness of an interdisciplinary home care approach for older adults with chronic conditions: A systematic review and meta-analysis. Geriatr Gerontol Int, 2024;24(9):827-840. DOI: 10.1111/ggi.14931. Epub 2024 Jul 17. 査読有
10. Sakai K, Hayashi K, Hoshino E, Nakayama E, Iijima K, Tanaka T, Momosaki R, Sakata N. Association of oral hypofunction with aspiration pneumonia, fractures, and mortality in older Japanese adults. Geriatr Gerontol Int, 2024 Oct;24(10):1053-1059. DOI: 10.1111/ggi.14973. 査読有
11. Tanaka T, Hirano H, Ikebe K, Ueda T, Iwasaki M, Minakuchi S, Arai H, Akishita M, Kozaki K, Iijima K. Consensus statement on "Oral frailty" from the Japan Geriatrics Society, the Japanese Society of Gerodontology, and the Japanese Association on Sarcopenia and Frailty. Geriatr Gerontol Int, 2024 Nov;24(11):1111-1119. DOI: 10.1111/ggi.14980. 査読有
12. Iijima K, Akishita M, Endo T, Ichikawa T, Ozaki N, Ogasawara K, Kihara Y, Kuzuya M, Komatsu H, Terasaki H, Doki Y, Noguchi H, Nishi K, Nishimura Y, Haga N, Miyachi M, Yasumura S, Wake J, Arai H. Reconstruction of a resilient and secure community and medical care system in the coronavirus era – English translation of the Japanese opinion released from the Science Council of Japan. Geriatr Gerontol Int, 2025 Feb 19; DOI: 10.1111/ggi.15073. Online ahead of print. 査読有
13. Yang CC, Chen HT, Iijima K, Tanaka T, Dai CY, Yu SJ, Chuang HY. Establishment of Mandarin Chinese Version Oral Frailty Index-8 and Exploration of the Association between Oral Frailty and Sarcopenia. Geriatrics (Basel), 2025 Mar 17;10(2):47. DOI: 10.3390/geriatrics10020047. 査読有

14. 鈴木 隆雄, 鄭 丞媛, 西田 裕紀子, 大塚 礼, 島田 裕之, 牧迫 飛雄馬, 金 憲経, 大淵 修一, 河合 恒, 藤原 佳典, 阿部 巧, 小島 成実, 平野 浩彦, 増井 幸恵, 稲垣 宏樹, 吉田 祐子, 飯島 勝矢, 吉村 典子, 山田 実, 渡辺 修一郎, 近藤 克則, 村木 功, 岩佐 一. 地域在宅高齢者における高次生活機能についてー ILSA-J における JST 版活動能力指標の分析からー. 老年応用学, 2024 8; 18(1): 107-115. 査読有

【学術雑誌等又は商業誌における解説、総説】

1. 飯島勝矢. 人生 100 年時代～健康長寿と幸福長寿の両方の実現のために. AUDIOLOGY JAPAN, 2024; 67: 229-237. 査読無
2. 飯島勝矢. 人生 100 年時代を元気で乗り切るためにー健康長寿 鍵は“フレイル予防”ー. 東京内科医会会誌, 2024; 40(1): 48-60. 査読無
3. 飯島勝矢. 高齢者医療の抱える課題とその対策 4) 地域包括ケア:「地域づくり」の視点からの深化. 日本内科学会雑誌, 2024; 113(9): 1646-1651. 査読無
4. 飯島勝矢. オーラルフレイルと口腔機能障害ー「オーラルフレイルに関する3学会合同ステートメント」を中心に. 月刊「臨床栄養」, 2024 9; 145(3): 299-304. 査読無
5. 飯島勝矢. 総論. 月刊地域医学, 2024; 38(11): 1157(13)-1153(19). 査読無
6. 飯島勝矢. 住民主体のフレイル予防を軸とした健康長寿まちづくり. 公益財団法人東北活性化研究センター機関紙, 2024 7; 56: 10-15. 査読無

【著書、編著】

1. 飯島勝矢. かかりつけ歯科医のための口腔機構低下症入門 第1章3節 健康長寿の鍵は“食力”人生 100 年時代におけるオーラルフレイル予防. 監修:一般社団法人日本老年歯科医学会, 編著:水口俊介, デジタルダイヤモンド社, 2024.7; 1: 14-18. 査読無
2. 飯島勝矢. 十訂 介護支援専門員基本テキスト 第4編第4章第1節 高齢者に多い疾患. 中央法規出版, 2024.6; 1: 82-95. 査読無
3. 飯島勝矢. 泉綾子. 標準理学療法学・作業療法学 専門基礎分野老年学 第6版 第9章高齢者の栄養状態の評価と対策. 編集:大内尉義, 医学書院, 2025.1; 15: 73-80. 査読無
4. 山谷薫, 唐子顕児, 陳昱, 上田英一郎, 井上敦, 大山勝徳, 胡莉珍, 飯島勝矢, 畑武生, 鐘明博. 認知症の予防・診断・介護 DX 第1章第6節 健診データのAI解析による認知症リスクの早期発見と個別的予防法. 監修:江頭 達政, 樋口 拓也, エヌ・ティー・エス, 2024.12.2; 85-103. 査読無

【国際学会・シンポジウムにおける発表】

1. Iijima K. Challenge of “Community Re-design” toward Healthy Longevity and Inclusive Society with Well-being (IKIGAI in Japanese). AFPPD Standing Committee on Active Ageing April 23th, 2024 Parliamentarians’ Meeting on ICPD30 “Leaving No One Behind in an Ageing World” Session 3: Policy Priorities for Ageing Friendly Environments, Tokyo, 2024.4.23. 査読無
2. Iijima K. Challenge of “Community Re-design” toward Healthy Longevity and Inclusive Society. アジア経済発展協会養老産業委員会, Tokyo, 2024.8.29. 査読無
3. Iijima K. What is the update for frailty diagnosis in clinical

practice and community service in Asia?. “Frailty diagnosis and prevention in Japan: Focusing on population approach in the community-setting”. ACFS (Asian conference of frailty and sarcopenia), Bangkok, Thailand, 2024.10.11. 査読無

4. Iijima K. “ORAL FRAILITY” - A new concept from Japan with preventive strategies -. ACFS (Asian conference of frailty and sarcopenia), Bangkok, Thailand, 2024.10.11. 査読無
5. Iijima K. Community re-design for Healthy longevity with Well-being. Stockholm Trio - The University of Tokyo Workshop 2024 -Increasing knowledge for future society-, Tokyo, 2024.10.23. 査読無
6. Iijima K. Challenge of “Community Redesign” Toward Healthy Ageing Society-Insights from Population Approach of Frailty Prevention. APEC Conference on Policies and Technologies to Promote Healthy Aging with Healthy Diet, Taipei, Taiwan, 2025.3.26. 査読無

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 飯島勝矢. シンポジウム フレイル対策へのポピュレーションアプローチ:健康長寿と幸福長寿の両面を目指す. 第66回日本老年医学会学術集会, 名古屋, 2024. 6. 13-15. 査読無
2. 飯島勝矢. シンポジウム パンデミック後を見据えたレジリエントかつ安心感のある地域づくりと医療ケア体制の再構築. 第66回日本老年医学会学術集会, 名古屋, 2024. 6. 14. 査読無
3. 飯島勝矢. シンポジウム 老年医学と老年学(ジェロントロジー)の融合～エイジフリー社会を目指して～. 第66回日本老年医学会学術集会, 名古屋, 2024. 6. 14. 査読無
4. 飯島勝矢. 基調講演 人生 100 年時代 ～健康長寿と幸福長寿の両立を目指すために～. 第61回日本リハビリテーション医学会学術集会, 東京, 2024. 6. 16. 査読無
5. 飯島勝矢. シンポジウム 住民主体および産学民協働で目指すフレイル予防. 第61回日本リハビリテーション医学会学術集会, 東京, 2024. 6. 16. 査読無
6. 飯島勝矢. 教育講演 人生 100 年時代 ～健康長寿と幸福長寿の両立を目指すために～. 第8回日本脳神経外科認知症学会学術総会, 名古屋, 2024. 6. 30. 査読無
7. 飯島勝矢. 市民公開講座 人生 100 年時代 ～健康長寿 鍵は「フレイル予防」～. 第8回日本脳神経外科認知症学会学術総会, 名古屋, 2024. 6. 30. 査読無
8. 飯島勝矢. 教育講演 フレイルを究める. 第10回日本栄養・嚥下理学療学会学術集会, 福岡, 2024. 7. 7. 査読無
9. 飯島勝矢. 市民公開講座 健康長寿と幸福長寿の両立 ～鍵はフレイル予防とオーラルフレイル予防!～. 第10回日本栄養・嚥下理学療学会学術集会, 福岡, 2024. 7. 7. 査読無
10. 飯島勝矢. シンポジウム “オーラフレイルに関する3学会合同ステートメント”～新たなステージへの挑戦. 第11回日本サルコペニア・フレイル学会大会, 東京, 2024. 11. 2. 査読無
11. 飯島勝矢. 公開シンポジウム 高齢者の健康と生活に与える環境の影響:学際領域の研究成果を融合. 日本学術会議, オンライン, 2025. 3. 1. 査読無
12. 飯島勝矢. 公開シンポジウム 「難聴」からフレイルや認知症への負の連鎖を断ち切ろう! . 高齢者の健康と生活に与える環境の影響:学際領域の研究成果を融合. 日本医学会連合 TEAM 事業 聴こえと認知症ー健康長寿にー, 2025.3.2. 査読無

● 受賞歴

1. 2025 年 2 月 21 日令和 6 年度東京都医師会功労賞 飯島勝矢

大月 敏雄

● 論文等

【学術雑誌等（紀要・論文集等も含む）に発表した論文】

1. 王 瑛玉, 大月 敏雄. ドイツ・アルテナ町における難民との分散型宿泊施設に関する研究. 日本建築学会技術報告集 30 (75), 856-861, 2024-06-20 査読有
2. 筒井 健介, 高橋 史織, 李 鎔根, 大月 敏雄. 高齢在宅療養者の住環境における医師の観察観点について 豊田地域を対象とした経過報告. 日本建築学会学術講演梗概集 建築計画 .837-838.2024-07 査読無
3. 石原 実季, 大月 敏雄. サブリース型支援付住宅における支援プロセスの類型化. 日本建築学会学術講演梗概集 建築計画 .857-858 : 2024-07 査読無

【学術雑誌等又は商業誌における解説、総説】

1. 大月 敏雄 .UR 都市機構 20 年・同潤会 100 年・日本団地論 . 住宅 73 (11), 10-18, 2024-11
2. 大月 敏雄 .住宅セーフティネット法改正：住宅政策から居住政策へ. ガバナンス / ぎょうせい 編 (279) 14-16, 2024-07
3. 大月 敏雄 . 地域ぐるみで空き家への移住にいざなう仕組み：西郷工芸の郷あまんじゃく及び NPO たけのかぞくの取り組みについて . 住宅 73 (7), 25-29, 2024-07
4. 王 瑛玉, 大月 敏雄. ドイツにおける難民等の受け入れ政策 . 住宅 73 (5), 53-60, 2024-05

祐成 保志

●論文等

【学術雑誌等（紀要・論文集等も含む）に発表した論文】

1. 赤川学, 山浦晴男, 祐成保志, 井口高志, 税所真也. 猫を看取る経験の構造的把握 . ヒトと動物の関係学会誌, 2024; 68: 51-59. 査読有
2. 祐成保志 . 社会調査のなかの住まい . 現代風俗学研究, 2024; 24: 13-22. 査読無

【学術雑誌等又は商業誌における解説、総説】

1. 祐成保志 . 書評 西川純司著『窓の環境史：近代日本の公衆衛生からみる住まいと自然のポリティクス』; ソシオロジ, 2024; 69(2): 109-112. 査読無
2. 祐成保志, 税所真也 . 協同組合による居住支援・生活支援の可能性 ; 社会運動, 2025; 457: 109-123. 査読無

【著書、編著】

1. 祐成保志 . 住まい：自助の錯覚を超えて . 石井まこと・所道彦・垣田裕介（編）. 社会政策入門 . 法律文化社, 2024 年 : pp157-174.

【国際学会・シンポジウムにおける発表】

1. Sukenari, Y. Reorganisation of housing policy in a super-aged society. 2024 EASP/FISS Joint Conference, Kyoto, Japan, 2024.6.13. 査読無（招待講演）

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 祐成保志 . ポスト持ち家社会に向けた居住政策の再編成 . 第 97 回日本社会学会, 京都, 2024.11.10. 査読無

二瓶 美里

● 論文等

【学術雑誌等（紀要・論文集等も含む）に発表した論文】

1. Costantini H, Nihei M, Ono T, Caring without Tolerance: Care Literacy as an Enabler of an Inclusive Society, Social Sciences, 2024, 13(7): 369. 査読有
2. Costantini H, Abdul Aziz Al Mujahid M, Hosaka K, Ono T, Nihei M, Instruments to Assess People's Attitude and Behaviours towards Tolerance: A Systematic Review of Literature, Societies, 2024, 14(7): 121. 査読有
3. Costantini H, Nihei M, Sugiyama M, Yagi N, Costantini J, Care Literacy for Culture, Nature, and Future, Open Research Europe, 2024, 4: 115. 査読有
4. Nihei M, Nohara T, Sugawara I, Ono T, Chatbots as Tools in Parent-Child Relationships, Human Aspects of IT for the Aged Population. HCII 2024. Lecture Notes in Computer Science, 2024, vol 14725: 147-155. 査読有
5. Costantini H, Nihei M, Ono T, Tanabe K, Motomura Y, Developing Inclusive Community Platforms: A Catalyst for DEI Community, Open Research Europe, 2024, 4: 111. 査読有
6. Kubota T, Iwamoto N, Taniguchi K, Ono T, Nihei M, Iwai K, Oh S, Health Literacy of Japanese Elderly who Participated in A Long-term Care Prevention Exercise Program by Household Composition, Exercise Medicine, 2024, 8: 1. 査読有

【学術雑誌等又は商業誌における解説、総説】

1. 二瓶美里, 第 11 章 健康長寿を支えるテクノロジー, 「高齢者および高齢社会に関する検討ワーキンググループ」報告書, 日本老年学会, 2024.

【国内学会・シンポジウム等における発表】

（招待講演）

1. 二瓶美里, 高齢者社会を支えるテクノロジー, 人口減少社会, 京都大学エグゼクティブ・リーダーシップ・プログラム, 2025.2.14.（京都大学）
2. 二瓶美里, 高齢者の移動支援, UniCoプロジェクト第5回勉強会, 2025.1.30.（オンライン）
3. 二瓶美里, 認知症の人の生活を豊かにする支援機器（教育講演 01）, 第 25 回日本認知症ケア学会大会, 2024.6.15.（東京国際フォーラム）
4. 二瓶美里, 高齢者の自立・自律支援におけるテクノロジーと AI 活用（シンポジウム 8: 高齢者の健康増進へ向けた AI の活用）, 第 66 回日本老年医学会学術集会, 2024.6.13.

(国内学会)

1. Chitao C, Sugahara Y, Nihei M. Evaluation of the Human-Machine Interactive Learning Operation System and the Seating System of the Hands-free Mobility. 第 24 回計測自動制御学会システムインテグレーション部門講演会 (SI2024).

2. 岩松広大, 二瓶美里. 視線と思考過程による熟練電動車椅子ユーザの情報収集行動の統合的分析. 1P2-F09, Proceedings of the 2024 JSME Conference on Robotics and Mechatronics (ROBOMECH 2024).

3. 矢口 喜一, 莫 欣熠, 小野 敬済, 二瓶 美里 .CNN による CIR 推定モデルおよび LLM を用いた居宅片付け支援手法の提案. フロントニア講演会, 2024.

4. 本村陽一, 櫻井瑛一, 山下和也, 井上恵, 神田昌幸, 脇濱直樹, 中野伊吹, 田邊解, 塚尾晶子, 宮田真一, 千々木祥子, 二瓶美里, 小野敬済, コスタンティーニ H. コミュニティ再生のための包摂的アプローチと支援システムの開発 (コミュニティデジタルツインを活用したリフレクションとリフレーム支援). 第 38 回人工知能学会全国大会, 2Q6-GS-11-03, 2024.

5. 神田陸人, 小野敬済, 高柳摩季, 中川聡, 二瓶美里. 要支援・要介護高齢者の心理的・社会的 well-being の向上を目的とした没入型 Head Mounted Display による Virtual Reality 介入. GS-5-3, 4 pages, 2024.

6. 小野敬済, 丸岡俊介, 山口祐弥, 小川順也, 二瓶美里. 慣性センサを用いたパーキンソン病者の自宅内日常生活動作の定量化. OS-6-1, 4 pages, 2024.

7. 小野敬済, 高柳摩季, コスタンティーニ H, 熊谷晋一郎, 菅原育子, 飯島勝矢, 二瓶美里. 包摂的な社会に向けた寛容性と自律性の評価尺度:要支援・要介護者における妥当性と信頼性の検証. O7-1, p89, 2024.

8. 高柳摩季, 清水雄一郎, 二瓶美里. 運転能力評価システムを用いた加齢に伴う認知機能低下と認知症による機能低下の操作特性の比較. 第 24 回計測自動制御学会システムインテグレーション部門講演会 (SI2024).

9. 眞野明日香, 川崎めぐみ, 小野敬済, 堅田理紗子, 二瓶美里, 井上剛伸. 生活期の身体機能に焦点を当てた支援ニーズおよび支援機器に関するスコーピングレビュー: プロトコルの構築. OS-6-3, 2024.

10. 莫 欣熠, 矢口 喜一, 小野 敬済, 二瓶美里. Lidar センサを用いた散らかり度合いを定量化する住環境評価手法の開発: 生活活動を阻害するモノの体積測定. 第 24 回計測自動制御学会システムインテグレーション部門講演会 (SI2024).

●受賞歴

1. 2024「ライフサポート学会奨励賞」(矢口 喜一, 莫 欣熠, 小野敬済, 二瓶 美里 .CNN による CIR 推定モデルおよび LLM を用いた居宅片付け支援手法の提案. フロントニア講演会, 2024.) ,

2. 2024 年度バリアフリーシステム開発財団奨励賞ファイナリスト (小野敬済, 丸岡俊介, 山口祐弥, 小川順也, 二瓶美里, 慣性センサを用いたパーキンソン病者の自宅内日常生活動作の定量化, OS-6-1, 4 pages, 2024.)

松田 雄二

●論文等

【学術雑誌等(紀要・論文集等も含む)に発表した論文】

1. 神門 侑子, 松田 雄二, 西村 顕, 亀屋 恵三子, 藤井 里咲, 熊谷 晋一郎. 障害者グループホームの入居者特性に対応した分類と建築的配慮. 日本建築学会計画系論文集, 2024; 第 89 巻, 第 818 号: 616-625. DOI <https://doi.org/10.3130/aija.89.616> 査読有

【学術雑誌等又は商業誌における解説、総説】

1. 石井 敏, 三浦 研, 松田 雄二, 八木 稔文, 山脇 博紀, 石橋 達勇. 福祉施設のこれまでとこれから. 医療福祉建築. 日本医療福祉建築協会. 2024; 8-13. 査読無

2. 松田 雄二. 建築・建物管理の視点から見る整備・再生産のポイント. 月刊福祉. 全国社会福祉協議会. 2024; 107(8): 18-22. 査読無

3. 松田 雄二. 福祉施設の「一生」をマネジメントする. 病院設備. 日本医療福祉設備協会. 2024; Vol. 66, No. 3, 371 号: 12-15. 査読無

【著書、編著】

1. 西野 亜希子, 岡部 真智子, 阪東 美智子, 石井 敏, 稲垣 具志, 李 潤貞, 植田 瑞昌, 笈田 幹弘, 大島 千帆, 大橋 寿美子, 糟谷 佐紀, 神吉 優美, 金 炅敏, 児玉 善郎, 雑賀 香, 佐藤 由美, 鈴木 晃, 鈴木 健太郎, 曾根 里子, 田中 紀之, 富安 亮輔, 西村 顕, 橋本 美芽, 原 和男, 番場 美恵子, 松田 雄二, 三浦 貴大, 南 一誠, 袁輪 裕子, 室崎 千重, 吉田 紗栄子. 地域とつながる高齢者・障がい者の住まい: 計画と設計 35 の事例. 学芸出版社, 2024: pp. 85-88, 101-104.

【国際学会・シンポジウムにおける発表】

1. KANDO Y, MATSUDA Y, Göran L. Morgan A. Classification and Case Studies of Group Homes for People with Disabilities in Japan, ARCH24 The 6th International Conference on Architecture, Research, Health, and Care. Espoo, Finland, 2024. 6. 17-19. 査読有

2. MATSUDA Y, YOKOYAMA Y, SATO K. Attachment to Places for Resting Outside?: Needs for the mobility of visually impaired people in urban environment, 28th International Conference Association People-Environment Studies, Barcelona, Spain, 2024. 7. 2-5. 査読有

3. YOKOYAMA Y, MATSUDA Yuji. Place Attachment of Visually Impaired People Compared with That of Sighted People: Where how and why it differs?, 28th International Conference Association People-Environment Studies, Barcelona, Spain, 2024. 7. 2-5. 査読有

4. KANDO Y, MATSUDA Y, Göran L, Morgan A. Safe and Supportive Home Design for People Displaying Challenging Behaviours, 28th International Conference Association People-Environment Studies, Barcelona, Spain, 2024. 7. 2-5. 査読有

5. MATSUDA Y, GO E. The Effectiveness of ICT Devices in Night Shift Operations at Residential Facilities for

People with Disabilities, 14th International Symposium on Architectural Interchanges in Asia, Kyoto, Japan, 2024. 9. 10-13. 査読有

6. KANDO Y, MATSUDA Y. Designing Housing to Support People with Disabilities: A Focus on Severity and Aging, 14th International Symposium on Architectural Interchanges in Asia, Kyoto, Japan, 2024. 9. 10-13. 査読有

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 神門 侑子, 松田 雄二. スウェーデン・ヨーテボリ市における強度行動障害に対応したグループホームの実態. 日本建築学会大会学術講演梗概集, 東京都, 2024.7: 45-46. 査読無

2. 高津 貴祥, 亀屋 恵三子, 松田 雄二. 3 施設の救護施設における利用者の行動特性に関する研究. 日本建築学会大会学術講演梗概集, 東京都, 2024.7: 47-48. 査読無

3. 石橋 達勇, 竹宮 健司, 小菅 瑠香, 河合 慎介, 江 文菁, 小林 健一, 松田 雄二, 渡辺 玲奈. 急性期病院における自律搬送ロボットの導入・運用の実態と建築・設備の整備要件. 日本建築学会大会学術講演梗概集, 東京都, 2024.7: 113-114. 査読無

4. 鍵 慶和, 松田 雄二, 小野 太樹. 全国自治体における避難行動要支援者の避難環境に関する研究 その1 全国自治体を対象としたアンケート調査. 日本建築学会大会学術講演梗概集, 東京都, 2024.7: 489-490. 査読無

5. 小野 太樹, 松田 雄二, 鍵 慶和. 全国自治体における避難行動要支援者の避難環境に関する研究 その2 河川地域を有する5自治体を対象とした事例調査. 日本建築学会大会学術講演梗概集, 東京都, 2024.7: 491-492. 査読無

6. 山田 海音, 西村 顕, 松田 雄二, 神門 侑子, 西村 亮平. 医療的ケア児とその家族の住生活上のストレスについて その1 住生活上のストレスの実態と転居や改修が及ぼす影響. 日本建築学会大会学術講演梗概集, 東京都, 2024.7: 833-834. 査読無

7. 西村 亮平, 西村 顕, 松田 雄二, 神門 侑子, 山田 海音. 医療的ケア児とその家族の住生活上のストレスについて その2: 医療的ケアに関係する物品量の実態調査. 日本建築学会大会学術講演梗概集, 東京都, 2024.7: 835-836. 査読無

8. 渡辺 智之, 松田 雄二. Covid-19 感染症対策が住生活に与えた影響. 日本建築学会大会学術講演梗概集, 東京都, 2024.7: 979-980. 査読無

檜山 敦

● 論文等

【学術雑誌等（紀要・論文集等も含む）に発表した論文】

1. Shohei Hasegawa, Kohei Yamaguchi, Ayane Horike, Ryota Kanai, Yoshiko Hara, Tomoya Sasaki, Atsuko Miyazaki, Atsushi Hiyama, Haruka Tohara, A novel virtual reality blowgun game for rehabilitation of older adults: A preliminary case series, Journal of Prosthodontic Research, Article ID JPR_D_24_00160, Advance online publication January 08, 2025, Online ISSN 1883-9207, Print ISSN 1883-1958 査読有

2. Atsuko Miyazaki, Kaori Ueki, Atsushi Hiyama, EFFECTS OF IZUMIOTSU CITY'S COGNITIVE DECLINE PREVENTION

DANCE AS A STRUCTURED ACTIVITY IN ADULT DAY SERVICES, Innovation in Aging, Volume 8, Issue Supplement_1, December 2024, Page 1238 査読有

【国際学会・シンポジウムにおける発表】

1. Christian Eichhorn, Christian Schepers, David A. Plecher, Atsushi Hiyama, Andreas Butz, and Gudrun Klinker. 2024. Tommi - A Web-Based Serious Game for Children Incentivizing a Healthy Lifestyle Combined with Environmental Awareness. In HCI in Games: 6th International Conference, HCI-Games 2024, Held as Part of the 26th HCI International Conference, HCII 2024, Washington, DC, USA, June 29–July 4, 2024, Proceedings, Part II. Springer-Verlag, Berlin, Heidelberg, 34–53. 査読有

2. Atsuko Miyazaki, Tomoya Sasaki, Takatoshi Yoshida, Kaohua Liu, Kong Lingrong, Kashun Rin, Chihiro Shoda, Lei Tingfeng, Eito Murata, Masahiro Ota, Mana Numata, Hayato Mori, Kazuhisa Sato, Yoshiro Inoue, Takayuki Kawashima, Mikei So, Keita Kamiya, Atsushi Hiyama, Rui Nouchi, Masahiko Inami, Community co-creation and living lab initiatives for dementia prevention: A case study from Izumiotsu City, NEURO2024, Fukuoka, 2024.7.24-27.

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 檜山敦、小林悠太、住民参加を促進する情報プラットフォームの地域実装—GBERを通じた社会連携—、日本行政学会総会・研究会、2024.5.18-19、学習院大学 査読有

2. 正田千宙, 宮崎敦子, 佐々木智也, 門内靖明, 稲見昌彦, 檜山敦. エクサゲーム開発に向けた没入型 VR 空間における上肢挙上動作解析 - 若年者・高齢者の比較検証. エンタテインメントコンピューティングシンポジウム 2024 論文集、北海道、2024. 2024. 123-128. 査読有

3. 宮崎敦子, 植木佳緒里, 檜山敦, デイサービスにおけるレクリエーションとしての泉大津市オリジナル認知症予防ダンスの効果, 第13回日本認知症予防学会学術集会, 2024 年 9 月 28 日

4. 宮崎敦子, 奥山卓, 森隼人, 佐藤和久, 檜山敦, 野内類, 認知症高齢者におけるドラム演奏前後の気分変化, 第13回日本認知症予防学会学術集会, 2024 年 9 月 28 日

5. 沼田まな, 宮崎敦子, 清水佑輔, 檜山敦, 認知症患者に対するぬいぐるみ型デバイスを用いた効果的な回想法の実施, 第13回日本認知症予防学会学術集会, 2024 年 9 月 28 日

孫 輔卿

● 論文等

【学術雑誌等（紀要・論文集等も含む）に発表した論文】

1. Son BK, Nanao-Hamai M, Umeda-Kameyama Y, Lyu W, Tanaka T, Yoshizawa Y, Akishita M, Iijima K. Ikigai is associated with lower incidence of frailty during a 5-year follow-up period in older women: the possible role of interleukin-6. Arch Gerontol Geriatr 2025 Apr;131:105776. doi: 10.1016/j.archger.2025.105776. 査読有

2. Son BK, Yang Y, Sugawara I, Matsuda Y, Baba A, Iijima K.

- Sex difference of well-being for longer volunteer activities in community-dwelling older adults. *Geriatr Gerontol Int.* (in press) 査読有
3. Uchiyama E, Wataru Takano W, Nakamura Y, Tanaka T, Iijima K, Venture G, Hernandez V, Kamikokuryo K, Yabu K, Miura T, Nakazawa K, Son BK. Coordinate System Transformation Method for Comparing Different Types of Data in Different Dataset Using Singular Value Decomposition. *IEEE TRANSACTIONS ON COMPUTATIONAL SOCIAL SYSTEMS* (in press) 査読有
 4. Lin Y, Xu J, Hachisuka S, Sasano T, Son BK. Exploring Emotional Changes Before and After Electronic Sports Participation in Older Persons Using Facial Expression Analysis. *MIPRO Conference* (in press) 査読有
 5. Miura T, Yabu K, Uchiyama E, Kamikokuryo K, Hernandez V, Son BK, Iijima K. Estimating Subjective Ikigai of Older Adults Based on the Analysis of Voice Communication in Social Activities: A Case Study of Frailty Check Activity Scenes. *HCI2024 conference*. https://doi.org/10.1007/978-3-031-76818-7_17 査読有
 6. Lyu W, Tanaka T, Son BK, Yoshizawa Y, Iijima K. Comparison of Non-exercise Physical Activity and Exercise Habits for Preventing Frailty Among Community-dwelling Older Adults: A 7-year Follow-up from the Kashiwa Cohort Study. *Arch Gerontol Geriatr.* 2025;131:105769.doi: 10.1016/j.archger.2025.105769. 査読有
 7. Tanaka T, Akishita M, Kojima T, Son BK, Iijima K. Anticholinergic burden using the Japanese risk scale predicts frailty and sarcopenia in community-dwelling older adults. *Geriatr Gerontol Int.* 2025 Mar 6. doi: 10.1111/ggi.70012. 査読有
 8. Tanaka T, Lyu W, Son BK, Yoshizawa Y, Iijima K. Kami-Chigiri" (newspaper tear-off) test: Simple screening method for assessing muscle weakness among community-dwelling older adults. *Journal of Frailty Aging* 2024;13(4):586-587.doi: 10.14283/jfa.2024.62. 査読有
 9. Oura M, Son BK, Song Z, Toyoshima K, Nanao-Hamai M, Ogawa S, Akishita M. Testosterone/androgen receptor antagonizes immobility-induced muscle atrophy through inhibition of myostatin transcription and inflammation in mice. *Sci Rep.* 2025 Mar 27;15(1):10568.doi: 10.1038/s41598-025-95115-6 査読有
 10. Nanao-Hamai M, Son BK, Ogawa S, Akihita M. Astragaloside IV inhibits vascular calcification through estrogen receptor alpha. *Geriatr Gerontol Int.* 2025 Jan;25(1):126-128.doi: 10.1111/ggi.15032. 査読有
 11. Komuro A, Son BK, Nanao-Hamai M, Song Z, Ogawa S, Akishita M. Effects of a high-phosphate diet on vascular calcification and abdominal aortic aneurysm in mice. *Geriatr Gerontol Int.* 2024 Aug 14. doi: 10.1111/ggi.14959. 査読有
 12. Tanaka T, Kojima T, Son BK, Akishita M, Iijima K. Medical care priorities of community-dwelling older adults according to three essential quality of life aspects: biological life, day-to-day life, and life from birth to death. *Geriatr Gerontol Int.* 2024 May;24(5):493-498.doi: 10.1111/ggi.14870. 査読有
 13. Morimoto K, Yamada T, Hirai S, Katayama Y, Fukui S, Sawada R, Tachibana Y, Matsui Y, Nakamura R, Ishida M, Kawachi H, Kunimasa K, Sasaki T, Nishida M, Furuya N, Watanabe S, Shiotsu S, Nishioka N, Horinaka M, Sakai T, Uehara H, Yano S, Son BK, Tokuda S, Takayama K. AXL signal mediates adaptive resistance to KRAS G12C inhibitors in KRAS G12C-mutant tumor cells. *Cancer Lett* 2024;216692. doi: 10.1016/j.canlet.2024.216692. 査読有
 14. Matsuda Y, Baba A, Sugawa I, Son BK, Iijima K. Multifaceted Well-being Experienced by Community Dwelling Older Adults Engaged in Volunteering Activities of Frailty Prevention in Japan. *Geriatr Gerontol Int.* 2024;24 Suppl 1:273-278. 査読有
 15. Son BK, Lyu W, Tanaka T, Yoshizawa Y, Akishita M, Iijima K. Impact of the Anti-inflammatory Diet on Serum High-sensitivity C-Reactive Protein and New-onset Frailty in Community-dwelling Older Adults: A 7-Year Follow-up of the Kashiwa Cohort Study. *Geriatr Gerontol Int.* 2024;24 Suppl 1:189-195. <http://doi.org/10.1111/ggi.14781> 査読有
 16. Costantini H, Ono T, Shogaki N, Tanaka T, Lyu W, Son BK, Yoshizawa Y, Iijima K. The Impact of Financial Pressure on the Association between Employment and Depressive Symptoms for Community-Dwelling Older Adults. *J. Ageing Longev.* 2024, 4, 41–50. <https://doi.org/10.3390/> 査読有
 17. Lyu W, Tanaka T, Son BK, Yoshizawa Y, Akishita M, Iijima K. Integrated effects of nutrition-related, physical, and social factors on frailty among community-dwelling older adults: A 7-year follow-up from the Kashiwa cohort study. *Geriatr Gerontol Int.* 2024;24 Suppl 1:162-169. <https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/37984854/> 査読有
 18. Lyu W, Tanaka T, Son BK, Yoshizawa Y, Akishita M, Iijima K. Validity of a simple self-reported questionnaire "Eleven-Check" for screening of frailty in Japanese community-dwelling older adults: Kashiwa cohort study. *Arch Gerontol Geriatr.* 2024 117:105257. <https://www.sciencedirect.com/science/article/abs/pii/S0167494323003357?via%3Dihub> 査読有
- 【学術雑誌等又は商業誌における解説、総説】**
1. 孫輔卿, 「生きがいを可視化できるのか」特集: 健康寿命と Well-being- 生きがいを伴った幸福長寿 - カレントセラピー Vol.42 No.8 2024
 2. 孫輔卿, 飯島勝矢. フレイル・認知症予防のための食・栄養 日本脳ドック学会報 第 17 号特集: 食・体内細菌叢と脳の健康 2024
 3. 孫輔卿, SNS を活用した包括的なフレイル予防②: オンラインでのフレイルチェック特集: 行動変容による疾病の予防 医学のあゆみ 2024
 4. 孫輔卿, 飯島勝矢 フレイルの予防「介護サービス事業のリスクマネジメント」2024 年 7 月
- 【著書、編著】**
1. 孫輔卿, 飯島勝矢. フレイル予防【高齢保健福祉実務事典】第一法規, 2024

【国際学会・シンポジウムにおける発表】

1. International Conference of Frailty and Sarcopenia Research 2024.3 12-14@France Tourouse
Son BK, Nanao-Hamai M, Umeda-Kameyama Y, Lyu W, Tanaka T, Yoshizawa Y, Akishita M, Iijima K. Ikigai and new-onset frailty among Japanese older adults: 5-year follow-up and the possible role of interleukin-6

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 第18回日本性差医学・医療学会 2025.1. 12-13 熊本
孫輔卿、呂偉達、七尾道子、亀山祐実、田中友規、秋下雅弘、飯島勝矢．高齢女性の生きがい喪失がフレイル新規発症のリスクとなる：5年追跡調査（最優秀演題賞）
2. 第10回日本サルコペニア・フレイル学会 2024. 11.4-5 東京
(1) 宋沢涵、孫輔卿、大浦美弥、七尾道子、豊島弘一、小室 絢、小川 純人、秋下 雅弘．廃用性筋萎縮は血管老化・病態を悪化する：骨格筋由来イリシンの低下による遠隔作用の機序解明
(2) 大浦美弥、孫輔卿、小川純人、秋下雅弘．テストステロン／アンドロゲン受容体による廃用性筋萎縮の改善機序の解明（優秀演題賞候補）
(3) 孫輔卿、呂偉達、七尾道子、亀山祐実、田中友規、秋下雅弘、飯島勝矢．高齢者の生きがいとフレイル新規発症の関連：性ホルモンとの関連
(4) 七尾道子、孫輔卿、宋沢涵、豊島弘一、大浦美弥、小室 絢、小川純人、秋下雅弘．エストロゲン欠乏と補充が血管 - 骨格筋関連に及ぼす影響：マウスモデルを用いた検討
(5) 呂偉達、田中友規、孫輔卿、吉澤裕世、飯島勝矢．地域在住高齢者において、運動習慣および中強度の非運動性活動がフレイル予防に与える効果の検証：柏スタディーの縦断調査（優秀演題賞候補）
3. 第56回日本動脈硬化学会 2024.7.3-4 神戸
(1) 孫輔卿：シンポジウム「老化研究からのエビデンスを動脈硬化診療に活かす」．サルコペニアと動脈硬化の関連機序の解明
(2) 宋沢涵、孫輔卿、大浦美弥、七尾道子、豊島弘一、小室 絢、小川 純人、秋下 雅弘．廃用性筋萎縮は血管老化および病態を増悪する - 筋由来イリシンによる遠隔作用の可能性 -
4. 第35回日本老年歯科医学会 2024.6.28-30 札幌
楠本奈央、永谷美幸、溝口奈菜、田子森順子、池田健太郎、前田真理子、田中友規、孫輔卿、飯島勝矢．Oral frailty Five-item Checklist で評価したオーラルフレイルと抑うつ傾向発症との関連：柏スタディ
5. 第66回日本老年医学会 2024. 6.16-18 名古屋
(1) 孫輔卿、久保梢、磯本勇人、上野雅子、新井麻子、植木絵美、興津由香、本宮祐希、増田桃佳、飯島勝矢．フレイル予防の「免疫力向上の食実践プログラム」の開発と効果検証
—高齢者同士グループワークを通じた食意識・行動変容—
(2) 宋沢涵、孫輔卿、大浦美弥、七尾道子、豊島弘一、小室 絢、小川 純人、秋下 雅弘．廃用性筋萎縮は血管老化・病態を悪化する：骨格筋由来イリシンの低下による遠隔作用の機序解明
(3) 菅谷賢司、北村佳代、片岡巧、阿部貴史、宮島貴代子、恒岡真由美、田中友規、吉澤裕世、呂偉達、孫輔卿、飯島勝矢．フレイル予防活動へのインセンティブポイント制度とフレイル傾向・医療費・介護給付費との関連
(4) 大浦美弥、孫輔卿、小川純人、秋下雅弘．高リン食が筋力

や筋機能の低下をもたらす - in vivo および in vitro を用いた検討

(5) 豊島弘一、孫輔卿、宮脇 正次、宋 沢涵、大浦 美弥、小室 絢、七尾 道子、小川 純人、秋下 雅弘．低タンパクは廃用性筋萎縮を悪化する一動物モデルを用いた検討—

(6) 呂偉達、田中友規、孫輔卿、吉澤裕世、飯島勝矢．地域在住高齢者において、運動習慣および中強度の非運動性活動がフレイル予防に与える効果の検証：柏スタディーの縦断調査

(7) 呂偉達、田中友規、孫輔卿、公益財団法人イオン環境財団、高芝美保、山口奈緒美、片岡務、浜田達蔵、福士謙介、飯島勝矢．里山活動を通じた高齢者の社会的・身体的フレイル予防に向けたチャレンジ：「イオン東大里山ラボ」における産学官民連携

● 受賞歴

1. 2025 年 1 月．第 18 回日本性差医学・医療学会 最優秀演題賞（孫輔卿、呂偉達、七尾道子、亀山祐実、田中友規、秋下雅弘、飯島勝矢．高齢女性の生きがい喪失がフレイル新規発症のリスクとなる：5年追跡調査）

田中 友規

● 論文等

【学術雑誌等（紀要・論文集等も含む）に発表した論文】

1. Tanaka T, Akishita M, Kojima T, Son BK, Iijima K. Anticholinergic burden quantified using the Japanese risk scale as a predictor of frailty and sarcopenia among community-dwelling older adults: A 9-year Kashiwa cohort study. Geriatr Gerontol Int. 2025 Apr;25(4):520-527. doi: 10.1111/ggi.70012.
2. Tanaka T, Hirano H, Ikebe K, Ueda T, Iwasaki M, Minakuchi S, Arai H, Akishita M, Kozaki K, Iijima K. Consensus statement on "Oral frailty" from the Japan Geriatrics Society, the Japanese Society of Gerodontology, and the Japanese Association on Sarcopenia and Frailty. Geriatr Gerontol Int. 2024 Nov;24(11):1111-1119. doi: 10.1111/ggi.14980. 査読有
3. Tanaka T, Lyu W, Yoshizawa Y, Son BK, Iijima K. "Kami-Chigiri" (Newspaper Tear-Off) Test: Simple Screening Method for Assessing Muscle Weakness among Community-Dwelling Older Adults. J Frailty Aging. 2024;13(4):586-587. doi: 10.14283/jfa.2024.62. 査読有
4. Tanaka T, Akishita M, Kojima T, Son BK, Iijima K. Medical care priorities of community-dwelling older adults according to three dimensions of quality of life: Quality of daily living, satisfaction and happiness from birth to death, and human vitality. Geriatr Gerontol Int. 2024. 24(5):493-498. doi: 10.1111/ggi.14870. 査読有
5. Lyu W, Tanaka T, Son BK, Yoshizawa Y, Iijima K. Comparison of non-exercise physical activity and exercise habits for preventing frailty among community-dwelling older adults: A 7-year follow-up from the Kashiwa cohort study. Arch Gerontol Geriatr. 2025;131:105769. doi: 10.1016/

j.archger.2025.105769. 査読有

6. Son BK, Nanao-Hamai M, Umeda-Kameyama Y, Lyu W, Tanaka T, Yoshizawa Y, Akishita M, Iijima K. Ikigai is associated with lower incidence of frailty during a 5-year follow-up in older women: The possible role of interleukin-6. Arch Gerontol Geriatr. 2025 Apr;131:105776. doi: 10.1016/j.archger.2025.105776. 査読有.
7. Iwasaki M, Shirobe M, Motokawa K, Tanaka T, Ikebe K, Ueda T, Minakuchi S, Akishita M, Arai H, Iijima K, Sasai H, Obuchi S, Hirano H. Response to the Letter to the Editor, "Is oral frailty a cause or a consequence?". Geriatr Gerontol Int. 2025;25(4):640-641. doi: 10.1111/ggi.70006. 査読有
8. Yang CC, Chen HT, Iijima K, Tanaka T, Dai CY, Yu SJ, Chuang HY. Establishment of a Mandarin Chinese Version of the Oral Frailty Index-8 and Exploration of the Association Between Oral Frailty and Sarcopenia. Geriatrics (Basel). 2025 Mar 17;10(2):47. doi: 10.3390/geriatrics10020047. 査読有
9. Hamada S, Sasaki Y, Son BK, Tanaka T, Lyu W, Tsuchiya-Ito R, Kitamura S, Dregan A, Hotopf M, Iwagami M, Iijima K. Association of coexistence of frailty and depressive symptoms with mortality in community-dwelling older adults: Kashiwa Cohort Study. Arch Gerontol Geriatr. 2024;119:105322. 査読有
10. Iwasaki M, Shirobe M, Motokawa K, Tanaka T, Ikebe K, Ueda T, Minakuchi S, Akishita M, Arai H, Iijima K, Sasai H, Obuchi S, Hirano H. Prevalence of oral frailty and its association with dietary variety, social engagement, and physical frailty: Results from the Oral Frailty 5-Item Checklist. Geriatr Gerontol Int. 2024;24(4):371-377. DOI: 10.1111/ggi.14846. 査読有
11. Lyu W, Tanaka T, Son BK, Yoshizawa Y, Akishita M, Iijima K. Validity of a simple self-reported questionnaire "Eleven-Check" for screening of frailty in Japanese community-dwelling older adults: Kashiwa cohort study. Arch Gerontol Geriatr. 2024;117:105257. DOI: 10.1016/j.archger.2023.105257. 査読有
12. Umeda-Kameyama Y, Kameyama M, Kojima T, Tanaka T, Iijima K, Ogawa S, Iizuka T, Akishita M. Investigation of a model for evaluating cognitive decline from facial photographs using AI. Geriatr Gerontol Int. 2024;24 Suppl 1:393-394. DOI: 10.1111/ggi.14793. 査読有
13. Kawamura J, Tanaka T, Kanno S, Osawa K, Okabayashi K, Hirano H, Shirobe M, Nagatani M, Son BK, Lyu W, Iijima K. Relationship between a gum-chewing routine and oral, physical, and cognitive functions of community-dwelling older adults: A Kashiwa cohort study. Geriatr Gerontol Int. 2024;24(1):68-74. DOI: 10.1111/ggi.14757. 査読有
14. Sakai K, Hayashi K, Hoshino E, Nakayama E, Iijima K, Tanaka T, Momosaki R, Sakata N. Association of oral hypofunction with aspiration pneumonia, fractures, and mortality in older Japanese adults. Geriatr Gerontol Int. 2024;24(10):1053-1059. doi: 10.1111/ggi.14973. 査読有
15. 神崎恒一, 水口俊介, 荒井秀典, 秋下雅弘, 飯島勝矢, 池邊一典, 岩崎正則, 上田貴之, 田中友規, 平野浩彦. オーラルフレイルに

関する3学会合同ワーキンググループ. 老年歯科医学 38(4) 106-116 2024. 査読有

【学術雑誌等又は商業誌における解説、総説】

1. 上田貴之, 飯島勝矢, 池邊一典, 岩崎正則, 田中友規, 平野浩彦, 水口俊介. オーラルフレイルの新たな概念と評価方法 国民に向けてのさらなる普及・啓発と多職種連携の推進(解説). 日本歯科評論, 2024;(0289-0909)84(6): 77-82. 査読無
2. 佐藤麻美, 澁谷奈菜子, 夢田明子, 貞清香織, 田中友規. 市民主体型フレイルチェックの実践と要支援・要介護新規認定の予測. 臨床栄養, 2024; 144: 610-612. 査読無

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 田中友規. 社会的フレイル対策を軸としたフレイル予防のポピュレーションアプローチ戦略. 第10回日本サルコペニア・フレイル学会大会. 東京, 2024. 11. 2-3. シンポジウム. 査読無
2. 田中友規. オーラルフレイルおよびサルコペニアの嚥下障害に対する包括的評価と支援 オーラルフレイル対策を軸としたフレイル予防のポピュレーションアプローチ戦略. 第66回日本老年医学会学術集会. 名古屋, 2024. 6. 13-15. シンポジウム. 査読無
3. 田中友規, 吉澤裕世, 津下一代, 飯島勝矢. 「後期高齢者の質問票」で評価したフレイル状態と介護認定・医療費・介護費との関連: 複数自治体の医療・介護の一体的データベースによる前向き検討. 第66回日本老年医学会学術集会. 名古屋, 2024. 6. 13-15. 査読無
4. 田中友規, 佐藤麻美, 澁谷奈菜子, 田子森順子, 永谷美幸, 池田健太郎, 前田真理子, 飯島勝矢. 産官学民協働によるフレイル予防の多面的地域介入がオーラルフレイルおよびフレイル重症化に与える影響: 非無作為化地域比較試験. 第11回日本サルコペニア・フレイル学会大会. 東京, 2024. 11.2-3. 査読無
5. 呂偉達, 田中友規, 孫輔卿, 公益財団法人イオン環境財団, 高芝美保, 山口奈緒美, 片桐務, 浜田達蔵, 福士謙介, 飯島勝矢. 里山活動を通じた高齢者の社会的・身体的フレイル予防に向けたチャレンジ: 「イオン東大里山ラボ」における産官学民連携. 第66回日本老年医学会学術集会. 名古屋, 2024. 6. 13-15. 査読無
6. 菅谷賢司, 北村佳代, 阿部貴史, 宮島貴代子, 恒岡真由美, 田中友規, 吉澤裕世, 呂偉達, 孫輔卿, 飯島勝矢. フレイル予防活動へのインセンティブポイント制度とフレイル傾向・医療費・介護給付費との関連. 第66回日本老年医学会学術集会. 名古屋, 2024. 6. 13-15. 査読無
7. 佐藤麻美, 澁谷奈菜子, 田中友規, 田子森順子, 夢田明子, 貞清香織, 田中陽子, 永谷美幸, 前田真理子, 飯島勝矢. オーラルフレイル予防啓発の多面的地域介入がオーラルフレイル認知度や意識・行動変容に与える影響. 第66回日本老年医学会学術集会. 名古屋, 2024. 6. 13-15. 査読無
8. 呂偉達, 田中友規, 孫輔卿, 吉澤裕世, 飯島勝矢. 地域在住高齢者において, 運動習慣および中高強度の非運動性活動がフレイル予防に与える効果の検証: 柏スタディーの縦断調査. 第66回日本老年医学会学術集会. 名古屋, 2024. 6. 13-15. 査読無
9. 佐藤麻美, 澁谷奈菜子, 夢田明子, 貞清香織, 村井彩美, 田中友規, 田子森順子, 前田真理子, 永谷美幸, 飯島勝矢. オーラルフレイル予防のまちづくり〜平塚モデルの次なる戦略〜. 第11回日本サルコペニア・フレイル学会大会. 東京, 2024. 11.2-3. 査読無
10. 呂偉達, 田中友規, 孫輔卿, 吉澤裕世, 飯島勝矢. 地域在住高齢者において, 中高強度の非運動性活動および運動習慣がサル

コペニア予防に与える効果の検証：柏スタディの縦断調査．第 11 回日本サルコペニア・フレイル学会大会．東京，2024. 11.2-3. 査読無

11. 孫輔卿，呂偉達，七尾道子，亀山祐実，田中友規，秋下雅弘，飯島勝矢．高齢者の生きがいとフレイル新規発症の関連：性ホルモンとの関連．第 11 回日本サルコペニア・フレイル学会大会．東京，2024. 11.2-3. 査読無

12. 佐藤麻美，澁谷奈菜子，田中友規，村井彩美，貞清香織，夢田明子，田子森順子，前田真理子，永谷美幸，飯島勝矢．40 歳代以上住民における Oral Frailty 5-item Checklist で評価したオーラルフレイル及びその下位項目の有症率．第 11 回日本サルコペニア・フレイル学会大会．東京，2024. 11.2-3. 査読無

13. 澁谷奈菜子，佐藤麻美，田中友規，村井彩美，貞清香織，夢田明子，永谷美幸，飯島勝矢．高齢住民サポーターの住民主体活動参加状況と生活習慣・エンパワメントとの関連 ～平塚市と東京大学の産官学連携研究からの洞察～．第 11 回日本サルコペニア・フレイル学会大会．東京，2024. 11.2-3. 査読無

14. 楠本奈央，永谷美幸，溝口奈菜，田子森順子，池田健太郎，前田真理子，田中友規，孫輔卿，呂偉達，飯島勝矢．オーラルフレイル新 5 項目 (OF-5) で評価したオーラルフレイルと抑うつ傾向発症との関連 柏スタディ．日本老年歯科医学会第 35 回学術大会．優秀演題ポスター．北海道．2024.6/28-30. 査読無

15. 田子森順子，田中友規，佐藤麻美，澁谷奈菜子，永谷美幸，池田健太郎，溝口奈菜，楠本奈央，前田真理子，飯島勝矢．地域ぐるみの多面的なフレイル予防啓発介入 オーラルフレイル認知への影響と口腔保健行動変容との関連．日本老年歯科医学会第 35 回学術大会．優秀演題ポスター．北海道．2024.6/28-30. 査読無

● 受賞歴

1. 2024 年 12 月「第 12 回 ロッテ重光学術賞 (公益財団法人 ロッテ財団)」(田中友規．All 健口健康を実現する地域モデル協創：オーラルフレイルを軸とした課題解決型実証研究)

2. 2025 年 3 月「Top Cited Article 2023-2024 Geriatrics & Gerontology International」(Tanaka T, Hirano H, Ikebe K, Ueda T, Iwasaki M, Shirobe M, Minakuchi S, Akishita M, Arai H, Iijima K. Oral frailty five-item checklist to predict adverse health outcomes in community-dwelling older adults: A Kashiwa cohort study)

3. 2025 年 3 月「Top Cited Article 2023-2024 Geriatrics & Gerontology International」(Tanaka T, Yoshizawa Y, Sugaya K, Yoshida M, Bokyoung S, Lyu W, Tsushita K, Iijima K. Predictive validity of the Questionnaire for Medical Checkup of Old-Old for functional disability: Using the National Health Insurance Database System)

4. 2025 年 3 月「Top Viewed Article 2023-2024 Geriatrics & Gerontology International」(Tanaka T, Hirano H, Ikebe K, Ueda T, Iwasaki M, Shirobe M, Minakuchi S, Akishita M, Arai H, Iijima K. Oral frailty five-item checklist to predict adverse health outcomes in community-dwelling older adults: A Kashiwa cohort study)

5. 2025 年 3 月「Top Viewed Article 2023-2024 Geriatrics & Gerontology International」(Kawamura J, Tanaka T, Kanno S, Osawa K, Okabayashi K, Hirano H, Shirobe M, Nagatani M, Son BK, Lyu W, Iijima K.. Relationship between a gum - chewing routine and oral, physical, and cognitive functions

of community - dwelling older adults: A Kashiwa cohort study)

李 鎔根

● 論文等

【学術雑誌等 (紀要・論文集等も含む) に発表した論文】

1. Ukawa S, Kato Y, Lee YG, Sugiyama M, Saito H, Ohara K, Mori K. Association between Volunteer Activity Participation and Daily Sedentary Time among Adults in Japan: A Cross-sectional Study
The Open Public Health Journal 17(1), 2024. 11 査読有

【著書、編著】

1. 李鎔根，佐々木誠，圓山王国，足立壮太，深井祐紘，古里実，露木尚文，梅本舞子，渡邊詞男．東京の住宅地第 5 版パイロット板．日本建築学会関東支部，2024 年，pp20-27

【国際学会・シンポジウムにおける発表】

1. Adachi K, Lee Y, Otsuki T. A Study on the Actual Situation of Vacant Houses and the Occurrence Trends of Long-term Vacant Houses in Densely Populated Cities: Focusing on Arakawa Ward, Tokyo. The 20th Conference of International Development and Urban Planning 2024. 12. 査読有

2. Adachi K, Lee Y, Otsuki T. A study on the occurrence and prolongation of vacant houses in the built-up area in Tokyo. Academic Conference Papers of AIK 44(2) 2024. 10. 査読無

3. Fujita A, Lee Y, Otsuki T. A Study on Sitting Places Spontaneously Set up by Private Organizations. Academic Conference Papers of AIK 44(2) 2024. 10. 査読無

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 筒井健介，高橋史織，李鎔根，大月敏雄．高齢在宅療養者の住環境における医師の観察観点について 豊田地域を対象とした経過報告．日本建築学会大会 2024. 2024.7

2. 吉田宗谷，大原一興，藤岡泰寛，李鎔根，吉田直子，阿彦菜季，伊波航．丘陵郊外住宅地における高齢期の生活行動に関する研究 その 5 購買行動と COVID19 対応による生活の変化についての考察．日本建築学会大会 2024. 2024.7

● 受賞歴

1. 2024 年 11 月「優秀発表論文賞」(李鎔根、大韓建築学会)

税所 真也

● 論文等

【学術雑誌等 (紀要・論文集等も含む) に発表した論文】

1. 税所真也．認知症高齢者の地域生活をめぐる社会学的研究．ジェロントロジー研究報告，2024; 16: 182-193. 査読無

2. 税所真也．判断能力が不十分な方の嗜好品摂取に関する社会学

的研究 . TASC 研究助成報告書 , 2024; 102-119. 査読無

【学術雑誌等又は商業誌における解説、総説】

1. 税所真也 . 巻頭言 成年後見の社会化に向けたあり方 . JA金融法務 , 2024; 16: 1. 査読無
2. 祐成保志 , 税所真也 . 協同組合による居住支援・生活支援の可能性 . 社会運動 , 2025; 457: 109-123. 査読無

【著書、編著】

1. 税所真也 (胡澎・卞显乐訳) , 成年监护社会学 , 世界知識出版社 , 2024.

【国際学会・シンポジウムにおける発表】

1. 税所真也 . 個人単位の社会保障システムを支える仕組み . 第 18 回日中韓社会保障国際論壇 , 2024, 広州市 , 2024.9.8. 査読無
税所真也 . 個人化社会における居住支援 . 日中高齢社会論壇 , 2024, 上海市 , 2024.7.27. 査読無

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 税所真也 . 任意後見制度を用いた居住支援に関する社会学的研究 . 第 97 回日本社会学会大会 , 2024, 京都市 , 2024. 11. 10. 査読無
2. 税所真也 . 判断能力が不十分な方の嗜好品摂取に関する社会学的研究 . 公益財団法人たばこ総合研究センター , 2024, 東京 , 2024. 9. 10. 査読無

1463:215-219. (英文、査読有)

7. 酒谷 薫、他 (2025) 健診データの AI 解析による認知症リスクの早期発見と個別的予防法 認知症の予防・診断・介護 DX 監修 江頭達政、樋口拓也) 東京、(株)エヌ・ティ・エス、pp. 85-103. (依頼原稿)
8. 酒谷 薫 (2024) 認知症における AI リテラシー：臨床応用の利点と課題 (特集 人工知能の認知症分野への応用：利点と課題) Dementia Japan : 日本認知症学会誌 / 日本認知症学会誌編集委員会 編 38 (1), 71-78.

【著書、編著】

1. 酒谷 薫(2024)臨床が変わる！医療 AI シンプル・レクチャー・ブック (著、編集) 新興医学出版社

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 酒谷薫「統合医療における AI の役割」第 28 回日本統合医療学会学術総会 (2024.12.15) 査読無
2. 酒谷薫「健診データの AI 解析による認知症の早期リスク判定と個別的予防法」第 8 回日本脳神経外科認知症学会学術総会 (2024.6.28) 査読無
3. 酒谷薫「人工知能と東洋医学による認知症の予防：シンポジウム先端科学と漢方医学ー AI の東洋医学への応用ー」第 74 回日本東洋医学会学術総会 (2024.6.1) 査読無
4. 酒谷薫「AI と代替医療による次世代統合医療」韓国統合健康管理学セミナー (2024.5.25) 査読無

酒谷 薫

● 論文等

【学術雑誌等 (紀要・論文集等も含む) に発表した論文】

1. Sakatani K, Kamohara S, Karako K, Oyama K. (2024) Personalized dietary therapy for prevention of dementia using AI. Clin Nutr Hosp Diet. 44(S1): 01-07. (英文、査読有)
2. Sakatani K. Relationship Between Dementia and Systemic Metabolic Disorders. Adv Exp Med Biol. 2024;1463:263-269. (英文、査読有)
3. Moriya M, Hu L, Sakatani K, Kitahara M (2024) Estimation of cognitive impairment in chronic pain patients and characteristics of estimated mild cognitive impairment. Front Neurol. 15: 1344190. (英文、査読有)
4. Oyama K, Isogai T, Nakayama Y, Kobayashi R, Kitano D, Karako K, Sakatani K (2024) Enhancing dementia risk screening with GAN-synthesized periodontal examination and general blood test data. Front Neurol.15: 1379916. (英文、査読有)
5. Karako K, Hata T, Inoue A, Oyama K, Ueda E, Sakatani K (2024) Importance of serum albumin in machine learning-based prediction of cognitive function in the elderly using a basic blood test. Front Neurol.15: 1362560. (英文、査読有)
6. Isogai T, Oyama K, Nakayama Y, Kobayashi R, Kitano D, Sakatani K. (2024) Augmenting Blood Test and Periodontal Examination Data with Generative Adversarial Networks for Enhanced Dementia Risk Prediction. Adv Exp Med Biol.

高瀬 麻以

● 論文等

【学術雑誌等 (紀要・論文集等も含む) に発表した論文】

1. 高瀬 麻以, 杉浦 圭子, 相良 友哉, 中本 五鈴, 馬 盼盼, 六藤 陽子, 東 憲太郎, 藤原 佳典, 村山 洋史 . 高齢介護助手雇用による介護職員の業務促進・阻害要因の変化と情緒的消耗感との関連 . 日本公衆衛生雑誌 , 2024; 71(5): 275-282. 査読有
2. 齋藤尚子, 高瀬 麻以, 田口 敦子, 村山 洋史 . 高齢者が感じる生活支援の必要性と住民の関係性・農村部における生活支援未利用者への横断調査 . 日本公衆衛生雑誌 , 2024; 71(6): 297-306. 査読有
3. 杉浦 圭子, 相良 友哉, 高瀬 麻以, 中本 五鈴, 馬 盼盼, 六藤 陽子, 東 憲太郎, 藤原 佳典, 村山 洋史 . 介護老人保健施設に勤務する高齢介護助手の業務内容と就労によって感じるメリットとの関連 . 日本公衆衛生雑誌 , 2024; 71(7): 337-348. 査読有
4. Yokoyama Y, Nofuji Y, Abe T, Nonaka K, Ozone Y, Nakamura Y, Chiaki S, Suda T, Saito N, Takase M, Amano H, Ogawa S, Suzuki H, Murayama H. The Wako Cohort Study: Design and Profile of Participants at Baseline. Journal of Epidemiology. 2024; in press. 査読有
5. Ma P, Sagara T, Takase M, Sugiura K, Nakamoto I, Muto Y, Higashi K, Fujiwara Y, Murayama H. Workload and emotional exhaustion among older assistant care workers in Japan: Buffering effect of work resources. Geriatrics & Gerontology International. 2025; 25(2): 273-278. 査読有

【学術雑誌等又は商業誌における解説、総説】

1. Takase M, Sugiura K, Nakamoto I, Watanabe S, Murayama H. The association between employment and cognitive function in older adults: A systematic review. *Geriatrics & Gerontology International*. 2024; 24(12): 1283-1291. 査読有

【国際学会・シンポジウムにおける発表】

1. Takase M, Goto J. Problems and issues for hosts of social participation activities; A case study from Japan. *GSA Annual Scientific Meeting 2024*, Seattle, USA, November 13-16. 査読有

2. Takase M, Yokoyama Y, Nofuji Y, Abe T, Nonaka K, Murayama H. The frequency of raw vegetable and fruit consumption and associates with depressive mood in Japanese older adults. *GSA Annual Scientific Meeting 2024*, Seattle, USA, November 13-16. 査読有

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 高瀬 麻以, 野中 久美子, 齋藤 尚子, 中村 由佳, 村山 洋史. 地域活動に関心が低い地域住民を引き出すための新たな試み. 第 83 回 日本公衆衛生学会総会, 札幌, 2024. 10. 29-31. 査読有

2. 杉浦 圭子, 野中 久美子, 高瀬 麻以, 齋藤 みほ, 村山 洋史. 就労者のプロボノ活動に参加する動機に関する研究. 第 83 回 日本公衆衛生学会総会, 札幌, 2024. 10. 29-31. 査読有

呂 偉達

● 論文等

【学術雑誌等（紀要・論文集等も含む）に発表した論文】

1. Lyu W, Tanaka T, Son BK, Yoshizawa Y, Iijima K. Comparison of non-exercise physical activity and exercise habits for preventing frailty among community-dwelling older adults: A 7-year follow-up from the Kashiwa cohort study. *Arch Gerontol Geriatr*. 2025;131:105769. doi:10.1016/j.archger.2025.105769 査読有

【国際学会・シンポジウムにおける発表】

1. Lyu W. “Exploring a population approach to citizen-centered frailty prevention activities for a vibrant and healthy longevity society”. *IARU-ALH Annual Conference 2024 Oxford, U.K.* (口頭). 査読なし

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 呂偉達, 田中友規, 孫輔卿, 吉澤裕世, 飯島勝矢. “地域在住高齢者において, 運動習慣および中高強度の非運動性活動がフレイル予防に与える効果の検証: 柏スタディーの縦断調査.” *日本老年医学会*, 2024 (口頭).

2. 呂偉達, 田中友規, 孫輔卿, 吉澤裕世, 高芝美保, 片桐務, 浜田達哉, 福士謙介, 飯島勝矢. “里山活動を通じた高齢者の社会的・身体的フレイル予防に向けたチャレンジ～「イオン東大里山ラボ」における産官学民連携～」*日本老年医学会*, 2024 (ポスター).

3. 呂偉達, 田中友規, 孫輔卿, 吉澤裕世, 飯島勝矢. “地域在住高

齢者において, 中高強度の非運動性活動および運動習慣がサルコペニア予防に与える効果の検証: 柏スタディーの縦断調査.” *日本サルコペニア・フレイル学会大会*, 2024 (口頭).

4. 呂偉達, 人・地域・自然 がつながり輝く新しい里山づくり. 第 2 回イオン SATOYAMA フォーラム 2025 年 2 月 18 日 (口頭)

田中 敏明

● 論文等

【学術雑誌等（紀要・論文集等も含む）に発表した論文】

1. Toshiaki Tanaka, Yusuke Maeda and Takahiro Miura. Effects of Tactile Sensory Stimulation Training of the Trunk and Sole on Standing Balance Ability in Older Adults: A Randomized Controlled Trial. *J.Funct.Morphol.Kinesiol*. 2025, 10(1), 96, 査読有

2. Toshiaki Tanaka and Takahiro Miura. Effects of postural control by personal mobility on human joint movements-prototype of a new alert system for personal mobility devices. *Ann Musculoskelet Med*. 2024, 8(1): 001-005. 査読有

3. Rika Miura, Naomi Esashi, Atsushi Mitani, Takahiro Miura and Toshiaki Tanaka (Corresponding author). Posture Retention Devices for Older Adults Undergoing Horseback Riding Therapy, *COJ Nurse Healthcare*. 2024, 9(1):939-946. 査読有

4. 工藤章, 加藤士雄, 三浦貴大, 田中敏明 (責任著者), HMD 下の異なる空間域における空間無視患者の頭部と眼球運動に関する予備的研究、作業療法の実践と科学、7 (4)、in press. 査読有

5. Akira Kudo, Norio Kato, Takahiro Miura, Toshiaki Tanaka: Effects of an HMD-based Attention System on Head and Eye Movement Strategies of Patients with Spatial Neglect. *International Journal of New Technology and Research*, (in press). 査読有

【国際学会・シンポジウムにおける発表】

1. Akira kudo, Norio Kato, Takahiro Miura, Toshiaki Tanaka: Effects of blinking alerts on visual search in spatial neglect in VR with HMD. *The 8th Asia Pacific Occupational Therapy Congress*, Sapporo, Japan, 2024.11. 査読有

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 田中敏明. 高齢者・障害者の日常生活を支援する福祉リハビリテーション研究ーバリアフリー・インクルーシブデザインと繊維製品への期待ー. いしかわ次世代スマートテキスタイル研究会令和 6 年度 第 1 回研究会、時 2024 年 7 月 19 日、金沢市

2. 田中敏明. 高齢者・障害者の日常生活を支援する福祉リハビリテーション工学研究、2024 年 12 月 17 日、JRA 馬事公苑、東京都

3. 藪謙一郎, 田中敏明, 伊福部達. ウェアラブルな構音障害支援デバイスにおける制御インタフェースと音声補完の検討. *音響学会*. 2024.3.685-686. 東京都. 査読無

4. 藪謙一郎, 田中敏明, 伊福部達. 構音障害支援を目的としたウェアラブルなリアルタイム音声デバイスの試作. *音響学会*.

2025.3. さいたま市 . 査読有

藪 謙一郎

● 論文等

【学術雑誌等（紀要・論文集等も含む）に発表した論文】

- 1. Ifukube T, Yabu K. Proposal and Design of Monitoring System in Private Spaces Modeled After Echolocation by FM Bats. IEEE Access. 2024.;12: 187676–187683. 査読有
- 2. 藪謙一郎, 伊福部達 . コウモリをモデルとする FM 超音波による浴室事故防止システムの試作と評価 . 日本音響学会研究発表会講演論文集 (CD-ROM). 2024.;2024: 99-100. 査読無
- 3. 藪謙一郎, 田中敏明, 伊福部達 . 構音障害支援を目的としたウェアラブルなリアルタイム音声デバイスの試作 . 日本音響学会研究発表会講演論文集 (CD-ROM). 2025;2025(春季): 801-802. 査読無
- 4. Miura T, Yabu K, Uchiyama E, Kamikokuryo K, Hernandez V, Son B, Iijima K. Estimating Subjective Ikigai of Older Adults Based on the Analysis of Voice Communication in Social Activities: A Case Study of Frailty Check Activity Scenes. HCI International 2024 – Late Breaking Papers. 2025: 248–255. 査読有

【国際学会・シンポジウムにおける発表】

- 1. Miura T, Yabu K, Uchiyama E, Kamikokuryo K, Hernandez V, Son B, Iijima K. Estimating Subjective Ikigai of Older Adults Based on the Analysis of Voice Communication in Social Activities: A Case Study of Frailty Check Activity Scenes. HCI INTERNATIONAL 2024 26th International Conference on Human-Computer Interaction, Washington DC, USA (hybrid), 2024.6, - Late Breaking Papers: 248–255. 査読有

【国内学会・シンポジウム等における発表】

- 1. 藪謙一郎, 伊福部達 . コウモリをモデルとする FM 超音波による浴室事故防止システムの試作と評価 . 日本音響学会第 152 回 (2024 年秋季) 研究発表会 . 埼玉 2024.9, 99-100. 査読無
- 2. 藪謙一郎, 田中敏明, 伊福部達 . 構音障害支援を目的としたウェアラブルなリアルタイム音声デバイスの試作 . 日本音響学会第 153 回 (2025 年春季) 研究発表会 , 埼玉 , 2025.3, 801-802. 査読無

秋山 弘子

● 論文等

【学術雑誌等（紀要・論文集等も含む）に発表した論文】

- 1. 秋山 弘子 . 長寿社会に生きる . 日本老年医学会雑誌 ,2024 年 61 巻 4 号 pp373-381. 査読無

【著書、編著】

- 1. 秋山弘子 . しあわせの高齢者学 2 古希式という試み , 樋口 範雄 (編), 武蔵野大学出版会 ,2024

【国内学会・シンポジウム等における発表】

- 1. 秋山弘子 . 長寿社会に生きる . 第 66 回日本老年医学会学術集会 , 名古屋 ,2024,6.13 査読無

● 受賞歴

- 1. 秋山弘子 .2024 年 6 月第 9 回尼子賞 (第 66 回日本老年医学会学術集会)

伊福部 達

● 論文等

【学術雑誌等（紀要・論文集等も含む）に発表した論文】

- 1. Ifukube T, Yabu K. Proposal and Design of Monitoring System in Private Spaces Modeled After Echolocation by FM Bats. IEEE Access. 2024.;12: 187676–187683. 査読有
- 2. 藪謙一郎, 伊福部達 . コウモリをモデルとする FM 超音波による浴室事故防止システムの試作と評価 . 日本音響学会研究発表会講演論文集 (CD-ROM). 2024.;2024: 99-100. 査読無
- 3. 藪謙一郎, 田中敏明, 伊福部達 . 構音障害支援を目的としたウェアラブルなリアルタイム音声デバイスの試作 . 日本音響学会研究発表会講演論文集 (CD-ROM). 2025;2025(春季): 801-802. 査読無

【学術雑誌等又は商業誌における解説、総説】

- 1. 伊福部達 . (解説) 伊福部音楽とアイヌの歌 . 北海道大学総合博物館ボランティアニュース , 2024.4; 68 号 , 1-3, 査読無

【国際学会・シンポジウムにおける発表】

- 1. Ifukube T. Cognitive InfoCommunication–Based Assistive Technology. Special Lecture, 15th IEEE Cognitive Info-Communication 2024, Tokyo, 2024.9. 査読有

【国内学会・シンポジウム等における発表】

- 1. 伊福部達 , 福祉工学への招待 -「聞く」「話す」「見る」を助ける技術を例にとって- , 小児リハビリテーション医学会学術集会 , 特別講演 , 東京 , 2024.9, 査読無
- 2. 藪謙一郎, 伊福部達 . コウモリをモデルとする FM 超音波による浴室事故防止システムの試作と評価 . 日本音響学会第 152 回 (2024 年秋季) 研究発表会 . 埼玉 2024.9, 99-100. 査読無
- 3. 藪謙一郎, 田中敏明, 伊福部達 . 構音障害支援を目的としたウェアラブルなリアルタイム音声デバイスの試作 . 日本音響学会第 153 回 (2025 年春季) 研究発表会 , 埼玉 , 2025.3, 801-802. 査読無
- 4. 伊福部達 , ゴジラ音楽と緊急地震警報チャイム - なぜ、耳に残るのか -, 北海道大学総合博物館 ボランティアの会 , 講演会 , 札幌 , 2024.7. 査読無

辻 哲夫

● 論文等

【著書、編著】

1. 辻哲夫. 在宅医療一泊し支える医療の概念と実践—監修 中央法規 2024.4

田子森 順子

● 論文等

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 田子森 順子, 田中 友規, 佐藤 麻美, 澁谷 奈菜子, 永谷 美幸, 池田 健太郎, 溝口 奈菜, 楠本 奈央, 前田 真理子, 飯島 勝矢. 地域ぐるみの多面的なフレイル予防啓発介入 - オーラルフレイル認知への影響と口腔保健行動変容との関連 -. 日本老年歯科医学会第 35 回学術大会, 北海道, 2024.6.28-30. 査読無
2. 楠本 奈央, 永谷 美幸, 溝口 奈菜, 田子森 順子, 池田 健太郎, 前田 真理子, 田中 友規, 孫 輔卿, 呂 偉達, 飯島 勝矢. オーラルフレイル新 5 項目 (OF-5) で評価したオーラルフレイルと抑うつ傾向発症との関連: 柏スタディ. 日本老年歯科医学会第 35 回学術大会, 札幌, 2024.6.28-30. 査読無
3. 佐藤 麻美, 澁谷 奈菜子, 田中 友規, 田子森 順子, 夢田 明子, 貞清 香織, 田中 陽子, 永谷 美幸, 前田 真理子, 飯島 勝矢. オーラルフレイル予防啓発の多面的地域介入がオーラルフレイル認知度や意識・行動変容に与える影響. 第 66 回日本老年医学会学術集会. 名古屋, 2024.6.13-15. 査読無
4. 佐藤 麻美, 澁谷 奈菜子, 夢田 明子, 貞清 香織, 村井 彩美, 田中 友規, 田子森 順子, 前田 真理子, 永谷 美幸, 飯島 勝矢. オーラルフレイル予防のまちづくり～平塚モデルの次なる戦略～. 第 11 回日本サルコペニア・フレイル学会大会. 東京, 2024.11.2-3. 査読無
5. 佐藤 麻美, 澁谷 奈菜子, 田中 友規, 村井 彩美, 貞清 香織, 夢田 明子, 田子森 順子, 前田 真理子, 飯島 勝矢. 40 歳代以上住民における Oral Frailty 5-item Checklist で評価したオーラルフレイル及びその下位項目の有症率. 第 11 回日本サルコペニア・フレイル学会大会. 東京, 2024.11.2-3. 査読無
6. 田中 友規, 佐藤 麻美, 澁谷 奈菜子, 田子森 順子, 永谷 美幸, 池田 健太郎, 前田 真理子, 飯島 勝矢. 産官学民協働によるフレイル予防の多面的地域介入がオーラルフレイルおよびフレイル重症化に与える影響: 非無作為化地域比較試験. 11 回日本サルコペニア・フレイル学会大会. 東京, 2024.11.2-3. 査読無

佐藤 麻美

● 論文等

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 佐藤麻美・澁谷奈菜子・夢田明子・貞清香織・村井彩美・田中友規・田子森順子・前田真理子・永谷美幸・飯島勝矢. フレイル・オーラルフレイル予防を軸とした産官学民協働による健康寿命の

延伸. 第 30 回日本摂食嚥下リハビリテーション学会学術大会, 福岡, 2024.8.30. 査読無

2. 田子森順子・田中友規・佐藤麻美・澁谷奈菜子・永谷美幸・池田健太郎・溝口奈菜・楠本奈央・前田真理子・飯島勝矢, 地域ぐるみの多面的なフレイル予防啓発介入 - オーラルフレイルの認知・理解に与える影響と口腔保健行動変容との関連. 日本老年歯科医学会第 35 回学術大会, 札幌 2024.6.29. 査読無
3. 佐藤麻美・澁谷奈菜子・田中友規・田子森順子・夢田明子・貞清香織・田中陽子・永谷美幸・前田真理子・飯島勝矢, オーラルフレイル予防啓発の多面的地域介入がオーラルフレイル認知度や意識・行動変容に与える影響. 第 66 回日本老年医学会学術集会, 名古屋, 2024.6.14. 査読無
4. 佐藤麻美・澁谷奈菜子・田中友規・村井彩美・貞清香織・夢田明子・田子森順子・前田真理子・飯島勝矢, 40 歳代以上住民における Oral Frailty 5-item Checklist で評価したオーラルフレイルおよびその下位項目の有症率. 第 11 回日本サルコペニア・フレイル学会大会, 東京, 2024.11.2. 査読無
5. 佐藤麻美・澁谷奈菜子・夢田明子・貞清香織・村井彩美・田中友規・田子森順子・前田真理子・永谷美幸・飯島勝矢, オーラルフレイル予防のまちづくり～平塚モデルの次なる戦略～. 第 11 回日本サルコペニア・フレイル学会大会, 東京, 2024.11.2. 査読無

荻野 亮吾

● 論文等

【学術雑誌等(紀要・論文集等も含む)に発表した論文】

1. 荻野亮吾. 社会教育で地域コミュニティをつくれるのか: 地域コミュニティの再編の論理から社会教育研究の課題を考える. 教育学年報, 2024;15:71-93. 査読有
2. 井口啓太郎, 荻野亮吾, 越村康英, 田中真由美, 床尾拓哉, 中村文昭. 公民館職員は公民館事業をいかに捉えているのか: 「公民館の仕事」に関するアンケート調査の分析から. 日本公民館学会年報, 2024;21:58-76. DOI: <https://doi.org/10.24661/kominkan.21.2.1> 査読有
3. 荻野亮吾, 内田光俊, 田中純子, 中村亮彦. 公民館事業評価の課題と展望: 「学習としての評価」の視点から考える. 日本公民館学会年報, 2024;21:77-89. DOI: <https://doi.org/10.24661/kominkan.21.2.2> 査読有

【学術雑誌等又は商業誌における解説、総説】

1. 荻野亮吾. 学校と地域の協働を紡ぐコーディネーターの学び合い: 大分県佐伯市の「協育」ネットワーク事業を事例にして. 社会教育, 2024;938、6-13. 査読無
2. 荻野亮吾. 地域における社会関係資本の醸成: 関係の基盤をどう築くか?. α シノドス, 2024;328. 査読無

【著書、編著】

1. 岡幸江, 内田光俊, 荻野亮吾, 丹間康仁, 池谷美衣子, 森村圭介. ポストコロナの公民館: 22 の問いから考える. 大学教育出版, 2025.
2. 荻野亮吾, 近藤牧子, 丹間康仁 (編). 地域学習支援論: 学び合える社会関係のデザイン. 大学教育出版, 2025.

【国内学会・シンポジウム等における発表】

- 1. 菅原育子, 荻野亮吾, 似内遼一, 久保田治助, 堀薫夫. 地域活動におけるコミュニティ・エンパワメントの評価方法の開発: 大都市近郊地域における試行. 日本老年社会科学会第 66 回大会, 大阪, 2024.6.2. 査読有
- 2. 荻野亮吾. 地域学校協働活動推進員の継続的な力量形成の方法に関する考察: 大分県佐伯市の協働事業を事例として. 日本地域政策学会第 23 回全国研究大会, 京都, 2024.7.7. 査読有
- 3. 荻野亮吾. 公民館事業における評価の意義: コミュニティ・エンパワメントの観点からの検討. 日本公民館学会 2024 年度 7 月集会, 弘前, 2024.7.13. 査読無
- 4. 高瀬麻以, 荻野亮吾, 似内遼一, 後藤純. 郊外住宅地における住民同士の支え合い活動に関する報告, 第 27 回日本福祉のまちづくり学会全国大会, 札幌, 2024.9.1. 査読無
- 5. 荻野亮吾, 中川友理絵. 社会教育実習を通じた学びの評価方法の検討, 日本社会教育学会第 71 回研究大会, 東京, 2024.9.7. 査読無
- 6. 荻野亮吾. 学校施設開放・複合化の過去と現在: 地域教育経営の視点から考える, 日本学習社会学会第 21 回大会公開シンポジウム, 奈良, 2024.9.14. 査読無

姜 琇仁 (KANG Sooln)

● 論文等

【国際学会・シンポジウムにおける発表】

- 1. Sooln KANG, Taketoshi MORI. Impedance measurement and photoplethysmography for prevention of complication in intravenous therapy and preliminary human trial. 2024 IEEE International Conference on Robotics and Automation Nursing Robotics Workshop, Yokohama, Japan, 2024. 5. 14-17. 簡易査読有.
- 2. Ryotaro SHIMA, Sooln KANG, and Taketoshi MORI. Real-time heartbeat interval estimation from face video by multiple filters ensemble. 2024 IEEE International Conference on Robotics and Automation Nursing Robotics Workshop, paper-19, Session 2, Yokohama, Japan. 2024. 5. 14-17. 簡易査読有.
- 3. Sooin KANG. Skin Status Monitoring for Nursing Care Using Multi-Frequency Impedance Tomography. 6th International Bio-Medical Interface Symposium 2025, New Taipei City, Taiwan. 2025. 3. 8-9. 招待講演.

【国内学会・シンポジウム等における発表】

- 1. 姜 琇仁, 森武俊. 皮膚インピーダンス計測を用いた血流速度変化の観察. 第 63 回日本生体医工学会大会, 鹿児島県, 2024. 5. 23-25. 簡易査読有.
- 2. 姜 琇仁, 森 武俊. 多周波インピーダンスデータとディープラーニングを用いた血管構造の検出. 生体医工学シンポジウム 2024, 東京, 2024. 9. 12-14. 簡易査読有.
- 3. カン ス - イン, 森 武俊. 多周波皮膚インピーダンスを用いた血流量推定の周波数選択最適化アルゴリズム. 第 12 回看護理工学会学術集会, 石川県, 2024. 11. 2-3. 簡易査読有.

後藤 純

● 論文等

【学術雑誌等(紀要・論文集等も含む)に発表した論文】

- 1. 後藤純. 仮設住宅における地域コミュニティ施策と地域包括ケアシステムー近代復興からコミュニティ・デザインによる現代復興へー. 雑誌 住宅, 2025;74:75-80 査読無
- 2. 後藤 純, 矢島 里紗, 手塚 悠希, 似内 遼一, 新 雅史. 岩手県釜石・大槌エリアにおけるコミュニティビジネスを通じた復興まちづくりの成果と可能性 新しい東北モデル事業を事例として. 都市計画論文集, 2024; 59(3):722-729. 査読有
- 3. 手塚 悠希, 後藤 純, 杉本 茅夏. 岩手県上閉伊郡大槌町安渡地区における復興まちづくりの現状と課題. 都市計画論文集 ;59(3):1517-1524. 査読有
- 4. 後藤純. 能登半島地震からの復興に向けて『仮設コミュニティ』を基点とした創造的復興 - コミュニティデザインと地域包括ケアシステムの連携に着目して. 雑誌都市計画 ; 2025, 73(369):76-79. 査読無
- 5. 後藤純. 理学療法士はどのように地域づくりに関わるか. 秋田理学療法 ;32(1):3-10. 査読無

【国内学会・シンポジウム等における発表】

- 1. 手塚 悠希, 後藤 純. 7326 岩手県大槌町安渡地区における住民から見た復興まちづくりの現状と課題 ー地域コミュニティの居住環境に着目してー. 日本建築学会大会(関東) 学術講演会 2024, 東京, 2024.8.29
- 2. 平方 慎人, 後藤 純. 7017 0 円空き家バンク制度の現状と課題 ー富山県上市町を事例にー. 日本建築学会大会(関東) 学術講演会 2024, 東京, 2024.8.28

菅原 育子

● 論文等

【学術雑誌等又は商業誌における解説、総説】

- 1. 菅原育子. 何歳になってもありがとうと笑顔を交わせる人生へ: 「貢献寿命」の延伸を目指そう. 企業年金(企業年金連合会), 519 号(2024 年 5 月号), pp24-25.
- 2. 菅原育子. シニア期の幸福度を高める地域とのつながり. ALPS(一般財団法人地域社会ライフプラン協会), 159 号(2024 年 10 月号), pp16 - 19.
- 3. 菅原育子. 人生 100 年時代に対応したウェルビーイングの実現へ. 第 86 回全国都市問題会議『健康づくりとまちづくり～市民の一生に寄り添う都市政策～』, pp48-51.

【著書、編著】

- 1. 菅原育子. 人生を彩る人や社会とのつながり. 樋口範雄(編)「しあわせの高齢者学 2: 「古稀式」という試み」. 武蔵野大学出版会, 2024;pp78-120.
- 2. 菅原育子. 高齢者を中心とした地域活動をどう支援するか? 荻野亮吾・近藤牧子・丹間康仁(編著)「地域学習支援論: 学びあえる社会関係のデザイン」. 大学教育出版, 2025;pp196-202.

【国際学会・シンポジウムにおける発表】

- 1. Nihei,M., Nohara, T., Sugawara, I., & Ono, T. Chatbots as tools in parent-child relationships. Paper presented at 26th International Conference on Human-Computer Interaction, Washington,D.C., USA, June 29-July4 2024. 査読有
- 2. Sugawara, I, Akiyama, H, Imashiro, S, & Hiyama, A. Multidimensional aspects of social engagement and their correlations with subjective well-being. Poster presented at International Conference of Psychology 2024, Prague, Czech Republic, July 21-26 2024. 査読有

【国内学会・シンポジウム等における発表】

- 1. 菅原育子・荻野亮吾・似内遼一・久保田治助・堀薫夫. 地域活動におけるコミュニティ・エンパワメントの評価方法の開発—大都市近郊地域における試み—. 日本老年社会科学会第 66 回大会. 2024 年 6 月 1-2 日, 帝塚山大学: 奈良. 査読有
- 2. 菅原育子. 技術とともにある豊かな高齢社会の実現へ—その法的・倫理的・社会的課題—(自主企画フォーラム企画及び話題提供). 日本老年社会科学会第 66 回大会. 2024 年 6 月 1-2 日, 帝塚山大学: 奈良. 査読有
- 3. 菅原育子・小林江里香. 中高年者の近隣関係と主観的ウェルビーイング:「家を行き来する間柄」と「互いの家族関係を知る間柄」の比較をとおして. 日本社会心理学会第 65 回大会. 2024 年 8 月 31 日 -9 月 1 日, 日本大学文理学部: 東京. 査読有
- 4. 菅原育子. 長寿時代における「貢献」のあり方を考える—貢献寿命の提案にあたって—. 第 3 回ウェルビーイング学会学術集会, 2025 年 3 月 20 日, 武蔵野大学: 東京. 査読有
- 5. 菅原育子・楠聖伸・平真由子・渡邊淳司. 大学教育におけるウェルビーイングの学びのデザイン—ウェルビーイング・コンピテンシーを用いた考察—. 第 3 回ウェルビーイング学会学術集会. 2025 年 3 月 20 日, 武蔵野大学: 東京. 査読有

【国内学会・シンポジウム等における発表】

- 1. 高橋競, 硯川潤. 身体障害者における防災の現状と関連要因—インターネット調査の結果から—. 第 83 回日本公衆衛生学会総会 2024, 北海道, 2024.10.29-31. 査読無
- 2. 高橋競, 高木憲司, 古山周太郎, 硯川潤. 障害者の防災と地域格差 - 福祉避難所の現状と課題に関する全国調査結果の考察. グローバルヘルス合同大会 2024 (第 39 回日本国際保健医療学会) 2024, 沖縄, 2024.11.16-17. 査読無

畑中 綾子

● 論文等

【国際学会・シンポジウムにおける発表】

- 1. Hatanaka R.“Japan's 2015 Medical Accident Investigation Scheme and its Current Challenges”World Congress for Medical Law, Batam, Indonesia ,2024.7.22. 査読無

【国内学会・シンポジウム等における発表】

- 1. 畑中綾子「AI / コミュニケーション支援技術の高齢社会への導入による自己決定 / プライバシー権に関する法的課題」日本生命倫理学会、大阪、2024.11.17.(査読無)
- 2. 畑中綾子「ナラティブ×テクノロジー」Code for Japan2024、滋賀、2024.11.16.(査読無)
- 3. 畑中綾子「法的課題から」自主企画ワークショップ『技術とともにある豊かな社会の実現：その法的・倫理的・社会的課題』日本保健医療社会科学会、奈良、2024.6.2.(査読無)
- 4. 畑中綾子「ラウンドテーブル：障害のある人とともに働くために—医療的ケア児の家族の語り・障害学生の語りを収集した経験から」日本保健医療社会科学会、千葉、2024.5.26.(査読無)

高橋 競

● 論文等

【学術雑誌等(紀要・論文集等も含む)に発表した論文】

- 1. 三塚みか, 藤崎万裕, 高橋競. 内閣府社会参加章を受章した社会参加活動事例の類型化とその特徴の整理. 文理シナジー, 2024; 28(2): 153-160. 査読有
- 2. Takahashi K, Takaki K, Koyama S, Suzurikawa J. Health literacy and disaster preparedness: the role of hazard map awareness among individuals with physical disabilities. JMA J, in press. 査読有

【学術雑誌等又は商業誌における解説、総説】

- 1. Takahashi K. Learn from Japan's rehabilitation professionals. Lancet, 2024;404(10452):521. DOI: 10.1016/S0140-6736(24)01482-X. 査読無
- 2. Takahashi K. Toilet problems in evacuation shelters in the Noto Peninsula earthquake in Japan: letter to editor. Disaster Med Public Health Prep, in press. 査読無

福沢 愛

● 論文等

【学術雑誌等(紀要・論文集等も含む)に発表した論文】

- 1. 福沢愛・叶少瑜. コロナ禍を経験した大学生の精神的健康と SNS 使用状況に関する量的・質的検討. 社会情報学, 2024; 13 巻 (2 号): 1-17. 査読有
- 2. 福沢愛・叶少瑜. コロナ禍の中盤から終盤期における大学生 SNS 使用, ソーシャルサポートネットワークと主観的幸福感の因果関係: 縦断調査による検討. 2024 年度 社会情報学会大会研究発表論文集, 2024; 277-282. 査読無

【国際学会・シンポジウムにおける発表】

- 1. FUKUZAWA, A. & YE, S. S Relationship between the number of online friends and well-being among Japanese university students. 33rd International Congress of Psychology, Prague, Czech Republic, 2024. 7. 25. 査読有

【国内学会・シンポジウム等における発表】

- 1. 竹内 真純・福沢愛・小林 江里香・片桐 恵子. 「若いから」「高齢だから」生じる年齢差別: 性別・年齢による差と心身への影響.

日本社会心理学会第 65 回大会, 東京, 2024.9.1 査読無

2. 福沢愛・叶少瑜. SNS における友人知人とのつながりと精神的健康の関連に関する世代間比較: 介護・子育ての有無別の検討. 日本老年社会科学会 第 66 回大会, 奈良, 2024.6.1 査読有

三浦 貴大

● 論文等

【学術雑誌等（紀要・論文集等も含む）に発表した論文】

1. Tanaka T, Maeda M, Miura T, Effects of Tactile Sensory Stimulation Training of the Trunk and Sole on Standing Balance Ability in Older Adults: A Randomized Controlled Trial, Journal of Functional Morphology and Kinesiology, 2025;10(1):96. DOI: 10.3390/jfmk10010096 査読有
2. Yoshioka - Maeda K, Matsumoto H, Honda C, Taira K, Hosoya N, Sato M, Iwasaki - Motegi R, Sumikawa Y, Fujii H, Miura T, Shiomi M, Development of the Essential Individual Care Needs Assessment Tool for Public Health Nurses, Public Health Nursing, 2025;42(3):1216-1225. DOI: 10.1111/phn.13545 査読有
3. Hiratsuka Y, Kuga K, Miura T, Tanaka T, Ueda M, Sounds and Natures Do Often Agree: Prediction of Esports Players' Performance in Fighting Games Based on the Operating Sounds of Game Controllers, Applied Sciences, 2025;15(2):719:1-719:13 査読有
4. Miura T, Yabu K, Uchiyama E, Kamikokuryo K, Hernandez V, Son BK, Iijima K, Estimating Subjective Ikigai of Older Adults Based on the Analysis of Voice Communication in Social Activities: A Case Study of Frailty Check Activity Scenes, Lecture Notes in Computer Science, 2024;15379:248-255. DOI: 10.1007/978-3-031-76818-7_17 査読有
5. Miura R, Esashi N, Mitani A, Miura T, Tanaka T, Posture Retention Devices for Older Adults Undergoing Horseback Riding Therapy, COJ Nursing & Healthcare, 2024;9(1):939-946. DOI: 10.31031/COJNH.2024.09.000704 査読有
6. Uchiyama E, Takano W, Nakamura Y, Miura T, Imaeda S, Tanaka T, Head Shaking Test and Its Validity Considering from the Point of View of Muscle Activities, 2024 46th Annual International Conference of the IEEE Engineering in Medicine and Biology Society (EMBC), 2024;1-4. 査読有
7. Matsuo M, Erdenesambuu D, Sakajiri M, Onishi J, Miura T, Tactris: Inclusive Falling Block Puzzle Game with Audio-Tactile Effects for Visually Impaired People, Lecture Notes in Computer Science, 2024;14750:128-136. DOI: 10.1007/978-3-031-62846-7_16 査読有
8. Matsuo M, Kitamura N, Egashira M, Hosogai T, Hatakeyama S, Kato D, Hayakawa K, Onishi J, Sakajiri M, Miura T, Inclusive Fighting with Mind's Eye: Case Study of a Fighting Game Playing with only Auditory Cues for Sighted and Blind Gamers, Lecture Notes in Computer Science, 2024;14750:137-145. DOI: 10.1007/978-3-031-62846-7_17 査読有

9. Erdenesambuu D, Matsuo M, Miura T, Sakajiri M, Onishi J, Advancing Mobility for the Visually Impaired: A Virtual Sound-Based Navigation Simulator Interface, Lecture Notes in Computer Science, 2024;14750:416-427. DOI: 10.1007/978-3-031-62846-7_50 査読有
10. Toshiaki T, Miura T, Effects of postural control by personal mobility on human joint movements-prototype of a new alert system for personal mobility devices, Annals of Musculoskeletal Medicine, 2024;8(1):001-005. DOI: 10.17352/amm.000034 査読有
11. Miura T, Fujii H, Yamazaki R, Erdenesambuu D, Matsuo M, Sakajiri M, Onishi J, Accessible Terminal Application for Visually Impaired Users Utilizing Screen Readers, Journal on Technology and Persons with Disabilities, 2024;12:184-196. DOI: 20.500.12680/79408552f 査読有
12. Hiraki H, Kanazawa S, Miura T, Yoshida M, Mochimaru M, Rekimoto J, WhisperMask: a noise suppressive mask-type microphone for whisper speech, AHs '24: Proceedings of the Augmented Humans International Conference, 2024:1-14. DOI: 10.1145/3652920.3652925 査読有

【著書、編著】

1. 西野 亜希子, 岡部 真智子, 阪東 美智子, 石井 敏, 稲垣 具志, 李 潤貞, 植田 瑞昌, 笈田 幹弘, 大島 千帆, 大橋 寿美子, 糟谷 佐紀, 神吉 優美, 金 晃敏, 児玉 善郎, 雑賀 香, 佐藤 由美, 鈴木 晃, 鈴木 健太郎, 曾根 里子, 田中 紀之, 富安 亮輔, 西村 顕, 橋本 美芽, 原 和男, 番場 美恵子, 松田 雄二, 三浦 貴大, 南 一誠, 袁輪 裕子, 室崎 千重, 吉田 紗栄子, 地域とつながる高齢者・障がい者の住まい: 計画と設計 35 の事例, 学芸出版社 2024.9. (分担執筆範囲 :2-2-1 節, 2-3-4 節, 2-3-5 節, 3-3-1 節)

【国際学会・シンポジウムにおける発表】

1. Kitabatake K, Matsuo M, Miura T, Onishi J, Sakajiri M, Co-designing screen reader-friendly apps by visually impaired developers and users: An interview study, 40th Annual CSUN Assistive Technology Conference (CSUN ATC 2025), 2025.3. 査読有
2. Miura T, Hayakawa K, Kitamura N, Hosogai T, Matsuo M, Egashira M, Hatakeyama S, Kato D, Onishi J, Sakajiri M, Exploring Reasonable Accommodations through Accessible eSports: A Hands-On Course into Visual Impairment Accessibility, 40th Annual CSUN Assistive Technology Conference (CSUN ATC 2025), 2025.3. 査読有
3. Kudo A, Kato N, Miura T, Tanaka T, Effects of blinking alerts on visual search in spatial neglect in VR with HMD. The 8th Asia Pacific Occupational Therapy Congress, Japan, 2024.11. 査読有
4. Matsumura T, Iijima R, Miura T, Matsuo M, Ochiai Y, Establishing a Community-Driven Digital Library for the Visually Impaired, 26th International ACM SIGACCESS Conference on Computers and Accessibility (ASSETS '24). 2024;117:1-4. DOI: 10.1145/3663548.3688524 査読有
5. Hiraki H, Kanazawa S, Miura T, Yoshida M, Mochimaru M, Rekimoto J, Conductive Fabric Diaphragm for Noise-Suppressive Headset Microphone, UIST Adjunct '24,

2024;56:1-3. DOI: 10.1145/3672539.3686768 査読有

● 受賞歴

- 1. 2024.9「年次大会論文賞」(早川 公、北村 直也、三浦 貴大: 社会包摂に向けた当事者と共にする変革の実践:「バリアフリー スポーツスクール」を事例として、日本ソーシャル・イノベーション学会第6回年次大会, 早稲田大学)
- 2. 2024.12「特集テーマセッション賞(ユーザーニーズに即した視覚障害者支援)」(平 海依、松尾 政輝、大西 淳児、坂尻 正次、三浦 貴大、視覚障害者の感性を養う描画手法に関する研究 - 描画ニーズの分析と支援システムの開発 -, HCG シンポジウム 2024, 2024.12)
- 3. 2025.3「最優秀論文賞」「最優秀発表賞」「インタラクティブ発表賞(PC 推薦)」(平城裕隆、金澤周介、三浦貴大、吉田学、持丸 正明、暦本純一: ClothTalk: 騒音環境でも GPU なしでリアルタイムに綺麗な声を入力可能な導電布マイクロフォン、情報処理学会シンポジウム インタラクション 2025, 2025.3.

吉江 悟

● 論文等

【学術雑誌等(紀要・論文集等も含む)に発表した論文】

- 1. Sun, Y., Sakata, N., Iwagami, M., Yoshie, S., Inokuchi, R., Ito, T., Kuroda, N., Hamano, J., & Tamiya, N. (2024). Regional disparities in Japan's home healthcare resources: A retrospective observational study using nationwide data from 2014 to 2020. Journal of General and Family Medicine, doi: 10.1007/s11606-024-09285-6. 査読有
- 2. Sun, Y., Sakata, N., Iwagami, M., Yoshie, S., Inokuchi, R., Ito, T., Kuroda, N., Hamano, J., & Tamiya, N. (2024). Regional disparities in home healthcare utilization for older adults and their associated factors at the secondary medical area level: A nationwide study in Japan. Geriatrics & Gerontology International, doi: 10.1111/ggi.15011. 査読有
- 3. Sun, Y., Masuda, R., Taniguchi, Y., Iwagami, M., Sakata, N., Yoshie, S., Komiyama, J., Yamagishi, K., Kihara, T., Watanabe, T., Takahashi, H., Iso, H., & Tamiya, N. (2024). Characteristics of cancer patients dying at home during the COVID-19 pandemic: A study based on vital statistics from 2015 to 2022 in Japan. Journal of General and Family Medicine, doi: 10.1002/jgf2.724. 査読有

【国際学会・シンポジウムにおける発表】

- 1. Enami, S., Shimoyama, Y., Honda, C., Matsumoto, H., Maeda-Suzuki, A., Yoshie, S., Ikeda, M., Yamamoto-Mitani, N, Yoshioka-Maeda, K. (2024.7.5). Report on health volunteer activities by students to a city in Ishikawa prefecture after the Noto peninsula earthquake. UTokyo Nursing International Conference 2024. 査読有

【国内学会・シンポジウム等における発表】

- 1. 小宮山潤、孫瑜、黒田直明、中野寛也、鈴木愛、浜崎曜子、吉江

悟、浜田将太。(2024.10.29-31). 高齢要介護認定者の在宅医療における訪問サービス実施の経時的・地域横断的分析. 第83回日本公衆衛生学会総会, 札幌. 査読有

- 2. 孫瑜、増田理恵、谷口雄大、岩上将夫、佐方信夫、吉江悟、小宮山潤、山岸良匡、木原朋未、渡邊多永子、高橋秀人、磯博康、田宮菜奈子。(2024.10.29-31). COVID-19 パンデミック前後におけるがん患者の患者特性毎の在宅死割合の変化. 第83回日本公衆衛生学会総会, 札幌. 査読有
- 3. 浜崎曜子、孫瑜、渡邊多永子、佐方信夫、吉江悟、伊藤智子、杉山雄大、田宮菜奈子。(2024.10.29-31). 訪問診療、訪問看護を利用する在宅療養高齢者における医療・介護サービス利用の実態. 第83回日本公衆衛生学会総会, 札幌. 査読有
- 4. 北村智美、浜田将太、若林律子、土屋瑠見子、石川智基、田口怜奈、吉江悟、近藤克則。(2024.10.29-31). 自宅で死亡した高齢者の医療介護サービスの利用状況: 医療介護レセプトデータ分析. 第83回日本公衆衛生学会総会, 札幌. 査読有
- 5. 吉江悟。(2024.8.24-25).「場」の力を活かした地域看護: ビュートゾルフ柏の取組み.. 第29回日本在宅ケア学会学術集会, 鎌倉. 査読無
- 6. 吉江悟、藤野泰平、北村充。(2024.8.23-24). 看護・介護職のフラットなチームマネジメント: オランダのビュートゾルフに学んだ約10年の経験を共有する. 第28回日本看護管理学会学術集会, 名古屋. 査読無
- 7. 吉江悟。(2024.7.20-21). 24時間対応の工夫: 訪問看護の立場から. 第6回日本在宅医療連合学会大会, 千葉. 査読無

● 受賞歴

- 1. 北村智美、五十嵐歩、野口麻衣子、吉江悟、山本則子。(2024). 日本在宅ケア学会奨励論文賞(論文名: 慢性呼吸器疾患患者に対する看護師・理学療法士・作業療法士による在宅呼吸リハビリテーションの実践に関する質的研究).

吉澤 裕世

● 論文等

【学術雑誌等(紀要・論文集等も含む)に発表した論文】

- 1. Tanaka T, Lyu W, Yoshizawa Y, Son BK, Iijima K. "Kami-Chigiri" (Newspaper Tear-Off) Test: Simple Screening Method for Assessing Muscle Weakness among Community-Dwelling Older Adults. J Frailty Aging. 2024;13(4):586-587. doi: 10.14283/jfa.2024.62. 査読有
- 2. Lyu W, Tanaka T, Son BK, Yoshizawa Y, Iijima K. Comparison of non-exercise physical activity and exercise habits for preventing frailty among community-dwelling older adults: A 7-year follow-up from the Kashiwa cohort study. Arch Gerontol Geriatr. 2025;131:105769. doi: 10.1016/j.archger.2025.105769. 査読有
- 3. Son BK, Nanao-Hamai M, Umeda-Kameyama Y, Lyu W, Tanaka T, Yoshizawa Y, Akishita M, Iijima K. Ikigai is associated with lower incidence of frailty during a 5-year follow-up in older women: The possible role of interleukin-6. Arch Gerontol Geriatr. 2025 Apr;131:105776.

doi: 10.1016/j.archger.2025.105776. 査読有.

4. Lyu W, Tanaka T, Son BK, Yoshizawa Y, Akishita M, Iijima K. Validity of a simple self-reported questionnaire "Eleven-Check" for screening of frailty in Japanese community-dwelling older adults: Kashiwa cohort study. Arch Gerontol Geriatr. 2024;117:105257. DOI: 10.1016/j.archger.2023.105257. 査読有

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 田中友規, 吉澤裕世, 津下一代, 飯島勝矢. 「後期高齢者の質問票」で評価したフレイル状態と介護認定・医療費・介護費との関連: 複数自治体の医療・介護の一体的データベースによる前向き検討. 第66回日本老年医学会学術集会. 名古屋, 2024. 6. 13-15. 査読無
2. 菅谷賢司, 北村佳代, 阿部貴史, 宮島貴代子, 恒岡真由美, 田中友規, 吉澤裕世, 呂偉達, 孫輔卿, 飯島勝矢. フレイル予防活動へのインセンティブポイント制度とフレイル傾向・医療費・介護給付費との関連. 第66回日本老年医学会学術集会. 名古屋, 2024. 6. 13-15. 査読無
3. 呂偉達, 田中友規, 孫輔卿, 吉澤裕世, 飯島勝矢. 地域在住高齢者において, 運動習慣および中高強度の非運動性活動がフレイル予防に与える効果の検証: 柏スタティーの縦断調査. 第66回日本老年医学会学術集会. 名古屋, 2024. 6. 13-15. 査読無
4. 呂偉達, 田中友規, 孫輔卿, 吉澤裕世, 飯島勝矢. 地域在住高齢者において, 中高強度の非運動性活動および運動習慣がサルコペニア予防に与える効果の検証: 柏スタディの縦断調査. 第11回日本サルコペニア・フレイル学会大会. 東京, 2024. 11.2-3. 査読無

● 受賞歴

1. 2025 年 3 月「Top Cited Article 2023-2024 Geriatrics & Gerontology International」(Tanaka T, Yoshizawa Y, Sugaya K, Yoshida M, Bokyoung S, Lyu W, Tsushita K, Iijima K. Predictive validity of the Questionnaire for Medical Checkup of Old-Old for functional disability: Using the National Health Insurance Database System)

WINGS-GLAFS

高齢社会総合研究国際卓越大学院

World-leading Innovative Graduate Study Program in Gerontology:

Global Leadership Initiative for Age-Friendly Society

(略称：WINGS-GLAFS)

プログラムの概要	104
プログラム担当教員	107
応募状況と合格者	109
WING-GLAFS の全体像	110
学生の業績	111

WINGS-GLAFS

プログラムの概要

本プログラムは、日本がリードする人類共通の新課題「高齢社会問題」における、基盤的総合知の習得と、最前線でのフィールド体験を通して、自らの専門領域研究が、どのように高齢社会の諸課題と接続し得るのかを理解し、自らの研究の社会対応力の強化を図ることを目的としています。このため、直接に高齢者を研究対象とする方に限らず、高齢社会の何らかの課題に高い関心を持ち、その解決に貢献する研究に取り組む方を、対象としています。

■1_プログラム参画専攻(2024年度)

本プログラムは、以下の専攻に所属する学生が履修することができます。

【工学系研究科】	全専攻
【人文社会系研究科】	社会文化研究専攻
【教育学研究科】	総合教育科学専攻、学校教育高度化専攻
【法学政治学研究科】	総合法政専攻
【総合文化研究科】	広域科学専攻
【農学生命科学研究科】	生産・環境生物学専攻、応用生命化学専攻、 水圏生物科学専攻、農業・資源経済学専攻、 生物・環境工学専攻、応用動物科学専攻、 獣医学専攻
【医学系研究科】	社会医学専攻、生殖・発達・加齢医学専攻、 外科学専攻、国際保健学専攻、 健康科学・看護学専攻
【新領域創成科学研究科】	人間環境学専攻、社会文化環境学専攻、
【情報理工学系研究科】	知能機械情報学専攻
【学際情報学府】	学際情報学専攻

■2_カリキュラム

<必修・座学>

高齢社会総合研究学通論Ⅰ・Ⅱ(1単位×2科目・2単位)

・俯瞰力の修得

高齢社会の基礎を「心と体の健康」、「社会環境」の2側面から効率的に理解し、「俯瞰力」を養います。

<必修・演習>

・現場解決力(1単位×1科目・1単位)

活力ある超高齢社会を実現するためには、分野横断的専門家のチームと地域住民、行政、企業等による協働的活動を主導し、様々な現場の様々な課題を解決する力を備えた多様な人材が必要であり、上記の座学に加えて、現場で分野横断的な取り組みに加わり、体験する。

<選択必修> 高齢社横断科目群(4単位以上)

・領域連携力の修得

超高齢社会の視点で、自らの専門領域あるいは他の領域を、各専攻から提供される幅広い科目から選択して学び、「領域連携力」を養います。



高齢社会演習
2024年度 プログラムNo.2403
「フレイル予防」



■担当教員：松島勝也(本学ビジネス研究センター・教授)、藤瀬剛(未来ビジョン研究センター・特任専任教授)
研究支援(高齢社会総合研究機構・特任助教)

■概要：高齢者が自らたくましく生きるためには、「健康増進→フレイル(虚勢)予防」が重要であり、積極的なまづくりが必要である。東大IOGは2015年に地域住民主体のフレイルチェックプログラムを開発、自ら手であるフレイルサポーター(地域高齢者)を養成し、地域において、住民主体的に高齢者がフレイルの兆候に気づき、フレイル予防活動を持続的に進めるように促している。

2024年度のフレイル予防の演習は「フレイルの兆候(虚勢)に気づきながら、IOGが長年に行っているユースト研究『金魚とふらしたの健康増進調査(遠征・船中版)』」に参画する内容である。船中版は、一つの会場において身体測定、高血圧の検診、調査票による日常生活の調査とともに、同席者に質問に答えることでチェック、回答する仕組みである。

2024年度船中版では「(観察員に注目した高齢女性のフレイル早期検知の指標と予防策の開発)」プロジェクトに関連してデータ収集や分析を行い、遠征・船中版のフレイル早期検知の成果を試みる。

本演習を通じて、多様な地域在住高齢者と接して、フレイル予防の重要性を知り、総合知(人文社会、情報理工学、工学、医学、新領域など)の取り組みを学ぶことで、自らの研究に対する考え方や分野横断連携の作法を学ぶ。



フレイル予防



高齢社会演習
2024年度 プログラムNo.2411
「Bill Sage教授 来日講演会」



■担当教員：畑中綾子(東京大学高齢社会総合研究機構研究員)

■概要：2025年3月に、アメリカの著名な医事法学者William Sage教授が来日されます。この機会に、「高齢社会と法ワークショップ2025 March」に招かれた2つの連続講演ワークショップを開催いたします。

Sage教授は法学博士と法学博士のDouble Degreeで、クリントン政権時代の医療保険改革の際にアドバイザーを務めておられました。第1講演は、高齢社会における医療安全、第2講演はコロナ禍での医療政策全般に関する問題についてお話いただき、ご参加の皆様とごくばらんな議論をする企画です。

第一講演14:00-17:00
合衆国の医療過誤法における医療安全をめぐる最近の傾向(飯塚)(日本語サマリーあり)
Medical Safety-Trends in the US Law of Medical Negligence (Malpractice)(Tentative title)

第二講演18:00-20:00
アメリカ高齢者法・医療政策への新型コロナウイルスの影響(飯塚)(同時通訳あり)
American elder law and health care effected by COVID-19

■日程：2025年3月6日(木) 第1講演 14:00-17:00、第2講演 18:00-20:00
※参加方法は別添(工学部8号館702号室 ライブラリー)もしくはオンライン

■申し込み方法：上記参加フォームから開日までに申し込むこと
参加申込フォーム(申込締切:3月4日17時まで)
<https://forms.gle/7d9qv7rF6N0k6w5>

■ポイントについて：第一講演で3P、第二講演で2Pのポイントを付与する。
次年度夏学期のイベント申請フォームが配布された際に、忘れずに申請すること。

Bill-Sage教授・来日講演会



高齢社会演習
2024年度 プログラムNo.2406
「リビングラボ」



■担当教員：秋山弘子(高齢社会総合研究機構客員教員)、吉田淳子(高齢社会総合研究機構学術専門職員)

■概要：リビングラボとは、生活の現場(住んでいる自宅、地域など)において、企画段階から住民を巻き込み、企業、自治体、大学、各種団体等が互いの強みを持ちより、生活者起点で暮らしを豊かにする製品やサービス、社会の仕組み等の新たな価値を創出する活動です。東京大学高齢社会総合研究機構は、東京都、今後自治体内、NPO法人メソサポーター・連携委員会、三井住友FG等と「暮らしのラボ」を運営し、高齢社会の課題を解決するものやサービスを創り出す活動を行っています。

本演習では、大学・自治体・企業・組織等の約400団体900名が登録し、リビングラボに関する研究発表や意見交換、交流を行う「リビングラボ研究交流会」への参加機会を提供します。

その他、リビングラボに関するイベント、テストベッドにおけるワークショップやインタビュー等への参加機会も提供します。

■日程：リビングラボ研究交流会は年2-3回開催を予定、日時が決まり次第メールにて告知。実施はオンラインまたは本邦キャンパス。
リビングラボイベントの開催は日時未定。日時が決まり次第メールにて告知。原則現地(鎌倉市内)での参加。

■留意事項：
・現地開催の場合、交通費は別途支給する。
・リビングラボ研究交流会への参加は上座となる。
・リビングラボイベントやテストベッドにおける活動に参加上座を設定する場合がある。
・告知・募集はhomeroom等を経由して行う。

リビングラボ



高齢社会演習
2024年度 プログラムNo.2404
「G-tech」



■担当教員：二瓶美菜、菅原京子、藤岡万祐、三浦貴大、森謙一郎、吉田淳子、吉崎れいな、カンスーイン、伊藤研一郎

■概要：近年、高齢化社会に起因する社会的課題に対して、AIやIoTの利活用による課題解決に関心が向けられている。一方で、活力ある高齢者が増加するとともに高齢者の生活スタイルニーズが多様化しているため、同じ特性としながら高齢者の生活に十分に支援できないことが明らかとなっている。そのため、高齢者が自律的に自身の課題解決に取り組める柔軟性を持った社会環境のあり方について検討が必要である。本演習では、高齢者が直面する生活課題を解決するに、高齢者が自律的なQoL向上を目指すことが可能な生活環境(7×24時間社会生活支援)の開発を行う。具体的な活動として、①高齢者の生活スタイルニーズを把握する「リアル調査」などの活動と、②実証実験を通じた社会実装の検討の活動である。AIやIoTのみならず、VRやメタバースなどの最先端のテクノロジーを活用した学際プロジェクトの課題などを演習の対象とする。具体的にはジェントロジー・アカデミーのいくつかの講義や研究プロジェクトへの参加や、共同センターや情報科学研究センターの施設の一部を含む。また、プログラムを主軸として得られた調査結果は学術を主として論文執筆・国際会議発表をサポートし、著者や発表者の活動もプログラムに含める。

■日程：10月 日程別演習(1h) G-techガイダンス@ライブラリー
10月 日程別演習(2h) 施設校中実大・給の巻 見学会
10月 日程別演習(2h) 施設校中実大実習大 見学会
11月-12月 日程別演習(2h) 調査実験・予備実験
04-07月 日程別演習(2h) 実証実験・実証実験
03月 日程別演習(2h) 秋学期との・春学期計画の相談会
日程別演習(2h) ジェントロジー・アカデミー・情報システムで解決の例

■留意事項：
・上記プログラム出席希望者は必ずG-techガイダンスを受講すること(録画対応可)
・調査活動や実証実験の計画・準備会議(ライブラリー/zoom開催)などに参加すること
・日程が決まっていなところは、後援者と相談しながら決定する
・交通費、研究活動経費は別途支給
・履修希望者は伊藤 (kito@naga-tekyo.ac.jp)・吉崎 (yoshizaki@mfg.t.u-tokyo.ac.jp)までご連絡をすること

G-tech

<全体研究発表会> 多領域連携

(演習発表／博士論文進捗発表会)

演習履修者には、年に2回の全体研究発表会を設け、それぞれの演習の成果を発表する。加えて、博士後期課程及び4年制博士課程の学生は博士論文進捗状況の発表を行い、異分野の研究手法等を学び合う場をつくる。

■3_開講科目

2024年度開講科目一覧

カリキュラム一覧								
科目番号	開講科目名称・講義別名	単位数	開講区分	主担当教員名	曜日	時限 (開始・終了)	必修 選択必修	開講日講義室名 その他特記事項
講義（必修:2単位）								
3799-461	高齢社会通論1	1	A1	飯島	水	5限 16:50-18:35	必修	10/16～12/4オンライン (初回はハイブリッド)
3799-462	高齢社会通論2	1	S2	大月	水	5限 16:50-18:35	必修	6/5～7/17 オンライン
演習（必修：1単位）								
3799-463	高齢社会演習	1	通年	各教員	－	集中	選択必須	開催日、開催場所は 各プログラム 担当教員が指示 WINGS-GLAFS生は この単位を履修
3799-234	高齢社会総合研究学実習Ⅰ	2	通年	各教員	－	集中	選択必修	同上
3799-235	高齢社会総合研究学実習Ⅱ	2	通年	各教員	－	集中	選択必修	同上
3799-236	高齢社会総合研究学実習Ⅲ	2	通年	各教員	－	集中	選択必修	同上
3799-237	高齢社会総合研究学実習Ⅳ	2	通年	各教員	－	集中	選択必修	同上
3799-238	高齢社会総合研究学実習Ⅴ	2	通年	各教員	－	集中	選択必修	同上
3799-239	高齢社会総合研究学実習Ⅵ	2	通年	各教員	－	集中	選択必修	同上
3799-240	高齢社会総合研究学実習Ⅶ	2	通年	各教員	－	集中	選択必修	同上
3799-241	高齢社会総合研究学実習Ⅷ	2	通年	各教員	－	集中	選択必修	同上
3799-259	高齢社会総合研究学演習Ⅹ	1	通年	各教員	－	集中	選択必修	同上
講義（選択必修: 4単位以上）								
●各参画専攻から提供された高齢社会横断科目群（別表）の中から選択して合計4単位以上を履修する ●以下はIOG提供の高齢社会横断科目群を示す（リーディング大学院履修生で特論未履修の者は下記を履修する）								
3799-225	高齢社会総合研究学特論Ⅳ 産学官民連携で作り上げる 高齢者の健康と地域のあり方	2	A2	飯島 孫	水	5限-6限 16:50-20:30	選択必修	12/11～1/22 オンライン (一部ハイブリッドの回あり)
3799-226	高齢社会総合研究学特論Ⅴ 地域農業マネジメント	2	A2	八木	火 金	5限 16:50-18:35	選択必修	(週2回)オンライン
3799-227	高齢社会総合研究学特論Ⅵ 高齢者法	2	A1A2	樋口	木	3限 13:00-14:45	選択必修	オンデマンド (一部オンラインの回あり)
3799-231	高齢社会総合研究学特論Ⅹ ジェロントテクノロジー	2	A1A2	二瓶 檜山	木	5限-6限 16:50-20:30	選択必修	オンライン

実習・演習Ⅹはリーディング大学院履修生のみ

■4_プログラムの修了要件

本プログラムでは、修士課程1年次修了時点のQualifying Examination 1 (QE1)、修士課程2年次修了時点のQualifying Examination 2 (QE2)、並びに博士課程修了時のFinal Examination (FE) の合計3回審査を行います。

■修士課程修了時 資格審査(QE: Qualifying Examination)

- ・「単位要件」等によって審査します。
- ・単位要件：通論（必修）1単位以上の取得。

■修士課程修了時 資格審査(QE2: Qualifying Examination2)

- ・「単位要件」、「学振要件」、「博士課程進学の確認」によって審査します。
- ・単位要件：通論（必修）2単位の取得と高齢社会横断科目群2単位以上の取得。
- ・学振要件：日本学術振興会（JSPS）特別研究員（DC1）に申請。
- ・博士課程進学の確認：面接により博士後期課程進学予定を確認。

■博士課程修了時 修了審査(FE: Final Examination)

FE では、「単位要件」、「発表要件」、「学振要件」、「博論要件」によって審査します。この審査に加え、所属専攻における博士論文の審査に合格した場合、「高齢社会総合研究国際卓越大学院プログラム修了証」が授与されるとともに、所属専攻が授ける博士の学位記に「高齢社会総合研究国際卓越大学院プログラム修了」という認定が付記されます。

- ・単位要件：通論(必修) 2単位と、実習(必修) 1単位以上と、高齢社会横断科目群(選択必修) 4単位以上、合計7単位以上取得
- ・発表要件：博士課程在籍期間中の各学期末に、指定された回数の博論研究進捗発表
- ・学振要：日本学術振興会(JSPS)特別研究員(DC2)に申請
- ・博論要件：提出した博士論文の発表を通じて、高齢社会の基礎の理解を踏まえているかを審査

■5_経済的支援(卓越RA)

経済的支援は、所定の様式にて申請した者に対し、選考委員会で審査し、給付額を決定し、卓越RAとして委嘱します。

修士課程2年次、博士後期課程及び4年制博士課程のコース生には月額18万円を上限に支給します。

プログラム担当教員

*所属・職名は2025年3月末現在

氏名	所属（研究科・専攻等）・職名
加藤 泰浩	工学系研究科・研究科長、システム創成学専攻・教授（プログラム責任者）
大月 敏雄	工学系研究科建築学専攻・教授、高齢社会総合研究機構・副機構長（プログラムコーディネーター）
飯島 勝矢	高齢社会総合研究機構・機構長／未来ビジョン研究センター・教授
祐成 保志	高齢社会総合研究機構・副機構長／大学院人文社会系研究科社会文化研究専攻・准教授
井口 高志	大学院人文社会系研究科 社会文化研究専攻・准教授
高橋 美保	大学院教育学研究科 総合教育科学専攻・教授
北村 友人	大学院教育学研究科 学校教育高度化専攻・教授
加藤 淳子	大学院法学政治学研究科 総合法政専攻・教授
横山 ゆりか	大学院総合文化研究科 広域科学専攻・教授
福田 大輔	大学院工学系研究科 社会基盤学専攻・教授
松田 雄二	大学院工学系研究科 建築学専攻・准教授
小泉 秀樹	大学院工学系研究科 都市工学専攻・教授
柳澤 秀吉	大学院工学系研究科 機械工学専攻・准教授
津本 浩平	大学院工学系研究科 化学生命工学専攻・教授、工学系研究科・副研究科長
横野 泰之	大学院工学系研究科 国際工学教育推進機構・上席研究員
太田 順	大学院工学系研究科 精密工学専攻・教授
青山 和浩	大学院工学系研究科 システム創成学専攻・教授
小紫 公也	大学院工学系研究科 航空宇宙工学専攻・教授
峯松 信明	大学院工学系研究科 電気系工学専攻・教授
求 幸年	大学院工学系研究科 物理工学専攻・教授
吉田 英弘	大学院工学系研究科 マテリアル工学専攻・教授
山口 和也	大学院工学系研究科 応用化学専攻・教授
伊藤 大知	大学院工学系研究科 化学システム工学専攻・教授
森本 淳平	大学院工学系研究科 化学生命工学専攻・講師
檜山 敦	大学院工学系研究科 先端学際工学専攻・特任教授
藤井 康正	大学院工学系研究科 原子力国際専攻・教授
酒井 崇匡	大学院工学系研究科 バイオエンジニアリング専攻・教授
長門石 暁	大学院工学系研究科 バイオエンジニアリング専攻・准教授
茂木 源人	大学院工学系研究科 技術経営戦略学専攻・教授
塩見 淳一郎	大学院工学系研究科 附属総合研究機構・教授
細井 文樹	大学院農学生命科学研究科 生物・環境工学専攻・教授
霜田 政美	大学院農学生命科学研究科 生産・環境生物学専攻・教授

プログラム担当教員

*所属・職名は2025年3月末現在

氏名	所属(研究科・専攻等)・職名
三坂 巧	大学院農学生命科学研究科 応用生命化学専攻・准教授
潮 秀樹	大学院農学生命科学研究科 水圏生物科学専攻・教授
八木 洋憲	大学院農学生命科学研究科 農業・資源経済学専攻・准教授
高橋 伸一郎	大学院農学生命科学研究科 応用動物科学専攻・教授
堀 正敏	大学院農学生命科学研究科 獣医学専攻・教授
橋本 英樹	大学院医学系研究科 公共健康医学専攻・教授(同研究科社会医学専攻兼任/健康科学・看護学専攻兼任)
小川 純人	大学院医学系研究科 生殖・発達・加齢医学専攻・教授
山田 雄大	大学院医学系研究科 外科学専攻・講師
山本 則子	大学院医学系研究科 健康科学・看護学専攻・教授
橋爪 真弘	大学院医学系研究科 国際保健学専攻・教授
安琪	大学院新領域創成科学研究科 人間環境学専攻・准教授
割澤 伸一	大学院新領域創成科学研究科・副研究科長 人間環境学専攻・教授
岡部 明子	大学院新領域創成科学研究科 社会文化環境学専攻・教授
二瓶 美里	大学院情報理工学系研究科 知能機械情報学専攻・教授
鳴海 拓志	大学院情報理工学系研究科 知能機械情報学専攻・准教授
越塚 登	学際情報学府 学際情報学専攻・教授
濱田 健夫	学際情報学府 学際情報学専攻・特任准教授
孫 輔卿	未来ビジョン研究センター・特任准教授

プログラムメンバー

氏名	所属(研究科・専攻等)・職名
秋山 弘子	未来ビジョン研究センター・客員教授
高瀬 麻以	工学系研究科建築学専攻・特任研究員
田中 友規	工学系研究科建築学専攻・特任助教
コスタンティーニ ヒロコ	未来ビジョン研究センター・特任助教(2025年1月まで)
高齢社会総合研究機構GLAFS事務局	

応募状況と合格者

	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
プログラム募集定員数	10人	14人	10人	10人	10人
応募学生数	7人	31人	26人	42人	38人
うち留学生数	0人	10人	8人	15人	2人
うち自大学出身者数	2人(0人)	13人(0人)	9人(0人)	14人(0人)	22人(0人)
うち他大学出身者数	5人(0人)	18人(10人)	17人(8人)	28人(15人)	16人(2人)
うち社会人学生数	4人(0人)	3人(3人)	5人(5人)	10人(6人)	7人(1人)
うち女性	3人(0人)	9人(4人)	6人(3人)	19人(8人)	11人(0人)
合格者数	7人	14人	10人	10人	10人
うち留学生数	0人	2人	1人	1人	0人
うち自大学出身者数	2人(0人)	10人(0人)	6人(0人)	7人(0人)	8人(0人)
うち他大学出身者数	5人(0人)	4人(2人)	4人(1人)	3人(1人)	2人(0人)
うち社会人学生数	4人(0人)	1人(1人)	0人(0人)	1人(0人)	2人(0人)
うち女性	3人(0人)	5人(1人)	1人(0人)	5人(1人)	5人(0人)
②のうち受講学生数	7人	14人	10人	10人	10人
うち留学生数	0人	2人	1人	1人	0人
うち自大学出身者数	2人(0人)	10人(0人)	6人(0人)	7人(0人)	8人(0人)
うち他大学出身者数	5人(0人)	4人(2人)	4人(1人)	3人(1人)	2人(0人)
うち社会人学生数	4人(0人)	1人(1人)	0人(0人)	1人(0人)	2人(0人)
うち女性	3人(0人)	5人(1人)	1人(0人)	5人(1人)	5人(0人)
プログラム合格倍率(①応募学生数/②合格者数) (小数点第三位を四捨五入)	1.00倍	2.21倍	2.6倍	4.2倍	3.8倍
充足率(合格者数/募集定員)	70%	100%	100%	100%	100%

※ 博士入学生 2020年度、2021年度：3年制博士1年次 各1名、2022年度：4年制博士1年次 1名、2023年度：0名、2024年度：1名

※()は留学生の人数

※ 2021年度は、2回(4月、9月)募集の合計

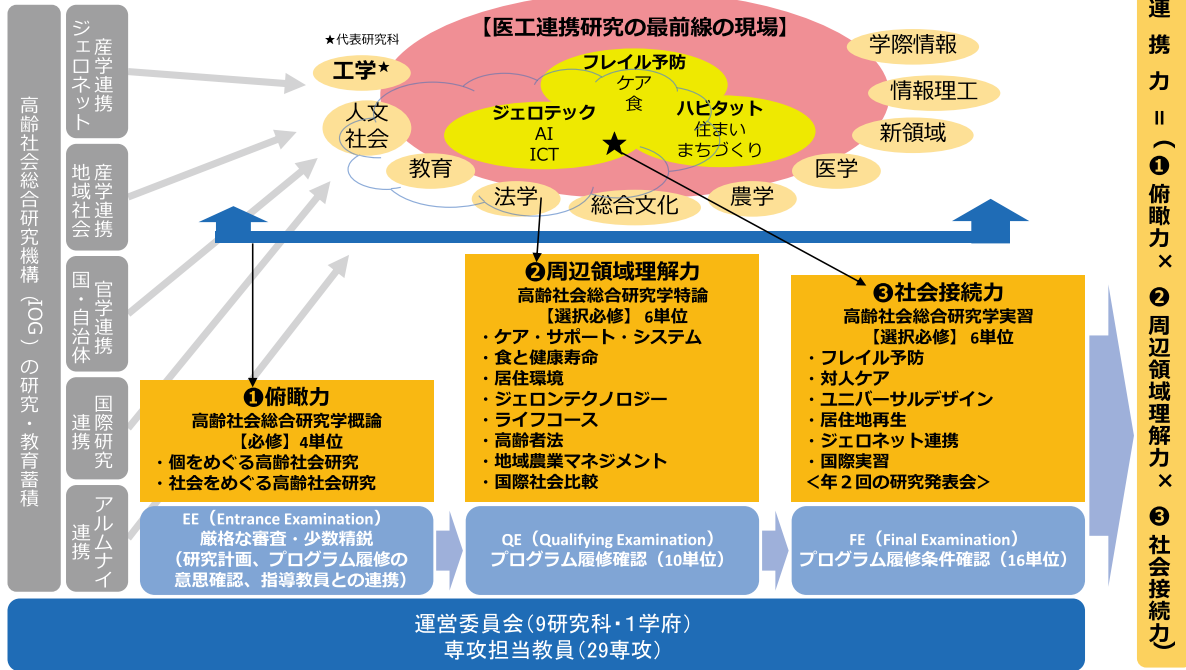
※各年度：各年度末現在

WING-GLAFS の全体像

■ 2020 年スタート時

高齢社会総合研究国際卓越大学院 WINGS-GLAFS

日本を皮切りに世界中のあらゆる領域でデフォルトとなっていく高齢社会特有の課題解決に向けて、
高齢社会総合研究学（ジェロントロジー）の体系を踏まえつつ、医工連携研究の最前線の現場で
俯瞰力、周辺領域理解力、社会接続力を育みながら、研究の多領域連携力を身につけた人材



■ 2022 年度～



学生の業績

GLAFS の学生が 2024 年度に発表した研究論文や学会発表などの業績について紹介します。

リーディング生

田中 萌子

● 論文等

【学術雑誌等（紀要・論文集等も含む）に発表した論文】

1. Ohyama, T., Tahara-Sasagawa E., Yonezawa, K., Usui, Y., Tanaka, M., Ohori, R., Fujita, M., Matsuzaki, M., Suetsugu, Y., Sato, Y., Haruna, M., & The J-PEACH Study Group As Of 2020-2023. (2025) Physical activity in the second trimester of pregnancy in relation to employment and teleworking availability: a multicenter study. Journal of Japan Academy of Midwifery: JJAM. (Accepted). 査読有
2. Fukuhara, A., Hikita, N., Suetsugu, Y., Sato, Y., Ohori, R., Tanaka, M., Fujita, M., Matsuzaki, M., Sasaki, S., & Haruna, M. (2025). Factors related to dissatisfaction with body shape among pregnant Japanese women: A prospective observational study. Journal of Japan Academy of Midwifery: JJAM. (Accepted). 査読有
3. Aoyama, S., Haruna, M., Yonezawa, K., Tahara-Sasagawa, E., Usui, Y., Ohori, R., Tanaka, M., Fujita, M., Matsuzaki, M., Suetsugu, Y., Sato, Y., & Takeuchi, A. (2025). Factors Associated With Inadequate Gestational Weight Gain: A Prospective Multicenter Cohort Study. Nursing & health sciences, 27(1), e70047. 査読有
4. Nakano, K., Tanaka, M., Nishihara, N., Usui, Y., Yonezawa, K., Hikita, N., Tahara-Sasagawa, E., Sasaki, S., Nagamatsu, T., Haruna, M., & Tokyo Area Members Of The J-Peach Study Group As Of 2019-2022 (2025). Association of Overnight Fasting Duration and Meal Frequency with Glucose and Lipid Metabolism During Pregnancy: A Cross-Sectional Study. Nutrients, 17(5), 807. 査読有
5. Kishino, S., Yonezawa, K., Haruna, M., Usui, Y., Sasaki, S., Fujita, M., Matsuzaki, M., Sato, Y., Suetsugu, Y., Ohori, R., Tanaka, M., & Aoyama, S. (2025). Relationship between maternal egg consumption during lactation and the risk of developing egg allergies in 12-month-old infants: A multicenter cohort study. Japan Journal of Nursing Science: JJNS, 22(1), e12631. 査読有

【国際学会・シンポジウムにおける発表】

1. Nishihara, N., Haruna, M., Usui, Y., Yonezawa, K., Hikita, N., Sasagawa, E., Nakano, K., Tanaka, M., Ohori, R., Aoyama, S., Sasaki, S., Fujita, M., Matsuzaki, M., Suetsugu, Y., Sato, Y. Dietary Intake of the Women with Nausea and Vomiting

during the Second Trimester of Pregnancy: A Cross-sectional Cohort Study in Japan. The 15th International Nursing Conference & 28th East Asian Forum of Nursing Scholars, Seoul, Korea. February 13-14, 2025. 査読有

2. Higuchi, M., Fujita, M., Suzuki, M., Aoyama, S., Yokoyama, M., Tanaka, M., Sato, Y., Suetsugu, Y., Haruna, M. Association between weight gained by mid-pregnancy in women who experienced early pregnancy weight loss and gestational diabetes mellitus. The 15th International Nursing Conference & 28th East Asian Forum of Nursing Scholars, Seoul, Korea. February 13-14, 2025. (Poster). 査読有
3. Tanaka, M., Haruna M., Yonezawa K., Yokoyama M., Aoyama S., Pathirathna M., Usui Y., Fujita M., Suzuki M., Hikita N., Suetsugu Y., Sato Y., Minami Y., Kishi A., Osako N., Imai Y., Fujita S., Ueda H., Kamada M. Association of accelerometer-derived sleep measures with depression and anxiety during pregnancy: a prospective observational cohort study. The American College of Sports Medicine: ACSM 2025 Annual Meeting, Atlanta, USA. May 27-30, 2025. (Poster). (Accepted). 査読有

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. Tanaka, M. Association of accelerometer-derived sleep measures with depression and anxiety during pregnancy: a prospective observational cohort study. The University of Tokyo-National Taiwan University Joint Conference 2024, Tokyo. November 28, 2024. 査読無

前田 一步

● 論文等

【学術雑誌等（紀要・論文集等も含む）に発表した論文】

1. 前田一步．近代日本都市公園における公共性の歴史的展開——振り子としての公共性．ランドスケープ研究，2024；88(2): 96-99. 査読無
2. 前田一步，堀江和正，瀬戸健太郎．「国鉄労働組合婦人部実態調査」（1952 年）の復元過程——「データセットの整備」と「資料保存」は両立しうるか．SSJ Data Archive Research Paper Series, 2024; 90: 1-43. 査読無
3. 佐藤香，堀江和正，瀬戸健太郎，前田一步．「国鉄労働組合婦人部実態調査」の復元．社会科学研究，2025；76 105-122. 査読無
4. 相澤真一，菅沼明正，前田一步．戦後労働調査資料の撮影作業．社会科学研究，2025；76: 141-158. 査読無

【著書、編著】

1. 前田一步, 団地のなかの児童公園——高度経済成長期の外遊びをめぐる生活時間データの分析. 相澤真一, 渡邊大輔, 石島健太郎, 佐藤香(編). 戦後日本の貧困と社会保障: 社会調査データの復元からみる家族. 東京大学出版会, 2024 年: pp221-241.
2. 渡邊大輔, 前田一步. 耐久消費財の普及は妻の家事時間を減らしたのか. 相澤真一, 渡邊大輔, 石島健太郎, 佐藤香(編). 戦後日本の貧困と社会保障: 社会調査データの復元からみる家族. 東京大学出版会, 2024 年: pp202-219.

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 前田一步. 昭和戦前期における街頭紙芝居の産業化と規格化——都市オープンスペース研究の視点から. 社会政策学会 第149回大会, 大分 2024.10.19-20. 査読無
2. 前田一步. 社会調査からみる戦後期・巨大公共企業の女性労働者文化——計量歴史社会学の実践. 日本社会学会 第97回大会, 京都, 2024.11.10-11. 査読無

WINGS 生

生田 大樹

● 論文等

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 生田大樹, 林勇佑, 杉山弘和. 新薬の費用対効果分析に向けた層別化医療のモデル化と評価事例. 化学工学会第55回秋季大会, 札幌, 2024. 9. 11-13. 査読無

石井 裕人

● 論文等

【学術雑誌等(紀要・論文集等も含む)に発表した論文】

1. Ishii H, Yamagishi M, Yajima J. Two Tetrahymena kinesin-9 family members exhibit slow plus-end-directed motility in vitro. Scientific Reports, 2024; 14 (1): 20993. 査読有

【国際学会・シンポジウムにおける発表】

1. Ishii H, Yamagishi M, Yajima J. Characterization of the motility of Tetrahymena kinesin 9A and 9B. 21st IUPAB Congress 2024, Kyoto, Japan, 2024. 6. 24-28. 査読有
2. Ishii H, Yamagishi M, Yajima J. Characterizing the in vitro motor properties of kinesin-9 family members from Tetrahymena. 69th Annual Meeting of the Biophysical Society, Los Angeles, USA, 2025. 15-19. 査読有

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 石井裕人, 山岸雅彦, 矢島潤一郎. Characterizing the motor properties of kinesin-9 family members from Tetrahymena. 第76回日本細胞生物学会大会, 筑波, 2024. 7. 17-19. 査読無
2. 石井裕人, 山岸雅彦, 矢島潤一郎. 絨毛虫 Tetrahymena kinesin-9A のモーター特性と細胞内機能の研究. 第57回日本原生生物学会大会, 山口, 2024. 11. 22-24. 査読無

石川 健人

● 論文等

【学術雑誌等(紀要・論文集等も含む)に発表した論文】

1. Ishikawa K, Chambers JK, Uchida K. Activation of the Wnt/ β -catenin signaling pathway and CTNNB1 mutations in canine intestinal epithelial proliferative lesions: Journal of Veterinary Medical Science, 2024; 86(7): 748-755. 査読有
2. 大慈 祐介, 前澤 誠希, 石川 健人, チェンバーズ・ジェームズ, 内田 和幸, 猪熊 壽. 23ヵ月齢のホルスタイン種初妊牛に発生した牛伝染性リンパ腫の1症例: 家畜診療, 2024; 71(6): 369-370.

【国際学会・シンポジウムにおける発表】

1. Ishikawa K, Chambers JK, Nakashima Ko, Uchida K. Histological classification and pathological studies of canine intestinal epithelial tumors. 2024 NTU-UT Veterinary Bilateral Virtual Symposium, Tokyo, Japan, 2024. 12. 5. 査読無

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 石川健人.VP-98 猫の大腸. 第34回獣医病理診断研究会, オンライン, 2024. 9. 27. 査読無
2. 島野 翔太郎, 富安 博隆, 後藤(越野) 裕子, 水野 壮司, 石川 健人, 佐久間 大樹, 豊田 泰斗, チェンバーズ ジェームズ, 内田 和幸, 栃内 亮太, 奥田 優. 健康犬におけるドキシソルピシンとエビルピシンの心毒性の比較および病理組織学的所見に基づいた心筋傷害と関連する心エコー図指標の検討. 第121回日本獣医循環器学会定例会, 大阪, 2024. 12.14. 査読無.
3. 石川 健人, チェンバーズ ジェームズ, 内田 和幸. 犬の直腸-肛門部に発生した上皮性腫瘍の病理組織学的検討. 第41回日本毒性病理学会総会及び学術集会, 三島, 2025. 1. 30. 査読無.
4. 石川健人, チェンバーズジェームズ, 内田和幸. 獣医病理学研修会 出題標本 No.1373. 猫の大腸(東京大学). 第65回獣医病理学研修会, 盛岡, 2025. 3. 27. 査読無.
5. 石川健人, チェンバーズジェームズ, 中島亘, 内田和幸. 犬の腸上皮性腫瘍の腫瘍形態と組織型および生存期間との関連性. 第12回日本獣医病理学専門家協会学術集会, 盛岡, 2025. 3. 28. 査読無.

板倉 悠真

● 論文等

【国際学会・シンポジウムにおける発表】

1. Y. Itakura, K. Kato, K. Komurasaki, H. Sekine and H. Koizumi. Analysis of Laser-Supported Detonation Wave Expanding to the Outside of a Laser Beam. ICCFD12, Kobe, Japan, 2024. 7. 14-19. 査読有

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 板倉悠真, 小紫公也, 関根北斗, 関根 北斗, Mielczarek Pascal, 村田 陽亮, 小泉宏之. レーザー支持爆轟波のユゴニオ解析における実在気体効果の影響評価. 第68回宇宙科学技術連合講演会, 姫路, 2024. 11. 5-8. 査読無
2. 板倉悠真, 小紫公也, 関根北斗, 小泉宏之. 2次元レーザー支

持爆轟波のユゴニオ解析における実在気体効果の評価．第 38 回数値流体力学シンポジウム，駒場，2024. 12. 11-13. 査読無

太田 貴士

● 論文等

【学術雑誌等（紀要・論文集等も含む）に発表した論文】

1. Takashi Ota, Keigo Matsumoto, Kazuma Aoyama, Tomohiro Amemiya, Takuji Narumi, Hideaki Kuzuoka. Ankle tendon electrical stimulation to enhance sensation of walking on a slope in walking-in-place. *Frontiers in Virtual Reality*. 2024. DOI: 10.3389/frvir.2024.1456202. 査読有
2. Takashi Ota, Tomohiro Amemiya, Hideaki Kuzuoka, Kazuma Aoyama. Electrical Stimulation of Nerve Bundles in the Lower Leg Generates Tactile Sensations on the Plantar and Dorsal Foot. *IEEE Access*. 2024. DOI: 10.1109/ACCESS.2024.3515259. 査読有

【国際学会・シンポジウムにおける発表】

1. Takashi Ota, Keigo Matsumoto, Kazuma Aoyama, Tomohiro Amemiya, Takuji Narumi, Hideaki Kuzuoka. The Effects of Electrical Stimulation of Ankle Tendons on Redirected Walking with the Gradient Gain. *ACM VRST'24*. 2024. DOI: 10.1145/3641825.3687727. 査読有
2. Takashi Ota, Hideaki Kuzuoka, Tomohiro Amemiya, Kazuma Aoyama. Insights from an Experiment Investigating the Relationship between the Effect of Electrical Stimulation of the Ankle Tendons and the User's Biological Structure, Gender, or Age. *ICAT-EGVE'24*. 2024. DOI: 10.2312/egve.20241355. 査読有
3. Ibuki Nakayama, Takashi Ota, Hiromasa Oku, Kazuma Aoyama. Developing an Optimization System for Point Current Source Positions in Transcutaneous Electrical Nerve Stimulation Using the Finite Element Method. *IEEE/SICE SII'25 (Poster)*. 2025. 査読有

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 太田貴士，葛岡英明，雨宮智浩，青山一真．有限要素法を用いた経皮電気刺激の電極配置最適化システム．第 29 回日本バーチャルリアリティ学会大会．2024. 査読無
2. 太田貴士，中村拓人，葛岡英明．五十肩の遠隔 VR リハビリテーションにおける異種互恵ケアの効果．第 29 回日本バーチャルリアリティ学会大会．2024. 査読無
3. 太田貴士，葛岡英明．Instant-NGP による実環境のモデリングおよびアバターによる身体化を用いた没入型遠隔コミュニケーションシステムの試作．第 73 回複合現実感研究会．2024. 査読無
4. 太田貴士．Neural Radiance Fields を用いた 3D 表現における物体の隠消手法の検討．第 211 回ヒューマンコンピュータインタラクション研究会．2025. 査読無
5. 太田貴士，葛岡英明，青山一真．下肢の筋の収縮を効率的に検知するための大腿部における加速度センサ配置に関する有限要素法を用いた検討．第 5 回神経刺激インタフェース研究会．2025. 査読無
6. 太田貴士．時間的に連続な複数画像から構築された NeRF 表現において人物オブジェクトを削除するパイプラインについての検討．電子情報通信学会 IE 研究会．2025. 査読無

● 受賞歴

1. 2024 年 12 月．ICAT-EGVE 2024 Best Paper Honorable Mention Award
2. 2024 年 12 月．令和 6 年ハプティクス研究会 研究発表賞（受賞発表：太田貴士，雨宮智浩，葛岡英明，青山一真．足首神経束電気刺激による足底および足背への触覚生起．第 32 回ハプティクス研究会．2024）
3. 2025 年 3 月．日本バーチャルリアリティ学会 学術奨励賞
4. 2025 年 3 月．日本バーチャルリアリティ学会 研究会貢献賞（関連発表：太田貴士，雨宮智浩，葛岡英明，青山一真．有限要素法を用いた足首の腱電気刺激における電極配置最適化の試み．第 4 回神経刺激インタフェース研究会．2024；太田貴士，雨宮智浩，葛岡英明，青山一真．足首神経束電気刺激による足底および足背への触覚生起．第 32 回ハプティクス研究会．2024；太田貴士，葛岡英明．Instant-NGP による実環境のモデリングおよびアバターによる身体化を用いた没入型遠隔コミュニケーションシステムの試作．第 73 回複合現実感研究会．2024.）

金沢 直晃

● 論文等

【学術雑誌等（紀要・論文集等も含む）に発表した論文】

1. Kawaharazuka K, Kanazawa N, Obinata Y, Okada K, Inaba M. Continuous Object State Recognition for Cooking Robots Using Pre-Trained Vision-Language Models and Black-Box Optimization. *IEEE Robotics and Automation Letters*, 2024; 9(5): 4059-4066. 査読有
2. Kawaharazuka K, Obinata Y, Kanazawa N, Okada K, Inaba M. Robotic Environmental State Recognition with Pre-Trained Vision-Language Models and Black-Box Optimization. *Advanced Robotics*, 2024; 38(18): 1255-1264. 査読有
3. Kawaharazuka K, Obinata Y, Kanazawa N, Tsukamoto N, Okada K, Inaba M. Reflex-Based Open-Vocabulary Navigation without Prior Knowledge Using Omnidirectional Camera and Multiple Vision-Language Models. *Advanced Robotics*, 2024; 38(18): 1307-1317. 査読有
4. Kanazawa N, Kawaharazuka K, Obinata Y, Okada K, Inaba M. Real-world cooking robot system from recipes based on food state recognition using foundation models and PDDL. *Advanced Robotics*, 2024; 38(18): 1318-1334. 査読有
5. 金沢直晃，河原塚健人，大日方慶樹，岡田慧，稲葉雅幸．料理レシピ記述解析と視覚 - 言語モデルの時系列利用による食材状態変化認識に基づくロボットの調理作業実行．*日本ロボット学会誌*，2024; 42(3): 266-273. 査読有
6. 河原塚健人，大日方慶樹，金沢直晃，岡田慧，稲葉雅幸．大規模視覚 - 言語モデルと遺伝的アルゴリズムに基づくロボットののための状態認識．*日本ロボット学会誌*，2024; 42(3): 259-265. 査読有

【国際学会・シンポジウムにおける発表】

1. Open X-Embodiment Collaboration. Open X-Embodiment: Robotic Learning Datasets and RT-X Models. 2024 IEEE International Conference on Robotics and Automation (ICRA2024), Yokohama, Japan, 2024.05.13-17. 査読有 <https://robotics-transformer-x.github.io/>

- Obinata Y, Jia H, Kawaharazuka K, Kanazawa N, Okada K. Remote Life Support Robot Interface System for Global Task Planning and Local Action Expansion Using Foundation Models. 2024 IEEE-RAS International Conference on Humanoid Robots (Humanoids2024), Nancy, France, 2024.11.22-24. 査読有
- Kawaharazuka K, Obinata Y, Kanazawa N, Okada K, Inaba M. Robotic State Recognition with Image-to-Text Retrieval Task of Pre-Trained Vision-Language Model and Black-Box Optimization. 2024 IEEE-RAS International Conference on Humanoid Robots (Humanoids2024), Nancy, France, 2024.11.22-24. 査読有
- Kim S, Kanazawa N, Hasegawa S, Kawaharazuka K, Okada K. Front Hair Styling Robot System Using Path Planning for Root-Centric Strand Adjustment. 2025 IEEE/SICE International Symposium on System Integration (SII2025), Munich, Germany, 2025.1.21-24. 査読有

【国内学会・シンポジウム等における発表】

- 大日方慶樹, 塚本直人, 河原塚健人, 金沢直晃, 岡田慧, 稲葉雅幸. 生活支援ロボットの現場知識に基づくオンライン動作プログラム展開. 第38回人工知能学会全国大会, 浜松, 2024.5.28-31. 査読無
- 大日方慶樹, 賈浩宇, 河原塚健人, 金沢直晃, 岡田慧. あいまいな生活支援ロボット動作記述のVLMとARデバイスを用いた提示と指示による展開. 第42回日本ロボット学会学術講演会, 大阪, 2024.9.3-6. 査読無
- 河原塚健人, 金沢直晃, 大日方慶樹, 岡田慧. 大規模視覚-言語モデルによる調理ロボットの時系列食材状態認識. 第42回日本ロボット学会学術講演会, 大阪, 2024.9.3-6. 査読無
- 河原塚健人, 大日方慶樹, 金沢直晃, 塚本直人, 岡田慧. 全天球カメラと事前学習済み視覚-言語モデルによる事前知識を必要としない反射型Open Vocabulary Navigation. 第25回SICEシステムインテグレーション部門講演会, 岩手, 2024.12.18-20. 査読無

● 受賞歴

- 2024年5月「ICRA2024 Best Conference Paper Award」(Open X-Embodiment Collaboration. Open X-Embodiment: Robotic Learning Datasets and RT-X Models) <https://2024.ieee-icra.org/awards-and-finalists/>
- 2024年5月「ICRA2024 Finalists of Best Paper Award in Robot Manipulation」(Open X-Embodiment Collaboration. Open X-Embodiment: Robotic Learning Datasets and RT-X Models) <https://2024.ieee-icra.org/awards-and-finalists/>
- 2024年12月「第25回SICEシステムインテグレーション部門講演会優秀講演賞」(河原塚健人, 大日方慶樹, 金沢直晃, 塚本直人, 岡田慧. 全天球カメラと事前学習済み視覚-言語モデルによる事前知識を必要としない反射型Open Vocabulary Navigation)
- 2025年1月「SII2025 Best Student Paper Finalist」(Kim S, Kanazawa N, Hasegawa S, Kawaharazuka K, Okada K. Front Hair Styling Robot System Using Path Planning for Root-Centric Strand Adjustment.)

北代 絢大

● 論文等

【学術雑誌等(紀要・論文集等も含む)に発表した論文】

- Fujita M, Cheng Z, Lugo S.D.R, Kitadai A, Dai Y, Fukasawa Y, Nishino N. Analysis of Medical Data and Machine-Learning Algorithms from the Perspective of Public-Goods Models of Data-Provision Decision Making. *Procedia CIRP*, 2024; 126: 3-8. 査読有
- Fujita M, Dai Y, Kitadai A, Lugo S.D.R, Cheng Z, Nishino N. Survey on Stakeholder Cooperative Behavior for Designing Voluntary Medical Data Provision Motivation Mechanisms. *Procedia CIRP*, 2024; 126: 14-19. 査読有
- Kobayashi M, Kitadai A, Sato U, Fujita M, Nishino N. Real Traffic Analysis Around Large-Scale Shopping Mall Using Game Theory. *IFIP International Conference on Advances in Production Management Systems*, 2024; 408-423. 査読有
- Kitadai A, Ogawa K, Nishino N. Examining the Feasibility of Large Language Models as Survey Respondents. 2024 IEEE International Conference on Big Data, 2024; 3858-3864. 査読有
- Takenoya Yu, Kitadai A, Nishino N. Accounting for Traffic Congestion: Heterogeneous Target Arrival Times, Uncertainty, and Monetary Incentives. 2024 IEEE International Conference on Big Data, 2024; 3880-3888. 査読有

【学術雑誌等又は商業誌における解説、総説】

- 北代絢大. 『経済セミナー』2024年8・9月号へのコメント. 経済セミナー 2024年12月・2025年1月号. 査読無

【国際学会・シンポジウムにおける発表】

- Kitadai A, Lugo S.D.R., Tsurusaki Y, Fukasawa Y, Nishino N. Can AI with High Reasoning Ability Replicate Human-like Decision Making in Economic Experiments?. 24th International Conference on Group Decision and Negotiation & 10th International Conference on Decision Support System Technology, Porto, Portugal, 2024. 6. 2-5. 査読有
- Sawazaki H, Shang X, Lee S, Kitadai A, Nishino N. Tenant allocation in shopping malls based on deferred acceptance algorithm. The 18th CIRP International Conference on Intelligent Computation in Manufacturing Engineering, Gulf of Naples, Italy, 2024. 7. 10-12. 査読有

【国内学会・シンポジウム等における発表】

- 北代絢大, 西野成昭. アンケート調査における大規模言語モデルの回答者代替可能性. 日本経営工学会秋季大会, 島根, 2024. 10. 26-27. 査読無
- 竹ノ谷悠, 北代絢大, 西野成昭. 到着時刻の異質性を組み込んだ交通状況評価の数値解析. 日本経営工学会秋季大会, 島根, 2024. 10. 26-27. 査読無
- 周澤宇, 北代絢大, 佐藤詩, 竹ノ谷悠, 西野成昭. 渋滞緩和のための効果的なBus Rapid Transit導入に関する評価検証: 実データに基づくモデル化およびシミュレーション. 日本経営工学会秋季大会, 島根, 2024. 10. 26-27. 査読無
- 北代絢大, 深澤祐援, 西野成昭. 最後通牒ゲームの大規模言

語モデルを用いたシミュレーション：バイアス補正による実験結果の再現性検証．行動経済学会第18回大会，大阪，2024.12.6-8. 査読有

- 渡邊光，北代絢大，永合由美子，李相直，夏目哲，宮原史明，藤田正典，西野成昭．新製品開発における意思決定支援ツールの提案：LLMとマッチングモデルを活用して．サービス学会第13回国内大会，大阪，2025.3.4-6. 査読有
- 周澤宇，北代絢大，佐藤詩，竹ノ谷悠，藤田正典，西野成昭．交通渋滞緩和に向けたBus Rapid Transit導入に関する評価検証：実データに基づくモデル化およびシミュレーション．サービス学会第13回国内大会，大阪，2025.3.4-6. 査読有
- 北代絢大，石川竜一郎，李相直，藤健勇，西山浩平，西野成昭．バーチャルエコノミーに向けたサービス設計の新視点：空間の差異がコミュニケーションにもたらす影響．サービス学会第13回国内大会，大阪，2025.3.4-6. 査読有
- 竹ノ谷悠，北代絢大，西野成昭．出発時刻選択モデルにおける金銭的インセンティブの渋滞緩和効果分析．サービス学会第13回国内大会，大阪，2025.3.4-6. 査読有
- 中村太一，北代絢大，西野成昭．データ収集における協力的行動の理論分析と経済実験：不完備情報下の非線形公共財ゲーム．サービス学会第13回国内大会，大阪，2025.3.4-6. 査読有

● 受賞歴

- 2024年6月「2024 GDN Springer Best Student Paper Award」(Kitadai A., Lugo S.D.R., Yudai T., Yusuke F., Nariaki N. Can AI with High Reasoning Ability Replicate Human-like Decision Making in Economic Experiments?)

日下部 紗伎

● 論文等

【学術雑誌等（紀要・論文集等も含む）に発表した論文】

- Kusakabe S., Katashima T., Sakuma I., Akagi Y., Non-linear stress relaxation and failure of time-strain separability of aqueous PEO/silica mixtures, Polymer Journal, 2025, 57(2): 163-170. 査読有
- Kusakabe S., Li X., Mayumi K., Katashima T., Sakuma I., Akagi Y., "Adsorption Suppression and Viscosity Transition in Semidilute PEO/silica Nanoparticle Mixtures under the Protein Limit", Journal of Colloid & Interface Science, in press. 査読有

小関 裕介

● 論文等

【学術雑誌等（紀要・論文集等も含む）に発表した論文】

- Koseki, Y., & Amemiya, T. Being an older person: modulation of walking speed with geriatric walking motion avatars. Frontiers in Virtual Reality, 2024; Volume 5. 査読有

【国際学会・シンポジウムにおける発表】

- Koseki, Y., Nakano, K., Narumi, T., Hideaki, K., Tomohiro, A. Co-embodied Mirroring: Preliminary Investigating the Effects of Movement Blending on Partner Impressions. Augmented Humans 2025 Posters, Abu Dhabi, UAE, 2025. 査読有

【国内学会・シンポジウム等における発表】

- 小関裕介，中野萌士，鳴海拓志．下方視野を拡大したHMDを用いたアバタの視覚情報提示が風味知覚に与える影響の基礎検討．MVE研究会，北海道，2024.9. 査読無
- 小関裕介，大野雅貴，中野萌士，葛岡英明，鳴海拓志．鳥アバタを用いたVR体験が昆虫食受容に与える影響．第29回日本VR学会大会，名古屋，2024.9. 査読無

● 受賞歴

- 2024年4月「電子情報通信学会 MVE 賞」，（小関裕介，中野萌士，鳴海拓志，葛岡英明，雨宮智浩．電子情報通信学会）

佐藤 みずき

● 論文等

【国際学会・シンポジウムにおける発表】

- Zizheng J, Sato M, Banjo K, Nakamura R. 第一次世界大戦後の国際社会の変動と日本外務省. ASIA PACIFIC CONFERENCE 2024, Beppu, Japan, 2024. 12. 1. 査読有

【国内学会・シンポジウム等における発表】

- Sato M. Diplomacy and Propaganda in the Japan-Soviet Negotiations of 1922 during the Russian Civil War. 第19回リサーチ・ショウケース，東京，2024.7.19. 査読無

島田 啓太郎

● 論文等

【学術雑誌等（紀要・論文集等も含む）に発表した論文】

- Shimada K, Sun H, Saiki T, Ito Y, Nakagawa K. Sequentially timed all-optical mapping photography with thin-plate-based spectral broadening for advanced laser ablation system compatibility. Applied Physics A, 2025; 3: 181. 査読有
- Shimada K, Saiki T, Inada Y, Nakagawa K. Single-shot ultrafast imaging of plasma dynamics induced by dual-angle ultrashort laser pulses with subpicosecond delay. Japanese Journal of Applied Physics, 2024; 63: 110901. 査読有

【学術雑誌等又は商業誌における解説・総説】

- 島田啓太郎，中川桂一：スペクトル分離バーストパルス生成技術と超高速イメージングへの応用．精密工学会誌，2024; 90: 876-879. 査読無

【国際学会・シンポジウムにおける発表】

1. Shimada K, Inada Y, Nakagawa K. Single-shot ultrafast multi-view imaging based on temporal wavelength division for capturing volumetric dynamics in femtosecond to nanosecond timescales. SPIE Photonics West 2025, San Francisco, US, 2025. 1. 28. 査読有
2. Shimada K, Sun H, Saiki T, Ito Y, Nakagawa K. Portable STAMP with thin-plate-based spectral broadening for picosecond single-shot imaging in laser ablation systems. 17th International Conference on Laser Ablation, Hersonissos, Greece, 2024. 9. 30. 査読有
3. Shimada K, Todorache D, Tanaka R, Saiki T, Inada Y, Nakagawa K. Single-shot THz-bursts-in-GHz-burst (BiBurst) imaging of picosecond dynamics in each GHz burst laser ablation. The 23rd International Conference on Ultrafast Phenomena, Barcelona, Spain, 2024. 7. 13. 査読有
4. Shimada K, Ishijima A, Saiki T, Sakuma I, Inada Y, Nakagawa K. Numerical and experimental study of spectrum shuttle for generating GHz burst pulses without sacrificing spectral ranges in advanced ultrafast imaging. 26th Photonics North Conference, Vancouver, Canada, 2024. 5. 30. 査読有

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 島田啓太郎, 中川桂一: 位相形状を個別に変調できる GHz パーストパルス生成法の開発. Optics and Photonics Japan 2024, 調布, 2024. 12. 1. 招待講演

● 受賞歴

1. 2024 年 11 月「光みらい若手奨励金（コニカミノルタ科学技術振興財団賞）」（島田啓太郎・時空間整形光パルス誘起現象の超高速 3 次元イメージング）
2. 2024 年 12 月「第 27 回光設計賞 光設計特別賞」（島田啓太郎, 中川桂一・位相形状を個別に変調できる GHz パーストパルス生成法の開発）
3. 2024 年 3 月「工学系研究科長賞（研究）」（島田啓太郎）

ジョン セギョン

● 論文等

【学術雑誌等（紀要・論文集等も含む）に発表した論文】

1. 鄭世暲. 化学物質過敏症が持つ「非可視性」と患者の「可視化作業」: 「患者」と「被害者」の間で. ソシオロギス, 2024, 48: 17-34. 査読有

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 鄭世暲. 診断を断る患者たち ——「論争中の病」である化学物質過敏症患者の事例を中心に—— 第 19 回日本社会心理学論学会, 東京, 2024.9.14.

鈴木 勇人

● 論文等

【国際学会・シンポジウムにおける発表】

1. Suzuki H. Territorial inequality in supplying graves: a case study of the role of the private sector in Tokyo metropolitan area, Japan. 35th International Geographical Congress 2024, Dublin, Ireland, 2024.8. 24-29. 査読有

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 鈴木勇人. 2000 年代以降の東京大都市圏における民間部門墓地供給と立地の変化. 2025 年日本地理学会春季学術大会, 東京, 2025. 3. 20-21. 査読無

高木咲恵

● 論文等

【国際学会・シンポジウムにおける発表】

1. Takagi S, Yoshie M and Murai A. Physiological Measurement of Music Performance Anxiety in Wind Instrument Players: A Preliminary Study. The 46th Annual International Conference of the IEEE Engineering in Medicine and Biology Society, Florida, USA, 2024. 7.15-19. 査読有

陳 童

● 論文等

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 陳童, 菊地謙, 濱田裕幸, 氷上隆三, 山下淳, 安琪. 理学療法士が足底部への介入技能を再現する刺激装置の開発—刺激力の再現と検証—. 第 37 回自律分散システム・シンポジウム, 山口, 2025. 01. 15-16. 査読無

弦本 健太郎

● 論文等

【学術雑誌等（紀要・論文集等も含む）に発表した論文】

1. Tsurumoto K, Ohnishi W, Koseki T, Van Haren M, Oomen T. Integrated Rational Feedforward in Frequency-Domain Iterative Learning Control for Highly Task-Flexible Motion Control. IEEE/ASME Transactions on Mechatronics, 2024; 29(4): 3010-3018. 査読有
2. Van Haren M, Tsurumoto K, Mae M, Blanken L, Ohnishi W, Oomen T. A frequency-domain approach for enhanced performance and task flexibility in finite-time ILC. European Journal of Control, 2024; 80(A): 101033. 査読有

【国際学会・シンポジウムにおける発表】

1. Tsurumoto K, Ohnishi W, Koseki T, Van Haren M, Oomen

T. Combined time-domain optimization design for task-flexible and high performance ILC. 2024 European Control Conference, Stockholm, Sweden, 2024. 6. 1190-1195. 査読有

2. Tsurumoto K, Ohnishi W, Hara Y, Kenjo A, Tanaka Y. On Analysis of Applying Iterative Learning Control to a Closed-Loop Three-Phase Linear Stepper-Motor. 2025 International Conference on Mechatronics Wollongong, Australia, 2025.3. 1-6. 査読有

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 弦本健太郎, 大西亘, 原嘉仁, 見城篤, 田中米太. 三相リニアステッピングモータへの反復学習制御の適用. メカトロニクス制御研究会, 東京, 2024. 9. 49-54. 査読無

田 子健

● 論文等

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 田子健, 松中玲子, 開一夫. 乳幼児における順番待ち行動への傍観者視点からの評価. 日本赤ちゃん学会第 24 回学術集会, 東京, 2024. 8. 24. 査読有
2. 田子健, 岸山健, 陳姿因, 広瀬友紀, 幕内充. 描画の描き順における「子どもらしさ」と「大人らしさ」～特徴量抽出の方法による考察～. 日本心理学会第 88 回大会, 熊本, 2024. 9. 8. 査読無
3. 田子健, 山中七菜子, 松中玲子, 開一夫. 乳児における「交代」に関する理解と評価. 日本発達神経科学会第 13 回学術集会, 所沢, 2024. 11. 9. 査読無

中島 優樹

● 論文等

【学術雑誌等(紀要・論文集等も含む) に発表した論文】

1. Nakashima Y, Yang W, Chen P, Masuda K, Hong T, Cabral H. Tryptophan intercalation in siRNA drives the formation of polymeric micelles with enhanced delivery efficiency: RSC Pharmaceuticals. 2024;1(3):513-23. 査読有

【国際学会・シンポジウムにおける発表】

1. Nakashima Y, Yang W, Cabral H. Biodegradable block copolymers incorporating tyrosinate groups demonstrate a highly effective capability for in vivo mRNA delivery. 12th World Biomaterials Congress (WBC), South Korea, 2024. 5. 26-31. 査読有

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. Nakashima Y, Cabral H. Impact of Polycation Chain Length on the Delivery Ability of PEG-Poly(glycidyl-phenylalanine)-based mRNA micelles. 第 8 回ナノマシン研究会, 東京, 2025. 1. 11. 査読無
2. Nakashima Y, Cabral H. Impact of Polycation Chain Length on the Delivery Ability of PEG-Poly(glycidyl-phenylalanine)-based mRNA micelles. The 1st BioHACK Workshop, 東京, 2025. 3. 10. 査読無

中根 葵

● 論文等

【国際学会・シンポジウムにおける発表】

1. Nakane A, Yanokura I, Hasegawa S, Yamaguchi N, Kojima K, Okada K, Inaba M. WARABI Hand: Five-fingered Robotic Hand with Flexible Skin and Force Sensors for Social Interaction. 2024 IEEE International Conference on Robotics and Automation, Yokohama, Japan, 2024. 5. 13-17. 査読有

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 長谷川 峻, 中根 葵, 山口 直也, 矢野倉 伊織, 岡田 慧, 稲葉 雅幸. 省配線で独立に読み出せる超小型センサセルを分布させた汎用高密度触覚シート. ロボティクス・メカトロニクス 講演会 2024, 宇都宮, 2024. 5. 29-6. 1. 査読無
2. 中根 葵, 山口 直也, 矢野倉 伊織, 小島 邦生, 岡田 慧. 人との手繋ぎのための対人適合可能な小型五指ロボットハンドの開発. 第 25 回計測自動制御学会システムインテグレーション部門講演会, 盛岡, 2024. 12. 18-20. 査読無
3. 山口 直也, 矢野倉 伊織, 真壁 佑, 中根 葵, 小島 邦生, 岡田 慧. 脱着可能モジュールによる知能空間展開を利用したオンデマンドタスク実行. 第 25 回計測自動制御学会システムインテグレーション部門講演会, 盛岡, 2024. 12. 18-20. 査読無
4. 矢野倉伊織, 山口直也, 中根葵, 岡田慧. 壁面着脱可能なインテリジェント省電力吸着センサモジュールによるロボットのための環境モニタリング. 第 25 回計測自動制御学会システムインテグレーション部門講演会, 盛岡, 2024. 12. 18-20. 査読無
5. 矢野倉伊織, 山口直也, 中根葵, 長谷川峻, 岡田慧. カメラによる自己位置推定と吸着ポンプの真空検知による吸着位置のオンサイトティーチングデバイス. 第 25 回計測自動制御学会システムインテグレーション部門講演会, 盛岡, 2024. 12. 18-20. 査読無
6. 矢野倉伊織, 山口直也, 中根葵, 真壁佑, 永田彩羽, 平井仁, 澤田智佳, 市倉愛子, 星野由紀子, 岡田慧, 稲葉雅幸. Riberry: 低コスト、カスタマイズ可能、小型、通信可能継続的統合の 5C フレームワークによる教育的ロボットソフトウェアハードウェアの構成法. 第 25 回計測自動制御学会システムインテグレーション部門講演会, 盛岡, 2024. 12. 18-20. 査読無

● 受賞歴

1. 2024 年 5 月「日本機械学会若手優秀講演フェロー賞」(中根葵, 指側面の近接・力覚で人の手の握り状態を推定する五指ハンドの開発と手繋ぎ動作の実現)
2. 2025 年 2 月「SI2024 優秀講演賞」(中根 葵, 山口 直也, 矢野倉 伊織, 小島 邦生, 岡田 慧. 人との手繋ぎのための対人適合可能な小型五指ロボットハンドの開発)
3. 2025 年 3 月「東京大学大学院学際情報学府 優秀修士論文コース長賞」(中根葵, 手繋ぎ可能な分布触覚五指ハンドによる状態認識と適応行動の実現)

浜中 清貴

● 論文等

【国際学会・シンポジウムにおける発表】

1. Hamanaka K, Ohnishi W, Koseki T, Asai M, Yoshihara K, Nawa M, Kato N. Vibration Suppression Feedforward Control Using Active Mass Damper for Stacker Crane. 2024 IEEE/ASME International Conference on Advanced Intelligent Mechatronics (AIM), Boston, USA, 2024. 7. 19-21. 査読有

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 浜中清貴, 大西亘, 古関隆章, 浅井満季, 箕浦康祐, 名和政道, 加藤紀彦. アクティブマスダンパの可動重量ストローク制約を陽に考慮したフィードフォワード軌道整形の一提案. メカトロニクス制御技術委員会, 東京, 2024. 12. 21. 査読無

● 受賞歴

1. 2024 年 7 月「Best Student Paper Finalist」(Hamanaka K. Vibration Suppression Feedforward Control Using Active Mass Damper for Stacker Crane)
2. 2025 年 1 月「メカトロニクス制御技術委員会 優秀論文発表賞」(浜中清貴. アクティブマスダンパの可動重量ストローク制約を陽に考慮したフィードフォワード軌道整形の一提案)
3. 2025 年 3 月「産業応用部門 優秀論文発表賞」(浜中清貴. アクティブマスダンパの可動重量ストローク制約を陽に考慮したフィードフォワード軌道整形の一提案)

平澤 郷

● 論文等

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. Muro T, Hirasawa G, Katsuma S. Molecular basis of cytoplasmic incompatibility in *Glyphodes pyloalis* induced by *Wolbachia* endosymbiont, 第 69 回日本応用動物昆虫学会大会, 千葉, 2025. 3. 査読無
2. 平澤郷, 兼田竜昇, 松田(今井)典子, 西野耕平, 小迫英尊, 木内隆史, 勝間進. Masc と協働する遺伝子量補償実行因子の探索. 日本蚕糸学会第 95 回大会, 京都, 2025. 3. 査読無
3. 平澤郷, 室智大, 勝間進. クワノメイガの人工飼料飼育法と雌雄鑑別法の開発. 第 69 回日本応用動物昆虫学会大会, 千葉, 2025. 3. 査読無

平山 陽菜

● 論文等

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 平山陽菜, 清河幸子. 見知らぬ他者への援助行動は伝播するか? (1): フィールド実験を用いた検討. 日本社会心理学会第 65 回大会, 世田谷, 2024. 8-9. 31-1. 査読有

2. 平山陽菜, 清河幸子. 見知らぬ他者への援助行動は伝播するか? (2): フィールド実験を用いた検討. 日本認知科学会第 41 回大会, 文京, 2024. 10. 12-14. 査読有

廣 佳穂里

● 論文等

【学術雑誌等(紀要・論文集等も含む)に発表した論文】

1. Maruyama T, Takahashi Y, Hiro K, Murase K, Kojima H, Okabe T, Yamauchi Y, Sato R. Discovery of Novel Binders to Sterol Regulatory Element-Binding Protein-1 by High-Throughput Screening. ACS Med Chem Lett, 2024; 15(5): 667-676. 査読有

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 廣佳穂里, 高橋裕, 丸山貴史, 岡部隆義, 小島宏建, 山内祥生, 佐藤隆一郎. HTS による新規 SREBP-1 バインダーの発見. 第 15 回スクリーニング学研究会, 2024.11.22. 査読無
2. 廣佳穂里, 高橋裕, チャンチャンウェイ, 田中和, リイテイ, 岡部隆義, 小島宏建, 倉島洋介, 佐藤隆一郎, 山内祥生. ヒトオルガノイドを用いた病態モデルの構築と腸炎改善作用を持つ天然物の同定. 日本農芸化学会大会 2025 年度大会, 2025.3.5-8. 査読無
3. 廣佳穂里, 高橋裕, チャンチャンウェイ, 田中和, 岡部隆義, 小島宏建, 倉島洋介, 佐藤隆一郎, 山内祥生. ヒト小腸オルガノイドを用いた表現型スクリーニングによる腸炎改善作用を持つ薬剤の同定. 第 24 回日本再生医療学会総会, 2025.3.20-22. 査読無

● 受賞歴

1. 2024 年 11 月「第 15 回スクリーニング学研究会ポスター賞優秀賞」(廣佳穂里, 高橋裕, 丸山貴史, 岡部隆義, 小島宏建, 山内祥生, 佐藤隆一郎. HTS による新規 SREBP-1 バインダーの発見. 一般社団法人スクリーニング学研究会)

牧野 巧

● 論文等

【国際学会・シンポジウムにおける発表】

1. Takumi Makino, Hidetoshi Sakurai, Ryuichiro Sato, Yoshio Yamauchi BMP signaling controls skeletal muscle cell maturation. Joint Conference of the 22nd Annual Meeting of Asian Oceanian Myology Center and the 10th Annual Meeting of Japan Muscle Society (AOMC-JMS 2024), Nara, 2024.9.12-15, 査読無

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 牧野 巧, 櫻井英俊, 佐藤隆一郎, 山内祥生. BMP シグナル阻害による骨格筋細胞の成熟および筋疾患への応用. 日本農芸化学会 2025 年度大会, 札幌, 2025.3.4-9. 査読無

増田 桃佳

● 論文等

【学術雑誌等（紀要・論文集等も含む）に発表した論文】

1. Masuda M, Goto C, Imai H, Sakurai S, Hidaka M, Ushimura H, Nakao R, Ohnishi M, Umezaki M. Associations of Dietary Inflammatory Index Scores with the Disability Status and Subjective Health of Older Adults Living in Non-Urban Municipalities in Nagasaki and Ishikawa Prefectures, Japan. Public Health Nutrition, in press. 査読有

【国際学会・シンポジウムにおける発表】

1. Masuda M, Goto C, Imai H, Ohnishi M, Umezaki M. Associations of the Dietary Inflammatory Index with Disability and Subjective Health among Older Adults in Japan. The 55th Asia-Pacific Academic Consortium for Public Health (APACPH) Conference 2024, Busan, South Korea, 2024. 10. 23-25. 査読無

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 増田桃佳. 非都市部に居住するニューカレドニア先住民カナックにおける家族農業の役割－「食べる」作物と「贈る」作物に着目して－. 第 42 回日本オセアニア学会研究大会, 青森, 2025. 3. 24-25. 査読無
2. 関家紗愛, 増田桃佳, 水野佑紀, 後藤千穂, 梅崎昌裕. 日本の農村漁村部における腸内細菌叢の個人間変動: 栄養素摂取パターンとの関連. 第 89 回日本健康学会総会, 東京, 2024. 10. 12-13. 査読無

松永 隆宏

● 論文等

【学術雑誌等（紀要・論文集等も含む）に発表した論文】

1. 松永隆宏, 羽藤 英二. BLE 観測の不確実性を考慮した屋内 3 次元経路選択モデルの推定. 都市計画論文集, 2024; 59(3): 1683-169. 査読有

【国際学会・シンポジウムにおける発表】

1. Matsunaga T. and Hato E. Three-Dimensional Pedestrian Route Choice Model with Quantization of Observational Uncertainty. The 27th edition of the IEEE International Conference on Intelligent Transportation Systems (ITSC 2024), Edmonton, Canada, 2024. 9. 24-27. 査読有
2. Matsunaga T. and Hato E. Joint Estimation of Latent OD Matrix and 3D Route Choice Model Across Railway Station Boundaries based on Manifold Learning. A THE 28th International Conference of Hong Kong Society for Transportation Studies (HKSTS), Hong Kong, 2024. 12.09-11. 査読有

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 松永隆宏, 羽藤 英二. 駅構内における三次元経路選択モデルの多様体推定, 第 79 回土木学会全国大会, 仙台, 2024. 9. 5-6.

査読無

2. 松永隆宏, 羽藤 英二. BLE 観測の不確実性を考慮した屋内 3 次元経路選択モデルの推定. 2024 年度都市計画学会全国大会(第 59 回論文発表会), 北九州, 2024. 11.2-3. 査読有

松村 実紗

● 論文等

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 松村 実紗, 崔 佑赫, 箕浦 有希也, 陳 家禾, 原 一晃, 中川 桂一, 正宗 賢, 桑名 健太, 小林 英津子. 仰臥位から側臥位への体位変換動作における人体モデルを用いた被介護者の軌跡推定. 第 42 回 日本ロボット学会学術講演会, 大阪, 2024. 9. 3-6. 査読無

村上 文子

● 論文等

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 村上文子, 武藤香織, 木矢幸孝, 山崎さやか, 熊田均, 山縣然太郎. 高齢者等終身サポート事業者による医療に係る意向表明文書に関する調査－中間報告－. 日本臨床倫理学会第 12 回年次大会, 東京, 2025. 3. 15-16. 査読有

山口 達寛

● 論文等

【国際学会・シンポジウムにおける発表】

1. Yamaguchi T, Sasaki K, Nakazato K. Muscle disuse leads to neuromuscular transmission impairment and atrophy of fast-twitch myofibers via neuromuscular junction degeneration in mice. The 29th Annual Congress of the European College of Sport Science, Glasgow, Scotland, 2024.7.2-5. 査読有
2. Yamaguchi T, Sasaki K, Nakazato K. Muscle unloading and immobilization have different effects on neuromuscular junction degeneration and myofiber atrophy. International Biochemistry of Exercise 2024 Conference, Limerick, Ireland, 2024.7.9-11. 査読有
3. Yamaguchi T, Sasaki K, Nakazato K. Reduced expression of Dok-7 and agrin due to mechanical unloading induces acetylcholine receptor degeneration in type 1 myofibers in mice. Joint Conference of the 22nd Annual Meeting of the Asian Oceanian Myology Center and the 10th Annual Meeting of the Japan Muscle Society, Nara, Japan, 2024.9.12-15. 査読有

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. Yamaguchi T. Morphological and functional impairments in the neuromuscular junction lead to muscle weakness associated with aging and physical inactivity. 日本体力医学

会、2024 年 9 月 2 日・佐賀、招待講演

● 受賞歴

- 2024 年 9 月 15 日・“Best of Excellence Award”, Tatsuhiro Yamaguchi, "Reduced expression of Dok-7 and agrin due to mechanical unloading induces acetylcholine receptor degeneration in type 1 myofibers in mice"

山口 敦大

● 論文等

【学術雑誌等（紀要・論文集等も含む）に発表した論文】

- 山口敦大, 木南章, 八木洋憲・水田地域の園芸振興におけるソーシャル・キャピタルの役割—経営者態度との相互作用に着目して—, 農業経済研究, 2025 年 6 月掲載予定; 97 (1 号)・査読有

【国内学会・シンポジウム等における発表】

- 山口敦大, 木南章, 八木洋憲・稲作経営への園芸作導入と拡大のプロセス—ソーシャル・キャピタルの影響経路と時点に着目した TEA 分析—, 令和 6 年度日本農業経営学会研究大会, 愛媛, 2024. 9. 査読有

横峰 真琳

● 論文等

【学術雑誌等（紀要・論文集等も含む）に発表した論文】

- Yokomine M, Morimoto J, Fukuda Y, Ueda T, Takeuchi K, Umezawa K, Ago H, Matsuura H, Ueno G, Senoo A, Nagatoishi S, Tsumoto K and Sando S. A high-resolution structural characterization and physicochemical study of how a peptoid binds to an oncoprotein MDM2. Chem. Sci., 2024; 15: 7051–7060. 査読有

【国内学会・シンポジウム等における発表】

- Yokomine M, Ueda T, Takeuchi K, Umezawa K, Ago H, Matsuura H, Ueno G, Nagatoishi S, Tsumoto K, Sando S, Morimoto J. Structural and physicochemical analysis of how a rigid peptoid binds to MDM2. 第 61 回ペプチド討論会, 名古屋, 2024. 10. 29–31. 査読無
- Yokomine M, Shiratori Y, Takaba K, Maki-Yonekura D, Yonekura K, Sando S, Morimoto J. Design of protein ligands based on heterochiral oligo(N-methylalanine) as a scaffold. 日本化学会春季年会 2025, 大阪府吹田, 2025. 3. 26–29. 査読無

● 受賞歴

- 2024 年 10 月「日本ペプチド学会 若手口頭発表賞」(Yokomine M, Ueda T, Takeuchi K, Umezawa K, Ago H, Matsuura H, Ueno G, Nagatoishi S, Tsumoto K, Sando S, Morimoto J. Structural and physicochemical analysis of how a rigid peptoid binds to MDM2)

吉澤 将嗣

● 論文等

【学術雑誌等（紀要・論文集等も含む）に発表した論文】

- 川本裕大, 竹下大介, 須藤佑介, 吉澤将嗣, 清水安夫・テニスの危機的場面における上級者の心理状態 - 感情安定型及び感情不安定型に対する自己効力感を指標とした心理的支援方法の検討 - . Journal of Kanagawa Sport and Health Science. 査読有, in press.

【国内学会・シンポジウム等における発表】

- 吉澤将嗣, 川本裕大, 竹下大介・テニスにおける戦略的リソース配分の有効性の検証 - 状態遷移モデルを用いた得点確率分散戦略 - . 第 74 回日本体育・スポーツ・健康学会大会, 福岡, 2024.8.29-31. 査読無
- 川本裕大, 吉澤将嗣, 竹下大介・テニスの試合のピンチの場面のスタッツと試合結果の関係・東京体育学会第 16 回大会, 東京, 2025.3.17. 査読無
- 川本裕大, 竹下大介, 須藤佑介, 吉澤将嗣, 清水安夫・テニスの危機的場面での感情パターンと自己効力感の関係, 東京, 2025.3.21. 査読無

● 受賞歴

- 2025 年 3 月「広域科学専攻奨励賞」(吉澤将嗣・マルコフ連鎖を用いた世界トップテニス選手のポイント取得戦略の解明)

イベント・インフォメーション

シンポジウム：IOG/IFI2024 年度シンポジウム	122
国際交流：2024 IARU	124
イベントカレンダー	126
メディア情報	127
出版物	129
沿革・組織図	130

Event Information

IOG/IFI2024 年度 シンポジウム

大学ー地域連携における「ローカル・コモンズ」を考えるシンポジウム

～ウェルビーイング／生きがいのある健幸長寿を実現できる地域コミュニティづくり～

2025 年 2 月 1 日、東京大学本郷キャンパス HASEKO-KUMA HALL にて、シンポジウム「大学ー地域連携における『ローカル・コモンズ』を考える～ウェルビーイング／生きがいのある健幸長寿を実現できる地域コミュニティづくり～」を開催した。本シンポジウムは、未来ビジョン研究センター（IFI）コミュニティ協創研究部門、高齢社会総合研究機構（IOG）及び東京大学「プラチナ社会」総括寄付講座の共催により実施され、会場およびオンラインのハイブリッド形式で行われた。

本シンポジウムの目的は、人口減少や高齢化が進行する中で、地域における「支え合い」や「共有資源（コモンズ）」の価値を再認識し、大学と地域が協働して持続可能な地域社会の姿を探ることであった。地域住民の主体的な活動や自治体による支援、そして学術的知見を融合させた形で「ローカル・コモンズ」の再構築に向けた視座を提示することをねらいとした。

当日は、高知県仁淀川町、新潟県佐渡市、鹿児島県南種子町、神奈川県秦野市など、全国の多様な地域から NPO 法人や企業、学生や行政担当者が登壇し、各地域の取り組みと課題を紹介した。また、学内を中心とした研究者による講演・討議を通じて、「生きがい」や「社会的つながり」、「自然との共生」など、ローカル・コモンズの多面的な意義について理解を深める機会となった。本シンポジウムは、今後の共同研究や社会実装の展開に向けた貴重な連携の場となった。



プログラム

<開会の辞>

福士 謙介（東京大学未来ビジョン研究センター センター長・教授）

飯島 勝矢（東京大学未来ビジョン研究センター 教授、東京大学高齢社会総合研究機構 機構長）

<第1部> 地方部の地域活動から
～住民パワーと資源の共存と融合～

●高知県仁淀川町：小松 仁視（NPO 法人フレイルサポート仁淀川 理事）
「90 歳代は伸びざかり～あなたの笑顔はわたしの幸せ・熟れたおとなのフレイルに強いまちづくり～」

●新潟県佐渡市：尾畑 留美子（尾畑酒造株式会社 専務取締役）
「酒造りは地域創り～資源・エネルギー・ヒトを循環させるサステナブル・ブリューアリー」

●鹿児島県南種子島：佐藤 南帆（種子島出身学生団体のらねこ 副代表 / 九州大学大学院総合理工学専攻 修士 1 年）
「種子島出身の大学生の視点から描く地域づくり：学生団体のらねこの活動の軌跡と広がり」

●神奈川県秦野市：可児 康一郎（NPO 法人自然塾丹沢ドン会 理事長）
「健幸育む週末の里山活動 丹沢ドン会の棚田の復元・米作り」

●岩手県：佐藤 光勇（岩手県 ふるさと振興部 県北・沿岸振興室 県北振興課長）
「地域資源の活用による新たな価値創造に向けた取組」

●東京都文京区：浦田 愛（文京区社会福祉協議会地域福祉推進係 課長）
「つながりをつくる地域の居場所づくり ～地域福祉コーディネートの視点から～」

<第2部> 東京大学からの最新知見

●田中 友規（東京大学高齢社会総合研究機構 特任助教）
「住民主体の健康長寿活動の全国基盤構築およびビッグデータからの洞察」

●大塚 彩美（東京大学未来ビジョン研究センター 特任研究員）
「CO-JUNKAN から新たに生み出す次世代型地域づくり」

<第3部> 総合討論：地方部からのパワーによる地方創生
～住民と資源の相互連関～

【パネリスト】 高知県仁淀川町 小松 仁視
新潟県佐渡市 尾畑 留美子
鹿児島県南種子島 佐藤 南帆
神奈川県秦野市 可児 康一郎
岩手県 佐藤 光勇
東京都文京区 浦田 愛
飯島 勝矢
菊池 康紀

【モデレーター】 尾下 優子
（東京大学未来ビジョン研究センター 特任講師）

<閉会の辞>

菊池 康紀（東京大学未来ビジョン研究センター 教授、
東京大学「プラチナ社会」総括寄付講座代表）



1

地方部の地域活動から ～住民パワーと資源の共存と融合～

90代は伸びざかり
あなたの笑顔は私の幸せ、離れたあんなの笑顔に似ている

健康な週末の里山活動
月間10回の里山の健康・農作業

酒造りは地域創り
酒造り・エネルギー・ヒトを結ぶネットワーク・コミュニティ

地域資源の活用による新たな価値創造に向けた取組
地域資源の活用による新たな価値創造に向けた取組

種子島出身の大学生の視点から描く地域づくり
学生生活のなかの活動の軌跡と広がり

つながりをつくる地域の居場所づくり
地域福祉コーディネーターの視点から

2025.02.01 大学・地域連携における「ローカル・コモンズ」を考えるシンポジウム ～ウェルビーイング/生きがいのある健康長寿を実現できる地域コミュニティづくり～

2

東京大学からの最新知見

住民主体の健康長寿活動の全国基盤構築およびビッグデータの活用
田中友規 先生

CO-JUNKANが5年たに住民出す次世代型地域づくり
大塚彩美 先生

Well-being 自然
自然の恵み

Co-learning
学び合いの場

フレイル予防
フレイル予防

2025.02.01 大学・地域連携における「ローカル・コモンズ」を考えるシンポジウム ～ウェルビーイング/生きがいのある健康長寿を実現できる地域コミュニティづくり～

3

総合討論：地方部からのパワーによる地方創生～住民と資源の相互連関～

ローカル・コモンズを促す、いかに
地域・持続可能性/活性化したい？

行政・民間、どう形成？
行政・民間、どう形成？

地域内外のつながりのバランス
地域内外のつながりのバランス

自分たちの未来を見える
自分たちの未来を見える

活動継続のため、何が必要？
活動継続のため、何が必要？

2025.02.01 大学・地域連携における「ローカル・コモンズ」を考えるシンポジウム ～ウェルビーイング/生きがいのある健康長寿を実現できる地域コミュニティづくり～



東大メンバーの集合写真

IARU（国際研究型大学連合）における「Aging, Longevity, and Health (ALH)」グループによる2024年の年次国際会議が、2024年9月30日から10月2日にかけて、英国オックスフォード大学にて開催されました。本会議は、加盟校が持ち回りで主催しているものであり、今年度はオックスフォード大学がホスト校を務め、世界各国から第一線で活躍する研究者、大学院生、若手研究者が参加しました。

ALH イニシアティブは2012年より

始動し、高齢化社会における課題の解決に向けた共創的な国際研究および人的交流のプラットフォームとして機能してきました。東京大学からは、高齢社会総合研究機構（IOG）および未来ビジョン研究センター（IFI）「人生100年を設計する超高齢社会まちづくり研究ユニット」がこの取り組みに継続的に参加し、国際ワークショップの開催、ネットワーク形成、若手研究者の育成に尽力しています。

今回の会議では、特定のテーマは設けず、多様なアプローチから「加齢」「健康」「地域社会」「テクノロジー」「社会経済的要因」などの課題について、幅広い学術領域からの発表が行われました。東京大学からは、飯島勝矢先生、コスタンティーニ先生、呂偉達研究員、大学院生の小関裕介氏およびYifan Li氏が参加しました。3日間にわたるプログラムには、Senior Faculty による基調講演や研究報告に加えて、Early Career Researchers（ECR）による口頭発表、ポスターセッション、グループディスカッション、ガイド付きキャンパスツアー、Ashmolean Museum 見学などが組み込まれ、参加者間の活発な交流が促進されました。

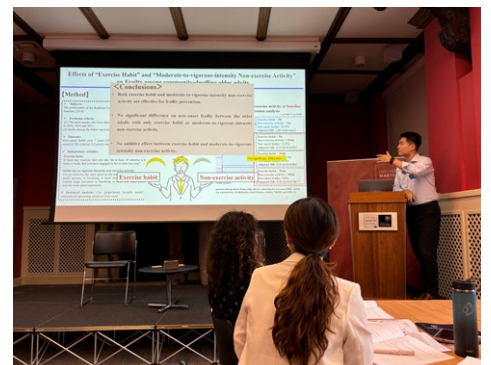
東京大学からの発表では、WINGS-GLAFS の小関裕介氏が「VR アバターの心理的影響と高齢者の食事・リモートワークへの応用」、WINGS-CFS の Yifan Li 氏が「健康モニタリングを可能にする身体スケールの電子テキスタイル」、呂偉達研究員が「住民主体のフレイル予防に向けたポピュレーションアプローチ」をそれぞれ報告しました。いずれの発表も活発な質疑応答が交われ、国際的な知見の共有とネットワークの構築が図られました。



WINGS-GLAFS 生 小関さんの発表



WINGS-CFS 生 Yifan さんの発表



呂研究員の発表



夜の懇親会

これらの研究発表は、それぞれの専門分野における先端的な視点から高齢者の QOL 向上や地域社会との連携強化を図るものであり、多国籍な参加者との質疑応答を通じて、有意義な議論が展開されました。特に、科学的知見がどのように実践や政策に貢献し得るかという点について、深い洞察が共有されました。

また、学際的・国際的な視点から高齢化社会に対する多様な解決策を模索することを目的としたグループワークや全体討議も行われ、参加者は各国の文化的・制度的背景の違いを理解し合うとともに、将来に向けた研究協力の可能性を探る貴重な場となりました。

最終日には、ALH Steering Committee Meeting および ECR ネットワークミーティングが開催され、今後の活動計画や論文共同執筆に関する検討がなされました。さらに、ECR による学術的リフレクションでは、各自の研究が持つ社会的意義や学際的応用についての意見交換が行われました。

この国際会議は、ALH 分野において今後のリーダーシップが期待される大学院生や若手研究者にとって、国際的なネットワークに加わる貴重な機会であると同時に、実践と研究を架橋する新たな視座を得る場となりました。東京大学の参加者にとっても、他国の研究動向や多様な社会課題に触れ、自身の研究活動の方向性を再考する契機となりました。



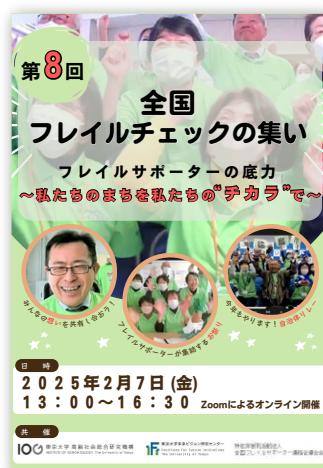
集合写真

イベントカレンダー

2024年度	
4月	● 高齢社会総合研究国際卓越大学院 WINGS-GLAFS 2024年度開講式 ● ジェロントロジー産学連携プロジェクト 2024年度開講式
6月	● 米国・メリーランド大学との若手交流会
7月	● 中国・上海市にて華東師範大学・東京大学高齢社会総合研究機構共催「日中の超高齢社会に関する学際的研究シンポジウム」開催
8月	● 豪州・国立サウス・ウェールズ大学 来訪 ● 中国・台州都市建設視察団 来訪 ● 第1回全国フレイルトレーナーの集い
9月	● ジェロントロジー産学連携プロジェクト前期総括会 ● ジェロントロジー産学連携プロジェクト<2Days Workshop> ● 「高齢社会対策大綱」公開(P32-P33参照)
10月	● IARU国際会議 英国・オックスフォード大学(P124-P125参照) ● タイ・Dr Sommach Unkhmthong、WHP視察団 来訪 ● 韓国・Cha医科学大学大学院生との交流会
12月	● 韓国・檀国大学校学生との交流会(JST主催「さくらサイエンスプログラム」にて来日)
1月	● 中国・華東師範大学との意見交流会
2月	● 第8回全国フレイルチェックの集い(オンライン)「フレイルサポーターの底力～私たちのまちを私たちの“チカラ”で～」 ● IOG/IFI2024年度シンポジウム(P122-P123参照) 「大学・地域連携における「ローカル・コモンズ」を考えるシンポジウム ～ウェルビーイング/生きがいのある健康長寿を実現できる地域コミュニティづくり～」
3月	● 高齢社会と法ワークショップ 2025 March ● ジェロントロジー産学連携プロジェクト年度総括会 ● 「社会提言」公開(P34-P35参照) ● 高齢社会総合研究国際卓越大学院 WINGS-GLAFS 2024年度修了式



全国フレイルトレーナーの集い



第8回全国フレイルチェックの集い



IOGシンポジウム

メディア情報

発売日・出演日	媒体・番組名	記事・特集名	執筆・出演者
2024/4/4, 4/18, 6/6, 7/4, 7/18, 8/1, 9/19, 10/3, 12/26, 2025/1/16	軽井沢エフエム放送	軽井沢ラジオ大学 ジェロントロジー学部	飯島勝矢
2024/4/8	読売新聞	ヨミドクター フレイル予防のポイント 大切な三つの柱は?… 東京大学高齢社会総合研究機構 飯島勝矢教授に聞く	飯島勝矢
2024/4/20	メディカルトリビューン	たった5項目でオーラルフレイルをチェック 医科・歯科の3学会が合同ステートメント発表	飯島勝矢、田中友規
2024/4/21	NHK 日曜討論	「どうする高齢期の住まい!」に専門家として出演	大月敏雄
2024/5/31	NHK Eテレ	アンコール／特集「人生レンピ ～ 料理と美容 輝く80代」 (初回放送:2024/01/19放送)	飯島勝矢
2024/6/17	NHKラジオ マイあさ! マイ!Biz・経済のイマ	高齢者のための「モザイク型就労」とは	檜山 敦
2024/7/20	日経新聞	土曜版「NIKKEIプラス1」 オーラルフレイル 口の衰え いずれ心身にも	飯島勝矢
2024/7/23	読売新聞	フレイル講座 生活行動 健康につなげる 農作業通じ交流 実験へ	飯島勝矢
2024/7/31	ライフメディコム	カレントセラピーVol.42 No.8 対談司会 日本におけるWell-beingと生きがいを追い求めて - 住民へのエンパワメント	飯島勝矢
2024/8/5	週刊 保健衛生ニュース 第2269号	「フレイル予防推進会議」発足、 先駆者の自治体や企業等が参加	辻 哲夫
2024/9/5	花王	KAO ヘルスケアレポート 巻頭インタビュー 全身の健康はお口のケアから	飯島勝矢
2024/9/7	文化放送	大垣尚司・残間里江子の大人ファンクラブ	飯島勝矢
2024/9/10	クインテッセンス出版	新聞QUINT 特別対談企画 オーラルフレイルの早期発見・治療につなげる 新指標「OF-5」とは? -なぜ、今口腔昨日が評価されるのか?	飯島勝矢
2024/10/1	さわやか vol.39 年次活動報告2024	巻頭特別寄稿 日本在宅介護協会の草創期を振り返って	辻 哲夫
2024/10/11	朝日新聞	性差分析:安心して暮らすために	孫 輔卿

メディア情報

発売日・出演日	媒体・番組名	記事・特集名	執筆・出演者
2024/11/29	日刊ゲンダイ	人生100年時代の歩き方 フレイル予防シニアの元気守る自治体&企業の取組	辻 哲夫
2024/12/18	週刊高齢者住宅新聞 第784号	第2回総会シンポジウム開催について 虚弱予防で産官学連携	辻 哲夫
2024/12/20	季刊 監事 2025.1 vol.029	特別対談 社会参加する機会をつくることで高齢者は元気になる。 高齢者と若い世代の共存を	辻 哲夫
2024/12/20	日本食糧新聞	ロッテ財団「研究助成事業」ロッテ重光学術賞に 田中友規・東大特任助教	田中友規
2024/12/24	"日本再生へのチャレンジ ー国家経営の抜本的施策をー"	社会保障制度と少子化対策を中心とする振り返りと 新しい政策モードへの転換について	辻 哲夫
2024/12/25、 2025/1/8	NHK Eテレ『きょうの健康』	骨の“新健康術”「骨折を防ぐ!ポイントは“足裏”」 NHKきょうの健康、アンコール放送	田中敏明
2024/12/26	NHK 総合 あしたが変わるトリセツショー	100歳×100人徹底取材1万年の健康パワーSP	飯島勝矢
2024/12/26	NHK 総合 あしたが変わるトリセツショー	炎症を防ぐ食生活の研究	孫 輔卿
2025/1/8	ファンデリー	フレイル予防のための“食の楽しみかた”	田中友規
2025/1/14	医学会新聞 第3569号	2025年問題として改めて問い直されていること	辻 哲夫
2025/1/25	読売新聞	「衰え」兆候 生活見直し 栄養・運動・社会参加 予防の柱	飯島勝矢
2025/2/28	集中 Medi Con 2025MAR3	高齢者が自宅で幸せに生活できる地域包括ケアの 理想モデルを追及	辻 哲夫
2025/3/2	日経新聞電子版	高齢女性「生きがいなし」は虚弱リスク 疲労感強い傾向	孫 輔卿
2025/3/5	山梨日日新聞社	認知症リスク AI分析	酒谷 薫
2025/3/13	NHK 総合 あしたが変わるトリセツショー	改訂版足・フレイル	飯島勝矢
2025/3/30	中日新聞	第3回あ・い・ち・ふ・くしシンポジウム 自分らしく生きるためには	辻 哲夫

出版物

シリーズ〈超高齢社会のデザイン〉

GLAFS講義をもとにジェロントロジーという学問の
体系化を目指すシリーズ本刊行中
(2024年度以降も続刊予定)



老化と老年病
予防・治療・医療的配慮の基礎

秋下雅弘編
東京大学出版会 2020年2月



人生100年時代の多世代共生
『学び』によるコミュニティの
設計と実装

牧野篤編
東京大学出版会 2020年9月



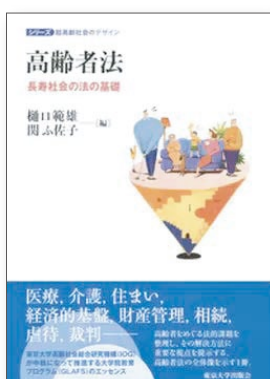
在宅医療
治し支える医療の
概念と実践

辻 哲夫
中央法規 2024年4月



臨床が変わる!
医療AI
シンプル・レクチャー・ブック

酒谷 薫
新興医学出版社 2024年7月



高齢者法
長寿社会の法の基礎

樋口範雄・関ふ佐子編
東京大学出版会 2019年8月



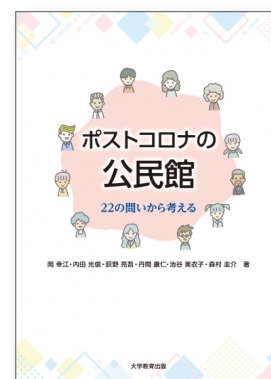
ジェロンテクノロジー
高齢社会を支える
情報通信技術の展開

廣瀬通孝・伊福部達編
東京大学出版会 2021年11月



**地域とつながる高齢者・
障がい者の住まい**
計画と設計 35の事例

松田 雄二、三浦 貴大
学芸出版社 2024年9月



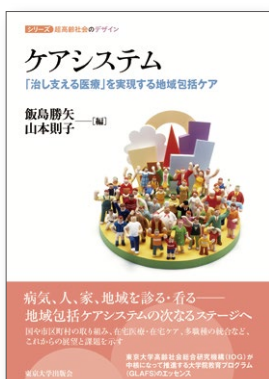
ポストコロナの公民館
22の問いから考える

荻野亮吾
大学教育出版 2025年2月



社会保障制度
国際比較でみる年金・医療・介護

岩村正彦・嵩さやか・中野妙子 編
東京大学出版会 2022年6月



ケアシステム
「治し支える医療」を実現する
地域包括ケア

飯島勝矢・山本則子編
東京大学出版会 2023年3月



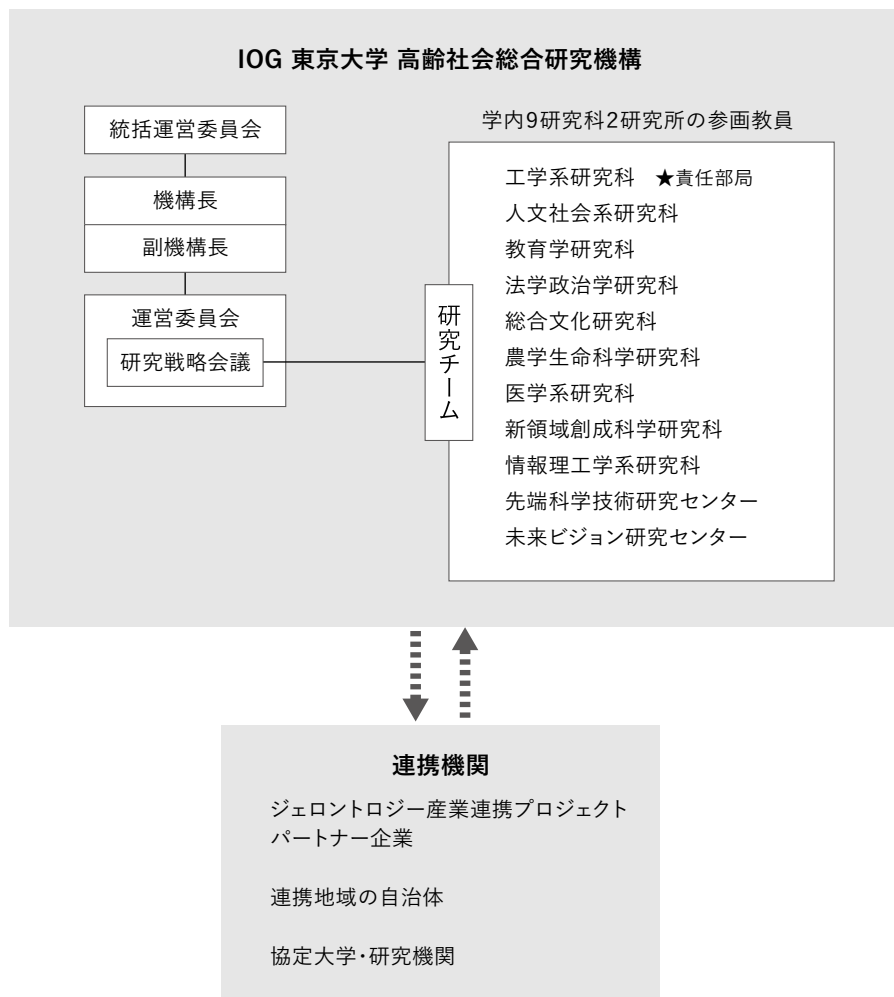
地域学習支援論
学び合える社会関係の
デザイン

荻野亮吾
大学教育出版 2025年3月

沿革

2006年 4月	ジェロントロジー寄附研究部門 設置 (平成18年4月に、総長室総括プロジェクト機構の活動の一つとして、日本生命保険相互会社、セコム株式会社、大和ハウス工業株式会社の3社からの寄附金により設置)
2008年 4月	学部横断型ジェロントロジー教育プログラム 開講
2009年 4月	総長室総括プロジェクト機構・高齢社会総合研究機構 設置 産学連携ジェロントロジーコンソーシアム 設立
2009年 6月	柏市豊四季台地域高齢社会総合研究会 発足 (柏市、東京大学高齢社会総合研究機構、独立行政法人都市再生機構の3者による共同研究会)
2010年 11月	東京大学柏キャンパス第2総合研究棟 竣工
2011年 4月	産学ネットワーク「ジェロントロジー」 設立
2011年 5月	東京大学柏キャンパス第2総合研究棟 稼働開始
2014年 4月	博士課程教育リーディングプログラム 「活力ある超高齢社会を共創するグローバル・リーダー養成プログラム」(GLAFS) 開講
2020年4月	連携研究機構・高齢社会総合研究機構に改組 ジェロントロジー産学連携プロジェクトに組織変更 国際卓越大学院教育プログラム(WINGS-GLAFS) 開講

組織図



IOG 活動報告書 2024

東京大学高齢社会総合研究機構

Institute of Gerontology, The University of Tokyo

TEL.03-5841-1662(代表) / FAX.03-5841-1662

〒113-8656 東京都文京区本郷7-3-1 工学部8号館7階

E-mail:info@iog.u-tokyo.ac.jp

発行 2025年6月

Editor/Writer 香川志帆(オフィスブライシング合同会社)

池田大作(池田屋)

Designer 北川原由貴

<http://www.iog.u-tokyo.ac.jp/>

IOGアニュアルレポート2024年度

IOG 東京大学 高齢社会総合研究機構
INSTITUTE OF GERONTOLOGY, The University of Tokyo

〒113-8656 東京都文京区本郷7-3-1 工学部8号館713号
TEL./FAX. 03-5841-1662

